
Knight's & Magic

天酒之瓢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Knight & Magic

【Zコード】

Z35560

【作者名】

天酒之瓢

【あらすじ】

メカラタ社会人が異世界に転生。

その世界に存在する巨大な魔道兵器の乗り手となるべく、彼は情熱と怨念と執念で全力疾走を開始する…。

#1 別れと出会い

給料日。

それは社会で働く者にとって一ヶ月で最も重要で、嬉しかったり悲しかったりフリー・ダムだったりする日。

京都の1企業に勤める“倉田翼”（28歳独身、プログラマー）にとつてもそれは例外ではなく、仕事が終わるや否や早速ATMでおろした給料を片手に走り出した。

彼の目的地はヨドバシカメラ。

給料日の帰りには自分へのご褒美として、新作のプラモモデルかゲームを買いに行くのが働き始めてからの彼の慣わしだった。

「今月はダブル一関連の新作がもつひとつどるしなー。どれにしようかなー」

稼いだ金で趣味に生きる、彼にとっては至福の瞬間である。

1時間ほど後、彼はヨドバシカメラの紙袋に入ったプラモモデル片手に、今にもスキップせんばかりの上機嫌で帰り道を急いでいた。

「（サフの補充も買ったし週末はゆっくりとプラモ三昧やなあ）」

人気の少ない、深夜の住宅街。

彼は正面から近づいてくる、車のヘッドライトの光に気づいた。射し込むハイビームの眩しさに、彼は目を細めつつ道路の端に寄る。多少浮かれていたためもあるが正面からのヘッドライトに目が眩み、彼は異常に気付くのが遅れた。

この車が、真正面から、彼を避けようとせず、しかも全く減速せ

ずに走つてゐるといふことだ。

気付いたときには既に避けようの無い距離だった。

「は？ つひよつ居眠り運転かよ！」

彼にできたことは我が身を守るように腕を交差させるだけ。

無駄な足掻き、といふよりは反射的な行動だった。

衝突の瞬間、体の芯から嫌な音がする。

あっさりと彼の体は宙を舞う。

意識が激痛に耐えかねて失われるまでのほんの刹那の間、彼の脳裏を駆け巡ったのは事故に対する恨み言でも、人生を振り返る走馬灯でもなく

「（ああ、積みプラモも積みゲームも全く消化できへんかったなあ）

」

遺されたプラモモデル、ゲームのタイトルの数々だった。

* * * * *

そこから、長い時間がたつた気がする。
夢の中のよつな、理不尽で、しかしそれに疑問も抱かずといふ奇妙な感覚。

目の前の光景の、その意味を彼は正確には把握していない。
ただ、今まで見た事もないよつな、極彩色で目くるめく光景。
その中を時折過ぎる、揺らめく何ものかの影。影から聞こえる心地よい旋律。

彼はそう感じていた。

そして何とも言い難い浮遊感に包まれたまま、彼の意識は何処かに着地した。

* * * * *

此処ではないどこか、遙か遠い世界。

大陸の中央からやや東よりに位置するフレメヴィーラ王国。
大陸の東側に広がるボキューズたいしんかい大森海と国境を接し、そこからやつてくる魔獣達との戦いの最前線となつてている国である。

いつ何時戦闘になるとも知れない故に強力な騎士団を擁し、西方諸国の盾としての誇りを持つ、曰く“騎士の国”。

その王都、カンカネン。

そこからやや郊外に進んだところにライヒアラ騎操士学園がある。“騎士の国”を自負するだけあり、この国において国家の、そして人類の盾であり剣である騎士は非常に人気の高い職業である。また、その性質上それなりの人数を必要とし、後続の育成は欠かせないため騎操士学校はかなりの規模を誇る。

その敷地内にある広大な演習場で、今二人の騎士が向かい合つていた。

試合の最中と見え、互いに剣を向け慎重に間合いを測つている。その一人が一步足を踏み出すごとに重量物が落ちるような音が周囲へ響く。

重々しいのもむべなるかな、周囲にいる見物人とおぼしき人影より、その二人は遙かに巨大だった。

それは人の持つ魔道技術の結晶にして、人が手にしうる最強の力。全高およそ10m、金属の骨格と結晶質の筋肉を持ち、魔力を動力として動く魔道兵器。

二体の幻晶騎士^{シルエットナイフ}が戦う様子を、一際鋭い視線で眺める人影があった。

マティアス・エチエバルリア戦闘指導教官。

30を超えたばかりで、鍛え上げた肉体は歴戦の勇士を思い起させる。

その鋭い眼差しは模擬戦を行っている教え子たちの動きを一つも見逃すまいと引き絞られていた。

「つあう～おぼとおぼとうねえ～」

意味不明の声にふと横を見やれば、可憐な女性が赤ん坊を胸に抱いて立っていた。

やや紫がかつた綿糸のような銀髪を腰よりやや短いロングのストレートにしている。

それが微かな風に煽られて、日の光の下に煌く様な銀の流れを描く。その下には優しげな目元に蒼い瞳、透き通るような白い肌。

その風貌は若々しく、10台後半くらいに見えるがれつきとした赤ん坊の母親だ。

そしてその腕に抱かれている赤ん坊は母譲りの紫がかつた銀髪をオカツパにそろえ、その下にはこれまた母の顔をそのまま幼くしたような卵型の顔にパツチリとした蒼い瞳をしていた。

唯一目元が母親のそれとは違つて見え、父譲りを思わせた。

マティアスは目を細めて彼の妻セレスティナと1歳になる息子、エルネスティを見た。

彼の息子は母の腕の中で、小さな手足を振り回しながら田の前の光

景に興奮している様子だった。

「エルも男の子なのね、幻晶騎士が好きなのかしら」「まだ1歳だ、何が起こってるのか理解してはいないんじゃないかな？」

「あら、そんな事ないわ。ちゃんとわかってるものね～？　エル「ん、あかてりょ！」

舌つ足らずで、十分に発音がなっていらないもののせつときりと理解した様子で返答を返す息子にマティアスは苦笑する。

「……この子は大物に育ちそうだな……」

両親の気も知らず、エルネスティは心中で快哉を挙げた。

「（ひつほほほほ、マジもんや、マジもんの大口ボットが動いとるー。

騎士か！　フームグ　イドか！　F　Sか！　ガイ　レフか！）

「

生後1年にして彼の人生はクライマックスを迎えていた。

「（一時はどうなる事か思たけど、こじつけ、こじつけたまんねえ！　いよしあ、乗つたるで巨大ロボット！　いやほんと最初はどうしようか思たしなあ……）」

倉田翼は混乱していた。

どうしようもなく混乱した時、関西人が取るべき行動は一つである。

「（なんでやねん）」

28年生きてきて　　実際はついさつき死んだのだが　　とにかく
彼の人生の中できれいに生きることは無いかもしない。
彼の記憶では、自分は車に跳ねられたはずなのだ。

病院のベッドで気がついて奇跡の生還を喜ぶとか、どこかの河岸で
死んだじいちゃんに呼ばれるのなら兎も角、全く見知らぬ外人の女
性に抱えられて喜ばれたとか何が起こったのか。

そもそも彼の体格は一般的な成人男性の水準にある。それを軽々と
抱きかかえ、こちらを覗き込むこの女性は一体何者なのか。
さすが外人、マッシュルなの？　ジャイアントなの？
そんな下らない事を考えたところでふと気付く。

視界の端に見える「」の小さな手脚。首は据わっていないし起き上がり
ることも出来ない。

しかも先ほどからそれは元気に大絶賛泣き叫び中だ。

「（んなアホな！　俺赤ん坊なつとんのかい！？）」

彼の渾身の突っ込みはやはり誰にも届くことはなかった。

赤ん坊の腕では彼が得意とした裏拳ツツコミが出来ないことが惜し
くてならない。

母親の腕の中でもぞもぞと動く赤ん坊を見て、家族全員が優しく微笑んでいることなど露知らず、翼は心の中で人生で使ったことのあるツツコミを総復習していたのだつた。

輪廻転生。

死んであの世に還った靈魂（魂）が、この世に何度も生まれ変わつてくる、という考え方。

日本人なら、信じてはいなくともその考え方自体は誰でも知っているのではないかだろうか。

翼も勿論知つてはいたが信じてはいなかつた。
まさかそれを自身が体験するとは。

その上、所謂前世の記憶がばっちらりと残つている。
ずいぶん滑らかに来世に来てしまつたものである。

精神的には30近いおっさんだったが、体は赤ん坊である。
ちょっと起きて食事をしては寝る、そんな日々を送る間に彼は現状について考えていた。

詰まるところ自分が生まれ変わり、現在は赤ん坊であることは間違えようも変えようも無い。

ならばあとは楽しむしかないではないかと。むしろこれは所謂“おいしい”状況なのではないかと。

関西人とはげに因果な生き物だった。

多少開き直りであることは本人も否定できない。

「（ほんま何でこんなことなつてんやろ。有り得へんやろ……）」

どうやら言語が違うらしいへ、最初は何を言つてゐるのか解らなかつた家族の言葉も、時間と共になんとなく理解できるようになつてきた。

いつも話し掛けられる内容から、彼の新しい名前は“エルネスティ”である事がわかつた。

いつもは“エル”と呼ばれている。

言葉が理解できてくると、何とか喋らうとまだ回らない口でも“もし”こと何かを話しだした。

斯様な摩訶不思議体験をしているといつに突っ込みの一つも出来ないなどというのは彼の魂が許さない。

不断の努力の結果、1歳になる頃には無駄に話せるようになつていった。

そしてある時、母と散歩に出た彼は、第一の人生の全てを賭すことになる衝撃の出会いを果たしたのであった。

* * * * *

赤ん坊を抱えた若い女性が学園からの家路を歩いていた。

「エルは将来騎士になるのかしら。」

「んー、きいなりょ！ おぼとうじーすよ！」

「あら、頼もしいわ。だったらもうちょっと大きくなつたらお父さんに稽古をつけもらいましょうつか」

「あいまむ！」

お父さんみたいに立派な騎士になつてね、と微笑む母親の腕の中、赤ん坊は中々テンションが下がらない様子で騒いでいるのだった。

#1 別れと出会い（後書き）

純粋に趣味の赴くままに書き始めました。
小説を書くのは初めてのため、拙い部分も多々あるとは思いますが
どうぞよろしくお願ひいたします。

ご意見、ご指摘、ご批判などありましたら感想、もしくはメッセー
ジへお願いいたします。

11 / 1 / 16 表現、内容微修正。
11 / 2 / 27 表現微修正。

#2 魔法を使おう

エルネスティの前世である“倉田翼”は、所謂ヲタクであった。ジャンルはメカもの。毎月ホーリジャパンをチェックし、毎週ファンでメカゲーを探す、それがかつての彼の生き方だつた。どちらかというとだらしない方に属する性格だつたが、趣味に関しては情熱……というより執念を感じるほどのやる気を出す。それでもさすがに戦車にのるために自衛隊にいく、というほどアグレッシブな生き方はしていなかつたが、今生は物が違つた。

巨大ロボット 幻晶騎士の存在シルエットナイト

彼は最初、プラモデルもゲームもない世界での第一の人生に失望の色を隠せなかつたが、その存在を知つてからはむしろこの世界に転生させてくれた何者かに感謝した。

何せ冗談でもなんでもなく全高10mものサイズの人型兵器が存在するのである。

メカラタクを自認する彼にとって、幻晶騎士との邂逅は自身の天命を悟るに十分な衝撃を持っていた。

僅か1歳にしてエルネスティは早速人生プランの構築に取り掛かった。

巨大ロボット 幻晶騎士に乗るために、騎士になることが必要であるらしい。

騎士といえば地球のそれを思い出すが、この世界でもその在り方に大差はないようだ。

ならばやることは一つ、自力英才教育である。

それは他の人よりも先んじると言うよりは、彼自身が一刻も早く騎

士……ひいては巨大ロボットに辿り着くための決意だった。

それでもさすがに僅か1歳の幼児に出来る事などほとんどなく。

逸る気持ちを抑えつつ、母親に絵本を読んでもらって文字を覚えた
りしながらしばしの時を過ごす事になる。

「父様、少しよろしいでしょうか」

自宅で休憩していたマティアス・エチエバルリアは息子に呼ばれ振り返った。

彼の息子、エルネスティは今年で3歳になる。

母親であるセレスティナ（ティナ）と同じ紫銀に輝く髪を顎の辺りで切りそろえて、母親譲りの容姿をもつその姿は非常に愛らしく、普段は鬼教官でなrasマティアスも今ばかりは相好を崩している。

「どうしたんだい？ エル

「父様にお願いしたい事があるのです」

エルネスティは年の割りに非常に明瞭に喋る。

そもそも何故かはわからないが、1歳を過ぎるころにはそれなりに喋れるようになっていたのである。

それを喜んだティナにより色々な会話の特訓を受けた結果、一時期言葉遣いが混乱していたが3歳となつた今では丁寧な話し言葉に落ち着いていた。

「（十分に話せるようにもなつたし、ええ頃合やう）」

しかしエルの内面は前世たる“倉田翼”から変わっていない。

“地球”の言葉で思考しながら“この世界”の言葉で会話をを行う。

多少奇妙な状態だったが、異なる2つの世界に生まれついた彼にとっては自然なことであった。

そして今もかつての世界の言葉で思考しながら、この世界の言葉で願いを口にする。

「父様、僕は騎士になりたいのです。僕に剣を教えてください」

マティアスは困った。

息子が騎士を目指すのは良い。本人にやる気があるのは素晴らしい事だ。

だが如何せんその息子は3歳……剣を教えるにもまだ早い。もう少し体が出来上がってからでないと逆効果だ。

その上息子は年々妻に似た可憐な面差しを見せてゆき、身長もやや小柄だった。

我が家ながら十分に剣を振り回せるか、少し躊躇を感じるのも本音だった。

それでも無下にする事はせず、焦らずにまずは体力作りから始める事、剣術以外にも魔法の知識が有効でありそちらを学ぶ事を勧めた。

「魔法……わかりました父様、そのうち剣も教えてくださいね」

少し悩んだ風を見せた後、決意に眉をつりあげて言う息子に押され、マティアスは6歳になつたら練習を始める事を約束したのだった。

急いで事仕損じる、エルは剣術を一旦保留にしてまずはできることから始めた。

“魔法”

前世にはなかつたその技術に惹かれた事もある。

メカものを専門にしていたエルではあるが、RPGもそれなりにプレイしていた事もあり、魔法も十分に魅力的な存在だつた。エルの母親、セレスティナの父親はライヒアラ騎操士学校の現学長、ラウリ・エチエバルリアその人である。

そのコネを最大限利用し、エルは母親に頼み込んで魔法についての教本をそろえたのだつた。

体力作りについては、最初は全く体力がなかつたため家の周りをマラソンし、いくらか腹筋腕立てを行つていた。

それと並行して魔法についての学習をすすめる。

エルはまだ3歳ではあるが、その中身の精神は30年以上を経た大人のそれである。

文字さえ理解できれば、内容を読むのは全く苦ではなくた。
むしろ物が物だけに単なる“勉強”より楽しめ、ある種の遊びの感覚だつたと言うのも大きな理由である。

子供特有の柔軟な学習能力と併せて、恐るべき速度で内容を理解してゆく。

この世界で魔法と呼ばれているのは、魔力を現象へと転換する技術である。

大気中に存在する“エーテル”を体内に取り込み、精製する事で魔力としてその身に貯める事ができる。

これは、この世界の意思ある生物なら全て可能な機能である。

そして、魔力を燃料として、魔法術式により現象の内容を決定し、触媒を介す事により世界に現象として発現させる。

これが魔法の基本的なプロセスであり、この触媒の有無によつて魔

法が使える生物と使えない生物が分かれる。

魔法が使える生物（この世界では魔物、魔獸などと呼ばれる）は、体内にこの触媒にあたる結晶を持っている。

それにより、例えばドラゴンは魔法でプレスを吐くのである。

元々この世界の人間は体内に触媒をもたない、魔法の使えない種族であった。

それを、知恵により魔法術式を解き明かし、触媒を外部に用意する事で魔法を使用可能となつたのだった。

それがこの世界では弱小の位置に甘んじていた人間が一定の勢力を得るきっかけであり、遙かな研鑽の末に魔法の力で動く巨大兵器：
・幻晶騎士シリエットナイトを作り上げるに至つて、有力な種族としてのし上がつた。幻晶騎士の力で大陸全てを制覇できないのかとも思ったが、結局は一時領土を広げてもそこを維持できない事が原因のようだ。

幻晶騎士であれば勝つことは出来ても生身の人間の手には余る魔獸も多く、突出した後ろが危険にさらされることもしばしばだつたと言つ。

また、幻晶騎士はその製造、維持にかなりのコストが必要な戦略兵器の一種であり、大陸全てを平定するだけの兵力を集めるのは事实上不可能であった。

徐々に領土を広げた結果が今の半分までであり、この状態で数百年は膠着状態となつてゐるようだつた。

話を魔法に戻す。

さて、魔法術式の構築は、脳内にある魔術演算領域マギウス・サーチネットに式を展開する事により行われる。

魔術演算領域はこの世界の意思ある生物なら備えていける機能だ。

元地球人であるエルにはこれがスムーズに使えるのか不安もあった

が、今の体は問題無くこの世界の生き物であり、その感覚に馴染むのにさほどの手間は必要なかつた。

魔法術式には基本的な現象を発現する基礎式アーキテクトと、それらをつなげて使用するための制御式が存在する。

それぞれは特定の図形のイメージで記され、それぞれを合わせて一個の魔法と成すと、丁度魔方陣に近い図形を構成する形となる。

本来、初めて魔法を学ぶ人間が躊躇く事が多いのが魔法術式の構成である。

基礎式の使用程度ならすぐに実行できるが、魔法の規模を大きくするためには魔法術式を拡大しようとすると、その理解に慣れが必要になる。

元々人間は魔法を使えないため高度な術式の構築には経験が必要であり、個人の資質が問われる部分であつた。

しかし、ここでエルの理解を助けたのが前世の職業であるプログラマーの経験だつた。

エルにとっては魔術演算領域は脳内に仮想的にパソコンがあるようなものであり、魔法術式はそのものプログラム言語と理解していた。文法を飲み込んだ後は教本から“読み込んだ”基礎式、制御式を思考上のエディタで編集する。

さすがに経験者であつても余りに規模の大きいソースを思考だけで組み上げる事は出来ないが、魔術演算領域というPCがあるため、エルは特に疑問に思うでもなく次々に術式を構築しソースを組み上げてゆく。

エルはこの世界の人間がどれくらい魔法を使えるか、そういった知識、常識を持たないが故に気付かなかつた。

極めて複雑な構文を構築し、制御しうる自分の演算能力が如何に異常かを。

軽い音をたててエルが手にもつた石から火線が飛び、標的のど真ん中に焦げ目を残した。

「まあ、基礎式とはいえこんなにすぐには魔法を使えるなんて。エルはす」いわ

「母様、本には基礎式は基礎中の基礎と書かれていますが」「そうね。でも、今みたいに目的の真ん中へ真っ直ぐ飛ばすには練習が必要なのよ」

「（ほんまか？ プログラム的には“Hello, World”並にベタやなんけど）」

座学だけでは机上の空論、エルはティナに用意してもらつた触媒を使って魔法の実技を行つていた。

エルは色々な基礎式を試し、実際に魔法を使う感覚を養つていた。幾らかの魔法を放つたところで、エルは全身に疲労感を感じ始めた。体力の消耗とは違う感覚に戸惑つたが、これが魔力^{マナ}を消耗したと言う事なのだろう。

周囲のエーテルを吸出し、魔力を少しでも補おうと、呼吸が荒くなる。

「（……こないに疲れるもんなんか。こじりつい魔法使うのなん何時になるんかわからんなん）」

その様子を見たティナは優しく微笑みながら息子の頭をなでる。

「……情けないです。少し使つただけで疲れてしまつて」

「そんなことはないわ。エルはまだ小さいもの、魔力だつて少なくて当然なのよ？」

「体が大きくなれば、魔力も増えますか？」

「うーん、そうね。体力と同じようなものと思えばいいわ」「わかりました。だつたらこれから魔力トレーニングも始めます！」

意気込むエルにティナはやや苦笑しながら彼の頭を撫で続けていた。

「まあ、エルは本当に頑張りやさんね。でもあんまり焦つては駄目よ。無理は良いものではないのだから。」

エルも確かに3歳児の思考としては異常極まるなと思い、同時にあまり母を心配させる物ではないかと反省する。

「はい、できるところから少しづつ進めていきます、母様」

先々を考えて、まずは体力と魔力の底上げを重點的に行うこととした。

術式の構築に関してはP.C相当の存在がある以上、前世のスキルに物を言わせばなんとかなる。

後はそれを扱う自分自身のキャパの問題になる。

「（つまり田指せガン ムファイターな生き方な訳やな）

そこでエルが田をつけたのが身体強化^{フィジカルブースト}の魔法であった。

身体強化は、その名の通り使用者に筋力の強化、耐久性の向上、動作速度の向上の効果を与える魔法である。

普段の体力づくりにこの身体強化を併用することで魔力を消費し、

それぞれを効果的に鍛えようと思い至ったのだ。

しかし、この身体強化という魔法は上級魔法。それも魔法、身体能力共に相当な修練を積んだ末に使用可能となる奥義のよつた代物であり、簡単に使えるものではなかつた。

何故かと言えば、それは魔法を発動させる手順に由来する。

魔法の効果を決めるのは魔法術式の構成である。それは、基礎式に近い単純なものほど制御が容易で、制御する対象が増え変数が多くなればなるほどその構築・制御が困難となり上級の魔法となる。

一口に身体強化と言つてもその内容は筋肉の一一つの性能強化、反動に耐えるための骨格への強化、同じく表皮の耐久性向上を含む高度な複合魔法であり、その構成は複雑極まりないものとなる。さらには自身の体の動作状態により刻一刻と変化する制御対象、その上効果を発揮するためには継続して魔法術式を維持・発動させ続けねばならない。

止めに戦闘中に使用するためには戦いながらそれだけの制御を行わなければならぬのだ。

如何に大規模でも一発放てば終わる遠距離系の魔法に比べ、この手の制御系の魔法が上級といわれる所以である。

しかしエルはそれをあつさりと解決する能力を持つていた。

身体強化の術式構成を見直し、関数化や隠蔽により構成を圧縮。可能な限り制御対象の変数を減らし、その上で自身の状態をなれば自動的に取得するサブ関数を作成、構成さえ組めばあとは勝手に制御を行えるようにし、負担を軽減する。

「（ほんまにこれ上級魔法なんか？なんかロジックに無駄が多くて扱いにくいだけなんぢやつか？これまで誰も改良せんかったんかなあ）」

そんな器用なことほそつそつ誰にも出来ないのだが、そんなことは露知らずさくと魔法の改良…それも恐ろしいほど劇的な改良を行う。

それでもまだまだ制御の難しい魔法のはずだが、彼の異様とも言える高い演算能力はそれを全く苦にしなかつた。

触媒を片手に満を持して身体強化を発動いざ往かん日課のマラソンを、と意気込んだエルを直後に悲劇が襲つた。

強化された肉体の強烈な手^{コス}じたえに感動する暇も有らばこそ、ほんの数百メートルを走つたところで魔力不足を起こして倒れ伏すはめになつたのだ。

さすがは上級魔法、必要魔力も上級だつた。

そんな基本的なところをすっぱり見落としたエルは落胆を隠せぬまま、しばらくは基礎魔術の使用で鍛錬を行うのだった。

弛まぬ努力により彼が身体強化をそれなりの時間発動させるようになるまで、それから2年の時間が必要となる。

そんなこんなでエルは子供の憧れで済ますには異常なほど^{コス}の熱意を持って日々目的に向かつて邁進するのだった。

#2 魔法を使おう（後書き）

1 1 / 1 / 1 6 表現、内容微修正。
1 1 / 1 / 2 5 内容修正。
1 / 2 7 表現微修正。

#3 旅には道連れ

ライヒアラ騎操士学園。

その周辺には学生の宿舎や幻晶騎士のための鍛冶屋などが集まり町を形成している。

学校の名をとりライヒアラ学園街と呼ばれるその街にエルネスティは住んでいた。

日が落ち、闇に包まれるライヒアラ学園街。

連なり、通りを形成する建物の屋根の上を疾走する小さな影があった。

その人影は、全体的に真っ黒な日が落ちた所で視認するのは困難な服装に身を包み、風のように屋根の上を駆け抜ける。

言わずもがな小さな影は5歳になつたエルネスティである。

体力づくりの日課である日々のマラソンは形を変え、今では屋根伝いに街を一周するのがその慣わしになっている。

科学文明から離れて久しいエルは、星明りがあれば視界には困らなかつた。

身体強化の魔法はかつて失敗したときからさらに改良を重ね、低出力で足回りのみを強化するように絞られて使用されていた。

慣れも手伝つてかなりの速度で疾駆する。

と、それまでは屋根が続いていた通りの端に辿り着き、大通りが大きく目の前に開いていた。

エルは一つ大きく息を吸い込むと、一気に身体強化の出力を上げる。力強い手ごたえと共にエルは弾かれたように加速する。

屋根が途切れるその瞬間、最後の踏み切りにあわせてエルはさら

魔法を重ねる。

前方の空気を圧縮し、高密度の空気の弾を作成する。それ自体は基本的な空気弾丸^{エア・バレット}の魔法だが、エルはそれを自身の後ろで炸裂させる。

圧縮したまま弾丸として発射するのではなく、指向性を『えて開放することで反動を擬似的な推進力とする。

瞬間に勢いを強めたエルの体はそのまま弧を描いて通りの上を飛び越えた。

上空に飛んだ時点では身体強化は抑え、次は着地の瞬間に魔法を発動する。

またも空気弾丸の魔法　しかし今度は普通の弾丸より巨大なサイズで空気を圧縮する。

圧縮して発射しないままそれをエア・クッシュョンとして見事に向かいの屋根に軟着陸を決めたエルは、自身の体を撓めて余分な衝撃を殺すそのまま同じ調子で走り出した。

魔法を学び始めておよそ2年、エルの魔力はやや小さな体格にも拘らず、同年代では異常なほど保持量となっていた。

普通、この年齢でここまで魔法の能力を磨くものはいないため当然ともいえるが。

体力も向上し、細い体をしなやかな筋肉が覆っていた。

しかし、それでも身体強化を全開にして使い続けるのは無理がある。その為に編み出したのが低出力で部分的に持続させ、必要なときに瞬間に全開にする使い方である。

移動に関してならば先ほどのように別の魔法を併用して高速移動する方法も考えた。

これらの修練は元々高かつたエルの演算・制御能力を更に高めるこ

ととなり、更には着実に増大した魔力により魔法を使ってへばることも少なくなった。

そして、エルが移動系の魔法を重点的に練習するのにはわけがある。エルとて日がな一日修練ばかりで過ごすわけではない。

同年代の子供と遊ぶこともある 理由は多分に両親に心配をかけないためのクッショーンであったが、童心に返つて遊ぶのも楽しかったのも事実だ。

すると、他の子に比べて自身の体格が小柄であることに気付いた割に体力のお化けと化しているのだが。

それ自体に不満はないが、このまま体格が伸び悩むとウェイトの軽さが弱点になる可能性が出てくる。

勿論身体強化はこれからも磨いてゆくし、生半可なことで力負けする気はなかつたが、それでもウェイトの軽い体で攻撃力を出すには一工夫が必要だ。

そのための移動力強化であつた。

それは単純に動きで相手を霍乱するためでもあるが、いざとなれば速度を乗せて攻撃することで威力を出すためである。

「（なんつうか、日本人は牛若丸好きやからねえ。俺の場合切実な事情があんねんけどさ）」

エルはつらつらとどうでもいいことを考えながら、今日も今日とて宵闇に包まれた街を疾走する。

いつものトレーニングコース、いつものマラソン。ただ、その日は少しだけいつもと違うことがあった。

「なんだお前？」
「誰ですか？」

期せずして誰かの声が重なる。

これまで誰にも会つことがなかつた屋根の上。
そこに一人の少年がいたのだ。

しばし無言で向き合つ。

お互に、他に人がいるなどと思つていなかつた場所での遭遇である。

多少以上に警戒するには仕方なかつたが、その上片方は全身黒尽くめで、丁寧にフードまでかぶつているのである。

星明りの下ではその表情までは窺い知れなかつたが、少年の瞳が僅かに細められたのがわかつた。

エルは標準よりやや小柄だが、少年はひょろつと背が高く、年齢はわからなかつた。

下と言う事はないだろうが、そう年上にも見えない。お互に無言ではつまらないのでひとまずエルは自己紹介をすることにした。

「僕の名前はエルネスティ、今は散歩の途中です。貴方は?」

黒尽くめの子供がいきなり自己紹介をしたのに驚いたようだつたが、少年はすぐに立ち直ると言葉を返す。

「俺はアーキッド。……ここで星を見ていた」

エルはちらりとアーキッドとなる子供の背後を見やる。

彼の背後の屋根には出窓があり、そこから出入りしたようだ。

「ああ、それは邪魔をしてしまって申し訳ありません。僕は立ち去り

ますので……」

「いやちょっと待てよ。散歩つづか？ 屋根の上を、しかもそんな格好で？」

「（…………）尤も」

声の調子から、アーキッドが相当に呆れていることがわかる。

「トレーニングなので、走りにくい場所を。でも余り田立ちたくはないですからこの服を」

エルが素直に答えるも、アーキッドはしばし不審げにしていたが、ややあつて口を開いた。

「…………そうかい、邪魔したな」

「お気になさらず。では、私はこれで……」

「こつもの辺を走つてんのか？」

さつきから話をさえぎる人だなあ、と思いつつエルは素直にはい、と肯定しました挨拶を残して走り出した。

アーキッドはしばらく闇にまぎれるその姿を追っていたが、思った以上の速度で走り去るその姿に驚き、さらに建物の端で姿がぶれるほど加速の後大きく弧を描いてジャンプするのを見、驚愕に目を見開いた。

「…………すげえ。すげえ。なんだありや、おつもしけー！」

ほんの気まぐれで屋根に出たその日に出会った奇妙な人間。アーキッドの生活はその日を境に大きく変貌することになる。

エルとアーキッドが出会った次の日、同じ場所で彼らは再び対面していた。

「こんばんは。また星を見に？」

「いよつ。いや、今日せむ前と話しき」

星明りの下でもわかるくらいい、アーキッドは上機嫌に笑っていた。いまひとつ彼の意図がつかめないが、もし面倒なことになるならこのまま走り去つて明日からはコースを変えよつゝと考えたエルはしばし話に付き合つて話した。

「といひでのフード、かぶつてないといけねえのか？」

確かに、話をするのにフードをかぶつたままこつのは失礼かと思つて脱ぎ、アーキッドの隣に座つた。

それで、と話を促そづとして、隣のアーキッドが実に形容しがたい表情で固まつてこいることに気がついた。

「……アーキッド？　どうしたのですか？　すゞい変な顔になつてますよ？」

「つえ？　ああ、いや、その、お前、女だつたのかよ！？」

美しい母親に似たエルの風貌はさうに磨きがかかり、こまや立派な美少女ぶりだ。

紫銀の髪は今はセミロングに切りそろえ、あごの下でかすかに揺れている。

それは頼りない月光の下でも全く隠しようがなく、むしろ紫銀の髪の輝きも、白い肌もその美しさをより一層神秘的に引き立てられていた。

その美しさと昨日見た動きの凄まじさがつながらず、アーキッドは混乱していた。

エルは微かに笑い、

「いいえ、見た目は母親似ですが、僕はれっきとした男ですよ。」「いや母親に似るつても限度があるだろそれ。本当に男かよ?」

「……微妙に嫌ですが、確認します?」

「ええ!? いや、いいよ! すまねえ、疑つて悪かった」

あたふたと慌てるアーキッドに落ち着くよう言い、エルはそれで、と切り出した。

「お話、とは?」

「ああ、昨日屋根からすつげえ飛んでたじゃねえか? あれってよ、どりしてんのか気になつてや。」

「ああ、あれは……」

「んでよかつたらいつちょ俺にもいつを教えてくれよー。」

唖然としていたのは何処へやら、今度は勢い込んで話すアーキッドに、エルはどうしたものかと思案する。

「教えるのはいいですけど、あれはすぐに身につくものではないですよ?」

「かまわねえよ、お前と一緒に練習してたらそのうちあれくらい飛べるようになんだろ?」

「もしかしたらそれ以上に習得できない可能性もありますし……」

と前置いてエルは簡単に説明を行つ。

身体強化の魔法、上級魔法の簡単な説明、魔法の併用等……。

アーキッドの理解力はかなりのもので、説明の飲み込みも早かつた

が、むしろ早かつたが故に盛大に顔を齧ることになる。

「それすっげえ大変じゃねえか！」

「だから、最初からそういうてるじゃないですか」

「エルネスティはなんでそんな魔法つかえんだよ？」

「エルでいいですよ。……それは相性もありますし、これでも何年か魔法を練習してきてますので」

「んじゃ俺はキッドでいいさ。何年かつて……いまいくつだ？」

「5歳です」

「同じじゃねえか！？」

「よしそれならやつてやれねえことはねえ、と盛り上がるアーキッドにエルは慌てて釘をさす。

「でも、身体強化は上級魔法で、まずは基礎から練習していかないと……」

「だつたらエルが教えてくれよ、魔法」

「……は？」

「エルすげえんだろ？ ジョーキューマホーとかガツツリじゃねえか！」

予想外だ、とエルは顔が引きつるのを止められなかつた。
確かに面倒じとで、本来なら逃げ出したいところではあるが、隣で表情を輝かせるキッドを見捨てるのは彼の良心が許してくれなかつた。

「あー、その、えーと、わかりました……けど」

「さつすが、話がわかるぜ親友！」

「（格上げ早ツ！？ ちょいマツハすぎね？）」

「でも！ 待ってください、さつきも言つた通りすぐには身につか

ないんですからー。

まずは基礎から学びます。いいですね?」

「おひよおひよ。任せな、すぐ追いついてやるつてー。」

「(わーお不安)」

エルは今後を不安に思いながらもアーキッドと細かな確認を行い、その場は別れたのだった。

そのまた次の日、アーキッドはエルの家を訪れた。
それを見てエルが訝しむ。アーキッドの隣にもう一人いたからだ。
二人とも綺麗な黒髪ブルネットにこげ茶の瞳、元日本人であるエルには少し懐かしさを感じる色合いだった。

キッドは髪を中途半端な長さでぼさぼさにしているが、もう一人は
女の子だ 緩くウエーブの掛かった髪を肩のあたりでそろえている。

ひょろりと身長が高い」とこじも、意志の強そうな田つきもよく似た雰囲気の一人だった。

「キッド? そちらの方は?」

「ん? 僕の双子の妹。アーテルトルートつってんだ。一緒にベンキヨーすることにしたんだよ」

「(おまつちよつうえつ)」

「私もエル君つて呼んでも良い? 呼ぶわね? 私のことはアーティでいいから。

でも本当に可愛いんだ君ー。」

「(いや返事してへんねけど? 微妙に話し聞かんのはキッドの双子やからか?)

「えーと……いえ、もうこいですけど。ちゃんと説明はしますよね? キッド?」

「任せろ親友。だからこそアディも付いてきたんじゃねえか」「ええ、ええ、なるほどその通りですね……」

半ば悟りを開いたように案内するエルに、キッドとアディが嬉しそうについていくのだった。

ティナが訪れてきた息子の友人にお菓子を振る舞い歓迎した後は、エルの部屋で基礎的な魔法の講義を行つ。

エルは、キッドはああ言つていたものの5歳の子供の事だ、いざ講義となれば面倒くさがるだろうと考えていたが、意外にもキッドもアディも熱心に講義に聞き入り、基礎式^{アーキテクト}の実践では数回の使用での中心を擊つ制御能力を見せた。

この双子を侮つていたかと思いつつ、魔力切れでへばる一人にアドバイスをする。

「貴方方のその状態が、魔力切れの状態です。

一人ともまだ魔力が少ないのでから、しばらくは魔力を上げるトレーニングをした方がいいですね」

「うう、はあ、きつついなあ、これ……で、そりやどうすりやいいんだ?」

「毎日魔力切れになるくらい魔法を使います。そうすると何もしないよりも魔力は多くなりますね。

同時に体力トレーニングもやつたほうがいいです、その方が自力の延びがいいですし」

「……ははあ、するつてーと、だからエルは屋根の上ん走つてたんだな?」

「その通りです。前も言いましたが簡単な事ではないでしょ?」「

「いいえ! やるわ! 毎日やれば良いんでしょ? 簡単じゃない!」

驚いて見上げると大分と落ち着いたアディが両手を腰に当てて仁王

立ちしていた。

意志の強そうな田つきは自信に溢れ、不敵な笑みを浮かべながら何故か自信満々に言い放つ。

背も高いし、将来はかなり美人になるんじゃないか、でもこの性格のままだとキツツイ子になりそうだなあと、エルはどこかずれた事を考えていた。

「……だったら。しばらくは基礎術式で地道なトレーニングをしてもらいます。

魔力があがつてきたら、より複雑な術式を教えますよ」

「こいつあ追いつくのは何時になるかわからねえな……でもエルの考てる通りや、ぜつてえすぐ追いついでっからよ！」

「（思つたよりか遅しいんやな。こら面白いダチできたもんやなあ）

エルは心中でこつそりと“親友”の評価を上げる。

こうして、エルの特訓に2人の友人が加わったのだった。

#3 旅には道連れ（後書き）

11 / 1 / 16 表現、内容微修正。
11 / 2 / 27 表現微修正。

#4 発想の転換

6歳になつたエル、キッド、アディの3人はエルの父マティアスから剣の手ほどきを受けていた。

剣に関してはキッドが一番筋がよかつたようで、魔法を併用しないと正面からでは勝てず、エルは多少悔しい思いをしたりもした。

剣の練習を行い、魔法の練習も欠かさず、さらに日々の鍛錬も行う。その間には近所の子供と遊び、親と共にいる時間もあり……と、エル、キッド、アディの生活はこの年頃の子供としては非常識なほど忙しさを見せていた。

エルは自身の目的のためにそれだけの修練を課している。

それは長く続ける間に一種の習慣と化し、さほど辛いとも思つていなかつた。

前世ではかなり怠惰な人間だつたことを鑑みるに、継続とは力なり、そして欲望こそが人間最大の原動力なのだなあなどと思つてゐる。しかし、キッドとアディはどうなのだろうか。

騎士を目指すとしてもここまでやる必要は、本来はない。

エルとの訓練は必要にハイレベルで、彼らも既に子供としては異様なほどの能力に達しつつある。

彼らの原動力は何なのだろうか。

中身が“やる気を出したオッサン”であるエルは、この年頃の子供がここまで訓練をこなしうる理由を思いつけないでいるのだった。

月日は過ぎ、彼らの耳にもライヒアラ騎操士学園への入学の話が届いてきた。

「」で少しライヒアラ騎操士学園について説明する。

ライヒアラ騎操士学園は大きく分けて3段階の学習過程を持つ。初等部が9歳から、中等部が12歳から、高等部が15歳からそれぞれ3年間である。

このうち、大半の生徒は初等部、中等部のみ在籍する。高等部とは地球で言うところの大学に相当する。

余談だがこの世界では慣習的に15歳で成人とみなされる。実際は18歳くらいから本格的に職業につくものが多いのだが、職業によつては15歳から一人立ちするものも少なくは無い。

さて、ライヒアラ騎操士学園にくるのは、何も騎士を目指す人間だけではない。

むしろ初等部、中等部への通学は国から補助が出ることもあり身分に関係なく多くの子供が在籍する。

それは義務教育というわけではなくて、「」の国状況が大きく関係する。

この国は“騎士の国”と呼ばれているが、裏を返せばそれだけ戦いの場面が多いのである。

未だ人以外に支配された領域であるボキューズ大森海だいしんかいと隣接するこの国では、勢い魔獣の出現率が他国より高くなる。

中でも広大な農地を耕作する農民がその危険に晒され易く、国家としても税収、食糧確保の基本として農民の保護は重要な課題となつていた。

ここで、国内の魔獣の駆逐といつ手段をとらなかつたのは単に限がなかつたからである。

勿論そのために騎士がいるのだが、如何せん国土は広く、また魔獣の発見から動いたのでは後手に回り易く、そのままでは被害は広が

る一方であった。

そういう背景もあり、いつしか農民自身が自衛のための技術を欲するようになつていった。

魔獸に關してもピンきりで、中には多少頑張れば撃退できるものもいた。

たとえ歯が立たないほど強力な魔獸が現れても、無策よりはよほどましである。

国がその要望に応えるまでさほどの時間はかからなかつた。最低限度の戦闘技術と魔法の知識を教育するための施設と法を整備したのである。

結局は農民といえども戦うすべなく過ぐせるほど安全な環境ではなく、自らの身を守ることが必要だったのである。

これが後に“フレメヴィーラ王国では剣と盾は農具である”と言われるようになる所以である。

王政下での国家運営としては、最下級の身分である農民に戦うすべを教えるのを嫌う風もあつたが、国全体の維持のために断行された。しかし広く一定の教育をほどこすことで、逆に国家の一員としての意識と誇りを持ち、国内の治安を良くする結果となつたのは僥倖だつたと言える。

その分王侯貴族にも高い意識と能力が求められるようになつたが、それは彼らの当然の義務として受け止められている。

国内各所に学校施設が作られたが、その中でも最大の規模を誇るフイヒアラ騎操士学園に人が集まるのは当然ともいえた。

そのため、学園内は農業学科や商業学科、騎士学科など細分化が進んでいる。

各学科に共通して一定の戦闘技術科目は存在するが、それ以外は自身の求める職能についての教育が多くなる。

また等級が多く別れているのは各家庭の事情に対応するためであり、

最低3年の学習である程度の技術を学べるようになっていた。

3人は説明を受け、それぞれ学園の案内に目を通していた。

「エルはやっぱり騎士学科に入んのか？」

「ええ、そのつもり……ですけど、これは少し困りましたね」

「どうしたのよ？なんか不満でもあるの？」

「いや、そういうわけではないんですけど。そもそも僕の目的は騎操ナイトラ士になることとして」「

騎操士　幻晶騎士に乗ることを許された騎士の総称である。

「幻晶騎士の数には限りがあります。

騎操士となれるのは騎士としても最上の能力を持つ一握りとあります。

そうしますと騎士課程が合計6年で、騎操士課程はその後になり、さらにその後の配属までと考えると……実際に乗れるようになるまでは遠い話ですね」

少し考えてエルはマティアスへ振り向いた。

「父様、質問があります」

「なんだ？　エル」

「騎士課程において飛び級、といつのは可能でしょうか？」

マティアスにはエルができれば急ぎたいと思う気持ちも理解できる。また彼の能力を鑑みるにあながち根拠のない話ではない。

「確かに、エルの魔法能力を考えればない話でもないが……騎士課

程では難しいな。

単純に剣や魔法の才のみならず、騎士課程では礼儀に関する教育も行つ。

今までエルはそのあたりを正式には学んでいないだろ？

それは盲点でしたね、とエルがひとりこちる。

それに、とやや言いづらうてマティアスは続けた。

「幻晶騎士への騎乗訓練は上級騎士課程の最終科目だ。大体は15歳くらいからになる。

……今ままだと、エルは……その、身長が足りなくて乗れる機体がない

地獄のような沈黙が落ちた。

確かにエルは同年齢の平均より更に小柄だ。
まさかそんなところで足踏みを食らうとは。

このままでは念願の巨大ロボットパイロットまで最低でもあと7年は掛かる計算になる。

待てない訳ではなかつたが、少し悔しさを感じるのも事実である。
ふと影が差したのに気付いてエルが顔をあげると、正面にティナが立つていた。

「『めんね、エル。私に似てしまつたから、背が余り伸びなかつたのね……』

申し訳無さそうなティナに、エルは目を見開いて首を振る。

「そんな！ 母様、そんなの関係有りません！

元々僕の年齢も足りてないのですし、そもそも方法だつてそれしかないと言つては……」

ふと、何かに気付いたように言葉を止める。

「……そう、それしか方法がないと言つ訳では有りません。操縦する事のみに拘るから、余計な時間がかかるのです。ならば、違う時間の使い方をすべき……」

「エル？」

訝しむティナに、エルは決然とした表情で顔を上げる。

「作ればいいんです」

「何を？」

脈絡のない言葉にキッドが氣の無い返事を返す。

「シリエットナイフ幻晶騎士です。自分で作ればいいんです」

「……は？」

「……え、エル君？ それ本気？」

今までにない決然とした表情で恐ろしいことを言い出すエルに、周囲の人間が呆気にとられた表情になる。

「ちょっと待てよ。作るって、なんだよそりゃ？」

「言葉のままです。これまではずつと乗ることを考えて行動してきました。

ですがよくよく考えてみると、それでは僕のための機体が手に入りません」

もしかして個人で所有する気だったのか、と周囲がこける。

一部の貴族や大商人を除いて幻晶騎士を個人で所有するものはいな

い。

製造、維持とともにかなりのハイコストだからだ。
それゆえに、騎操士になるためには騎士になる事がむしろ近道のはずなのだが……。

「そり、そもそも支給されるよつた機体ではあまり派手に改造も出来ないですか……。」

どうしてこんな単純な事に気がつかなかつたのでしょうか。
カスタマイズはメカの華、どの道全身くまなく改造するにはそれ相応の知識が必要です……迂闊でした」

段々とエルの笑顔が危険な方向へ傾ぐのを見て、ヒツと呻いてキッドとアディが距離をとつた。

普段は物腰も穏やかで何事にも冷静にあたるエルだが、ときたま斜め上の方向へ有り得ない情熱で進む場合があり、キッドとアディはその源泉とも言ひべきものの正体を垣間見た氣分だった。

「本気かよ、エル……」

「勿論です。このままでは無闇に時間がかかるのは確か、ならば自作を目指すのも一興といつものです。」

それに、今からお金を貯めて貰おうとするよりは現実的でしょう？」

それはどちらも夢物語というんじゃないのか？と思つたが、賢明にもキッドがその言葉を口にするとはなかつた。

げんなりとするキッドを横田に、難しい表情のマティアスが言つ。「エル……気持ちはわかるが、言つほど簡単なことではないぞ？」
「わかつています、父様。でもできれば僕のための幻晶騎士も欲しいですから。

やれるだけのことせやひつと思こます

「やうか……騎士課程にもかやんとこへんだが？」

「はー。乗り手としても手を抜く氣はありませんから」

アティは一周していつそ感心した、といつ風だ。
何故かエルの頭をなでながら話しあす。

「なんてこりが、エル君って本当に目的のためなら手段を選ばない
んだね」

「……字面が少し気になりますが、選べる手段があるのに選ばない
理由があつませんから」

「ホント凄い。エル君で見た田いんなど可愛このに寒はすつゝく過
激だよね」

「（いんなん書つな。むしわいとなんやから別の手段が必要になつ
たんだよー。）」

その後、キッドヒューマン騎士学科を希望するじとを決めた。

目的は様々だが、ひとまずは3人揃つて騎士を図描すことになる。

「（ああて、こちちよロボット作つてみよかー。）」

そしてエルのテンションはとどめるといひを知らなごのであつた。

#4 発想の転換（後書き）

もうしばし、脳内設定の垂れ流しが続きます。設定類は完全に脳内だけの思いつきなので整合性の怪しい部分があるかと思いますが、矛盾点への指摘やより良いアイデアがありますから感想でもメッセージでも連絡いただけたと幸いです。

11/1/16 表現、内容微修正。
11/2/27 表現微修正。

#5 図書館にて

ライヒアラ騎操士学園、その敷地内にある図書館。多数の学生を抱えその学習内容も多岐に渡るため、図書館も多種多様な資料を所有する知の宝庫であった。

その図書館にて、穏やかな口差しを受け窓際の席で本を読む子供が居た。

図書館にはそれなりに人が居たが、不思議な事にその子の周囲だけまるで何かを憚るように空間が空いていた。

日の光に透き通りそうな銀の髪が、滑らかな曲線を描く顔の輪郭に沿つて流れている。

長い睫毛に彩られた蒼い瞳は、今は本を読むために軽く伏せられていふ。

背筋を伸ばした綺麗な姿勢で、しかし小柄な体格の為やや抱えるように本を支えるその姿はどこか微笑ましくも見える。

ここに画家が居れば迷わず筆をとるであろう、まだ幼いながら溜め息の出るような美しさをもつたその子に、周囲の人間は気になりながらも気後れして近づけないで居るのだった。

その子とは言わざもがなエルであり、今は幻晶騎士シルヒックトナイトについての調査の為、まだ入学しても居ないライヒアラに潜入しているのだった。

ひとまずは書物で調査可能なことを調べることにしたエル。

それだけでも相当な物量ではあったが、調べる物が物である。

そもそも前世ではモルスースの構造設定を片端から読み漁り、機

体名と設定に至つてはその8割を暗記していたような廃スペックのヲタクである。

実際の巨大ロボットの作り方など、これが俺の聖書だと言わんばかりに裂帛の気合いで読み漁っていた。

およそ半年をかけて数多の資料を読み込んだエルだったが、書物だけでは不十分な部分も感じていた。

「（あかんな、やっぱ開示されてへん情報が有る……）」

幻晶騎士を構成する要素は大きく分けると5つになる。

頭脳たる魔導演算機、
心臓たる魔力転換炉、
筋肉たる結晶筋肉、
骨格たる金属内格、
そして鎧である外装

幻晶騎士は魔力を動力として動く。
魔力を生み出すのは魔力転換炉だ。

この機関は、この世の生物がもつ“エーテル”から“魔力”への転換機能を機械的に再現したもので、周囲にエーテルが存在する限り半永久的に魔力を生み出し続ける。

そのままでは魔力は拡散し、エーテルへと還元してしまうが、それを全身の結晶筋肉へと送ることで魔力のまま保持しておく。

結晶筋肉は触媒結晶を鍊金術で加工した物で、特定の魔法術式と魔力の作用により形状を変化させる性質がある。

その性質を利用して、幻晶騎士にとつて文字通りの筋肉として利用される他、内部に魔力を貯めることができるために魔力電池としての役割も持つ。

それらの制御を司るのが魔導演算機である。
マギウスエンジン

内部に緻密にして膨大な魔法術式^{スクリプト}を抱え、全身を動かすための魔力の制御、魔力転換炉の出力制御、その全てを行つてゐる。

インナースケルトン アウタースキン

金属内格と外装は比較的単純な金属製の骨格と外装になる。

ただし、この時代の鍛冶技術では10mサイズの巨人の鎧や骨格を一気に作成することはできない。

そのためある程度小さな部品を組み合わせ身体強化^{フィジカルブースト}の魔法を応用した強化術で接合強化し、全身を支えている。

これは幻晶騎士に見た目以上の防御力を持たせる結果となるが、魔力転換炉からの魔力供給がなくなると全身を支えられないというこ

とでもある。

幻晶騎士とは全身を冶金と鍊金と魔術で構成した生物機能の単純模倣といえる。

さて、上記要素のうち結晶筋肉、金属内格、外装は運用上でも損耗の激しい部分であり、それこそ前線の砦や多少の設備のある街程度でなら容易に調達できるよう、鍛冶師と鍊金術師むけに教育が行われている。

勿論ライヒアラにもそのための学科もあり、設備や材料と言つた部分を別にすれば知識を得るのは簡単であった。

だが、魔導演算機、魔力転換炉　幻晶騎士の心臓部たる情報はほとんど開示されていない。

幻晶騎士とは国家にとって重要な戦力であると共に、おいそれと持たれては困る類いの物でも有る。

当然流通は国家に統制され、その心臓部の製法も秘匿されているのだった。

製法の秘匿は製造効率の低下につながり、大量生産できない分極めて値段も高額になる。

幻晶騎士のコストの原因の大半は此処にある。

「（とはいえ魔導演算機はまだ何とかなりそうやねんけどな）」

魔導演算機は魔法術式を用いて全身を制御している事まではわかっている。

ならば、同様の魔法術式で干渉できるはず……早い話、エルはどこの魔導演算機に対しハッキングをかけようとしているのである。単体で恐るべき演算能力を持ち、かつプログラム・ソフトウェアの知識も持つエルならではの発想である。

しかし、そんな理論的な部分ではない純粋な魔法技術の結晶、魔力転換炉。

この世界の魔法の根源を成す部分の模倣は、さすがのエルにも荷が重かった。

「（せめて……せめてもうちょっとヒントがないと。
こないな概念前世にやそもそもないし、見当もつかへんしなあ）」

たった一つわかった事は魔力転換炉では“精靈石”と呼ばれる特殊な鉱石を使用している、と言う事だけ。

その使い方も入手方法も全く不明、いっそ清々しいさっぱりっぷりだった。

最悪、魔力転換炉は稼動品の入手が必要になるかもしない。

全てを自作に拘るつもりはなかったが、結局その費用を考えると魔力転換炉だけの入手も現実的ではない。

「（まあ焦つてもしゃがない、それに理論はわかつても生産設備の無いもんが大半やし、そっちの都合を先につけるほつが先決かねえ）

「

本を置み片手をついて窓の外を見ながら思考にふける。

物憂げなその様子はまさに絵になる、と言つ風でちらちらと視線を向けていた周囲の人間の溜め息がせらりと深くなる。

「（設備はむしろこの学園の設備をなんとかちようまかしたほうにはやいんやないか？

どの道ここにあるんやし。むしろ餅は餅屋つてもんや、人材コミニコニアランで渡りつけるべきか。

さすがに俺だけで全部カバーは出来んし）」

エルは脳内で書物より得た多岐に渡る知識を整理し、実現性を検討する。

「（……どの道本格的に考えるんはガツコ入つてからになりそうやなあ。むしろこれやっぱ銭の問題なんのとちゃうか。

嫌んなるねマジで、世知辛いこつて。世間を渡るにゃコネとカネつてかーい。

ああもうほんまいつそのことどつかに所属不明の機体が落ちたり遺跡に安置されてたり戦闘に巻き込まれて新型機見つけたりせえへんやろか）」

薄く息をつき、思考を切り上げたエルは帰宅の準備を始める。

此処に来るたびに読む資料が増えていったせいで、今やエルの前は教本の見本市のようになっていた。

帰るには多少面倒だが資料を返却しないといけない。

そう思つてエルが顔を上げると目の前に座っていた人と目が合つた。

それもそのはず、目の前の人には本を読むでもなく、ずっとエルに視線を注いでいたのだ。

しかし、エルはまさかずっと注視されているとは思わず、普通にスルーして片付けを進めた。

エルの目の前に座った人物はそれを全く気にするでもなくその様子を興味深そうに観察していたが、ややあってエルに喋りかけた。

「ねえ君、ちょっとといいかしら？」

「……？　はい、何でしょうか」

声をかけられてエルは漸く確りと目の前の人物を見る。

豊かな金髪がウェーブを描き、形の良い眉とややたれ目氣味の青い瞳が特徴的な美人がそこにいた。

年齢のほどははつきりとしないが中等部の高学年、もしくは高等部くらいに見える。

「随分といろんな本を読んでいるようだけど、どこの学科の子かしら？」

「僕はまだここの中学生ではありません。この春から入学するのですが、その前に予習をとっています」

女性が軽く目を見張る。

エルは普通に答えてしまったことに少し後悔を覚える。

家族もキッド・アディももはや気にしていないので意識したことはなかったが、これらの資料は入学すらしていない子供が読むものとしてはかなり異常だ。

人目につく場所での調べ物は迂闊だったかもしない。

エルの内心の動搖に気付いたのかどうか、女性は表情を戻すと話を続けた。

「入学前に応用鍊金学、応用魔法構造学、初級騎操士概論まで読む
なんて……貴方す”く優秀なのね」

「いえ……」

しつかりとタイトルまで観察されていたようだ。

エルは会話に地雷原の中を竹馬で走るような感覚を感じた。

「噂以上の子ね。図書館の姫君さん」

「（ちよつおまつりえつなにそれこわい）何でしうつか？ その…
…呼び名？は」

「最近噂になつているの。図書館に信じられないほど綺麗な子が毎
日来て」

女性はふと視線を窓の外に向けた。

「こつも窓際の席で本の海に溺れているつて

女性の視線が戻る。

頬杖をついたその顔には楽しそうな笑みが浮かんでいた。

エルも表面上はにこやかに対応しているが、内心はしかめつ面もい
いところである。

「……存じ上げませんでした。それこそ本しか見ていませんでした
から」

「ふうん。それで、ね？ ちょっと興味があるんだけど……予習に
してもその量はすごいよね？
どうしてそこまで勉強しているの？」

ある意味当然の質問に、エルは即答を返す。

「趣味です」

「へえ、趣味。そうくるのかあ……ちょっと変わってるかもね、貴方」

「そうかも知れません。そろそろ本を片付けてきてもいいですか？あちこちに返さないといけませんから、時間が掛かりますので」

やや強引に切り上げたエルに特に不機嫌な様子も見せず、女性は片付けの手伝いを申し出た。

二人で本を片付け、挨拶を交わし図書館を退出する。

エルが相手の名前も話し掛けた目的も聞いていないことに気が付いたのは自宅に帰り着いた頃、だった。

「（うーん、入学前にあんまり派手なことはしたあないな。
概ね資料も行き詰つてたし、入学までは控えよかねえ）」

結局それから入学式の日まで、エルがライヒアラヘと行くことはなかつた。

図書館で出会つた女性、彼女と意外な縁があることを知るのは、入学式より後のこととなる。

#5 図書館にて（後書き）

11 / 1 / 16 表現、内容微修正。
11 / 2 / 27 表現微修正。

#6 入学式にて

春、ライヒアラ騎操士学園は入学式を迎えていた。

エル、キッド、アティの3人は連れ立つて学園へやつて来る。遠くからライヒアラへやってくる生徒は寄宿するが、元々ライヒアラ学園街に住んでいる生徒は実家からの通学になる。

初日はまず入学式となつてあり、先生方のありがたい話を聞くことになる。

その後昼食をはさみ学科ごとに別れ、授業内容についての簡単な説明を行う。

とは言え初等部は基礎系の授業の大半が各学科に共通となる為、学科の区切りも曖昧で本格的に学科ごとに分かれるのは中等部からになるのだが。

入学式は大講堂で行われる。

規模に比例して広大な学園内の敷地に迷う人間も多い中、以前から図書館に通り詰めていたエルは勝手知ったるとばかりにすいすいと大講堂へと歩いてゆく。

あとの二人はその小柄な後姿を見失わないようにと必死だった。

「案内いらすつてのはいいんだけどよ、どうにもエルは人ごみで見失つちまうんだよなあ。ちっこいし」

「そうよねえ。もーちょっと身長高いとみやすそうなのに。可愛いから良いんだけどね！」

「置いて行きますよ？ 一人とも」

「あ、そうだ良い事思いついた！ エル君抱きしめておけば見失わないよね？」

「是が非でも止めていただきたいです」

どうでもいい雑談を交わしながら大講堂へ辿り着くと、そこは既に大勢の生徒であふれていた。

これが全て新入生なのだろうか。さすが国内一の規模は伊達ではないようだ。

座席はまずは新入生向に空いているところに自由に座れるため、できれば3人まとめて座れるところを探したかったエル達は無駄なあがきかと思いつつ周囲を見回した。

すると、端のほうの席に空いている場所を発見した。

5人がけの長椅子に1人しか座っていない。

渡りに船とばかりにエル達はそこへ行くが、辿り着いたところでその理由を知ることになった。

ドワーフ族は主に北方の大地に住む山の民のことだ。
ただ1人そこに座っていたのは“ドワーフ族”と思しき少年だった。少年といったのは、新入生用の席にいるからの推測であって、すでに立派な髭を持つその外見は年齢が解りづらかつた。

険しく、冬は雪に閉ざされる地方に暮らす彼らは、元々は山腹の洞窟などを利用して暮らしていた。

それは時代が進むにつれ自分たちで洞窟を掘るようになり、高度な掘削技術を生み出すことになる。

また北方の地には良質な鉱山が多く、日常的に山を掘つて暮らす彼らは自然、多くの鉱物資源に通じていった。

それらの資源を利用するためには鍛冶技術が高まり、今では彼らは鍛冶の民と見做されている。

そういうた経緯もあり、狭い洞窟で活動し易いように背は低いがそ

の分全身を強靭な筋肉に覆われており、膂力だけなら人の倍にも達しようかといふほどである。

風貌は概ね厳ついと言つてよし、しかも男性は生まれたときから髪の毛と同様に髪がある。

また十分な髪を蓄えることが立派と見做される一族の特徴と相まつて、年齢よりも相当に老けて見えることが多かつた。

そんなドワーフ族だが長い歴史の間ずっと北方の山地に閉じこもっていたわけではない。

一族に伝わる鍛冶技術と、その強力な身体能力をもつて各国で鍛冶屋として働くものも多い。

とは言え見かける頻度は高くなく、一般的な子供にとっては非常に老けて見える外見は奇妙に映り、近寄るのを躊躇わっていたのだった。

バトソン・テンドーは隣に人の気配を感じ、ちらと横に視線を向けた。

周囲の子供がドワーフ族である自分の横に来るのを躊躇っているのはわかっている。

嫌な気分にならぬもないが、まだ最初の入学式である。多少の人見知りとして気にしないでおくことにした。

そんな訳で先ほどから隣の席は空きっぱなしだったのだが、その状況で物好きにも自分の隣に来る奴はどんな奴か、少し気になったのだった。

隣に座った人間は、一言で言つと小さかつた。

ドワーフ族であるバトソンも身長は低いが、それでも既にかなり筋肉になりつつあるため存在感がある。

それに比べ、隣に来た少女は身長も低く、全体的に華奢で兎に角小さく見える。

単に座席が埋まつてきただけかと視線を正面に戻そうとして、その前にこちらを向いた少女と目が合つた。

予想外なことに少女は怯むでもなく至極自然に話しかけてきた。

「お隣、空いていますか？」

「あ、ああ。空いている」

「ありがとうございます。僕はエルネスティ・エチエバルリアと申します。貴方は？」

いきなりの自己紹介にむしろバトソンが怯みかけたが、黙つているのも失礼だうと返事を返す。

「バトソン・テンドニーだ。見ての通りドワーフ族だな」「バトソンさんですね。隣り合つたのも何かの縁です。よろしくお願いしますね」

その少女とは簡単な挨拶を交わした後、入学式が始まるまで適当な世間話をしていた。

ドワーフ族を全く気にせず話しかける人間は珍しい。
ショッパながらそんな奴に会えるとは、とバトソンはなんとなくこの先の学園生活が気楽に思えてくるのだった。

エルがドワーフ族を気にしているには大した理由はなく、エルにとつてはこの世界のものは大半が“変わったもの”であるというだけだった。

ドワーフ族の風貌などについては多少は聞いたことがあったが、実際に見てみるとほんとうにうつ感じなのかあ、と思つただけだった。

た。

そういう意味では真っ当に話が通じるならどの種族でも大差ない、と割り切っている部分もある。

バトソンと話してみるとややぶつ毛ひげなきりこはあるものの、特に引っかかる感じもない。

バトソンから父母が鍛冶師としてライヒアラに来たこと、じうじの慣習に従って学園に入学し、学科は当然鍛冶師学科であることなどを聞いていた。

「（ドワーフは鍛冶の技術がかなり得意らしいしなあ、新入生じゃ何があるってわけでもないけどいざれコネがあるんは損やない。割と幸先ええんかもな）」

裏に打算も含みつつ入学式が始まるまで会話は続くのだった。

学園生活の心得や新生活に向けて、といつも題目の長時間に及ぶ話を耐え切り、新入生一同に退屈と忍耐の表情が浮かんできた。教師の話が終わり、次は一人の女生徒が壇上に上がる。

見事な金色の髪を揺らし、背筋を伸ばして歩くその姿に、生徒の間に微かなざわめきが広がった。

「初めてまして新入生の皆さん。私はライヒアラ騎操士学園の生徒会長を勤めますステファニア・セラーティー……」

その姿を見たとき、エルは苦笑いを抑えきれなかつた。

「（なんとまあ、）ないだの図書館の人かい。まさか生徒会長とは

ねえ）」

そこに居たのは以前図書館で声をかけてきた女性だった。思つたよりも厄介な人に目をつけられたのかもしれない、そう思つていたエルだがふと隣で息を飲む気配を感じた。

ちらりと目線をやると、キッドとアディが生徒会長を凝視している。美人だから熱心に見ていてます等とは決して言えない苦々しさも感じる雰囲氣に、エルは首をかしげる。

「（なんか縁もあるんか？　どうも双子とも関係ありそやけど……）」

そのうち本人達から話があるかもしれない。
何も無いうちから敷をつつくのも無粋か、とひとまづそれは置いておく事にした。

生徒会長の挨拶も終わり、昼前に入学式は終了となつた。

昼食を挟んで昼からは学科」とのオリエンテーリングになる。
昼食をとろうとする生徒で混雑する食堂の一角に、矢鱈と皿立つ集団がいた。

うち二人は黒髪フルネットをぼわぼわとゆるいウェーブの肩丈にしたよく似た雰囲氣の男女。

うち一人は銀髪をセミロングに揃え、小柄な美少女（？）。
うち一人は赤茶けた髪と髪を伸ばしたドワーフの男性。
一体どうこう取り合わせなのか、傍からはまるで解らなかつた。

「……俺も一緒でよかつたのか？」

「ええ。どなたか待ち合わせの約束があるのでしたら、無理にと

は言ひませんが

「いや、特にそういうことじやないが……」

「じゃ、いんじやね？ つか午後も話まだんのかよ。なげーよ」

「キッズはまともに聞いてないんだから良いんじやないの？」

「取り敢えずは食事にしましょ。混んでますし、早めに場所を空けたほうが良いでしょう」

傍からは詮索するような視線があつたものの、話しかける勇者は一なかつたようだ。

しかしその中で、そんなことをものともせずに昼食をとる彼らに近づく人影があつた。

小型のテーブルは彼らだけで満員だったが、その人物は気にせず傍らへとやってくる。

「ほんにちよ。また会つたわね、図書館の姫君さん」

「ほんにちよ、生徒会長。会つたも何もせんからこりつしゃたよう」

「あら、そんな細かいこと気にしちゃ負けよ？」

そこで生徒会長は一緒に席についていた面々のひ、双子を見て目を見張つた。

「アーキッズ、アーテルトルート……貴方達、どうして此処に……知り合いなの？」

キッズが表情を消し、常とは違つ様子で答えた。

「（）無沙汰しております、ステファニア姉様。

エルネスティとは、近所のよしみで一緒にいます」

「（姉様……なあ。しかし）（）敬語使えたんや。知らんかったわ（）

「そうだったの…貴方達もライヒアリに入学する歳になつたのね…」

…

「ステファニア姉様は……生徒会長、でしたか。バルトサーク兄様も、此処に？」

「ええ、騎士学科の中等部1年よ。そのうち会う機会があるでしょ

う

「（あーなんか、なんとのう、察しがついてきた）」

どこがギクシャクした空氣を払つよつてエルが皆を促す。

「こんな混んでいるところで立ち話をしても落ち着かないでしょ
し、ここは場所を改めては如何でしょうか？」

「それもそうね。貴方達も騎士学科だったわね？だとすれば会う機
会には困らないわ」

生徒会長は話すだけ話すと去つていった。

エルの視線は事情はまた今度聞きます、と語つていたがその場は特
に何も聞かなかつた。

一人蚊帳の外でなんとも微妙な表情のバトソンに詫び、丁度いい時
間なので学科の教室へ移動することを提案する。

なんともいえない雰囲気の中バトソンと別れ、3人で騎士学科の教
室を目指し歩き出したのだった。

学科ごとのオリエンテーリングはさしたこともなく、明日からの
授業内容と今後について簡単な説明があつただけだった。
説明を受けたあとは解散となり、3人は家路へとつぶ。

エルは気にしていなかつたがキッドとアディは軽口も弾まづ硬い雰囲気のままだつた。

「詳しく述べわかりませんが、あまり氣を落とさないことです。明日からは授業も始まりますし、今日は特訓は無にしてしまつか」

「エル」

「はい？」

「聞かねえのか？」

「言つ必要があるのなら、聞きますよ」

ひとつ息を吐くと、一人の雰囲気が和らいだ。

少し確認するより視線を交わしていたが、ややあつて切り出す。

「エル君、このあとちょっと話したいことがあるんだけど」「はい。では僕の部屋にでも行きましょうか」

エルの家に着き、部屋へと向かつ。

普段魔法の講義にも使つてゐるため一人にも勝手知つたる場所である。

「あー、まあ簡単に言つとよ、うちの親父つて貴族なんだ」

簡単すぎた。

エルは目を瞬いて答える。

「でもキッドも、アディも……貴族らしい事していませんよね？」

「僕と訓練したりしてますし」

「ああ、そこがちょっと複雑で……母さんは正式な奥方じゃない。所謂妾つてやつだな」

「……」

「まあ母さんのんびりしてるからわ。俺たちもできたり、妾でも氣にしないって言つてたんだけど」

「父さんの正式な奥さんが……なんていうかスッゴク嫉妬深いのよねえ。その癖体面は気になるらしくて」

「で、苦々しくは思つても、妾じきに突つかるのはプライドが許さないんだよ」

さすがにエルは反応に困つて、とりあえず相槌だけ打つていた。

「母さんホント大人しいのよねえ。何でも奥様に遠慮して。

それで、奥様がさ、結局私達が同じところに住むのはどうしても許せなかつたみたいで」

「住む所を与えるつて感じで今のお家を用意して、そつちに住めつてや。あと食費の面倒は見てくれてる」

「まあそういうわけで……おつきの生徒会長、がその正式な奥さんの娘」

「そつちはまだいいけど後一人息子がいてさ。その下のまづがこれまたうつぜえ奴なんだよな」

「何かにつけて威張り散らしていくし、妾の子だなんだつて絡んでくるんだよ」

苦々しげな様子でキッドヒアディが溜め息をつく。

「それが、ライヒアラにいるのですね？」

「そう。騎士学科の中等部1年、だつたっけか」

「なるほど。トラブルの予感ですね」

キッドが天を仰いだ。

彼はトラブルの予感ではなく、確信に近い思いを抱いていた。

「生活費も出してもらつてるし、親父には感謝してるんだけどさ」「向こうも放つて置いてくれるんだつたらこっちから絡むことはないのに。どうにも突つかかつてくれるんだよな。気に入らないんだとよ」

キッドが大仰なリアクションをとり、どつかと椅子に沈み込んだ。

「姉さんに知られたからには……いずれ、来ると思うわ。

そして、来たら一緒にいるエル君も、巻き込んでじゃうかもしけないし……」

「大よその事情はわかりました。で？」

小首をかしげつつヒルが聞き返す。

「……で？ つたあ、なんだよ？」

「方針は、撃退ですか？ 黙殺ですか？ それとも闇討ちとかでしょうか？」

「そうそう、闇討ち……つておい！」

「（なんと見事なノリ突っ込み）」

エルはいつもどおり一コ二コとしながら物騒なことを言つてのける。見た目どおりの人間ではないとわかっているはずのキッドでさえ思わず引く勢いだ。

「……俺さま、お前が友人でよかつたと思つぜ？ 敵に回すの嫌過ぎる」

「本当心強いつたらありやしないわねえ。

まあしばらくは様子見ね。もしかして何も起こらないんだつたらそれに越したことはないし」

「そうですね。とは言いましても、僕が何処まで首を突っ込んで良

いかもわかりませんし。

必要なら言つてください。幾らでも力になりますか？

「ああ、助かる」

「（しつかしまさか貴族たあなあ。つテーことは何かい？ 何やら

俺に曰えつけてきたのは貴族かい。

さてなんか一悶着ありそややなあ）」

その懸念は程なく現実のものとなる。

#6 入学式にて（後書き）

10 / 10 / 31 誤字・表現修正。
11 / 1 / 16 表現、内容微修正。
11 / 2 / 27 表現微修正。

#7 ものの武器の名は

入学式の次の日には授業が始まった。

そつするとエル達3人の生活も学園を中心としたものになってゆく。

騎士学科の授業内容は大きく分けると一般教養と初級騎士課程の二つに分かれる。

一般教養はほぼ全学科に共通で、騎士課程ではまずは魔法の知識・魔力の強化と剣術の習熟が重点的に行われる。

魔法は難易度や威力により、おおまかに初級魔法、中級魔法、上級魔法に分類される。
基礎式の行使からその規模拡大・連續使用や基礎式の複数同時使用までが初級魔法に分類され、フレメヴィーラ王国の国民は最低でも初級魔法以上は習得している。

中級魔法からは、単純な拡大でも一定以上の威力を持つもの、複数属性の組み合わせ魔法の行使、そして基本的な強化制御魔法の行使がその範囲になる。

戦闘職を目指すのではなく、一般的な職業につくものは中級魔法をある程度習得していることが多い。

保有する魔力と相談すると、ある程度の威力の中級魔法の使用が限度になるからである。

騎士学科以外の学科では初等部から中等部の間に中級魔法までを習得することを目的とする。
一定以上の中級魔法や上級魔法まで習得するのは騎士学科 つまり戦闘職のみだ。

上級魔法は身体強化に代表される多数強化制御、複数属性魔法の上位版などどちらかというと強力だが扱いの難しい魔法が分類される。

上級魔法になると、単純にその制御能力のみならず膨大な必要魔力を支える保有魔力の問題が大きくなる。

エルの例もあるが、魔力を増やすには日々の地道なトレーニングが必要になる。

長期間、十分に魔力のトレーニングを行えるのが騎士学科の特色ともいえた。

授業内容は勿論最初は初歩的な内容が主になるのだが、3人は魔法と剣術については以前から修練を積んでいるため、いまさら初歩を教わったところで意味がない。

エル達以外にも、例えば貴族の子弟には家庭教師をつけ事前に魔法や剣術、場合によつてはそれ以外の知識も学んでいることが多々あるので全員一律の授業とはしていない。

最初のクラス分けで全く経験の無いものは一般クラスとなり、ある程度の経験者は上級クラスとなる。

入学前に魔法や剣術の教育を受けられるものというのは、当然それなりに裕福な家庭の者になる。

そのため必然的に上級クラスには貴族や商人の子供が多く、どこか言い知れぬ緊張感のようなものも感じられるのだった。

魔術の授業では、最初に各自に魔法を使う為の道具が配られる。

それは木製の杖で、銀の簡単な装飾が施され先端部分に触媒結晶が装着されている。

元々魔術を習っていたものは個別に持っていることが多いが、入学時には一律で配布されるのが常だつた。

騎士であつても魔法を使うときは杖をつかうため、杖の扱いに慣れておくことは重要だ。

それを見ていた一人の生徒が手を上げる。

「先生、この杖なんですが、他の物……例えば剣に触媒結晶をついた物では駄目なのですか？」

教師は良い質問です、と頷いた後説明を始める。

「そうですね、それには魔力と金属の関係について知る必要が有ります。

金属には、魔力をそのまま通すことができる性質があります。逆に木等は魔力を通さない。

皆さんの杖は素材は木ですが、表面に銀で装飾がありますね？それは魔力を通し触媒結晶に伝える為のものです」

教師は手に持つ杖を軽く振りながら説明を続ける。

「金属と言つても一律に魔力を伝えるわけではなくて、種類によって通しやすさが違います。

例えば銀は魔力を非常に良く通しますが、逆に鉄や鋼は魔力をやや通しにくい。

通常の鉄製の剣に触媒結晶を装着するのは、ロスが大きく染められないんですね。

逆に全部銀で武器を作ると恐ろしく高価になってしまいます」

「でも、それならこの杖と同じように魔力の部分だけ銀で伝えればいいのでは？」

説明を聞いていた生徒の一人が挙手し、質問する。

丁度聞いて欲しかった質問を受けた教師がにこやかに説明を続けた。

「いい着眼点です。しかしijiで重要なのは剣と言つのは消耗品であるということです。

魔獣には強靭な皮を持つ物も多い、何回か戦えば剣は直ぐに駄目

になってしまいます。

そこで新しい剣を用意するのですが……毎回銀を施していたのは余計な手間がかかりてしまいます。

平時ならともかくもし戦いが続くといふれば思つたより厄介な事なのですよ」

「それで、魔法は専用の杖を用意するのですか」

「その通りです。長年の内に今の形に落ち着いたのですね」

教師の説明を聞きながらエルは考える。

「（まあそら剣と合わせてもいられんか。でもなあ、前から思つてたんやけど杖つて扱いにくいんやなあ。

なんとかこう、杖をもつと使いやすくするか、剣とかに合わせら
れへんやろか）」

先ほどの説明を聞く限り、重要なのは触媒結晶とそれに魔力を伝え
る銀の導線。

そして近接武器は容易に交換できるものが望ましい。

「（杖つちゅーか、これ要するにや、射撃武器なんよな。魔法飛ば
すための。

扱い易い射撃武器つちゅーたら……銃やん。そりや、拳銃みたい
なの作ればいいんじゃね？

そしたら撃ちやすいし、何よりわかりやすい。何で今まで思いつ
かんかつてんや（ひ）」

そしてエルの思考は授業から大きく飛翔を始めた。

「（特注品になりそやけど本物の銃と違つて複雑な機構はいらな
いし、ガワだけなら何とかなるんとちやうか。

あれ？ ちょい待つて？ 銃？ 剣？ ……銃剣？ あ）「

思いついたエルは猛烈な勢いでデザインを考える。

銃剣 つまり魔法を発射する銃を模した部分と、それに装着する小剣とに分ければ良いのではないか？

ただし、本来銃剣自体はがつちりと斬りあう事など想定しているものではないので、構造は一工夫必要だろ。う。

最初はハンドガンに銃剣を装着するようなイメージで考えていたが、どうも色々としつくりこない。

そもそも銃としての機能が要らないのだからやはり剣に沿う形のほうが……。

そこで、彼の脳裏に閃くものがあった。

前世で彼が大好きだった銃。

きわめて完成度の高いレバーアクション機構と流麗なフォルムを持つライフル。

“ ウィンチエスター M 1894 ”

彼が所有していたのはそのショートバレルタイプのエアガンだが。あれの弾倉部分を剣と考えて、バレル部分の長さを変えてデザインすれば……。

放課後、魔法の授業そっちのけで書き上げた怪しい図面を手にエルは鍛冶学科を訪れた。

探しているのはバトソンだ。それ以外に鍛冶に縁のある知人は居ない。

一度挨拶しただけの縁ではあるが、彼はドワーフである。

彼自身に作ってもらうか、場合によつては親に頼んでもらひ事はできないだろうか、エルはそんなことを考えていました。

ドワーフ族であるバトソンを探して訪れてきた見田麗しき少年に、周囲は何事かと囁きあつ。

当のバトソンは悪田立ちすることにため息を隠せない様子だったが、訪れてきた知人を無碍にすることはしないようだつた。

「こきなりどうしたんだ？ 鍛冶学科までくるとは」

「突然すいません。武器を特注で作りたいのですが、その、他に鍛冶に縁のある知人がいないものとして」

「ああ、それで俺に相談か。で、ものは何だ？」

「それは、この図面を見てもらいたいのですが」

図面を見たバトソンの表情が見る見る訝しげなものになる。

「エルネスティ、これは……なんだ？」

「ワインチエスター・ライフルです」

「聞いたことのない名前の武器だな、それにややこしい形をしている

……作るのは良いが、もう少し具体的な説明をしてもらひぞ」

「お願いできますか？ ああ、勿論費用はお支払しますので、どれくらい掛かるか見ておいてくださいね」

エルはほっとすると共に、同時にバトソンの鍛冶の腕を見る良い機会だとも思った。

数日後、バトソンから連絡を受け彼の家を訪れたエルの目の前には、エルがデザインした怪しい武器が形になつて存在していた。ライフルのストックをイメージした、やや下へ向かつて湾曲する持ち手に、本来鍔のある部分は奇妙な構造になつていた。

そこには、上半分はグリップから伸びた銀のフレームに触媒結晶が装着されている。

下半分はそこから伸びるショートソードの留め金になつており、刀身部分だけ交換可能となつていた。

ショートソードは一般的な量産品を流用可能になつていて。

ドワーフ族の技術はエルの指定した構造をキッチリと仕上げてくれたようだ。

手にとつて感触を確かめていたエルに訝しげにバトソンが声をかける。

「頼まれたとおりに仕上げたが……剣にしては随分といけいや」としているんだな

「剣と同時に魔法を撃つてみよつかと思いまして」

実演します、と言ひてエルは2本の剣を持ち、鞘を身につけて裏手へでた。

そこにある試し切りの的へ切つ先を向ける。

通常の剣や杖と違い、銃床を模した持ち手は手に馴染み、重量感も懐かしさを感じる程だ。

エルは徐に剣を水平に構え、魔法を発射する。

基本術式を軽く数発。狙い過たず的に中心に当たる。

そのまま走り出し、標的に斬りかかる。

当てる直前に真空斬撃ソニックブレードの魔法を発動、衝撃波を発生させ丸太の標的を両断する。

斬り飛ばされた上半分が地面に落ちる前にもう一本の剣を向け、今度は爆炎球の魔法を発射。

上空で丸太が粉々になるのを見届けた。

2本の剣を軽く振り、そのまま腰の鞘に収納する。

にこにこと上機嫌なエルと対照的に、バトソンは呆れ氣味だった。

「何て言つた、無茶苦茶だな。出鱈田もいいところだ」

「まあそれはそれとしまして、素晴らしい出来栄えです。バトソンさん、貴方はいい鍛冶師になりますね」

「これでもドワーフの端くれでね。ま、御代はきつちりいただくが」

バトソンから受け取った請求書を見たエルが首をかしげる。

「……思ったよりも安いのですけど。大丈夫ですか？」

「ああ、俺が練習がてら作ったものだからな。大半は材料費だ」

「色々とありがとうございます。他にも、思いついたらお願ひしても良いですか？」

「場合によるし、俺の手におえるものならな」

そのまま“ワインチエスター？＆？”と呼びかけられた2本の剣はエルの腰に後ろに伸ばすような形で装着され、以降どこに行くにも持ち歩かれることになる。

#7 もの武器の名は（後書き）

10 / 11 / 1 冒頭に行き場の無い魔法のレベル説明的なものを追記。

11 / 1 / 16 表現、内容微修正。

11 / 2 / 27 表現微修正。

#8 授業をつけよう

場面はエルがウインチエスター？＆？を入手するより少しさかる。

エル達がいるクラスでは魔法能力測定が行われていた。

使用可能な魔法のレベル、構築速度、そして魔力の総量を測定する授業である。

参加している生徒もそれぞれにやる気を漲らせながら、自身に可能な最大の魔法を放ち、魔力の限界まで使い続ける。

単純に魔法能力の上下で何が決まるというわけではないが、やはり他人よりよい成績を出すと嬉しく、得意になるものだつた。

ある生徒が爆炎球^{ファイアボール}の魔法を放つ。

火の基礎式^{アイキテクト}系統では中級に位置する魔法だ。

杖から放たれた橙色に輝く橢円形の魔力球が、微かな炎の尾を曳きながら標的へと命中する。

命中した瞬間、爆炎球の魔法はその名の通り炎を撒き散らしながら爆発した。

標的である鎧は形を保っているものの焼け焦げ、爆発の威力を物語つていてる。

周囲の生徒がどよめく。

入学直後に中級魔法、それも威力は折り紙付きの魔法である爆炎球を使いこなす者はかなり少ない。

さすがに強力な魔法だけあり必要魔力も高く、放った少年は息を切らせている。

入学直後にこれだけの魔法が使えれば、在学中に魔力の増大に努め

ればいざれかなりの実力を持つことが望める。

教官達は今年の生徒は将来有望かもしないと期待を抱いていた。

しかしそんな周囲の様子とは対照的に、エルは困っていた。
彼は他人の魔法能力について殆ど把握していないため、自分がどれくらいの位置にいるかをわかつていなかつた。

正確にはキッドとアディの能力は知っているが、如何せん彼らはエルにとつては弟子のような位置づけであり、その能力の高低は世間一般におけるそれを知る指針にはなりえない。

エルの両親も息子の成長に変な枷をつけたくなかつたからか、一般的なレベルに関しては殆ど説明をしなかつた。

その結果、エルはどこまでやつてもいいものか考えあぐねているの

だつた。

「（やつきの鑑みる限り、一発でも爆炎球使えんのは相当なもんつてことやな。

もしかしして爆炎球やつたら連射できますとか**暴炎嵐巻**けますとか
言つたら弔るされんちゃつかこれ）」

エルが自身の魔法能力の位置づけに悩んでいる間にも、無情にも頑番は回つてくる。

エルは教官の呼び出しに応じ、前にでながら心を決める。

「（あんまり飛ばしそぎると後々厄介そいやし、）」
「（は爆炎球で様子みるか）」

未だ日本人だったときの思考が抜けきらないエルは、自身の趣味には全力を傾けるが大勢の前で力を振るうのには苦手意識を持つている。

程ほどを目指すべく爆炎球の魔法術式を組み上げ、エルが杖を構えたとき運悪く（？）小声で囁かれた周りの咳きが耳に入ってきた。

「お、次の奴見ろよ。すげえ可愛いじゃん！ 魔法使えるってことはどつかの貴族の子かな？」

「ほんとだ。あんな子が騎士目指してるとか？ いくらなんでも無理じゃないかなー。」

「まともに魔法使えるのかあれ？ あんだけちつここんじゃ魔力もほとんどなさそうだし。」

真剣だったエルの表情が不自然なタイミングで微笑みに代わる。

「（ははは、遠慮するとかファッキン阿呆らしいがな……全 力だ）」

魔術演算領域に展開していた爆炎球の魔法術式を変更、一部構成を変更し威力を引き上げ、繰り返し構文を構築し範囲を拡大する。

徹甲炎槍 ピアシングランス 爆炎の魔法を圧縮し対象に命中した方向に指向性の爆発を発生させる、貫通力を上げた火炎弾 しかも1つではなく10本もの炎の槍が出現する。

瞬きするほどの間に杖を回転させて円周上に徹甲炎槍を配置すると、標的へ向けて一斉に撃ち放った。

狙い過たず、標的として用意された鎧に次々命中した赤く細い炎の槍が、当たつた瞬間鋭い音を立てて炸裂する。

狭い領域に発生した熱と衝撃波が鎧を背後まで貫き、内部の杭を破断する。

それが10本。貫かれ、真っ赤に溶けた鎧が内部の杭ごと爆ぜ飛んだ。

徹甲炎槍の魔法自体は爆炎球よりやや上の中級魔法に分類されるが、

一瞬でその魔法術式を構築し尚且つ一撃に10本も同時起動するとなると容易なことではない。

さうには驚くべきことに、それだけの規模の魔法を放ちながらエルは息すら切らしていない。

それは彼が保持する魔力に対し、徹甲炎槍の消費が負担にならないといふことを示す。

そんなものは正騎士すら通り越してこの国の近衛騎士レベルの所業である。

間違つても学園入学直後の生徒に可能な状況ではない。

吹き飛んだ鎧に一警をくれ、エルが振り返るとそこには驚愕に彩られた顔、顔、顔……。

エルがこれはもういつそ開き直つてこれまで通り全開で生きるかと考えていると、キッドとアディが近づいてきた。

「おー、エルやる気満々じゃねえか

「むしろ鎧に何か恨みでもあつたとかー? といつかエル君怒らせると消し炭にされちゃうんだ!?

「違いますよ。これはその、手が滑ったと言いますか……」

「手が滑ると消し炭なんだ……」

話しながらすすりと後ろに下がってゆくアディを、キッドが苦笑しながら止めた。

「ちげえだろ。やっぱ目的あると手え抜けねえんだろ? よし、いつちよ俺もカツ飛ばして来るぜ」

「(ええ、ちよ、そらまざいんとかけやつか? 物凄い立つで?)」「

エルは気持ち声を潜めてキッドに忠告する。

「そんなことをしたら恐ろしく立ってしまいますよ。」
「兄弟の耳に挑戦状を突き立てるつもりですか？」

「お前これだけブツ放してそれを言つかあ？ 前も言つたけどよ、
どうせつるんでるんだからこっちまで辺り着くのなんぞ時間の問題
だろ？」

「（的確すぎて全く反論できへんな）……来るのも迎え撃つのもほ
ぼ確定ですね……」

「予定通りじゃねえか。んじゃ、ちよこと行つてくら

先ほどのエルの起こした大惨事に、未だショックが抜けやらぬ演習
場にキッドが向かつ。

あれほど魔法能力を目の前で見せられて、なおその後に続こうな
どと考える人間は稀である。

その気まずい雰囲気を歯牙にもかけぬとばかりに出てきたキッドを、
周囲は同情するような視線で眺めていた。

しかし、それも彼が魔法を使つまでであった。

「（わすがはエル、我らが師匠つてか。追いつくのは厳しいつって
も、ちょっとくらいはカマしてやんねーとなー）」

気合を入れたキッドが爆炎砲撃フレイムストライクを放つ。

単発だが威力の拡大率で徹甲炎槍を凌ぐ高火力の中級魔法。
派手な炎の尾を曳いた橢円形の魔力球が飛翔し、爆炎球を凌ぐ爆発
を起こす。

アディがそれに続き、雷撃投槍ライオットスパローを放つ。

雷撃投槍はその名の通り、電撃を槍状に収束し、標的へと放つ中級
魔法である。

眩い雷光が煌き、大気を裂く轟音と共に標的に雷の槍が突き刺さる。雷の系統は威力は火の系統と場合により分けるといったところだが、性質上相手へと正確に誘導することが難しい。

地味に制御の負担が大きく、扱いが難しいため他の系統よりも上位として扱われることの多い魔法である。

二人とも手馴れた様子で魔法を放ち、無理をしている様子はない。さきほどのエルよりは地味ではあるものの、十一分に同年齢の平均をブツちぎる魔法能力を見せる一人に、周囲から何かを諦めた溜め息が漏れた。

以前述べたが、上位クラスの人間は貴族や商人の子供が多い。それはとりもなおさずプライドが高い子供が相当にいるということである。

子供らしい短気さと結びついた幼い自尊心は、容易に勘気になりうる。

だが、目の前で見せられた光景は自尊心こと対抗心を碎くだけの威力があった。

明らかに意氣消沈したクラスの様子に、別の意味で失敗したかと困惑するエル達だった。

上位クラスの受難はまだ続く。

魔法に続き実施された剣術の授業。

先の授業で常人離れした能力を見せた3人に對し、周囲の生徒は“剣術まで化け物だつたらどうしよう”と不安で仕方がなかつたが、運動能力は高かつたものの技術的には他の生徒と大差はなかつた。少しは安心したのもつかの間、エルとキッドが簡単な模擬戦を始めた時にその安心は脆くも崩れ去る。

二人の模擬戦は最初は軽い打ち合いだったが、お互にいつもの相手であるため、何時の間にかいつもと同じ訓練メニューになつた。

動き 자체はまだまだ荒いが、互いに限定身体強化リミテッド・フィジカルベースを発動しての恐ろしい速度の打ち合いに発展するまでさほどの時間は掛からなかつた。当の本人たちはこれでも遠距離魔法や機動系の魔法を使わずに練習のつもりだったが、周囲の人間からするとそこだけ別次元の空間である。

魔法を併用しての剣術訓練など、初等部では触りを習うかどうかというところ。その上文句なしの上級魔法である身体強化を併用しての戦闘など、冗談もいいところであつた。

驚愕や嫉妬を通り越し、上位クラスの生徒達は一つの悟りを開いた。“アレは放つておいて自分たちの分を頑張ろつ。それとアレに逆らうな。逆らうと死ぬ。”

一日が終わる頃には逆に晴れやかな表情になつたクラスの生徒に、エル達は何ともいえないものを感じるのだった。

“ 今年の新入生には上級魔法を軽々と使いこなす化け物がいる”

その噂は数日と待たず同学年を越え、騎士学科中に響き渡ることになる。

しかし、直接目撃していない人間にとつては眉に唾をつけたくなるような噂だ。

何故なら百歩譲つて上級魔法を構築したのはいいとしても、必要魔力が壁と成り立ちはだかるからだ。

人が持つ魔力の量とは多少の差はあれ、概ね努力と訓練により増大するものであり、同年代でそこまで極端な差が出るものではない。たかが初等部の新入生が上級魔法に必要な魔力を貯えるとは到底思えなかつた。

エルは学園への入学時点でも6年にも渡り普通は過酷といわれるレベルの訓練を絶やさず続けている。

多少の遅れはあれどキッドとアディも訓練量は相当なものであり、保持魔力だけなら一般的な成人の騎士にも引けを取らない。しかし噂を聞いただけの生徒にそんな事情がわかるはずもなく、噂の真相を確認すべく物見高い一部の生徒が初等部の付近に現れるようになつたのだった。

「おや、これはアーキッドじゃないか。久しぶりだなあ？」

そんな上級生の姿も見慣れたものとなつた頃、廊下を歩いていたキッドは最も会いたくない人物に遭遇した。

彼の名はバルトサール・セラーティ。

キッド・アディの異母兄にして昔から彼らに嫌がらせを繰り返す人物だ。

その容貌は彫りが深く、整つていると言つてもいい顔立ちだが、口元に浮かべる笑みの嫌らしさがそれを損なつてゐる印象があつた。異母兄のいつもながらのにやにやとした表情に反射的にキッドは顔を顰めそうになるが、表面上は平静を保つていた。

「お久しぶりです。バルトサール兄様」

「噂を聞いたんだよ、噂。他愛もない話なんだがな？ 今年の新入

生に凄いのがいるらしいなあ？」

バルトサークルの身長はキッドを上回る。何が楽しいのか、彼は笑みを浮かベキッドを見下ろしたまま話を続ける。

「それがどうにもビックリも？ 詳しく話を聞けば誰かさんにてつくりだそうじゃないか？」

「そうなのですか？ 私はその噂を知りませんが……」

ついにきたか、とキッドは内心で気合を入れた。
常よりもさらにくどいこの態度を見れば、果たして愉快な会話など期待できやうにもなかつた。

「兄にむかつてその態度、やはり新入生のガキじゃあまだまだ礼儀ができないなあ？」

「……申し訳有りません」

「まあいい、私は寛大なんだ。躊躇のなつてないガキも広い心で赦そ
うじゃないか」

「……有り難う御座います」

「それよりも、さう、さつきの噂だ。アーキッド？」

バルトサークルの田元が細められ、口元の笑みが更に深くなる。
キッドの背中を言い知れぬ気配が走る。

「（本題はここから、セービング出る……？）」

「アーキッド？ それにアーテルトルートもだ。お前たちも少なからず魔法は使えるだろ？ が。

「そう、少なからずだ。入学したてのガキにできる」とは少ないんだ。なあ？」

しかるに噂の本文は下らない物だ。實に下らない。その通りなら

……」

バルトサークルの目がいつそう細められる。

「お前たちは既に正騎士並みの魔法を使えることになるじゃあないか？ なあ？」

「兄様、それは」

「まさか、まさかだらう？」

バルトサークルの口元から笑みが消える。

そのままにじり寄るように進みだし、周りを憚つてか声を潜めた。

「妾のガキごとに、随分と分不相応な話じゃないか？ なあ？」

「……家の近所に魔法を教える者がいまして、彼から習いました」

「お前らが？ 上級魔法だと？ 噂は無責任な物だ。

何を誤魔化したのか知らないが周囲が勘違いしてるんだろう？」

「いいえ、概ね事実です。兄様、私たちは……」

「もういい、黙れ。」

バルトサークルの口元は笑みとは逆の方向に歪められていた。

段々と感情的になるバルトサークルに、キッドは何があつても対処できるように全身を緊張させる。

しかしキッドの予想に反し、バルトサークルはふつと表情を消して問い合わせてきた。

「それでどうするつもりだ？ アーキッド」

「どう……とは？」

「上級魔法、騎士学科。随分と豪勢な騎士ができるぞうじゃないか？」

「騎士か？ それで？ 手土産でも持つて我が家へ帰るつもりか？」

表情を消したまま、バルトサールは淡々と問いかける。

「兄様、以前から言つていいとおりです。私たちは実家とは関わるつもりは、ありません。

「騎士を目指したのとてそれは生活を考えてのことです。」

「いいぞ、優しい兄は愚弟の言葉を信じてやるつじやないか

「ありがとうございます」

再びにやついたような笑みを浮かべたバルトサールは踵を返した。捨て台詞を残し去つてゆくバルトサールの姿に、キッドは溜め息を隠せなかつた。

「（この場でビッグヒット一のはなかつたがよ。ぜつてえこのまま終わるなんてこたあない。

嫌がらせくらいなら我慢すつけどよ、下手な騒ぎにならねーことを祈るぜ）

心中とは裏腹に、キッドは悪い予感を払つ事が出来ないでいるのだった。

キッドがバルトサールと話していること、エルヒアティは別の場所で見覚えのある人物と遭遇していた。

「噂は聞いたわ。“図書館の姫君”は魔術、体術ともに非常に優秀なようね？」

「ここにちは、生徒会長。それと噂はともかくその呼び名は止めていただきたいのですけれど、

「あら？ ミリシテ？ 似合つたるの？」

エルはチラリと横のアディを見やる。

「（毎回会つたび）機嫌なんやけどほんまこの人何のつもりなんやろ。

こないだの話聞く限り、この人自身はキッドやアディに嫌がらせをするつもりは無さそうやし……」

折角この場にいるのだから、とエルはその理由について直接聞くことにした。

「せういえば、前から気になつていたのですが

「何かしら？」

「キッドとアディでしたら兎も角、生徒会長が主に僕に話しかけてくる理由はなんでしょうか？」

「あら、それはとても簡単な理由よ」

腰に手を当て、自信に溢れた表情でステファニアが言い切る。

「私は可愛くて賢い子が大好きだからよ！」

あんまりな理由にエルとアディが凍りついた。
とつたにエルが裏手ツツコミを入れかけたが、驚異的な精神力で自重する。

「前々から図書館の姫君には目をつけてたのよねえ 実際見たら
凄い可愛い子だったし、しかも賢い！」

我慢できないとばかりにエルを抱きしめにかかる。

「魔法も得意で騎士を田指してゐんじょ」「べつに、お姉さんを守る騎士になつてみない？」

今ならう食添い寝付きで……」

「ちょ、ちょっと駄目よ！ エル君は私のぬいぐるみなんだから！」
「（なに）この家系こわい。つーかアティ、なんぬいぐるみやねん」

「

衝撃の告白に固まつていたはずのアティが素つ頓狂な声を上げたかと思つとエルを奪還した。

ステファニアに対する言葉遣いが素に戻る勢いだ。

それを見るステファニアは笑顔とくつよつにやけているとか例えたほうが的確な表情をしている。

元が美人だけにどことなく空恐ろしく感じる笑顔だった。

「あらあら、これはこれなるほどねえ～」とかつぶやいていた気がしたが、エルは黙殺した。

「アティ、言葉遣いが戻つてますよ」

しまつたと言いたげな表情でアティが口を押さえる。

「いいわよ、学校でまで無理しなくとも。私はバルトと違つてそんなの気にしないもの」

「姉様がそうおっしゃ……言つんだつたら」

「それはそれとしてアティ？ そろそろ離して貰いたいのですが？」
「ほへ？ あ、『じめん』じめん。あまりのすっぽり感につい……」

漸くエルは解放される。

ステファニアがそれを羨ましそうな視線で見ていた。

「そうなのよね……エル君、君のサイズ、こりへ、腕の中にすっぽり
入る丁度よさ……」

「ええ、姉様。しかもエル君、髪の毛さらりさらりで……」

「アーテルトルート……貴女、さすがは私の妹ね！」

「姉様……！」

エルはがしつと手を取り合つ姉妹からそそくさと距離を取る。

「（いやちよお待とうやそこ）の変態姉妹。

つーかこんな変態が生徒会長でいいのかよ？ 裏で職権乱用とか
しどんのちぢうつか）」

どんどん議論が白熱する姉妹を横目に、これまでとは別の意味で学園生活の不安がぬぐいきれないエルだった。

#8 授業をひきよひ（後書き）

11 / 1 / 16 表現、内容微修正。
11 / 2 / 27 表現微修正。

#9 決闘の時間

一部授業をのぞき、3人とも普通に学園生活を送っていた。剣術に関しては魔法を使用しないことである程度問題はなく、魔法に関してはもはや学園で習う事がないレベルだった為早々に自習になっていた。

そんな自習時間を利用して、エルはワインチエスターの習熟訓練を行っていた。

標的と向き合い、腰にかけたワインチエスター？＆？を抜き放つ。ワインチエスターをバトソンから受け取つてから、幾度となく練習し繰り返した動作。

以前の記憶・経験と重ねて、抜刀と運用は既にエルの感覚に馴染んでいた。

エルにとっては、ワインチエスターは魔法を使うための道具というよりは既に銃としての認識の方が強い。

それも発射するのは魔法であり、認識する魔法の種類だけ弾が選べるまさに“魔法の銃”だ。

エルは切つ先を標的に向けたまま“銃”としての発射に最適化した魔法術式を呼び出した。

「（右弾種設定・“空気弾丸”、発射形態・“連続射撃”）」

魔術演算領域へ選択された魔法術式が展開し、瞬きするほどの間に

追加の関数を呼び出し発射形態に合わせる。

連続射撃 前世の銃と同様に、弾丸を続けて発射するための制御

文を付帯する。

右手の銃から魔法発射に特有のやや甲高い、乾いた発射音が連續して響き渡る。

弾に選ばれたのはお得意の空気を圧縮して弾丸にする魔法だ。連續して対象に命中したそれは、当たった端から炸裂し強烈な圧力を標的に与えていた。

「（左弾種設定・“火炎弾丸”^{ファイアートーチ}、発射形態・“单発拡散”^{モード キャニスター・ショット}）」

左手は設定を変更する。

威力の低い炎の弾丸を同時に16発、網を広げるよう拡散して投射する形態。

全く別の魔法術式を平然と同時に処理できるあたり、エルの処理能力の高さが伺える。

発射音が重なり、常よりも高い音が訓練場に響いた。

同時発動数の拡大も、連続発射も制御文の附加により簡単に実現できる。

「（さて他になに再現できるやろ。3点バーストは鉄板にしてもグレネード？それただの爆炎球。もうちょっとおもろい撃ち方なかつたやうか？）」

この“魔法の銃”と前世における銃の最大の違いは弾切れがないと言つ点だろう。

正確には魔力が続く限り撃ちつづけられる。

しかし、エルはまるで弾倉^{マガジン}があるかのように24発を1セットとして魔法術式の更新を要求するようにし、連続発射数に制限をつけた。これは発射数の計数が容易となるようにあり、撃ちすぎによる魔力の過剰消費へのリミッターであり、単に昔の癖に合わせた遊びの部分であった。

「（リロードのない銃とか浪漫がたりん。

欲を言えば薬莢と排莢機構が欲しいとこやけどさすがにそれは遊びすぎやしなあ。

つか物理的に機構が必要な部分はきつこ」

そんな様子を見て、横で同じく発動練習や魔力トレーニングを行っていたキッドがぼやいた。

「なんつうかよ、“ういんてすた”だっけ？ その武器

「“ワインチエスター”です。どうかしましたか？」

「武器もそうだけど、その魔法をバカス力連射するやり方って珍しいと思つてよ。

普通は剣の補助にするか、隙を見て一撃狙いになるんじゃねえか？ その武器だと連射しやすいとかか？」

「どうでしょ、私はそう思いますけど、大半は感覚的な部分の話ですしね」

キッドは何かを思い悩むようにしばし空中を見ていたが、ややあって切り出した。

「おんなじような武器を、俺も欲しいんだけどよ」

「あまりお勧めできません」

「即答するじやねえか。理由は？」

「今の形態では機構上、大型の武器はつけられないのですよ」

ワインチエスターに装着されているのは比較的小型のショートソードである。

エルの体格的な問題もあるのだが、根元のグリップ機構の耐久性の問題や魔法を放つ場合の取り回しも考えると、根本的に大型の剣を

着けるのに向いていない。

キッドが好んで使うのはやや大ぶりのブローディソードであり、当然重量的にもかなり豪張る代物だった。

「あー……そういうことか。ん、でもよ、それって魔法放つのに必要なのは根元の部分だけなんだろう?」

「はい、そうですよ」

「じゃあ、杖の代わりにそこだけ使うのはありなんじゃないか?」

「(なるほど)銃&剣スタイルか。それはそれでよさそうやな)

一回試して見ますか。製作はまだバトソンさんにお願いしないといけませんけど」

「そうこねーとな」

エル達がこの後のことを話し合しながら教室に戻ると、クラスメイトの様子が少しおかしかった。

休憩時間が騒がしいのは良くある事だが、エル達を見てなんとも微妙な表情をされでは、気にするなど言つ方が無理だった。

「どうかしたのですか?」

「え?いや、その、最近君たちのことを聞きこくる人が多くてさ。

その、今も……」

「それはなんだか申し訳ないです。手間を取らせてすいませんでした」

「そつ、そんなの別に手間でもなんでもないからー。きつ氣にしないで!」

クラス……どころか学科に有数の実力者(しかも非常に可愛い外見の-)に普通に頭を下され、クラスメイトは顔を赤くして焦った

ようにわたわたと答えていた。

「しかしそんなに頻度が高いのですか？」

「結構来るみたいだよ？でもまあ、大抵は少し質問したら帰つていくようなんだけど、さつきはなんていうか凄くしつこい人がいてさ」

「しつこい……」

キッドとアティは無言で視線を交わした。

それをちらと見てエルもなんとなく状況を察する。

「ねえ、そいつ、常に口元がいやらしくニヤニヤ笑つて豚が腐つたような顔してなかつたかしら？」

「（その例えに該当するんつてほんま人間か？ いつちゃん最初に検索ヒットするのE-Tやねんけど？）」

「ええ！？ そんな凄い顔してなかつたよ！ ……あ、でも口元が笑つてつてのは、あつたかも」

キッドとアティが頷きあう。

「そりなんだ。あ、いろいろありがとうね？ 今度からそういうのつて私たちが応対するつて断つてくれたらいいからさ」「なんだか全校生徒の前でガツーンとブツ放つのが一番楽な気がしてきたぜ」

「一理ありますね。だからとて見世物になる気は毛頭有りませんが」

これでクラスメイトの負担が少し軽くなるか、と3人は思った。

しかし、その後も“しつこい上級生”は何回か出没した。

その上級生は、大抵エル達と会わないような場合に現れ、話はエル達本人に直接聞いてくれというと上級生である事を理由にその場で

の回答を強制し、なおかつ内容によつてはしつこく否定していくらしい。

直接的な害はないがその影響も無視できなくなつてきている。クラスメイトとの間に漂う雰囲気がだんだんとギクシャクしてゆくのを、エル達は感じていた。

バルトサール・セラーティは苛立つていた。

キッドと話した後、噂に興味のある上級生と言う風を装い、彼のクラスメイトにそれとなく聞いてみたのだが、彼らはキッド達の能力が如何に凄まじかっただかを語つた。

クラスメイト達の話は彼らが実際に見た光景なのだが、バルトサールにとつてはその内容が信じがたく不愉快極まりない。

キッド達の実力は凄まじく、話のとおりならばバルトサールよりも遥かに強いことになる。

バルトサールにとつては姫腹の弟が自分より高い能力をもつなどあつてはならないことだ。

感情的にも受け入れられるものではないが、不機嫌の主な理由はバルトサールの立場によるものだった。

セラーティ家はフレメヴィーラ王国では有力な貴族だ。

所有領の広さこそそこそこではあるが、地形がなだらかで大規模な穀倉地帯が存在する。

また位置的にボキューズ大森海に近しい位置にあるため、魔獣を警戒し国内有数の規模を誇る騎士団を擁する。

前線と接する重要な拠点とも言え、そのため最前線として常に人と物が行きかう活動の活発な場所であり、自然経済的にも発展していた。

セラーティ家には3人の子供がいる。

長男のアーツは家の跡取りとして貴族としての教育を専門に受け、すでに父について領地経営の補佐を始めている。

長女のステファニアが現在ライヒアラ騎操士学園中等部3年、次男のバルトサールは現在ライヒアラ騎操士学園中等部1年である。本来は妾腹の子供があと2人いるのだが、正妻と本人たちの希望により一般には知られていない。

一般に貴族の次男以下の男手は、大体の場合は騎士、もしくは官僚としての能力を求められる。

ゆくゆくは自領地の経営補佐に入るか騎士団へ参加するか、直接国に仕えるかである。

セラーティ領には国内有数の騎士団があることもあり、バルトサールは当然騎士を目指した。

“騎士の国”では騎士団を率い、魔獣から領民を守ることは貴族として最も誉れ高い役目とされる。

領主や国王への尊敬とは別に、直接自分たちを守ってくれる者が尊敬を勝ち得るのは当然だからだ。

それ相応の能力は求められるが、領主の子弟ともなれば騎士団を率いる事も夢ではない。

そのためにもバルトサールはこれまで努力を続けてきた。

長兄の下で騎士団を率いる事を疑いもしなかつたバルトサールだが、ここに来てのキッドの台頭が影を落とす。

これまでのバルトサールの努力を一笑にふすキッドの能力。

もし、本当に現時点で正騎士にも匹敵するだけの力があるなら、下手をすればいずれ国を代表する騎士にまで上り詰めるかもしがない。いくら今は実家とは無縁の境遇にあるとは言え、それだけの能力があれば父の耳にもその名が伝わるだろう。

それほどの騎士を、しかも妾腹とはいえ領主と血縁にある人物を周囲が捨て置くとはとても思えない。

騎士団を率いるには単純な戦闘能力だけが問題になるわけではないが、それでもその性質上、より強い者が優遇される傾向はある。直接率いるかは別としても、キッドが現在バルトサールを目指す位置を脅かしていることくらいは簡単に想像がつく。

自身がつくべき名前ある立場に、しかも妾腹の弟がつく。それはバルトサールにとって悪夢意外の何者でもなかつた。

彼は考える。

これまで日障りではあつたが、実害もなければたいしたもの出来なかつた妾腹の弟。

その油断が現在の状況につながつてしまつた。もはや事態は一刻を争う。排除をできるだけ急ぐべきだが、噂の通りなら現時点でも正面きつて戦いを挑むのは得策ではない。キッドの能力をうまく抑えて、安全で効率的に排除する方法を模索する。

バルトサールは馬鹿ではない。

むしろ他を犠牲にすることを厭わないその性格は、時に卑劣な策を自らに与える。

常からにやついた笑いを浮かべるバルトサールの口元が、さらに醜悪な弧を描いた。

「これはどうこう」とでしょうか？ バルトサール兄様

アディの前ではバルトサークルがいつも笑みをへばり付けて立っている。

だが、問題はその周囲だ。

バルトサークルの後ろに3人、そしてアディの後ろに4人、まるで道を塞ぐようにして男達が立っていた。

一人で廊下を歩いていた時にバルトサークルに呼び出され、人気の少ないところに連れて来られた。

大声で罵声でも浴びせ掛けるのかと思って油断したのは失策だった。アディとしてもいくらなんでもバルトサークルがここまでやるとは考えていなかつたため、気付けば囮まってしまったのだ。

「彼らは私の友人だよ。なに、聞き分けのない新入生に、礼儀を教えるのを手伝ってくれるそうでねえ？」

バルトサークルの仲間は無言でにやにやと笑っているだけだった。

「礼儀は授業で学んでいる途中です。皆様のお手を煩わせるほどのことではありません」

「妾腹のガキには、授業だけじゃあ全然足りてないね。

兄が手づから教えてやろうというのだ、平身低頭するのが本来といふものじゃあないかね？」

バルトサークルの子分の一人が前に出る。

「そう、お嬢さんは大人しくして……」

もはや付き合つていられないと判断し、アディはその言葉が終わるのを待たず素早く腰の杖を抜く。

リミテッドファイジカルブースト
限定身体強化を展開、近寄ってきた子分が反応しきる前にその腹に肘鉄をかける。

とにかく逃げ出すにも包囲を突破しなければいけない。

アディは子分の一人が悶絶して倒れた隙を逃さず、そのまま強化された足で駆け出す。

予想以上のアディの動きに浮き足立つ子分どもの間を勢いをつけて突破しようとしたその時、

「スパークダート
電撃矢」

アディに背後から電撃が浴びせられた。

「かはっ」

致命傷ではないものの、電撃が直撃し体が痺れたアディはそのままもんじりうつて倒れる。

「（くつ、失敗したあ……駄目、気が……遠……く……）」

薄れ行く意識の中、アディは電撃を放ったバルトサークルがいつものにやけ顔のまま近づいてくるのを見ていることしか出来なかつた。

アディが意識を失つてしまし後、キッドの下へ望まぬ客が訪れていた。

「おや、今日は教室に居るのだね？ 天才君」

キッドは驚いた。

バルトサークルは実家から離れている状態のキッドに話し掛けるのに、今までには多少場所を選んでいたようであつたが、今回は大勢の人が

いる場所で堂々と話し掛けってきた。

一瞬何と呼ぶべきか、キッドが言ことよどむ。

「先輩、今日はなんの御用でしょうか」

キッドの質問に、バルトサールが常の笑みを浮かべたまま高らかに答えた。

「君に決闘を申し込む…」

「…?」

周囲が一瞬シン、と静まり、直後抑えきれないじよめきが広まる。

「尊を集めのも飽き飽きしてねえ。天才新入生と讐敵き君の実力、この手で試させてもらおうか！」

「（）いつが遠まわしにでも誉めるなんざありえねえ。何かある、絶対何からくでもねえこと考えてやがる！（）」

「答えはどうしたんだい、天才新入生君？」

「いいじゃねえか……受けて立つてやるよ…」

これまでのように嫌味を言われるなら兎も角、正面から戦いを挑まれたのだ。

もはやキッドに態度を取り繕つ氣はなかつた。
「なんと口汚ない……品性を疑つね。その化けの皮、何処までもつか楽しみだよ」

ライヒアラ騎操士学園では生徒同士の戦闘行為を禁止しているが、
“決闘”と呼ばれる戦闘だけは例外だ。

決闘にはルールが存在し、必ず1体1で行うこと、決闘に参加する両者の合意が必要であること、別に審判となる人間が必要であること、そして審判の言葉と判断には従うことなどが決められている。他には武器は練習用の木剣を使用し、周囲に被害を及ぼさないため放出系の魔法が禁止になっている。

決着は片方の意識の喪失もしくは敗北の意思表明により付けられる。

騎士学科はその性質上、揉め事の解決を決闘で付けることも多く、学園内には“決闘広場”とも呼ばれる定番の場所まで存在する。バルトサールとキッドの決闘の話はすぐさま周囲へ広がった。彼らが決闘広場に到着すると、噂の天才新入生の戦いを目見ようとかなりの野次馬が詰め掛けているようだつた。

生徒の一人が審判を買って出、決闘のルールを読み上げた。

両者の合意が確認され、二人が向かい合つたところでバルトサールが胸元のポケットから何かを取り出す。それを見たキッドの表情が強張る。

「（あれは……今朝アディイがつけてた髪留めじゃねえか！？　まさかこの下衆野郎……！…）」

驚愕の思いでバルトサールを見返せば、常よりもより深い笑みを浮かべた顔と目が合つた。

キッドは相手の狙いを一瞬で悟る。

「てめえ……アディイに……」

「ふん？　何のことかわからないが」

バルトサールは既に高笑いを始めそうな様子だ。

「天才君はすでに上級魔法が使えるのだりつへ、ぢうだい、一つみせてもらえねいかね？」

キッドは低く唸つた。

わざわざそんな事を言い出すのは、裏を返せば使うな、こじで恥をかけという事である。

その証拠に、バルトサールはそう言いながらも髪留めをひらひらと見せ付けていた。

「……そんなの、使えねえよ……」

キッドは肺の奥から搾り出すよつにして答える。

周囲の観客からどよめきが上がる。

噂の新入生は、実は何かの間違いだったのだろうか？

そして何より驚いたのはキッドのクラスメイト達だろう。何を言つているんだ、以前アレだけの力を見せつけた君が？

「なんだ、なんだそれは！　シヒアッ天才君なんていうのは何の間違いかい？

全く、ぼろが出るにも早いじゃあないか！　もつきまでの威勢はどうしたんだね？　シヒアッ！」

視線で人が殺せるなら、バルトサールはキッドの視線に射殺されてしまう。そんな視線を意にも介さずひとしきり笑つたあと、バルトサールは告げる。

「やれやれ、嘘をついてまで田立とうなんて、随分と不逞の輩じゃないか。

新入生の腐つた性根を叩き直すのも上級生の勤めというものだね？

さあて、それから始めよ! じやないか

そして、決闘という名の処刑が始まる。

「どうしたんだね？ 天才君！ 魔法も使えなければ剣術もさっぱりじゃないかね！」

剣を打ち合いながらバルトサークルが嘲笑う。

キッドはよほど怒りにまかせて反撃しようかと思つたが、時折アディの髪飾りを見せられてはそれもかなわない。

傍目にはキッドの動きのキレは鈍く、決闘の開始から30分余り、ほとんど一方的に攻められる有様に見える。

何回か反撃するも、明らかに勢いに欠け、直ぐにバルトサークルに押し返されている。

周囲の人間は噂の新入生の体たらくに失望の色を隠せない。何を間違つたのか噂は所詮噂で、生意気な新入生が現実を知つて終わるだけ。

既に飽きてその場を立ち去つた者もいた。

だが、一部の生徒は違和感を覚え始めた。

相当数の打撃が直撃しているはずだが、キッドはそれでも立つて構えていた。

圧倒的優位に酔うバルトサークルはその違和感に気付かない。ただまだまだキッドを打ち据える事ができることに喜ぶばかりだ。

バルトサークルを倒せない以上、キッドには攻撃を耐え凌ぐことしか出来ない。

果たしていつまで続くかはわからないが、それでもキッドは反撃の

時をひたすらに待っていた。

本当にそのときが来るのか、キッドにも確信はない。
だが、彼にも望みはある。

彼の親友がこの状況でこの場所にいない。
これだけ仰々しく騒いでいるのだ、きっとその耳には入っているはず。

ならば、親友が動かないはずは無い。

「（頼むぜ親友……ここで頼れるのはお前だけなんだからよー）」

#9 決闘の時間（後書き）

11 / 1 / 16 表現・内容微修正。
11 / 2 / 27 表現微修正。

#10 決闘の決着

エルが調べ物をしようと図書館へ向かっていると、突然誰かに後ろから抱きしめられた。

訝しげにエルが視線を上に向けると、果たしてそこにはエルの髪に頬擦りをするステファニアの至福の表情があった。

「ああ、このやうなぞら感、癖になりそう」

「（弟警戒しどつたらまさかの姉からの襲撃かい）生徒会長、もう擬態すら止めましたね……」

「こんなにサラサラな髪の毛がいけないによよよ。この小・悪・魔ちゃんめ」

ステファニアはほお擦りをしたままエルの頬を指で突つつく。

「ひとまず正気に戻つてください。そして離してください」「あら、動搖もしないなんてお姉さん自信なくしちゃうわ」「（やべえこの変態、完全にキャラかわつとんがな）」「そうそう、あまりのサラサラ感に本題を忘れるところだつたわ」「（諦めよう、こいつもあかんわ……）」

かなり投げやりになりつつあるエルだったが、次のステファニアの言葉で急速に冷静さを取り戻す。

「アディがね、バルトに呼び出されたみたいなのよ」

「！ それは……」

何かを言いかけてエルが言ひよどんだ。

確実にトラブルが起こっているが、最終的にはこれは身内の問題に

なる。

エルには、どこまで首を突っ込んでいいものか判断がつかなかつた。しかし、そんな迷いも次の一言で吹っ飛ぶ。

「……それには、バートのほうはかなり大勢だつたのよね」「あまり人様の身内をどうこう言いたくはないのですが。非常にろくでもない予感しかしませんね」

エルの内心は言葉ほど冷静ではなかつた。

兄妹喧嘩ならまだしも、人数を揃えてとなると話は別だ。

「エル君にはアディを探しにいつて欲しいの」

「……いいのですか？」こう言つては何ですが、もしアディに危害が加えられた場合、貴女の弟御とはいえ容赦できそうにないですよ？」

精神的には既に30台半ばも過ぎるエルだが、親友が大勢をもつて害されてまで大人しくは出来そうにない。

「死なない程度にお願いね」

「割りりますね」

「バートが一人で動いているのならまだいいの。

……でも今回は違う。生徒会長として、姉としても見過しがせないわ」

ステファニアは苦笑するような表情を浮かべている。

二人の視線が交錯し、エルは即座に決断した。

「アディが連れて行かれた場所を、教えていただけますか？」

学園内にある今は使用されていない一角に、アディとバルトサークの子分はいた。

アディは今、両腕を後ろ手に縛られ、足も縛られた上で椅子に座らされている。

バルトサークの電撃により意識を失つてから一時間ほど、彼女の意識は戻っていない。

「チツ、このガキが、やつてくれるじゃねえか！」

「おい、意識失つてるんだからあんまり余計なことすんな」

アディの意識が無いにも拘らずこれだけの人数が居るのは、彼女が意識を取り戻して暴れた場合の備えだった。

そして苛立ちを抑えきれない様子の男は、アディが包囲を突破しようとして肘鉄でのした男である。

彼もつい先ほどまで気絶していた。

「なんだよ、氣い失つてる上に縛り上げてるんだぜ？ そんなびびるこたねえだろ」

「一発でのそれたくせに偉そうに『いつ』」

「ああくそ、油断したんだよ…」

その男は気絶しているアディの髪を乱暴につかみ、上を向かせた。

「ガキだと思つて手加減してりやあ付け上がりやがつて、一発思い知らせてやらねえと気が済まねえ！」

周りの子分達は呆れる。

彼がやられたのは手加減も何も、完全な油断を突かれて一撃で燐さ

れただけだ。

そしてもし殴りでもしてアディが意識を取り戻せば少々厄介なことになる。

男を止めようと、別の子分が手を伸ばした瞬間。

突然、教室の後ろから人が入ってきた。

ほとんど人が出入りしない場所だと高をくくっていた子分達は、突然の侵入者への対処が遅れた。

驚きつつ振り向いたとき、彼らが目にしたのは銀色の弾丸が剣を抜き走り出す姿だった。

侵入者……エルは迷いなくウインチエスターを抜刀し疾走する。

同時に風の中級魔法である風衝弾(アロダム)を3点バーストで左右に同時発射。放たれた風の弾丸が奥にいた二人に直撃し吹っ飛んでいくのを確認もせず、エルは身体強化でさらに加速し、今しもアディに殴りかかるとしていた男に斬りかかった。

男は慌てながらも迎撃しようとしたが、強化状態で走るエルのほうが圧倒的に速い。

エルはその状況でも冷静だった。

直接斬りはせず、疾走中に刀身に真空衝撃(ソニックブーム)の魔法を展開、衝撃波で男をブチ飛ばした。

瞬きするほどの間に3人の仲間が仲良く切り揉みしながら吹っ飛んでいくのを見て、残る1人は驚愕に動きを止めた。

それは侵入者が明らかに幼かつたからであり、それが突然暴風のような勢いで全員を吹き飛ばしたからだが、残念なことにそんな隙を見逃してくれる相手ではなかつた。

とつさに構えた杖が一瞬で両断され、もう一刀が横合いから襲い来る、それが彼が記憶している最後の光景だった。

暴風の勢いで子分4人を瞬殺したエルは、彼らが気を失っているのを確認してアディに駆け寄る。

彼女を拘束する縄を切り、様子を確認すると怪我もなく呼吸も落ち着いており、気を失っているだけのようだ。

アディの無事を確認したエルは一息ついた後、転がっていた子分たちを縛り上げにかかった。

全員の手脚を縛って拘束すると、エルはアディを横抱きに抱え上げる。

悲しいかな、アディの方が身長が高いため大幅にはみだし気味だがなんとかバランスをとる。

此処に来るまでに聞きつけた騒ぎの様子で向こうで何が起こっているのか、凡そのところは把握していた。

エルには向こうの様子は窺い知れないが、キッドが何もせずにやられるとは思っていない。

「間に合ってくださいよ……」

エルは一刻も早くキッドの下に向かうべく、騒ぎの中心に向けて走り出した。

ライヒアラ騎操士学園の校舎の間にある中庭、通称“決闘広場”では、2人の生徒の戦いが未だに続いていた。

戦いは既に1時間の長きに渡り、ほとんど一方的な内容にも関わらず未だに決着の気配は無い。

バルトサークルは此處に至り、漸く違和感を覚え始めた。

キッドの剣術の腕前は其処まで高くはない。

この戦いの間にキッドに剣が直撃した回数は数え切れないので、上に来る。

木剣とは言え、普通は動けなくなるほどダメージになつて然るベキだ。

それが、確かに動きは鈍つてきているものの其処までのダメージを感じられない。

人質を気にしてか積極的な攻めは行つてこないが、それにしてもやの瞳には強い光が宿り、何かを狙つていることは明白だった。

「（なんだこのタフさは？　何故まだ倒れないんだこいつは！

まさか、アディが自力で脱出してくるまで粘るつもりか？

確かにアディもかなりの動きを見せた、有り得ない話じやない）」

バルトサークルが再びにやりとほくそ笑む。

キッドは、例えアディが目を覚ましても縛り上げられている上に監視がついていることを知らない。

余計な希望も潰してやるとばかりにキッドに話しかけた。

「……なにを時間稼ぎをしている？」

「……！」

「あれがくるのを期待しているのかね？　だったらそれは無駄だとしか言いようが無いね？」

まあ私も飽きてきた。そろそろ決着をつけようじゃないか。なあ

？」

アディの髪飾りを殊更見せ付けるようにしながら木剣を構えなおす。

キッドの顔がこわばる。

彼も見かけほど無事ではない。

ダメージは確実に蓄積しているし、この上全力で攻撃を受ければ切

り抜けられるかは微妙なところだつた。

しかも、先ほどからバルトサールの視線はその狙いを雄弁に語つてゐる。

「（避けるな）」

本当に決着をつけるつもりなのだから、次の攻撃は恐らく渾身の一撃になる。

今の状態のキッドには、避けずについて無事に済むとは思えなかつた。バルトサールが気合と共に間合いを詰めようとするのと、その影が飛んでくるのはほぼ同じタイミングだつた。決闘を見守る野次馬達の頭上をまとめて飛び越し、その最前列に突如として現れる。

かなりの大ジャンプ、しかも女性を横抱きにしているにも拘らず、着地は何か柔らかいものを踏んだように音もなくスムーズだつた。野次馬達が驚いて自分達を飛び越した小柄な影を見る。

それがアディを抱えたエルであると確認した瞬間、野次馬の中のクラスマイト達はこの決闘に決着のときが来たことを悟つた。

それを横目に確認したバルトサールの表情が驚愕に歪んだ。アディは縛り上げた上に見張りまでつけていたはずだ。それを突破してきた？ 彼の子分達は一体何をしていたのか？ それよりアディを抱える銀髪の子供は一体誰か？ バルトサールには状況が全く理解できなかつた。

移動している間に目を覚ましたアディが立ち上がり、バルトサール

を一睨みした後、キッドに向き直る。

握りこぶしから親指だけを立て、そのまま首を横に搔つ切る仕草をする。

それを見たキッドの全身から力が抜け、笑い出しそうになる。キッドはアーティの後に居るエルを見て話しかけた。

「遅せえよ

「すいません。教室がやたら多いのがいけないのでですよ」

「なんだよそりゃあ。まあいいけどよ」

笑いながら、キッドが木剣を構えなおす。

バルトサークルは今にも叫びだしたい気分だったが、こと此処に至っては事態が最悪の方向へ向かっていることを悟らざるをえない。

だが、とバルトサークルは思い直す。

確かにキッドを抑え付けていたアーティという切り札がなくなつた。だからと言つてこれまでキッドに与えたダメージがなくなるわけではない。

今ならまだ速攻で勝負を決められるはずだ。

バルトサークルは再び渾身の力を込め、キッドに斬りかかった。

果たしてキッドの動きはそれまで散々に打ち据えられていた人間のそれとは思えないほどだった。

弾かれたような勢いで踏み出し、軽く剣を払うとそのままショルダータックルの要領でバルトサークルを弾き飛ばす。

バルトサークルが吹っ飛び、一旦間合いが開いた。

キッドの魔力容量はエルには敵わないものの、それでも相当な量を誇る。

これまでの戦いでかなり消耗していたが、それでも暫くの間全力で動いても問題ない程度は温存されている。

「（今までの借り、まとめて熨斗つけで返してやるー。）」

キッドがエル直伝の**身体強化**フィジカルブーストを全開で発動した。

足元の石畳を踏み割りそうな勢いでキッドが加速する。

慌てて起き上がるうとするバルトサークルが迎撃の構えを取る前に、キッドの木剣がバルトサークルの腹に叩き込まれる。

ぐげっ、という声と共にバルトサークルの肺から空氣が吐き出され、その体が宙に浮いている間に次の攻撃が放たれる。

凄まじい勢いで連撃が叩き込まれ、バルトサークルの体が滞空したまま不自然な体勢で回転しようとしているところに、たちこキッドの回し蹴りが叩き込まれた。

今度こそバルトサークルの体は縛もつれる様に切り揉みしながら宙を舞い、数回は空を飛んでからべしゃつと地面に落ちた。

一息の間に全力を振り絞ったキッドが大きく息を継いだとき、やつと審判が我に返った。

慌ててバルトサークルに駆け寄るが、彼は襤襷雜巾タマリタタケンのような姿のまま白目を剥き、泡を噴いて気絶していた。

そのまま審判によりキッドの勝利が宣言される。

それまでの戦いが嘘のようなあつけない幕切れに野次馬もついていけなかつた。

最後にキッドが見せた動きは、明らかにバルトサークルなど歯牙にもかけないだけの力があつた。

ならば途中までのあの体たらくなんだ？

野次馬の視線がキッドに駆け寄る少女に移る。

彼らも馬鹿ではない。彼女がこの場に来た瞬間、キッドが何かを吹

つ切るよつな動きを見せたのだ。

事情など言わざもがな、といつといひがである。

襟襷巾状態のバルトサークルに向かう視線が冷ややかなものになつていいく。

騎士学科の生徒にとつて決闘は力による問題解決の手段ではあるが、それでも勝者に与えられる名誉は神聖なものである。それをこのよつな手段で得よつとするひとは、騎士といつあり方に対する裏切りも同然であつた。

慌てた様子の子分達に回収され、保健室へ運び込まれるバルトサークルに対する周囲の態度はどこまでも冷ややかだつた。

この出来事が噂となり広まるまでにひとせどの時間は必要ないだろつ。

さすがにダメージが重く、座り込んだキッドにアーティイが寄り添つていた。

「キッド、大丈夫なの？」

「なんともねえ、とはさすがに言えねえな。随分痛めつけられちまつたぜ」

「うわ、服破れてるじゃない！……あんな豚の攻撃、避けちやえばよかつたのに」

「あんなもんちりつかされたんじゃ早々自由にや動けねえよ

「…………」「めんなさい、私の……油断のせいだ」

キッドは落ち込むアーティイの頭をぐしゃぐしゃと撫でながら笑つた。

「気にはんな、悪いのはあの馬鹿だし。エルもありがとな、ちとやばかつたぜ」

「間に合つて何よりです。それより

ちやつかりバルトサールから髪飾りを回収したエルがそれをアディに返しながら聞く。

「相當に打ち込まれたようですが、その割りにダメージはなさそうに見えますね」

「ああ、あいつこっちが避けづらいからって技もへったくれもなく打ち込んできたからよ」

苦笑しながらキッドが答える。

「当たる場所に合わせて身体強化フィジカルブースト ハードスキンと外装硬化を一瞬だけ使って、ダメージ抑えてやってな」

「なるほど……しかし危険な芸当をやってのけますね」

「他に何も考えずに済んだからできた芸当だな……あとあの馬鹿にも救われた。」

もつと全力で急所狙われたら保たなかつただろうな

「結局、あの人の敗因は全く詰めが甘かつたことですか」

エルが頷いている間に、決着を見届けた野次馬がぞろぞろと解散してゆく。

「では、ひとまず後のことばはこちりで付けておきますので、アディはキッドを連れて保健室へ行つてもうれますか」

「わかったわ。キッド、立てる?」

「大丈夫だ。傷はほとんど打ち身だしな、歩くのにも問題ねえよ」

野次馬が立ち去り、キッドとアディも保健室へ向かうのを見送ったエルはややあつて振り向く。

そこには、一人ぽつんとステファニアがいた。

「良かったのですか？ 弟御へのダメージは、色々な面で軽くはないですよ？」

「……そうね、でもバルトはそれだけのことをしてしまったもの」

ステファニアはむしろ清々しいと云う表情で首を振った。

「あの子は……本当にここにいるばかりお母様に似るんだから……。

ちゃんとおじいさん返しがあってもいい時だったの」

「（やつぱ遺伝なんやこれ）苦労されてるのですね……」

エルはキッドとアーティの実家の事情を思つとなんとも言えない気分になつたが、頭を振りて気持ちを切り替える。

「後始末はお願ひしても？」

「ええ。家のほうとも、話をないといけないから」

エルは一礼してその場を離れた。

結局この決闘騒ぎにより、彼らの能力を疑つものせまどんど居なくなつた。

そして、此れど二者の間ではキッド達とステファニア家の関係が囁かれるようになるのだった。

#110 決闘の決着（後書き）

一つイベントを完了しました。

次からはエル達の手に入らずともロボットの出でてくる話を考えたいところ。

11 / 1 / 16 表現・内容微修正。

11 / 2 / 27 表現微修正。

フレメヴィーラ王国の西側はオービニエ山地にかかり、険しい山が連なっている。

中央付近で山裾から平地が多くなり、東側には平地からつながつてボキユーズ大森海^{だいしんかい}が広がっている。

人々は人間はオービニエ山地の西側にしか居らず、東側は全て魔獸によつて支配された地域だつた。

オービニエ山脈を越えてきた人類は、幻晶騎士をはじめとする戦力によつて魔獸を駆逐し、この地を手に入れたのだつた。

しかし、それまでは快進撃を続けていた人類の歩みがこの地で初めて止まる。

広大な森林地帯であるボキユーズ大森海^{エットナイト}の深部には、何百という幻晶騎士^{エンドナイト}をもつてしても敵わない強大な魔獸が潜み居り、人類はほうほうの体で大森海の手前まで撤退したのだつた。

オービニエ山地の東側はなだらかな平野部から森林地帯に続いている。

開拓すれば優良な農業地帯になりうる土地を前に、人々は山を越えてまで撤退せず、森の浅い部分までをその領土とした。

そして以降もときたまボキユーズ大森海から現れる大型の魔獸を防ぐため、東の国境には防壁が築かれることになる。

“街道”と呼ばれる森の出入り口（それは正に巨大な獸道のことだ！）に砦を築き、主要な砦の間を城壁でつないだのである。それにより大型の魔獸が国内へ侵入することは少なくなり、これまで危機的な状況は訪れていない。

国境全てを城壁で覆うことは物理的に無理があつたため、街道から外れた場所からの魔獸の侵入は絶えないが、国民の努力もあり概ね安定してきているといえる。

それは、静かな夜だった。

野生動物の気配すらしない、不自然なまでの静寂。

まるで森から全ての動物が逃げてしまつたかのようだつた。

ボキューズ大森海の手前、バルグリー砦。

街道から外れたこの砦は中型の魔獣が現れることが稀であり、比較的静かな場所にあつた。

それでも常には不気味な静けさに、その日の歩哨は違和感を感じていた。

いつもならば森から魔の遠吠えの一矢一いつは聞こえてきても良い頃合である。

しかし静寂は長くは続かなかつた。

遠くからまるで木々が次々に折られているような音が聞こえて来る。何かが近づいて来る。そして木を折りながら進むような存在はこの世に魔獣しか居ない。

歩哨は躊躇うことなく警笛を鳴らした。

「なんだ、こんな夜中に魔獣の野郎か！？」

「街道でもねえつてのにこんな田舎に何の用だよ！」

砦中に響く非常警笛に俄かに騒がしくなる。

その間にも木々が倒れる音は続き、それはすでに目前に迫っていた。

宿直の騎操士が己の幻晶騎士に飛び乗る。

ナイトランナー シルエットナイフ
テルリアクタ
魔力転換炉の吸気機構が唸り、低い、地鳴りのような音が鳴り響きだす。

大急ぎで装備を整え、砦の正門を固めたところで、木々を踏み分けながらそれが現れた。

全長約50m以上、高さも20m以上はあるだらう。

ごつごつとした剣山のような甲殻を纏った堅固な体から、これまた隙間なく甲殻に覆われた手足と頭が生えている。

その様はまるで小山か巨大な岩石が動いたかの如くだつた。

砦の城門の上から固唾を飲んで見張っていた歩哨も、知識でのみそれが何かを知つていた。

陸皇亀 ^{ベヘモス} 強靭な膂力と呆れるほどの耐久性が特徴の動く要塞とも言われる魔獸。

ベヘモスの魔獸としての最大の能力は、簡単に言えば“強化”である。

およそ物理的に支えることが困難な巨体を強化魔法により支え、尚且つ見た目以上の素早い動きを可能としている。

その上装甲、骨格から各組織の一つにいたるまで恐るべき耐久性を誇り、主な攻撃手段である体当たりの威力は城壁すら碎く。

巨体に見合つた“心臓”により生成される莫大な魔力は幻晶騎士数10体分にも上り、それに伴う無尽蔵とも言えるタフネスにより、鉄壁の防御を崩すことを更に困難とする。

兎に角呆れるばかりの耐久性とタフネスによる難攻不落の魔獸。

それが陸皇亀である。

一体何を考えているのか、ベヘモスはほんの少しの躊躇もなく砦に向かいそのまま直進していく。

「敵影確認……ま、魔獸は陸皇亀……！ ベヘモスです！」

歩哨の悲鳴のような報告を騎操士達が理解する前に、ベヘモスが砦の外壁の門扉に突き刺さつた。

自らが持つ莫大な質量に勢いを乗せ、恐るべき強度を誇る外殻によりその身を生きた破城槌と化す。

鋼鉄製の強固な門があつさりとひしゃげ、周囲の壁を抉りながら倒れていった。

ベヘモス　一瞬だけ聞こえた歩哨の報告と、目の前で打ち破られた門を見て、騎操士達の表情が驚愕と恐怖に染まった。

街道からもそれ、これまで大型の魔獸を見かけることも少なかつたこんな辺鄙な砦によもや師団級の魔獸が現れるなど、誰が予想できただろう。

師団級と称される魔獸は、その名の通り倒すためには一個師団規模（約300機）の幻晶騎士が必要とされる。

この砦に配備されている幻晶騎士は1個中隊（9機）よりやや多い10機。

中型以下魔獸を駆逐するには十分だが、師団級を倒すには全く足りない。

それでも、騎操士達は覚悟を決める。

このベヘモスは如何なる理由かは知れないがまっすぐにフレメヴィーラ国内へ向けて進んでいる。

これ以上ベヘモスが進む前にこの事態を連絡しなくては、国内にどれほどの被害が出るか想像もつかない。

この砦の戦力では倒すことは叶わなくとも、たとえ僅かにでも時間を稼ぎ、またこの魔獸の弱点を探ることは出来るかもしれない。

ベヘモスは城門へ突撃したその勢いのままに周囲の城壁をも吹き飛ばし、内部へ侵入してきた。

待ち構えていた幻晶騎士が魔導兵装“カルバリン”を構え、その切先をベヘモスに向ける。

槍に似た武器へ魔力^{マナ}が流れ、内部の紋章術式^{エンブレム・グラフ}に従つて現象が発現す

る。

人間では不可能な規模の出力と構成の槍が放たれる。

轟！！

周囲を揺るがす爆音をあげて、直撃した炎の槍が盛大な火柱を上げ炸裂する。

残る機体も僅かに遅れて、全機で“カルバリン”を叩き込む。幻晶騎士用の魔導兵装は、その威力と引き換えに燃費が悪い。一旦機体の持つ魔力貯蓄量^{マナ・プール}の限界まで攻撃を叩き込んだところで法撃が止まった。

魔力転換炉が出力を上げ、周囲のエーテルを吸入すべく吸気機構の唸りが大きくなる。

砦の入り口は次々に叩き込まれた炎の槍により炎上していた。轟と燃え盛る炎と煙によりベヘモスの姿を見失う。

僅か10機とはいえ全出力による法撃である。

いかな師団級といえ少しばかり傷を負わせただろう……騎操士達がそんなことを考えた瞬間だった。

炎を搔き分けて猛然とベヘモスが飛び出してきた。

期待に反し、その巨体には些かのダメージも見受けられない。

その巨体からは考えられないような勢いに、近くに居た幻晶騎士は避ける事ができなかつた。

大質量による体当たりをまともにくらい、ひとたまりもなく一瞬で胴体が陥没し、手足がひしゃげる。

鎧の隙間からキラキラと光る結晶の破片を撒き散らしながら体当たりされた機体が吹っ飛んでゆく。

あの様子では内部に居る騎操士も無事ではすまないだろ？

オバード・スペル

戦術級魔法による巨大な炎

それを見ていた他の幻晶騎士が慌てて散開し、距離をとる。

もはや地震と聞き紛うような地響きを立てながらベヘモスは猛然と進み続け、同じく避けきれずに最後の抵抗とばかりに数発の炎弾を浴びせる幻晶騎士を跳ね飛ばした。

魔法による攻撃では埒が明ないと判断した何機かがベヘモスに追いすがり、剣で斬りかかる。

しかし、ベヘモスを覆う甲殻は評判どおり恐ろしいまでの耐久性を示し、斬撃の一切を通さなかつた。

全身を甲殻で覆われている上にその巨体からは想像もつかないほどの速度で動く。

僅か10機では時間稼ぎにすらならず、むしろ簡単に全滅の危機に瀕している。

残る騎操士達の背中を言い知れぬ寒気が走った。

先ほどの覚悟も被害予想も、全く生温い。

生き残った騎操士達のうち、隊長格の人物は、即座に決断した。

「アーロ、ベンヤミン、クラエス！ 生きてるか！」

「「「はい！」」

ベヘモスは幻晶騎士を吹き飛ばした勢いのまま皆巨体に体当たりをかけ、暴れている。

石造りの砦は見る間に碎け、あと幾らも持たない風だった。

「アーロはうちの生き残った奴をまとめて脱出、カリエール砦に駆け込め！」

ベンヤミン、お前は進路予想上の至近の都市に連絡！ ヤントウネンへ行け！
クラエス！ お前は王都に走れ！ 結晶筋肉が碎けるまで走りま
くれ！

クリスタルティショウ

絶対にこのことを伝えるんだ！」

隊長機は機体の頭部をぐるりと後ろに回した。

「残った奴は……すまねえな、貧乏籠だ。」

名前を呼ばれた3名は隊の中でも比較的若い人間だった。

しかし、それで反論する」とも躊躇することも許されはしない。

重要なのは生きて情報を伝えること。一瞬でも早くこの危機を伝えること。

別れを惜しむ暇すら、そこには在りはしなかった。

命感に意氣を上げる。

「行け！」

———

「野郎ども！ 狹い場所では吹っ飛ばされるのがオチだ！ 皆は現時点を持つて放棄、野外で遅滞戦闘を展開する！」

一応さ！」

「俺たちの国に入れさせやしません世！」
「亀野郎に目に物見せてやりましょう！」

3機の幻晶騎士が駆け出したところで、残りの5機も砦から脱出す。

壁を崩し、再び歩みだしたベヘモスに対し、細かく攻撃を加え歩みを阻害する。

闇雲に遠くから法撃を加えるだけでは歩みを止める」とすらできな
い。

必然的に近寄り、頭部や脚部を集中的に撃つては逃げ、の一撃離脱を繰り返すことになる。

その間、攻撃に怒ったべへモスから逃げ回ることになるが、如何な幻晶騎士といえどその力には限りがある。

幻晶騎士のもつ動力炉、魔力^{モルタル}転換炉、それ自体は半永久機関である。周囲にエーテルが存在する限り魔力に変換し供給するが、一度に供給可能な量には限度がある。

こと戦闘という状況では消費魔力が供給魔力を上回り、機体の魔力貯蓄量はどんどんと減少してゆく。

それだけでなくとも幻晶騎士を動かしているのは人間　　その全てが有限の存在なのだ。

魔力貯蓄量の減少し、動きが鈍った機体が体当たりで吹き飛んでゆく。疲労により集中力が落ち、離脱のタイミングを失敗した機体が尾の一撃を受け倒れる。

それでも彼らはたった5機の幻晶騎士で、師団級の魔獣を相手に貴重な数時間稼ぎ出すことに成功する。

最期に残つたのは、やはり最も実践経験豊富な隊長機だった。

機体の細かな傷は数え切れず、尾が掠つた右腕は半ばから折れ飛んでいた。

全身の結晶筋肉は疲労とダメージであちこちが砕け、魔力貯蓄量も残り少なく、最早逃げる事も容易ではなかつた。

「ひよつこじもは逃げおおせたか……」この亀野郎、この次に来るのは俺達みてーな半端ものじやねえぜ。

本物の騎士団様だ、覚悟しやがれ。」

逃げることもかなわぬならば、と隊長機はボロボロの機体を叱咤し突撃する。

残る魔力の全てをつき込み、それまででもっとも鋭い動きで隊長機がべへモスに肉薄する。

未だ残った左腕と剣を固定し、機体の質量を全て乗せた一撃を顔面へ向けて放つた。

魔獸にも、敬意という概念があるのかもしれない。

べへモスは自分を邪魔した最後の敵を見定めると、大きく口を開け、息を吸い込んだ。

一拍の間があり、魔術による猛烈な竜巻^{ブレス}がその口から放たれるのと、隊長機の攻撃が当たるのはほぼ同時だった。

ブレスを正面からくらうた隊長機は吹き飛び、結晶の欠片と鎧の破片を盛大に撒き散らしながら森の中へ落ちていった。

べへモスは低く唸る。

遅滞戦闘を仕掛けるために彼らが浴びせた数々の攻撃。

そして、隊長機が最後に加えた一撃により顔面に僅かな罅^{ひび}が穿たれていた。

その傷は僅かに眼球をそれでいる。

邪魔者が居なくなつたことを認識すると、魔獸は歩みを再開する。地に響く足音をたてながら、無感情な瞳のまま。

魔獸の進路上には、フレメヴィーラ中央部最大の都市、ヤントゥーンがあった。

#111 陸皇襲來（後書き）

11 / 1 / 16 表現・内容微修正。
11 / 2 / 27 表現微修正。

#12 見学しよう

場面は変わって、ベヘモスが現れる2週間ほど前のこと。

ライヒアラ騎操士学園において、花形の学科といえばその名に「冠する騎操士学科」である。騎士課程を修了し、高い能力を認められた生徒が騎操士になるべく日夜勉学に励んでいる。

しかし、一口に騎操士学科と言っても操縦者シルエットナイトでは幻晶騎士ハイトルランナーは動かない。

当然ながら機体の整備を担当する人間というのが必要になる。

騎操士学科とは幻晶騎士の操縦技術を訓練するための学科だが、それとは別に幻晶騎士を製造・整備するための人材も育てている。騎操士は操縦技術を学び、鍛冶師は外装、金属骨格の修理、製造技術を。

鍊金術師は結晶筋肉の製造、整備方法を学ぶ。

直接機体の整備とは関係しないが、関係ある分野を扱つものとして刻印術師も含まれる。

刻印術とは、魔法術式の構成を魔術演算領域で処理するのではなく、外部の物体に図表の形式で記述することで魔法を使用可能とする技術である。

刻まれた物体とその魔法術式を合わせて刻印紋章マギウス・サーチャーと呼ぶ。

刻印紋章を使用して魔法を使う場合は、直接それに魔力を通すことで魔法が発動する。

便利な技術に思えるが、魔法術式は実際に記述するとかなり嵩張る代物になるため、目的とする魔法に対して巨大な装置になりがちである。

製造の手間や難易度を考えると日常での普及には難がある技術である。

この技術が最も有効なのが幻晶騎士用の外付け式遠距離魔法攻撃用装備である魔導兵装^{シルエットアーマー}の術式実装としての利用だろう。意外なことに、幻晶騎士は単体では規模の大きい魔法を使用できない。

幻晶騎士を制御する魔導演算機^{マギュスエンジン}の機能は全身の制御、それに特化している。

魔法を使用しようにも、魔法の単純増幅機能など搭載していないのである。

そのため、幻晶騎士が魔法を使うためには内部の騎操士が直接魔法を構築する必要がある。

しかし幻晶騎士が使用して有効な規模の魔法現象^{オバード}それは戦術級魔法^{スペル}と呼称される を発生させる術式の構築は、人間には極めて困難である。

稀に構築可能な処理能力を持つ人間も居るが、それは時間をかけば可能という話でありとても戦闘中に構築できるものではない。

よつて、幻晶騎士が戦闘中に戦術級魔法を使用するためには、魔法術式のみをあらかじめ外部に用意するという方法がとられている。刻印紋章による術式構築は、術式を記述するだけの面積を確保できればいいかる魔法も用意できる。

発動時には外部からの魔力^{マナ}を供給するだけで使用可能であり、魔力の塊とも言える幻晶騎士とは相性のいい技術である。

欠点は、一つの術式につき刻印された一つの魔法しか使えないこと。そのため、魔導兵装は様々な状況に対応するため多数の種類が作成され、戦闘行動中の幻晶騎士は背中に複数の装備をつけていることもしばしばである。

そういう訳で、直接は騎操士学科ではないものの、刻印術学科も

ほぼ併設に近い扱いを受けている。

閑話休題。

そういうた背景から、騎操士学科では実際に幻晶騎士を運用することでそれぞれの職業ごとの技能を修得できるようになつてい。騎操士学科は内部でいくつかのチームに分かれており、各チームごとに幻晶騎士を保持している。

3年の間、定期的に模擬試合や野戦訓練を行い実技を磨くのである。

学園で保有する幻晶騎士は2機ずつ10チームで20機。

数だけ見れば2個中隊余に相当し、ちょっとした砦よりも戦力が整つていて、どの機体も長年に渡つて運用されてきたものであり、戦闘能力は2線級のものである。

さらには1機に対し複数名居る騎操士達が交互に訓練を行うため常に消耗を強いられており、騎操士学科で真に大変なのは裏方である、と言わしめるほど頻繁に整備が必要なのであつた。

余談だが騎操士学科を卒業した鍛冶師・鍊金術師はそのまま最前線で働くだけの能力を持つていることが多いといふ。

ライヒアラ学園内の訓練場では今も幻晶騎士同士の戦闘訓練が行われていた。

紅い機体と白い機体が、それぞれ剣を片手に激しく打ち合つて、幻晶騎士による模擬戦闘といえど、あくまでも授業であり、当然その時間は他の学科では授業がある。

そのためその場に居るのは関係者ばかりであり観客などいようはずもないのだが、最近は事情が違つた。

ぶつかり合つ幻晶騎士を指揮所から様々な人間が眺めている。

ある者は戦闘の記録をとり、騎操士の操縦技術について調べている。ある者はダメージの様子から補修部品の手配をし、ある者は使用される魔導兵装の効果を検分する。

慌しい様子を見せる指揮所に、非常に小柄な人影があつた。

その場の他の人間よりふた周りは小さなその人影は、他の人に遮られないよう最前列で幻晶騎士同士の戦いを食い入るように見ている。

その影はやはりエルネスティである。

授業をサボっているわけではなく、自習になる魔法の時間と模擬戦闘訓練が重なつていてるときはこうして見学に来ているのだ。

エルは、最初は可愛らしいその外見からマスクットのような感覚で出入りを許されていた。

彼自身があくまで見学にどどまり大人しくしていたというのもある。そのうちに戦闘だけでなく整備も見学するようになり、機体の構造について質問もしました。

（あくまで男だが）見目麗しく、しかも礼儀正しい後輩からの質問に先輩達は快く答えていた。

さまざまな知識を現場から吸収しながら、やはりエルが熱心に見ていたのは戦闘訓練である。

巨大ロボットが現実に目前で戦闘を行う姿は、エルの胸にえもいわれぬ感動を呼び起こそ。

鎧騎士を象つた巨大な人型の存在が鋼鉄の手足を打ち鳴らし、剣で斬り合い、魔法を撃ち放つ。

その一拳手一投足を見逃すまいと、常に漲る熱意で模擬戦の様子を見つめていた。

余談だが少女と見紛うような美貌の少年が、頬を上気させ憧れの視線を幻晶騎士へと注ぐさまは、周囲の人間を倒錯の世界に誘いかけていた。

たとかかけないとか。

「エル、今回の戦闘はどうみるんだい？」

戦闘の記録をとっていた上級生がエルに横から話しかける。どちらも視線は訓練場から離さず、しかし会話は滑らかに続いていた。

「グウエールの剣速が、以前より鈍く見えます。そのせいで何度も有効打を逃しているように見えますね」

「……なるほど。言われてみると今回はミスがやや多い。どうしたんだろうね」

「右腕の動きが渋いですね。恐らくは関節か、クリスタルティッシュ結晶筋肉を取り替えたのではないでしょうか」

上級生は手持ちの資料の中からグウエールと呼ばれた紅い機体の整備記録を確認する。

確かに今朝方、疲労劣化により右腕の結晶筋肉を全交換していた。動きが硬いのは、その後の慣らしが不十分なのだろう。

彼もグウエールの動きが悪いことは把握していたが、右腕の不調までは見抜けていなかつた。

訓練を見るエルの熱心さ、細やかさは当事者たるチームメンバーよりも上だらう。

彼はその熱意の元はなんだらうと不思議に思つのだつた。

訓練場ではグウエールと対戦していた白い機体、アールカンバーが有効打をとり、戦闘に勝利していた。

グウエールは前述の不調による攻撃のミスをカバーしきれなかつた

ようだ。

学園に用意されている機体は操縦席のある胴部の装甲が特に分厚く、騎操士の生存性に重点が置かれている。

それでも幻晶騎士同士が全力で戦闘を行うのは危険が大きいため、模擬戦闘では威力を抑えた訓練用装備を使用し、命中回数を競う競技的な形式で行われる。

正式装備による戦闘は魔獣に対する実戦訓練の場合にのみ許可される。

今しがた戦っていた機体が整備場に戻り、騎操士達が降りてくる。白い機体、アルカンバーの騎操士はエドガー・C・ブランシュ、威風堂々とした体躯をした偉丈夫だ。

見た目どおりに質実剛健な性格をしており、騎操士学科内でも上位の実力を持っている。

紅い機体・グウエールの騎操士は、ディートリヒ・クーニッツ、エドガーとは逆にやや細身の優男だった。

こちらも実力は中々のものだが、神経質な性格が災いして些細なことでペースを崩しがちで、実力に斑があるのが難な騎操士だった。負けた後だからだろうか、その表情は曇っている。

彼は機体から降りるや否や、整備班と口論を始めた。

どうやら今回の敗因についてやり合っているらしいが、原因を調べるというよりは責任の押し付け合いに終始し、傍から聞いていても埒の明かないものだった。

見かねた観測担当の上級生が、先ほどわかつたグウエールの腕の調子について説明する。

途端ディートリヒの表情は晴れ、皮肉げな笑いすら浮かんできた。対照的に整備班は苦々しい表情だ。

「ああ、どうにも今日は動きが悪いと思つたら、そういうことか。

全く、整備班の奴らは中途半端な仕事しか出来ないねえ」

言外に負けたのは自分のせいではない、と呟ませる物語にて、ハドガーハーが険しい顔をしながら横から忠告した。

「ディー、それは言いすぎだ。腕の不調を感じたなら感じたで、それをカバーする戦い方というものがあるだろ？」

その上で負けてしまうのは仕方ないが、今日のお前の動きはとても工夫を感じるものではなかつた。

全てを整備班のせいにするのは良くないぞ」

正面から正論で諭され、皮肉げに笑うディートロビの表情が一気に不機嫌なものとなる。

「こひらの不調で勝ちを拾つておきながら随分と言つてくれるじゃないか」

「模擬戦は勝敗よりも内容が重要だ。必要な反省はしたほうがいいといつてているだけだ」

「そういうかい、だったら次はお前が不調を抱えて戦えば良いさー。」

ディートロビには付き合つていられないとばかりに捨て台詞を残し、足音も荒く立ち去つた。

整備場に居る面々はいつものことだという風に肩をすくめるだけだったが、その場で一人反応に困つている人物が居た。

エルである。

なにしろグウエールの不調を言い当てたのは他ならぬ彼なのだ。

それはさきほどひと悶着の原因を作つてしまつたに等しい。

申し訳なさげな様子のエルをみた記録係の上級生は、苦笑いしながらその懸念を否定した。

「エル君は悪くないよ。むしろミスや課題を発見してもうれてありがたいくらいだ」

「ですが、先輩は納得されていないうですが」

「いや、口ではああいつているが奴も内心反省はしてこねど。それに原因がわかつたほうが本人もすつきりするだらう」

本来ミスや問題点は、そこから改善することを思えば見つかることはない物である。

しかし結果を出す当人にとつては必ずしもその限りではなく、悪い結果を嫌う人間といつもの何処にでもいた。

「そうですね……今後も問題を見つけられるように注意します」

「そうしてもらえると有難いよ。正直、君ほどの眼をもつ人間は少ないからね」

「そろそろ自習の時間が終わるので、戻ります」

「ああ、そうだね。またおいで、いつでも待っているよ」

「はい、ありがとうございます」

辞去を告げ、エルはその場を後にした。

「野外演習?」

見学を終え席に戻ったエルにクラスメイトが野外演習について聞いてきた。

エルには全く聞き覚えがないが、何かしらのイベントのようである。クラスメイトが皆一様にそれについて話しているところを見るに、エルは話題に乗り遅れているようだ。

興味のある分野にのみ異様に詳しい、ヲタ気質の弊害ともいえる。

今生でのエルは、その辺ひどい事にはならぬよう意識して生きてきたつもりだったが、最近の騎操士学科参りの間ついぞ疎かになつたようである。

「すいません、十分に内容を把握していくなくて。できれば何のことか教えて欲しいのですけれど」

困ったように言つエルに、クラスメイトは一瞬顔を見合せたがすぐによ々に話しだした。

単純にエルと喋るのが楽しいのか、エルに教えるのが嬉しいのか、てんでばらばらに喋る全員の話をまとめるのは根気の要る作業だったが、話を要約すると以下のようになる。

- ・魔獸と戦い実戦経験をつむため、騎士学科の中・初等部各学年合同で参加する遠征。
 - ・毎年実施しており、目的地はヤントゥネンの近く、比較的小型の魔獸が多くすむ山林地帯。
 - ・新入生は体験参加のようなもので、一緒についてゆき基本的な野営などのアウトドア技術を学ぶのが主。
 - ・万が一を考え、騎操士学科から幻晶騎士が数機護衛としてつくる。
- 「なるほど。それが2週間後にあると言つわけですね」
- 「つかよ、今まで知らなかつたのかよ」
- 「そりやそうよね。さーいきんずーっと高等部に入り浸りだつたしねえ？」
- ゼーんぜんこいつち戻つてきてないんだもの

呆れた様子のキッドはまだしも、アディの不機嫌な様子にエルは首をひねつた。

「アティ？ その、なんだか『機嫌斜めの』ようですね？」

「なんですよ。全然全くそんなことないわ。『氣のせい』じゃないの？」

腕を組み、強く言い放つその姿 자체が不機嫌ですと公言しているようなものである。

「とても氣のせいには思えません。僕、何かしましたか？」

「そうよねー。何にもしてないわよね。何せ居なかつたんだもんね

ー」

取り付く島がないとはこの事だ。

エルは助けを求めキッドにアイコンタクトを送る。

キッドは仕方ないなあと言いたげな様子で強引に話題の転換を図った。

「で、野外演習じゃ班組んで行動すんだけどよ、お前はどうすんだ、

エル

「ああ、それは」

横目に好奇心を隠しきれて居ないアティをみつつ

「特に指定がない限り僕達で集まっていたほうが良いでしょ？」

「ま、だらうな。でもよ、1班5人なんだよな」

あと2人なあ、とこぼすキッドから視線を逸らし、エルが周囲を見回すと何故かクラスのほぼ全員が3人を見ていた。

氣圧されるものを感じたエルは引き攣った笑顔でキッドへ振り向く。

「それについてはおいおいですね。

聞けば新入生はほとんどおまけですし、適当に決めても問題ない

「うひよ」

「ふーん、じゃあその間は一緒に居られるんだ……」

ふと見るとアーティの機嫌が明らかに好転していた。
その様子に、前世から数えるとその精神年齢もそろそろ30代後半
になるエルネスティは

「（俺にやあいくつなんても女心つてもんはわからんかもしけ
ん……）」

ある種の戦慄を覚えるのだった。

#12 見学じょうづ（後書き）

11 / 1 / 16 表現・内容微修正。
11 / 2 / 27 表現微修正。

#1-3 出発しよう

エル達が野外演習に出発する日、空は好天に恵まれていた。

ライヒアラ騎操士学園の前には大型の乗合馬車がすらりと並び、生徒達が教師の誘導に従いそれに乗り込んでゆく。

野外演習の最終的な目的地はクロケの森と呼ばれる場所である。

ボキューズ大森海だいしんかいほどではないが森林地帯と小高い山々が広がつて

おり、比較的弱い魔獸が多くいる場所だ。

わざわざ馬車を使い長距離を移動するのは、生息する魔獸の強さや拠点の確保などを鑑みると、クロケの森は様々な意味で都合が良かつたためである。

まずはクロケの森への最寄の都市であるヤントゥネンまで馬車で移動する。

ヤントゥネンにて一旦物資を補給した後、馬車はクロケの森の手前まで向かう。

森の浅い場所を全体のベースキャンプとし、後は学年や目的別にそれぞれ森の各所へ向かうことになる。

ヤントゥネンは位置的にはフレメヴィーラ王国のほぼ中央に位置する。

国内の流通の1大拠点もあり、当然首都であるカンカネン、その付近にあるライヒアラからヤントゥネンまでは整備された街道が続いていた。

ぞろぞろと連なる大型の馬車の群れがのどかな街道を進む。

そして馬車の列を護衛する様に、一定間隔で合計10機の幻晶騎士シルエットナイツが歩いている。

高等部の騎操士ナイトランナー達が乗る機体だ。

学園で使用する機体は元々は軍で使用していた物の払い下げだが、長年に渡り学生達が自分でメンテナンスしてきた結果、その外見はかなり趣味的な物になっている。

鎧に複雑な文様が刻まれた機体、頭部に矢鱈と大きな飾りがある機体、無闇に複雑な形式で装甲が接続されている機体……それぞれにこれでもかというばかりに自己を主張している。

色もそれぞれに派手に塗り分けられており、勇壮と言つよつはひたすらに派手だった。

10機のうちには、真紅の機体と純白の機体 グウエールとアルカンバーの姿も見える。

そしてライヒアラ騎操士学園で使用される幻晶騎士はどれも日々酷使されているはずだがどの機体も装甲に歪み一つなく、新品のよつに綺麗な姿をしていた。

こういった幻晶騎士を伴なう演習が企画される場合は長距離の移動に耐えるように、事前に機体の大規模なオーバーホールが行われる。

学園側としても日頃の酷使を把握しているため、こういった機会ごとに特別に準備期間と資金が与えられ、機体は新品同様まで修復された後、慣らし運転を経て遠征に参加するのである。

仮にも学園の外部に出すのだから継ぎ接ぎだらけの姿だつたり動きに支障があつては困る、という見栄が入つてゐるのは否定できない。

この演習には大勢の騎士学科の生徒が参加している。

まだ未成年の子供たちだがそこは騎士を目指すもの、多少の魔獣に襲われた程度ならば問題は無いだらう。

演習の目的としても、小型の魔獣にまじつかれては困る。しかしフレメヴィー＝ラ国内といえども、森や山には數m～十数mサイズの中型の魔獣が生息しており、何かの拍子に街道沿いに現れな

いとは限らない。

その備えとしての幻晶騎士であった。

とは言え例年をほどの問題も起こらない暇な行程であり、一応は騎操士達にも長距離移動の訓練は課せられている物の、全体的に緊張感ややる気と言つた言葉とは無縁の旅になるのであった。

「仕方ねーってのはわかんだけどよ。ですがにこいつあ暇すぎんだ
る」

馬車にゆられること約半日、キッドは腐っていた。
別にキッドだけのことではなく、周囲に居る生徒も同様といふ感じである。

到着まで約3日、基本的に馬車で移動するためどうしても暇な時間がが多くなる。

しかも何といつてもここにいるのは子供の集団である。

雑談こそいくらでも可能だが、動くこともままたらない馬車の上では早々に飽きが来るのも致し方ないことだった。

「でしたらキッドも外の景色を眺めませんか？見ていると飽きませんよ」

「いや、そんなもんで満足できんのはおめえだけだつて。つうかよく飽きねえなあ。何時間見てんだよ」

キッドが呆れ気味の視線をエルに送る。

エルは所謂”電車で移動するとき、ずっと外を見ている人”であり、風景が続く限り退屈はしない人間だった。
放つて置くところ間ずっと外を見ていくそつな勢いだ。

「周り見てみるつて。どう見たって暇そうな奴のほうが多いじゃねえか」

「そうですねえ……」

エルは窓の外を見ていた姿勢から振り向き、そのままひょこっと座り直す。

小首をかしげて考え込む姿は可愛らしく、一瞬周囲の雰囲気が和んだ。ややあつて何かを思いついたふうに顔を上げた。

「僕の持つてきた本を読みますか？ 暇つぶしにはなると思いますけれど」

「本かあ……なんつか体動かしたいんだよなあ。まあいや、なんて本だ？」

「鍊金術概論？・上巻です」

「いや教科書だろ、それ」

がくつと音がしそうな勢いでキッドがうなだれた。

「んなもんで暇潰すくれーなら寝たほうがましじゃねえか

「とはいえるこんな場所では本当にやる事がありませんしね。アディを見習つて大人しく寝るのもいいかも知れませんよ」

キッドが胡乱げな視線を向けた先では、アディが実に気持ちよさをうに眠つていた。

「結局そつなんのかよ……」

彼は思わず天を仰ぐ。

そのまま、ふと何かを思いついたように視線を上に向けていた。

「まあ、退屈じのじよじよなるか？」

一人は馬車の屋根へと上がっていた。

馬車の屋根の上には、元々生徒達の荷物が載せられている。内部とは違った座席などはないが、単に乗るだけならさほど問題はない。

かつた。

「此処からのほうが景色がいいですね」

晴れた空の下、のどかな街道を進む馬車の屋根の上は実にのんびりとした雰囲気が漂っていた。

街道を吹き抜ける風がエルの銀の髪を揺らし、流れてゆく。エルは荷物の間に陣取り、早くも風景鑑賞モードへと入りつつあった。

「あー、結局暇だな。まあ、狭い馬車の中よりや、ましか」

どうせやることが無いなら、青空の下で寝るのも一興かとキッドが考え始めた頃。

「キッド、本当に退屈しているんですね。……んー、でしたら、時間も余っていることですし。

本当はクロケの森についてからじょりと黙りてましたが……

「ん？」

エルは馬車の屋根に括り付けられた荷物の中から一抱え程度の木箱を探し出し、キッドに差し出した。

「ここには？」

訊しむキッドを前にエルが箱を開く。

中には金属製の道具が並んでいた。

短く、直線的な金属パーツに握り手と思しき部分が”く”の字形についている。

握り手には指を引っ掛けた輪がついており、その機構は前方のグリップ部分につながっていた。

「これはハンドガン……えーと、”ヴァーテックス”という名前の、
“銃スタイルの杖”です」

「ウインチエスターの小型版つてやつか！　へええ。こいつが……」

キッドは受け取った銃杖をまじまじと眺める。

構造上先端部に重心が偏りやすく振り回すと慣性のつくれに比べ、重心が手元付近にある銃杖のほうはその影響が小さい。

また対象へのポインティングがやり易く、魔法の発射方向の調整が容易である。

かなり小さな差ではあるが、戦闘という状況ではこのポインティングの難易度というのは無視できない要素になる。

目標を正確に素早く狙うことが出来れば、それだけで遠距離戦闘でのアドバンテージになりうるのだ。

「馬車での移動中においそれと魔法を撃つことは出来ませんから、渡すのは森に着いてからにしたかったのですけれど」

「確かに。でもよ、だべりっぱなしの寝っぱなしのよりやこいつ見てるほうが遙かに楽しいぜ」

キッドはエルの構えを思い出し、見様見真似でヴァーテックスを構える。

「どの道やることも無いのですし、ヤントゥネンに到着するまでは
“抜き撃ち”の練習でもしましょうか」

先ほどまでの腐りよつぱんくやら、トランシショーンの上がったキッド
が一いつ、と笑いながら応じる。

「やうこねえとなあ。これでやつとこの旅も面白くなつてきただって
もんだ！」

途中起き出してきたアーディを加え、3人で銃杖の習熟訓練を行う。
勿論実際に魔法を撃つわけではないが、それでも馬車の中で振り回
すわけにも行かず。

結局3人はヤントゥネンまでの道中のほとんどを馬車の屋根の上で
過ごすことになるのだった。

#1-3 出発じより（後書き）

11 / 2 / 27 表現微修正。

#14 クロケの森にて

馬車にゆられるライヒアラ騎操士学園・騎士学科の一^レ行はフレメヴィーラ王国中央部最大の都市であるヤントゥネンに到着していた。ヤントゥネンが国内でも有数の都市になつたのには訳がある。

国の西側、オービニエ山脈を越える他国との輸送路と、国の東側、ボキユーズ大森海^{だいしんかい}手前の砦や穀倉地帯からの荷を運ぶルートのちょうど中継地点に位置しているのだ。

そして街道の要所にあるが故に、この街は国内でも王都に次ぐ高い防衛能力を持たされている。

街の周囲は堅牢な城壁に覆われており、更にその周囲には堀がめぐらされている。

それだけでなく、内部には最大で幻晶騎士^{シルエットナイツ}1個旅団（約100機）規模になる騎士団を抱えている。

この数はいくら重要な拠点とは言え一つの街にある戦力としては過剰だが、これは街道を利用する^{こと}でござりうべき国内各所への戦力派遣が可能なためであり、実際に一部は周辺に出ていることが多かつた。

ライヒアラの一^レ行がヤントゥネンに到着したのは昼も過ぎたころだった。

この時代、一定以上の規模を持つ街は魔獣の襲来を警戒し城壁を備えている。

勿論ライヒアラ学園街にもあるのだが、ヤントゥネンのそれは他を圧倒する規模を持ち、見ただけでこの街の重要性が理解できるものだった。

魔獣が存在する影響で少人数での長距離移動が難しいこの時代、初めてライヒアラ以外の大都市を見る生徒も多く、圧巻とも評すべき

街の様子に興味津々の様子だった。

「すごい城壁ねえ。一体何と戦うつもりなのかしら」

「今存在する魔獸と、というよりも建国時の魔獸を想定しているのでは？」

「今よりも凶悪な魔獸も多かつたようですし」

「なるほどねー。それは分厚くなるわけね」

城壁の内部へ通じる巨大な門の威容に生徒達の期待が高まる。
しかし彼らを乗せた馬車は門をくぐらず、その手前の広場で集結していった。

「なんだよ、ヤントゥネンには入らねーのか？」

「事前の説明で、ヤントゥネンでは物資の補充だけが目的だと説明していましたし」

馬車から出て休息をとることは可能だったが、荷物の積み込みが終われば再び出発しなくてはいけない。

巨大な門を睨みながら双子が盛大に愚痴つていた。

「なによつまんない。街の中くらい入れてくれてもいいじゃないの！」

「だよなあ。あちこち見て回りたかったんだけどなあ」

「いえ、そういう目的の旅ではないのですが……」

「エルは見たくないのかよ」

「それは興味はありますけど」

この人数の生徒をまとめて観光とか、そもそも恐ろしい事態になると思いますしね」

そういうて横を見やれば事前に手配していたのだろう、街から出て

きた商人から受け取った物資が馬車に積み込まれてゆく。短い休憩は終わり、すぐに出発の時刻がやつてきた。

ヤントゥネンに未練たらたらの生徒達を乗せたまま、馬車は目的地であるクロケの森へと出発するのだった。

ヤントゥネンから更に馬車で一日ほど揺られたところにクロケの森はある。

東の国境線へと向かう街道からそれ、ほとんど舗装されていない道を苦労して進むこと丸一日。

鬱蒼とした森林がその口を開いていた。

馬車は森に入つてすぐの木々のまばらな、開けた場所に次々と止まつてゆく。

そこは例年、野外演習があるたびに拠点として利用されている場所だった。

「よーし、荷物を降ろしたら各班まずはテントを作れー。それが終わつたら夕食にするぞ」

教師の号令一過、生徒達が寝床となるテントを作成する。これまでの行程では夜間の就寝にも馬車を利用してきた。開けた街道を利用して移動しているとはいえ、いつ何処で魔獣の襲撃に会うかわからないため、いやといこうときすぐに動けるようにしていたのだ。

ここでは演習の日程は数日間に渡り、さすがに馬車を使って過ごすわけにも行かない。

そのための拠点としてのテント設営だった。

上級生は既に何度も経験したことがあり、手馴れた様子でテントを設営してゆく。

騎士学科ではこういった演習以外にも、何かにつけて設営を行う機会が多い。

いずれ騎士となるならば、行軍時の拠点設営は必須の技能となる。単純に剣や魔法だけではなくこういった技能の教育を行う事も騎士学科の特徴といえた。

しかし、新入生にとっては中々容易なことではなかった。

野外演習に先立つて説明と練習は行つたものの、そもそも体格的にも幼い初等部の低学年にとってはテントの設営はかなりの重労働だ。教師がフォローに入るもあちこちで作業が遅れ、結局その日の夕食は遅い時間となつた。

テントを張り終えた森の入り口はさながらキャンプ地の様相を呈していた。

周囲には篝火が焚かれ、薄暗い森の中でこの場所だけが明るくなつていた。

さらには、中等部以上の生徒は持ち回りで夜間の歩哨を行つことが実習に組み込まれている。

流石にこの人数を教師だけで面倒を見ることは出来ないため、実習を兼ねて生徒自身でも周囲を警戒しているのだ。

エルの班は他の班より早めにテントの設営を終えた。

十分に手順を理解していたためもあるが、中でも双子は同年代でも体格に恵まれ、しかもエルとの訓練を経て体力的にもかなり高かつたためこういった場面で活躍したからだ。

今彼らははまごつく他の班の設営を手伝っている。

そしてエルは1人野営地の外れへと向かっていた。

「（ノルマはこなしとるし決してサボりやないですよ……つと、

あつたあつた) 「

そこには高等部の騎操士達と彼らの幻晶騎士の駐屯地になっている。さすがに幻晶騎士で見回りをした日には、騒音で安眠妨害も甚だしいことになる。

そのため、彼らは有事に備え野営地の一角で待機していることになつていた。

片膝をつく様な駆機体勢をとり、10機の幻晶騎士がずらりと並ぶ。篝火に照らされ、夜陰の中にその影を浮かび上がらせていた。その姿は全体が視認しにくいこともあり、昼間見るそれよりも更なる迫力を持っていた。

常人ならば威圧感を感じるであろう、無言で居並ぶ鉄の巨人達をエルは満面の笑みで見回す。

「（ああ、やつぱり大口ボはええなあ。これぞ心の癒し。一家に1台必須やなあ）」

そんな恐ろしい家庭はこの世界にも存在しないが、エルの心の中の咳きに突っ込める存在は居なかつた。

「おー、やこの……銀色？ エルネスティか？」

そうしてしばらく経つたころ、謎の癒しに没頭するエルに背後から声がかかつた。

エルが振り返ると、そこにはアールカンバーの主、エドガーが居た。

「こんばんは、エドガー先輩。少しあ邪魔しています」

「やはりエルネスティか。何故此処に……などと聞くだけ無駄なの

だらうな

すでにエルは騎操士学科でも有名人であり、そしてその行動理由も知れ渡つていてる。

「先輩は、待機の担当ですか？」

エドガーは先ほどまでは別種の苦笑を浮かべ、首を振つた。

「いや、先ほどまで待機の順番を決めていたんだがな……まあ、例によつてディーが渋つてな」

「ディートリヒ先輩が？」

「ああ、簡単に言つと待機任務は面倒だと、盛大に愚痴を漏らしていくな。

我らはライヒアラ最高学年の騎操士として、後輩の安全を守ることも立派な任だというのに。

相変わらず奴は気分屋だよ

我僕を言つたところで結局は役に付かざるを得ないため、騒ぐだけ無駄というものなのだがそこを気にしないのがディートリヒと言つ人物であった。

「奴の愚痴に付き合つのも面倒になつたのでな。少し気分転換がてらこいつを見に来た」

そして二人で、それを見上げる。

篝火の明かりに浮かび上るのは純白の鎧を纏う巨大な騎士、幻晶騎士アールカンバー。

特別な工夫はないものの基本に忠実に、堅実に調整されたこの機体は突出した点はないものの、極めて素直な性能を持っている。

それは学園の騎操士でもトップクラスの実力を持つエドガーの能力に確実に応え、彼らの組み合わせは騎操士学科でも上位に位置していた。

「先輩も、幻晶騎士が好きなのですか？」

「つうむ？ 好きと言つか……」といつは、私の武器であり相棒でもあるからな。

共にあれば気分が落ち着く。今みたいにささくれた時とか、疲れてるときにはよくこいつのところに来るよ」

柄にもないか、とエドガーが頭をかく。

「いいえ、信頼できる相棒が居ると言つのは素晴らしいことだと思います」

「お前は幻晶騎士が好きなのだつたな。
騎士として努力を続ければ、お前もいすれ良い相棒を得ることができるだろう。

ああ、長々と立ち話をしてしまつたな。余り夜が深ける前に戻つておけ」

挨拶を交わし一人は元来た道を戻る。

「さて、そろそろディーも落ち着いたあたりか」

「人ごぢちる」と、戦闘に向かうよつた気合を入れてエドガーは戻つていくのであった。

とつぱりと日が暮れる頃、遅めの夕食を終えて新入生達もそれぞれ

テントに入っていた。

初等部の生徒は夜間に特にやることはない。

移動と設営をこなし、疲労を感じていた生徒達はしばらくするとそれぞれ毛布に包まって眠りに付いてゆく。

その時である。

生徒達が完全に寝入る前に森から獸の遠吠えが聞こえてきた。
狼だろうか、1匹が声を上げるとそれに応じるような声が森のどこから響いてくる。

歩哨に立つ生徒は一瞬森の方を警戒したものの、遠吠えだけなら良くあることでありすぐに興味をなくしていた。

しかし、そうはいかなかつた者も居る。

初めて野外演習に来た新入生達は、その遠吠えに今更ながら自分達の状況を再確認していた。

安全な街の中ではなく、すぐに逃げ出せる馬車でもなく、魔獸が潜む森の手前にテントを作り寝ていうという状況。

いくらクロケの森の危険度が高くはなく、見張りに立つている生徒も居ると言えども此処は全く安全という訳ではない。

ここまで安全に移動してきたこともあり、これまでどこか気楽な気分であった彼らは一つの遠吠えで一気に緊張を感じ始めた。
疲労による眠氣も引っ込み、逆に目がさえてしまった格好だ。

「今の声……魔獸？」

「いいえ、ただの狼じゃないかと思つただけど……」

エル達の居るテントでも、不安を紛らわすかのようにぼそぼそと会話が交わされる。

彼らの会話を何とはなしに聞きつつ、キッドも寝転びながら首を振つた。

程度の差はあるけど、キッドも少なからず不安なものを感じており、すぐには寝付けそうもなかつた。

「（自分ではもうちつと図太いつて思つてたんだけどよ、俺も結構キンチヨーするんだな）」

少し篝火の明かりが差し込む薄暗いテントの中、落ち着かない空気が流れる。

ふと隣で寝るエルも同じように不安を感じているのかと思い、キッドが小声で声をかけた。

「なあ、エル。ちょっといいか……つて」

しかしエルは既に寝入つていた。

エルとてこの状況に緊張感を感じないわけではない。
しかし、前世では地獄の最前線で戦つていたエルは、休息を取りができる状況で確実に休んでおく事の重要性を嫌というほど知つていた。

さらには、コーナーからの連絡待ちの間すら休める彼は、如何なる状況でも寝ることができるスキルを体得している。

騎操士学科の先輩達が警備についていることも把握しており、多少の不安は無視していたのだった。

「（すぐえなエル。前から思つてたけどよ、神経太いよな）」

キッドの声にアティが振り返り、そこに眠るエルを見つけた。

「むう、ずるい」

何がずるいのか良くわからないままアティはそもそもそと移動し、そ

のままエルを抱え込む。

所謂“抱き枕”的体勢である。

さすがにいきなり誰かに抱きつかれてエルも田を覚ましたが、それがアディだとわかると軽くその頭をひと撫でし、再び睡眠に戻つた。それで安心したのか、じぱりりするとアディからも寝息が聞こえてくる。

それを見ていたキッドは、眠れない自分が馬鹿馬鹿しく思えてきて思わず苦笑した。

「（なんか俺だけ緊張してんの馬鹿みてーじゃねえか）」

なんとなく気楽に思えれば、程なく眠りの中へと落ちていったのだった。

翌朝、田の出からじぱらぐすると生徒達が起きだして來た。寝不足の生徒も大勢おり朝からだるい雰囲気が漂う中、エル達はすつきりとした目覚めを迎えていた。

野営で寝付けない生徒が出るのはいつものことである。街の中ばかりでなく、野外でこいつこいつた緊張感を実際に感じる事もまた演習の目的である。

ただ、教師達としても体力の少ない低学年の生徒に無理をさせる気はない、これを見越して初等部は比較的作業内容が軽い。

生徒たちは保存食を使った簡単な朝食をとつた後、教師の号令に従い学年別に集まつて行つた。

簡単な説明の後、中等部の生徒は森の奥を目指し、班ごとに出発してゆく。

彼らは途中森に生息する魔獣と実際に戦闘し、一定以上を狩る事がこの演習の最大の目的だ。

初等部の生徒は森の浅い部分を田指し、場合によつては戦闘もありうる、という程度である。

学年や班に分かれ、教師の先導に従い生徒が移動を始める。そして、彼ら騎士学科の生徒達にとって忘れられない体験となる、とても長い一日が始まった。

#14 クロケの森にて（後書き）

11 / 2 / 27 表現微修正。

#15 魔獸襲来の日

魔法現象に特有のやや甲高い飛翔音を残し、^{ニアロリッパー}大気円刃の魔法が風蜥蜴に襲い掛かつ。

薄く圧縮された大気の刃がスタッカートリザードの華奢な首を切り裂き、断末魔すら残さず魔獸を討ち倒す。

「すり抜けた蜥蜴が来ます！ 前列、盾構え！」

凛とした声の女性の指示に従い杖や弓矢を構えた生徒が後ろに下がり、代わりに重い鎧を着込んだ生徒が前に出る。

横一列にずらりと並び、押し寄せる魔獸の群れに対し盾を構える。魔法や弓矢といった遠距離攻撃で仕留め切れなかつた魔獸が生徒達に襲い掛かり、激しいぶつかり合いが発生した。

牙や爪をもつて迫る魔獸の攻撃が盾で弾き返され、逆に剣で切り倒され、多くの魔獸がここで屠られてゆく。

しかし魔獸は数で以つてその鉄壁の防御をかいぐり、その背後へと抜けるものも居た。

突破されたと見るや否や重装備の生徒の後に控えていた比較的軽装備の生徒がすぐさま対応し、陣形の背後まで抜けた魔獸は皆無であつた。

班ごとに別れ、クロケの森へと分け入ったはずの中等部の生徒達は今や一箇所に集まり大規模な隊伍を形成していた。

大きく横に広がり、一方からの攻撃を受け止めることを目的とした陣形をとっている。

彼らの前には、森の奥からまさにとめどなく魔獸の群れが襲い掛かっていた。

津波のような勢いの魔獸の攻撃を正面から受け止め、中等部の生徒達は獅子奮迅の戦いを見せる。

数え切れないほど魔獸が屠られてゆくが、しかし恐ろしいことに此処で倒される魔獸は全体の一部でしかない。熾烈なぶつかり合いの様相を呈する部隊の正面を迂回し、あるいは時たま突破して魔獸達が森の入り口へと殺到する。

「このままだと後ろの初等部にも魔獸が……！ 何とか連絡しないと…」

先ほどから指揮を執る女生徒が危機感を覚え、後方へ危難を伝えようとするがしかしその時彼ら自身にも大きな危険が迫っていた。

「やばい！ 棘頭猿だ！ こっちにむかってきやがる…」

それを目撃した生徒から悲鳴が上がる。

これまでに戦っていた^{スタッカトリザサドベルキヤット}風蜥蜴も剣牙猫も、それほど体躯は大きくな^{マイスヘッドオーガ}く、数こそ厄介ではあるが現在の陣形で対応可能であった。しかし、棘頭猿はその名の通り短く節くれだった角を頭頂部一面に生やし、全高3mにも達する巨大な猿のような魔獸だ。

本来は1匹に複数名で立ち向かつて漸く戦える強力な魔獸であり、小型の魔獸を相手しながら戦えるようなものではなかつた。

「……！ 第2列杖構え！ 猿の脚を狙つて！ 近寄られたら対処できません！」

前線の間から杖が差し出され、様々な魔法が撃ち出される。爆炎の魔法が、風の魔法が、雷撃の魔法が魔獸たちを迎撃つた。

事態の発生は数時間前にさかのぼる。

午前中、早速クロケの森へと分け入った中等部の生徒達は意氣揚々と歩を進めていた。

彼らは警戒しながらも順調に森の奥へと進んでいたが、次第に違和感を感じ始めた。

いつもならば、ここまで森に分け入ればそれなりの回数魔獣と遭遇するはず。

それがこの日は1回も戦闘が発生していなかつた。

此処しばらくでクロケの森から魔獣がいなくなつたなどと聞いた事はない。

彼らは困惑したまま森を彷徨い、そして次に情報を求めて他の班と接触を図った。

どの班も異口同音に魔獣が居ないと口にする。猫はあるか、蜥蜴の一匹も出ないと。

あるべきものが居ないと言つことも、異常事態といえる。

相談の後、彼らは一旦ベースキャンプに戻り事態を報告することを決心した。

彼らが移動しようとしたその時である。

森の奥よりぽつぽつと魔獣が現れ始めた。

彼らにとつては少し拍子抜けした気分だが、それでも現れた魔獣を討伐すべくそれが武器を構える。

1匹、2匹……5……10……。

魔獣の数が2桁を超えたところで彼らの表情が強張り、そして森の奥から走り来る数え切れぬほどの魔獣の大群を目にすると至り、最

初とは別の異常事態が起きていることを悟った。

不幸中の幸いとも言うべきだったのは偶然にも彼らが一旦集まり、大人数で居たことだろう。

日頃より騎士としての戦闘訓練をつむ生徒達は、すぐさま事態に対応すべく大人数で迎撃陣形を取った。

いずれ騎士団にて行動することを想定し、集団戦闘の訓練も行われていた成果が發揮された形だ。

彼らの部隊と魔獣の群れがぶつかり　そして冒頭の状況に至る。

すでに撃破したメイスヘッドオーガは10匹に上る。

遠距離からの足止めを優先するやり方は功を奏し、接近戦で被害を受ける前に何とか切り抜けられていた。

そしてこの場に留まつても損耗が増えるだけだと判断した彼らは、現在じりじりと森の入り口へ向けて後退中である。

中等部の生徒にとつてもう一つの幸運は、この場に生徒会長であるステファニア・セラー・ティが居たことだろう。

元々彼らは班行動のある程度役割を分担し、それに合わせた装備を使用していた。

大人数での陣形を組む際もその延長線上として各自が適した役割に入ることにより、即席の割りにスムーズに進んだと言える。

しかし、実際に部隊として行動する際に問題となるのが指揮官の不在であった。

それぞれが役割分担に従い行動するのは良いが、適したタイミングで適した運用を行わねば折角の大人数も宝の持ち腐れである。

その上この場には生徒しかおらず立場の上下と言つものも明確ではなかった。

そういう状況でこの場の最高学年であり、生徒会長としての肩書きを持つ彼女が指揮を執ることに異論を唱えるものは居なかつた。彼女自身、単に肩書きを持つだけでなく学科での成績優秀者に名を連ねる。

即席の部隊に即席の指揮系統ながら、彼女の指揮は的確でありこれまで大した被害を被らずに切り抜けることが出来ていた。

「（まことに、魔獣の数も問題だけど、何故かこいつら皆必死に向かってくる……）の圧力にいつまで耐え切れるか」

ステファニアは内心で焦りつつも懸命に指揮を執っていた。
今はまだ生徒達の体力、魔力共に余裕がある。
しかしこの調子で襲撃を受け続けては、いずれ押し潰されてしまうのは目に見えていた。

「（それに、全ての魔獣を止められたわけじゃない。後ろの子達、どうか無事で居て……！）」

状況は全く好転しないが、それでも彼らは懸命に抗うのだった。

中等部の生徒達が森の奥で奮戦しているところ。

比較的森の浅いところで実習を行つていた初等部の生徒達もまた、魔獣の襲撃を受けていた。

最初から戦闘を想定して装備を整え、また日頃から戦闘訓練を積んできた中等部に対し初等部の生徒達は全てにおいて準備不足だった。

最も森の奥側にいた生徒から悲鳴が上がつた。

突如数匹のスタッカートリザードが襲い掛かり、生徒に噛み付いてきたのだ。

一撃で致命傷となるほどの攻撃力はないが、それでも多数に襲われれば危険である。

それに気付いた教師達がすぐさま助けに入り、生徒に襲い掛かる魔獸を攻撃した。

彼らを責める」とは出来ないが、結果的にこの教師の行動は裏目に出た。

現れた魔獸がこの数匹だけならば良かつたが、時をおかず多数の魔獸が森の奥から現れたのだ。

動くタイミングを逸した教師達はそのまま戦闘を続行せざるを得なくなる。

彼ら自身はすぐさま倒れるようなことはなかつたが、その後ろで生徒達は突如現れた魔獸の群れに半ばパニックになつていた。

それを静める役を負う教師が動けず、十分な指示が出来ないため生徒達は我武者羅に杖を振り回し魔法を撃つ。

ろくに狙いもつけていない魔法は十分な効果を發揮せず、逆に同士撃ちにすらなりかけていた。

更には周囲に他の生徒が居る中で剣を抜くものすら現れ、パニックは深まる一方である。

「エアロダムド キャニスター
風衝弾、単発拡散」

突然、生徒達の集団を何者かが飛び越した。

銀色の髪が陽光に反射し、混乱の坩堝にあつた生徒達の頭に焼きつく。

彼は上空で身を捻るようにして地上へと狙いを定め、多数の風の法弾を一斉に撃ち放つた。

連續して響く轟音は、法弾が一斉に地面へ着弾した音だ。

面を押し潰すように放たれた圧縮大気の弾丸が魔獸もろとも地面を耕し、吹き飛ばす。

中央の魔獸が大きく減つたところで更に左右から一人の生徒が前に出た。

一人が魔獸の群れに突撃し、その手に握る大振りなブロードソードを薙ぎ払う。
フィジカルアースト
身体強化で強化された臂力を以つて振り回された剣は、多数の魔獸をまとめて両断した。

剣を振った勢いを殺さずそのまま一回転するように身を捻り、その間に腰から武器を取り出してまだ生き残る魔獸へと向けてた。

「甘えゼ！ 真空衝撃！」
ソニックブーム

その武器 銃杖・ヴァーテックはその先に空氣の断層を発生させ、ぽっかりと空いた真空に流れ込む空気が衝撃波となつて魔獸に襲い掛かる。

ブロードソードの範囲外に居た魔獸が衝撃波に直撃し、その身を不自然な体勢に曲げながら吹き飛んでいった。

逆サイドでは、もう一人の女生徒が両手に持つた銃杖をそれぞれ別の魔獸に向けながら走っていた。

「ライオットスパロー
雷撃投槍！」

直後、轟音と閃光を伴つて雷撃が走り、一塊になつていた魔獸を擊ち据える。

引き攀つたような断末魔を上げる魔獸には目もくれず銃杖を腰のホルスターに戻すと、その横に下げていた剣を引き抜いた。

双剣を両手に持ち、すれ違いざまに残る魔獣を斬りつける。

小ぶりな双剣でありながら魔法で強化されたそれは、易々と魔獣を切り裂いていった。

たつた3名の生徒による嵐のよつたな攻撃により、魔獣の群れは大きく数を減じていた。

群れの接近による圧力が減り、状況に一瞬の猶予が生まれる。

目の前で行われる蹂躪にも等しい戦闘を叩撃した生徒達は混乱よりも驚愕で動きが止まっていた。

「総員、抜杖」

さきほど生徒達の頭上を飛び越え、その最前線に立った小柄な生徒が指示を出す。

幼く、小鳥が^{さぶやか}轟るような声の中に言い知れぬ迫力を感じた生徒達は、慌てて指示に従つた。

「集まって、密集陣形を。先生！」

同様に呆気にとられていた教師がその声で我に返る。

「指揮をお願いします。隙を見せないよつこしながら後退しましょう。

僕達は、周囲のフォローに回ります」

教師達が慌てて指示を始め、生徒達は密集陣形を取り守りを固めてゆく。

個々の戦闘能力で劣り、また装備も十分ではない初等部の生徒達が魔獣に対抗するには、集まって魔法火力を集中させるしかない。

それでも魔力の上限が低いため息切れも早いだろうが、それは指揮

を執る教師達でカバーできる範囲だろ？

再び森の奥から走り来る魔獸を睨みながら、ヒルはゆっくりとウインチュスターを構えた。

彼の左右を固めるようにキッドとアーティが並ぶ。

キッドは大振りなブロードソードを片手で持ち肩に乗せ、片手にヴァーテックを持っている。

アディは双剣を鞘に戻していた。

「おうおう、すげえ数の魔獸だな。まだまだじゃんじゃんくいりあ。こいつあ思う存分暴れられそうじゃねえか」

「ふふーん 新しい武器もあるし、遠慮なんてしないんだからー。」

気勢を上げる一人をエルが嗜める。

「二人とも、戦うのは構いませんが他の生徒のカバーにはいる事をお忘れなく」

「えー。あつちはあつちで何とかするんじゃない……の……」

不満を漏らさうとしたアディの台詞が尻つぼみに消えてゆく。エルが全くの無表情でアディへ振り向いたからだ。

「暴れたいだけなら、ここに居る必要はありませんよ?」「う、わ、わかってるわよ!」

キッドは早々と両手を上げて降参のポーズをとっている。

「幸い此処はまだ森の入り口。後退すればすぐにキャンプに戻れます。

向こうで幻晶騎士と合流すればかなり楽になるでしょう。それまでは

言いながら素早く風衝弾を放つ。

会話中のエル達に襲い掛かる^{シルエットナイト}とした魔獸が正面から法弾をくらいい吹つ飛んだ。

「僕たちが彼らを守らねばなりません」

初等部・中等部の生徒が森へ出ている間、高等部の騎操士達は待機任務から外れてそれぞれが訓練を行っていた。

護衛戦力として持ってきている幻晶騎士に訓練で負担をかけるわけにもいかないため、騎操士同士での訓練が主になる。

ふと、訓練中のHドガーが違和感を感じた。

違和感の元を辿ると……その耳に訓練では起こりえない音が微かに届く。

「おい、何か、森の中が騒がしくないか?」「ん?」

その言葉に剣を組み合っていた相手も森の方を見、耳を澄ませた。

「爆発音……魔法か!?」

「何かトラブルが起こっているようだな……全員、訓練の中止を!騎操士は幻晶騎士の騎乗準備だ。森の中へ偵察に出るぞ!」

ベースキャンプが俄かに慌しくなり、整備要員が幻晶騎士から離れ

てゆく。

半数の5機の幻晶騎士が立ち上がり、森へと偵察に出ようとした。

「おい、アレをみろよ……」

森の中に入るまでもなく、すぐに湧き出すように走り来る魔獸の群
れが目に入る。

「な、なんだこれは！」

「魔獸の暴走だと？ ガキどもヤバいんじゃないか！？」

言いつつ、幻晶騎士が森へと入ってゆく。

彼らが初等部の生徒と合流するまで、たほどの時間はかからなかっ
た。

初等部の生徒達はエル達の機転により即座に撤退行動をとつていた
からだ。

一塊に集まり、群れへ魔法を放ち牽制しながら後退する初等部の生
徒達。

その周囲には圧倒的な速度で駆け回り、魔獸を打ち倒す生徒達がい
る。

「おいおい、あの銀色はエルか？ あいつ、本当に出鱈目の力持つ
てたんだな」

幻晶騎士が彼らの前に出て、群れを蹴散らし始めたといひで生徒達
に安堵が広がつていった。

人が持つ最強戦力である幻晶騎士に対する信頼は大きい。

特にこのような魔獸に襲撃された場面において、その一騎当千の戦
闘能力は生徒達に大きな安心をもたらした。

初等部の生徒達がベースキャンプに合流し、幻晶騎士が守る中教師と高等部の騎操士達により善後策が協議されている。

初等部は十分にカバーできるが、以下の問題は森の深くへと入つていった中等部だ。

「中等部の子供達の進路はわかりますか？」

「難しいな。実習の目的を考えると森の中全域に広がっているはずだ」

如何せん幻晶騎士の数にも限りがある。救援に向かおうにもどこに行けばいいか、彼らは決めあぐねていた。

唸る教師の横からひょこりとエルが顔を出す。

「森の中で、比較的人が集まりやすい場所は？」

「ん？ ああ……この辺りだな。」

唐突なエルの質問に、教師がいぶかしみながらも答える。

本来、この場に初等部の生徒がいても仕方ないのだが、既にエルの存在を邪険に扱うものはいなかつた。

「これほどの規模の魔獣の群れ、先輩達も集団での抵抗を考えるのではないか？」

「ならば、それなりの規模の人数が動きやすい場所へ行くかと」

「ふむ……一理あるな」

「それに、あまり木々の多い場所では幻晶騎士は動き辛くなってしまいます。」

「こちら側の戦力事情としても開けた場所から探索するのがベターではないでしょうか？」

ルートとして指定された開けた場所は丁度森の中央を抜ける形になる。

「こちらに向かう魔獣を逆流する形にもなります。

巻き込まれて戦闘をしている人がいれば音でわかるでしょう。」

エルの提案は受け入れられ、救助部隊に伝達される。

この場にいる幻晶騎士の半数が救助部隊として編成された。

幻晶騎士に乗り込もうとしたエドガーを呼び止める声が上がった。彼が振り向くとそこにはエルの姿がある。

「私もお供してもいいですか？」

「なぜだ？」

「中等部には、親友の家族がいます。彼らが心配していますので出来れば探しに行きたいのです」

束の間、エドガーは悩んだ。

先ほどみた会議での機転を鑑みれば、探索の役に立つ可能性は高い。危険も多いがそれもエルの戦闘能力があればある程度は問題はないだろう。

そう考え、エルに了承を返す。

アールカンバーはエルをその手に乗せ立ち上がった。

「魔力切れの人は負傷者を運んで！ 前列、待機列と交代！ あと少しです、持ちこたえて！」

魔力が減り、荒くなる呼吸を無理やり落ち着かせながらも負傷した生徒を抱え、彼らは後退していた。

戦闘の開始からすでに数時間が過ぎ、中等部の撤退戦は凄惨な様相を呈していた。

1匹1匹はたいした事はないが凄まじい数が押し寄せる小型の魔獣は否応なく体力を削り。

幾たびも現れたメイスヘッドオーガが魔力を削つてゆく。

先ほどついに十分な魔法を撃てずにメイスヘッドオーガの接近を許し、大きな損害を被つたばかりだ。

部隊を組むうち半数近くの人間が魔力切れか負傷状態になつており、戦力はもはやギリギリだ。

僅かな体力を温存し、前衛が交代しながら戦線を維持しているが、それも何時までもつかはわからなかつた。

ベースキャンプまでの距離はあと僅か。安全圏まであと一步といつ希望だけが彼らを支えていた。

しかし、現実は彼らにとつて非情であった。

正面から、メイスヘッドオーガが2体。

それらは興奮し、泡すら吹きかねない様子で一直線に部隊に突つ込んでくる。

応じる魔法は最初に比べ明らかに散発的で、十分な足止めにならなかつた。

前衛の生徒の表情が歪む。

先ほど1匹のメイスヘッドオーガを倒すのに10名以上の生徒が負傷し、部隊は大きな打撃を受けた。

このまま2匹同時に戦えば、下手をすればこのまま瓦解しかねない。

それは指揮をとるステファニアも同じ気持ちだった。

さきほどからステファニア自身も指揮をとるだけでなく、杖を持ち魔法を放っている。

あらゆる可能性を検討するが、現状を打破するにはどうしても戦力が足りない。

部隊を組む生徒たちは体力的にも魔力的にも限界近い。

無理をしてでもメイスヘッドオーガを撃退しようにも、その無理をするだけの余力が残されていないのだ。

体躯に見合った強靭な体をもつメイスヘッドオーガは、生徒の最後の抵抗をものともせずに肉薄してきた。
むしろ、下手に魔法による攻撃を受けた分さらに興奮状態になってしまっている。

「駄目だ……」

その呟きは誰のものだったのか。
メイスヘッドオーガの拳が振り上げられ、前衛の頭部めがけて振り下ろされる。
絶望的な抵抗だが、彼には自身の身を守るべく盾を掲げる事しかできなかつた。

ヒュンボッ

だから、彼は頭上で鳴り響いたぐもつた音が何を意味するのか、直ぐには把握できなかつた。

部隊の背後から恐るべき精度で飛来した複数の徹甲炎槍ピア・シングラーンズの火線が、

狙い過たずメイスヘッドオーガの腕に吸い込まれるのを。

徹甲炎槍の魔法が自身の術式に従い次々と炸裂し、その腕を吹き飛

ばしたのを。

飛んできたのは法弾だけではなかつた。

直後、法弾を放つた本人が銀色の弾丸と化して飛来する。

それは半ば比喩ではなく、大気圧縮推進によりジャンプ中に更に加速したエルはまさに弾丸と化していた。

空中の勢いそのままに、腕エアロストラストを失い大きく体勢を崩すメイスヘッドオーガへ、すれ違いざまに真空斬撃ソニックブレードの魔法と共に斬りつける。瞬くほどの間にメイスヘッドオーガの首が宙を舞い、その巨躯が地に沈んだ。

地面をえぐる勢いで着地したエルは滑走しながら振り向き、もう1匹のメイスヘッドオーガへと爆炎球ファイアボールを連続射撃フルオートで放つ。

多数の炎弾が連なるようにメイスヘッドオーガに襲い掛かり、爆発の嵐がその巨躯をも揺るがした。

その体の半ばを焼かれながら、メイスヘッドオーガが地面に転がる。

「今よ！ ヒダメを！」

突如飛び込んできたエルに驚愕しつつも、ステファニアは生まれたチャンスを逃がさなかつた。

その声に慌てて生徒たちがメイスヘッドオーガに止めを指す。

「……エル君……」

「お待たせしました、生徒会長。強力な助つ人を連れてまいりました」

エルの指示示すとおり、後方から重々しい足音が響いてくる。彼らが振り返ると、そこには高等部の幻晶騎士の姿があつた。中等部の生徒達から歓声が上がる。

もはや限界を迎えていた彼らにとって、これほど心強い救援はなかった。

「やれやれ、まさか本当にエルネスティを連れてきて正解とはね」

そして周囲の魔獣を駆逐しつつ、アールカンバーの中ではエドガーがぼやいていた。

エルの進言どおり開けた場所を選んで進んでいたところ、中等部の生徒達は比較的容易に発見できた。

しかしエドガーが彼らを発見したとき、既に部隊は大柄な魔獣により危機を迎えていた。

幻晶騎士の力であれば苦もなく排除できる程度の魔獣……しかし、余りに部隊との距離が近すぎた。

近寄つて斬りつけようにも、遠距離から魔導兵装シリエットアームズで撃とうにもこのままでは生徒達まで巻き込んでしまう。

力を持ちながらも眼前の事態に有効な手を打てない……エドガーが歯噛みしそうになつたとき、アールカンバーの手に居たエルが飛び出した。

10m近い高さから飛び出したにも関わらず滑らかに着地し、そのまま残像すら残すほどの速度で疾走する。

恐ろしい勢いのエルの一撃により部隊に迫っていた魔獣が倒されるのを見ながら、エドガーはこれでは自分達の立つ瀬が無いな、と溜め息を隠せなかつた。

そうしてギリギリのタイミングで間に合つた幻晶騎士の護衛を受け、多くの負傷者を抱えながらも背後を気にすることなく撤退することが出来た中等部の生徒達は、無事ベースキャンプまで逃げ延びる事に成功したのだった。

#15 魔獸襲来の日（後書き）

11 / 2 / 27 表現微修正。

#16 魔獣襲来の夜

ヤントゥネン市街地、東門へと一機の幻晶騎士^{シルエットナイフ}が辿り着いた。

余程急いで来たのであるつ、機体を駆る騎操士^{ナイトランナー}は疲弊しきった様子であつたが、城門へ辿り着くなり詰めていた騎士へと駆け寄る。

突然の事に騎士は驚いていたが、騎操士の話を聞くなり顔を青くして報告に走つた。

「それは……本当の事か！？」

ヤントゥネン守護騎士団の団長であるフィリップ・ハルハーゲンは、部下の報告に血相を変えた。

共に団長室にいた副団長である「トフリート・ヒュヴァリネンも無表情ではあるがその顔色は蒼白であり、報告の内容が『えた衝撃の強さを表している。

「ハツ、陸皇亀^{ベヘモス}の襲撃によりバルゲリー砦は壊滅的な打撃を受け、守備隊も恐らくは全滅。

ベヘモスはそのまま国内へと西進しており、いざればこのヤントウネン付近に姿を現すことが予想される、との事です！」

師団級魔獣の突然の襲撃。

悪夢としか言いようのない事態に、フィリップは眩暈がする思いだつた。

しかし、騎士団の指揮官たる彼が呆けている場合ではない。

不幸中の幸いでその騎操士が急いでくれたことにより、ベヘモスが現れるまでに僅かな猶予がある。

この時間を一刻たりとも無駄にすることは出来なかつた。

「ぐ、大至急ヤントゥネン付近にいる全ての騎士に召集命令を出せ。緊急事態だ、現在遂行中の全ての任務より優先する！」

報告を持ってきた部下は復唱すると、敬礼を返すすぐさま走つてゆく。

その後を追つみつこ、フィリップとゴトフリートは作戦会議室へ向かうべく団長室を飛び出した。

「ベヘモスだと……いかなヤントゥネンと言えど、師団規模の戦力はないぞ。

そんなものを持っているのは王都ぐらいだ」「等級の区分は目安でしかありません。

師団規模ならば余裕を持つて相手を討ち取れると言つだけの話。現在の戦力でも、相応の被害を覚悟すれば討伐は可能かと思われます」

足早に移動しながら、フィリップは拳を握り締める。

「わかつてゐる、そんなことはわかつてゐるが、問題は被害の規模だ！

我が騎士団の100の騎士と相打ちでは意味がないのだぞ！

その後ヤントゥネンは誰が守るといつのだー！」

その言葉にゴトフリートは押し黙る。

彼とて騎士団の壊滅を望んでいる訳ではない。しかしごくごく一部でベヘモスにより皆一つが壊滅しているのだ。

仮にこのままヤントゥネンが甚大な被害を被つた場合、国内の物流が大きく滞る。

国境線への物資補給が滞つては、連鎖的に被害を被る皆も出てくる

だろう。

今此処で騎士団と引き換えるにしてもベヘモスを倒す必要があつた。そして必要とあらば如何なる内容であれ団長に進言するのが、副団長たる彼の役目なのだ。

「……いや、もはやそのような事を言つてはいる場合でもないな。此処で止めねば下手をすれば国が滅ぶ。」

王都に遣いを出すぞ。我々が壊滅した後の騎士団を頼まねばならん……」

状況への苛立ちに表情を歪めるフイリップに、ゴトフリートは領きを返すことしかできなかつた。

フイリップ達が作戦会議室へ入ると、そこには騎士団詰め所にいた騎士達が集まっていた。

どの顔も突然の事態に緊張の色を隠せない。

外に居る騎士達が召集指令を受け集まるまでの間に現状の確認が行われる。

早速地図が用意され、ベヘモスの予想進路の推定作業が始まった。報告を持ってきた騎操士も、ベヘモスの具体的な位置を把握しているわけではない。

ベヘモスの移動能力、地形からのルート割り出しで大まかな現在地を推定するのだ。

その上で騎士団が迎撃するための場所を決定する必要がある。

「やつてきた方角、バルグリー砦からの地理を考慮するとテグベル山を迂回し、麓の森林地帯を踏破するルートが最も有力な予想進路になります」

「このルートだとヤントゥネン近郊は避け得ないな……現在位置の推

測は？

問われた騎士が地図上の一点を指す。

「恐らくはクレペル平原を過ぎ、クロケの森に差し掛かつたあたりかと」

「クロケの森か……近いな。」のままでは迎撃するにもヤントウネン至近での戦いになるな……」

その時、背後で一人の騎士が切羽詰つた声を上げた。

「クロケの森だつて……ー？」

「どうした？クロケの森に何かあるのか？」

最悪の予感を感じ、声を上げた騎士は言葉を詰まらせる。

「あそこでは今、ライヒアラの学生たちが演習を行っています！」
「なつ……ー？」

周囲の騎士たちも絶句する。

ヤントウネンの街だけではなくライヒアラの財産たる国民、それも子供達が危険に晒されている。

中にはライヒアラの騎士学科に家族の居る者も居た。焦つた一部の騎士が前に出る。

「すぐさまクロケの森へ向かうべきです！」

重なる問題にフィリップは頭を抱える。

しかし、悩んだのは一瞬だ。彼には優先すべき使命がある。

「伝令は向かわせる。しかし、騎士団は動かさん。もう少し騎士が集合してからだ」

「団長！ 見捨てるおつもりですか！？」

血相を変えて詰め寄る騎士をフイリップが一喝する。

「そんな訳はないだろ！」

隠し切れない悔しさが、その声に滲んでいた。

「助けに行きたいのは当然だ、だが我が騎士団の戦力ではべヘモスを倒すので精一杯なのだ！」

……それ以上の戦果は望めない。

戦力の整わぬまま焦って出撃しても徒に消耗し、最悪べヘモスを討ち切れない可能性もある。

間違えるな！ 我々の目的はあくまでもべヘモスの討伐。
それによりヤントゥネン……ひいてはフレメヴィーラ王国を守ることにある！」

ざわついていた騎士達が沈黙する。

「……今我々に出来ることは、彼らの幸運と機転に期待する事だけだ……」

クロケの森の入り口、ライヒアラ騎士学科のベースキャンプ。

中等部の撤退が完了した後は、高等部の幻晶騎士が全機でベースキャンプを囲み防衛網を構築していた。

森から出てくる魔獣の大半が1m前後のサイズであり、大きくても

3mほどである。

全高10mの幻晶騎士とは戦闘能力の桁が違う。

群れ集う魔獣は剣の一振りで吹き飛んでいた。

しかしサイズが違う故にどうしても討ち漏らしが出でてしまったため、その穴を埋めるようにまだ生徒達が展開していた。

魔獣の側からしてもその存在を誇示する幻晶騎士と正面からぶつかるのを嫌つたのか、いつしか流れがベースキャンプを挟んで二つに分かれていった。

ちょうど川の真ん中に島があるような形に例えられる。

中等部にて怪我人が多く出、戦力的に厳しい騎士学科の面々にとつてこれは幸運だった。

太陽が中天を越し、真っ赤な姿で山間に沈む頃。

魔獣の襲撃が途切れからも警戒態勢を維持していた彼らもさすがに事態の収束を感じ、一息ついた。

「さすがにもう魔獣は居ないようね……」

ステファニア・セラー・ティは心底疲れた、と言う風に息をつく。結局彼女は無事な生徒達を率いて最後まで指揮を執っていた。キャンプには合流した教師達も居るが、脱出中から指揮を執つていた彼女が継続したほうがわかり易いだろうという判断だ。

「キッド、アディ、エル君」

警戒態勢を緩め、休息をとりだす生徒達へと労いの言葉をかけながら彼女もキャンプへ戻つていた。

その中に彼女が良く知る顔を見かけ、呼び止める。

「あ、ねえ……じゃない先輩、お疲れ様です」

慌てて言い直すアーティにステファニアが苦笑する。

「わざわざ戻さなくてもいいわ。こないだの事もあるし、今まで通りで、ね？」

「うん、じゃあ姉さん……怪我してない？ 中等部は大変だったってきいたんだけど！」

ステファニアは首を振る。

「見ての通り私は大丈夫よ。それより、貴方達も無茶をするわね」

そういうステファニアの表情はやや呆れ気味だった。
ベースキャンプまで撤退した直後は、負傷と疲弊により中等部の戦力はかなり落ちていた。

そのままでは幻晶騎士の防衛網を搖い潜ってきた魔獣の相手も困難だったが、エル達が時間を稼ぐことでなんとか部隊を立て直したのである。

「つつてもよ、あん時は戦えるの俺達だけだったしな。多少の無茶はするつてもんだ」

「……3人で部隊1つレベルの活躍を見せるのは多少ビックリじゃないと思うのだけれど……まあいいわ。

あ、エル君」

ステファニアは一人の後ろに居たエルに近づくとそのままがぱっと抱きしめる。

抵抗する暇も無く捕まり驚くエルをよそに、ステファニアは「満悦

の状態で髪の毛に頬ずりをしていた。

「ああ～やつぱり癒されるわ エル君がいればまだ戦えちゃう」

「（おいおい。まあしゃ はない、今回はサービスしどこか。俺一人の犠牲で気分転換になるなら安いもんやろ）」

エルはよつぽど抗議しようかと思つたが、これまでの彼女の活躍を考えて思いとどまる。

後ろの双子も、アディがなにやら不審な拳動を見せてしまが止めるつもりは無い様だつた。

そうしてステファニアがしばらくエルを堪能していると、彼らの背後からおずおずと声がかかつた。

「あ、あの、生徒会長……」

ステファニアを呼びに来たと思われる生徒は、彼女の様子に半ば以上引き気味だ。

つい先ほどまで中等部の生徒を率い、凜々しく指揮を執っていた彼女が今は下級生を抱きしめてだらしない笑顔を浮かべているのである。

さもありなんという所だ。

「何かしら？」

「（うん、今更キリッとしても手遅れやとおもうんよ。色々と）」

「今後の方針を決めるので、来て欲しいと先生がお呼びで……」

「わかったわ。ごめんね3人とも、行って来るわ」

恐ろしい速度で生徒会長モードに切り替わったステファニアに半ば呆れつつも手を振った。

「（たあて、当面の危険は乗り切つたやうにけど、）いつから先どつなるんやうね）」

エルはクロケの森を振り返る。

日が落ち始めた森は、まるで視線を拒むかのようにどんどんと暗さを増してゆく。

その奥に何が潜んでいるのか、それはエルにもわからなかつた。

「それで？ 結局移動は明日になつたのかよ

その後の方針をめぐつて多少もめたようだが、夕食が始まるころには全員に行動が伝えられている。

夕食に携帯食料と簡単な山菜のスープを啜りながらエル達は状況を確認していた。

「ええ、負傷者は多いのですが幸いにも致命傷を負つた人はいません。重くて骨折といったところでしきう。

それよりも魔力を使い果たし疲弊している人も多く、実働上の戦力が乏しいのが痛いですね。

「この状況で強行軍で移動するのは危険だと言つ判断だとか」

「ねえ、こんなところで休んでるのも危険じゃないの？」

「夜間となれば、馬の視界も利きませんしね。

疲弊を押して危険な馬車での移動中に襲撃されるよりは明かりもあり、まだ拠点としての能力のあるこのキャンプのほうが安全だと判断したようです。

それに、さすがに同規模の魔獣の群れがもう一つ存在するとは思えませんし

「ふーん。なんか楽観的だね！」

「楽観つーよりや、何やつても賭けになるからリスク低いほう選んだってだけだろ。

仮に夜になんか来るつつても、動かねーほうが幻晶騎士による防衛がカンタンなんだしょ」

似たような危惧は他の生徒も抱いており、小声で話し合ひ姿がそこかしこで見られた。

今現在彼らに出来ることは十分に休養を取りつつ、危険が発生したときにそれを速やかに検知・対処することだけ。

ギリギリの状況ではあるが、こまめに交代することで前日に倍する人数の見張りを立て、緊張感は拭えないものの何とか夜を過ぐずのだった。

だが、彼らは見落としていた。

魔獣が暴走した原因は何なのか。
そして彼らは気付けなかつた。

こちらへ向かう魔獣が、どれも必死の様子だったの。
何かに追い立たれる様にして西を目指していたことを。

それを後悔するのは、夜明けを目前にした深夜のことであつた。

夜が明け、じわりじわりと山々の頂から赤い日差しが見え始める頃。見張りに立つ生徒が、森から異様な音が聞こえてくることに気がついた。

それは木が張り裂け、倒れる音。

規則正しい間隔で聞こえる、重量物が落下したような音。

彼らがその意味に気付くのに時間は必要なかつた。
すぐさま力の限り警鐘を打ち鳴らす。

「やばい！ 大物だ！ 大物がきやがつた！」

突如鳴り響いたけたましい鐘の音に、教師、生徒を問わず寝ているものは全員が飛び起きた。

元々緊張もあり眠りはやや浅かつたこともあり、全員起き上がるや否やすぐさま行動を開始する。

待機中の幻晶騎士が森の入り口を固め、休憩に入っていた機体も次々に立ち上がりつて行く。

だんだんと木が倒れる音も、地響きのよつた足音もはつきりと聞こえ始めている。

かなり巨大な何者かが迫つていてる。

「おーおー、ここはやばかねえか？」

言つまでも無く、その場にいる全員がこれまで以上の危険を感じている。

張り詰めたような空氣の中、引き寄せられるように全員の視線が森の入口へと集中した。

これまでクロケの森には決闘級（最低でも幻晶騎士が必要なレベル）以上の大型魔獸が居なかつた。

小型の魔獸しかいからこそ実習の場所に選ばれたのである。
しかし響いてくる足音は明らかにそれ放つ者の巨大さを物語つている。

元々クロケの森には居ないはずの大型魔獸。

突如襲撃してきた小型魔獸の群れ。

昼間の群れは森にいる全ての魔獸が向かつてきたような数だった。あれがもしや、この大型魔獸の侵入によつて追い立てられてきたものだとしたら……。

ついに入り口付近の木々が倒れ、夜明けに差し掛かる薄暗い光の中に魔獸がその姿を現した。

剣山のように刺々しい甲殻に隙間無く覆われた体。人間の持つ最強戦力である幻晶騎士すら子供のごとく見える、小山と見紛うばかりの巨大さ。

その巨躯に比べ驚くほど小さな瞳が、目の前の光景を睥睨する。

誰もが声も無くその威容に萎縮し、恐怖した。

陸^{ベヘモス}皇^{モス}亀^{モス}　過日国境線に現れた巨獸は、今正にヤントウネンの喉元

まで迫つていたのであつた。

#16 魔獣襲来の夜（後書き）

11/2/27 表現微修正。

#17 死地からの脱出

奇妙な静寂がその空間を覆っていた。

現れた魔獸、その場に居た人間の双方が無言で対峙したが故の静寂。

その場の人間、ライヒアラの学生達は目の前に現れた陸皇亀の巨体に氣圧され、動くことすら出来ないでいた。

かつてベヘモスと遭遇した精鋭たる国境守護騎士団の騎士すら、一瞬の自失を避け得なかつたのである。

十代半ばの学生に、それに匹敵する胆力を求めるほうが酷だ。対してベヘモスが動いていない理由は定かではない。

しかし現に森の入口から周囲を見回し、状況を確認するかのように黙り、佇んでいる。

凍りついたような時間の中、先に動いたのはベヘモスだった。

恐らくそれは余裕の程度の差なのだろう、ひとしきり周囲を見回したべへモスはその口を大きく開き、咆哮を上げる。

それは最早音と呼ぶよりも、空気の振動による衝撃波に近いものだつた。

途方も無い肺活量により押し出された轟音は地面を振動させ、至近距離の木々が破裂する。

防衛を担うべく前に出ていた幻晶騎士シリエットナイトの装甲が振動で震え、押し寄せる圧力に絶えかね何歩か後ずさつた。

少し離れていたはずの生徒達ですらあまりの大音量に耳をふさいで蹲り、衝撃に気を失つものすらいた。

そしてそれが彼らの金縛りをとく事となる。

一度動き始めた彼らは、それまでの停止が嘘のように弾かれたよう

に魔獸からの逃亡へと移つた。

しかしそれは正気に戻つたからではなく、逆に恐怖と混乱による暴走へと陥つただけだつた。

もはや教師の統制など利くはずも無く、ただベヘモスから距離をとりつて闇雲に駆け出すのみ。

この状況では逃走自体は最善の選択肢だが、その方法がまずかつた。人の足では逃げられる範囲など高が知れている。

より遠くへ逃げるのならばまずは馬車へと向かうべきだつたのだ。だが恐慌状態の生徒達はそんなことすら思いつかないのか、走る方向はばらばらだ。

そつして彼らが四方に離散するかと思われたとき、突如進行方向のあちこちで爆発が発生する。

いくら恐慌状態とは言え、目の前で爆発が発生してそれに突っ込む生き物はいない。

一瞬生徒達の動きが止まる。

それを狙つたかのようにその前に人影が躍り出た。

「離れて逃げては危険です！ 全員馬車のほうへ！」

爆炎球
ファイヤーボールを放ち彼らの離散を制したのはエルを筆頭に何名かの冷静さを保つていた生徒達だ。

彼らはまるで勢子のように魔法により注意を引いて散らばつた生徒達を集め、馬車の元へと誘導する。

生徒達は冷静には程遠い状態だったが、それでも言葉を認識できる程度には落ち着くことができた。

今度こそ彼らはベヘモスから逃れるため、馬車へと向かつてゆく。

ベヘモスの威圧感に恐怖していたのは高等部の騎操士達も同様であった。

しかも彼らの場合は幻晶騎士という力があるゆえに、ベヘモスの脅威はより深刻であった。

無闇に逃げ出すには自分達は力を持ち、相対するには敵が強力に過ぎるのだ。

「立ち止まるな！ 動けええ！」

進退窮まり、強敵を前にしているにも拘らず足が止まっていた騎操士達のなかで、最初に動き出したのはエドガーだった。

逃げるにしろ戦うにしろベヘモスの前で足を止めるのはただの自殺行為でしかない。

ベヘモスが突撃を開始するのを見て取った騎操士達は慌てて回避行動に入った。

そして、ベヘモスの進路の先に初・中等部の生徒達が逃げる馬車置き場があるので見て取ったエドガーは、自分の中の恐怖を押し殺して決断する。

「我々で、ベヘモスの注意を引く！」

「なつ、お前、自分で何を言つてゐるのかわかつてゐるのか！ あれはベヘモスだぞ！」

俺達じゃ片足で蹴散らされるのがオチだ！」

「だからと云つて！ このままでは後輩達が全滅しかねない！」

その上あのまま馬車の後を追われてはいずれヤントウネンが襲われるんだぞ！」

反論した騎操士にもそれはわかっている。

ここで彼らが逃げ出したとて、逃げこむ先すら危ういのだと。

「くそー！ やるしかねえのかよ……！」

「俺たちは騎士だ。弱きものを助けるために剣を習い、国を守るために幻晶騎士に乗る。

ここで何もせずに逃げるなど、できはしない！」

言いながら、エドガーはアールカンバーに魔導兵装シルヒットアーマーズを装備させた。

「俺だつて無駄死にはしたくない、兎に角ベヘモスの注意をそらすんだ！」

「畜生が！」

アールカンバーは既に走り出し、ベヘモスの足へと狙いを定める。

「全員抜杖！ 法撃で注意を逸らしつつ離脱だ！」

エドガーは叫びながら操縦桿トリガーを引き絞る。

騎操士の意思を受けたアールカンバーは魔導兵装・アークウイバスマナへと魔力を送り込む。

長柄の、シンプルな棒状の杖のような武装の先端が眩く発光し、放たれた雷撃がベヘモスを撃つた。

雷撃に効果があつたようには見えない。

ベヘモスの巨大さによるところもあつたが、雷撃は甲殻を伝い地に逃げるのみで内部組織には伝わっていなかつたためだ。

エドガーの他にも3機の幻晶騎士オバード・スペルがそれぞれに魔導兵装を構え、ベヘモスと並走するようにして戦術級魔法による法撃を始めた。

そのどれもが効果があつたとは言い難いが、それでもベヘモスの注意をそらす程度の役にはたつた。

攻撃を受けたことに気付いたベヘモスが首を巡らし、いましも魔法を放つた幻晶騎士を視界に捉える。

「ぐ、全く効いてないだと……」

「逃げるぞ！ 時間を稼げればそれでいい！」

ベヘモスの注意がこちらを向いた事を知った騎操士達は、そのままベヘモスを初・中等部の生徒達から引き離すべく後退を開始した。

高等部の幻晶騎士がベヘモスに挑みかかっている間、初・中等部の生徒達は必死に馬車へと乗り込んでいた。

定員に達した馬車から次々に出発しているものの、乗り込めた人数は全体の半分と言つた所だった。

「（さすがに人数が多い……先輩の頑張りに期待するしかないな）

エルは生徒達の最後尾で、ベヘモスと幻晶騎士の戦闘の様子を見ていた。

生身の人間には不可能な出力での魔法 戰術級魔法による法撃も堅固極まりない甲殻に阻まれ効いた様子が無い。

人間の技術の粹たる幻晶騎士すら、あの魔獣の前では無力な存在に過ぎない。

ましてや一人の人間になど何ができるよ。

エルは険しい表情で戦いを見守つてゐる。

傍から見ている限りでは高等部の騎操士達は圧倒的に不利だ。何せ攻撃が通じていない。

今は後退を中心に動きで翻弄しているが、ベヘモスの巨体から鑑みて幻晶騎士すら一撃で行動不能になる可能性がある。

エルにしてもこうして見ている事しか出来ないのは非常にもどかしいが、いくらなんでも手の出しあうが無かつた。

「（ヒ）ちは全員逃がして見せる。先輩達も死なんといてや……！」

「

ベヘモスが本気で突撃を開始しては幻晶騎士の移動速度をもつても逃げ切れる保証は無い。

そのため、誰かが狙われそうになる度に逆側から集中砲火を浴びせ、注意を逸らすことで時間を稼いでいた。

攻撃はさしたるダメージにもなっていないが、それでも攻撃される事自体にベヘモスは苛立つているように見える。

「ははは！ なんだ、このデカ物め、手も脚も出ないじゃないか！」

ディートリヒが咆える。

その巨体からでる威圧感に圧され、竦んでしまったからこそ現在の自分達の優位を、まず自分自身に言い聞かせる。

しかし時間稼ぎが上手く行くことによって逆に彼らは油断し始めてしまった。

実はこの魔獸はでかいだけのウスノロド、大して恐れることは無いんじゃないのか？

実際には一回でもベヘモスの突撃が当たれば幻晶騎士は破碎されかねないので、この巨獸を手玉に取っているという事実が彼らの判断を曇らせる。

そうして暫くは順調に時間を稼いでいるかのように見えた、その時。攻撃を加え逃げる機体を追っていたベヘモスが突如動きを緩める。先ほどまでは闇雲に追つてくるばかりだったベヘモスの変化を、騎操士達は訝しがる。

ベヘモスが大きく息を吸い込む。

直後、その口腔から猛烈な竜巻の吐息が放たれた。

魔法による遠距離攻撃。

これまでの行動から突撃しか行わないと思い込んでしまっていた騎操士達は、ベヘモスの突然の魔法攻撃に反応できなかつた。

竜巻が直線状に放たれ、荒れ狂う大気の渦が機体を捕らえた。圧倒的な圧力に抵抗することも許されず、幻晶騎士の装甲がひしゃげ、体を支える結晶筋肉クリスタルティッシュが砕けてゆく。

全高10mの金属の塊である幻晶騎士の機体が軽々と宙を舞い、地面に叩き付けられた。

激突の衝撃で最も耐久性に劣る四肢が破碎し、ちぎれ飛び。なまじ幻晶騎士は人の形をしているため、地面に散らばるその姿の凄惨さが、残る騎操士達の目に焼きつく。

「ヒツ、う、うわ！」

ディートリヒはその様子をまともに見てしまつた。

これまで高等部で共に学んできた学友が、彼が駆る幻晶騎士が、呆氣なく粉砕される様を。

彼の喉から出たのは引き攣れるような悲鳴だ。

瞬間、風を斬る轟音と共にディートリヒの前に居た機体が居なくなつた。

一瞬彼には何が起こつたのかわからなかつたが、少し視線をずらせばすぐに原因がわかつた。

ベヘモスによる尾の一撃。

動きの止まつたところを遠心力のついた攻撃に直撃され、目前に居た機体はひとたまりも無く折れ飛んでいたのだ。

ディートリヒが無事なのはほんの少しの偶然、立ち位置の違いによるものだ。

あと数歩踏み込んでいれば尾に巻き込まれ、同じように吹き飛ばされてしまうだろう。

瞬く間に2機の幻晶騎士がまるで陶器か何かのように碎け散った。それまで仮にもベヘモスに対しても戦いつると言えつしあつた騎士達は、完全に己の考え方違いであつたことを悟る。

目の前で、実際に易々と幻晶騎士が粉碎される光景を見せられ、そしてその原因が次はこちらを狙つてている。

2種類の叫びが交差する。

前者はティートリビ、田の前の魔獸に対する恐怖の叫びだった。後者はエドガー、己の恐怖に打ち勝つ奮起の雄叫びだった。

「（くそつ、何故油断した！　ベヘモスは師団級魔獸……俺達で簡単にじぶんにかかるできる相手じゃないなんてこと、わかつていたというのに！）

全員正面は避けろ！ 兔に角回避を優先するんだ！ あと少し、
あと少しだけ粘ってくれ！」

どの道既にベヘモスと相対している以上、迂闊に背を見せではなく扱われて全滅するのは目に見えている。

エトナーの声に恐怖に震えながらも他の騎操士が応じいでベヘモスの攻撃を避けてゆく。死に物狂

最早彼らには、完全に死線を越えてしまつた場所で粘ることしか道が残されていなかつた。

ベヘモスからの魔法の暴威により、高等部の騎操士達が窮地に陥っていたころ。

エル達は初・中等部の生徒を全員送り出し、最後の馬車へと飛び乗つていた。

信号弾代わりに空中に爆炎球を数発打ち上げる。
何とか、それに気付いた騎操士達が脱出に移ることを祈るのみである。

エルは走る馬車の後部から遠ざかる戦いの様子を見ていた。

先ほどのベヘモスの魔法攻撃により、高等部の旗色は良くない。

恐らくはエル達が此処を離脱した後でも、距離を稼ごうと戦い続けている。

エルの胸中に、一昨日のエドガーとの会話がよぎる。
もはやエルには、届かないと解っていても応援を送ることしか、できることはなかつた。

その時、エルの視界の端を紅い影がよぎった。

森へと振り向き、それが何であるかを確認したエルの表情が驚愕に彩られる。

紅い影 それは幻晶騎士・グウ エールだ。

まさか、という思いで振り返れば、他の機体はベヘモスと戦っているのが遠くに見える。

つまりグウ エールは、他の生徒を見捨てて、一機だけ逃亡している事になる。

そう理解した瞬間、エルの体は馬車から躍り出していた。

幻晶騎士の移動速度は速い。エルも全力を込め、弾丸の如き速度でグウ エールの後を追い始めた。

突然のエルの行動に驚いた皆が止める暇も有らばこそ。
その姿は一瞬の間に森の中に消え、もはや探すことは出来なかつた。

#17 死地からの脱出（後書き）

11 / 2 / 27 表現微修正。

日が差し込み、明るい森の中を紅い幻晶騎士^{シルトットナイト}が走る。周囲には森が広がるばかりで何者の姿も無い。

しかし紅い機体は脇目も振らず、速度を緩めずにまるで何かに追いで立たれている様に全力で駆けていた。

そして事実、紅い幻晶騎士 グウエールとその騎操士^{ナイトランナー}、ディート・リビ・クーンツは完全に追い詰められていた。

ディート・リビを駆り立てているのは恐怖の感情だ。

陸皇亀^{ベヘモス}に学友の幻晶騎士が倒される光景が、彼の脳裏にこびりついて離れない。

後ろを振り返ることすら出来ず、ディート・リビは遮二無一^{グウエール}を走らせる。

自分が走っているわけでもないのに、恐怖に乱れた呼吸が肺を締め付けていた。

彼だけの話ではないが、騎操士達は己の愛機に絶対の信頼を持っている。

勿論世の中には幻晶騎士の戦闘能力を上回る魔獸もあり、全くの無敵であるとは思っていない。

時には犠牲も出るだろう。

しかしそれでもあるのよ、一切手も足も出さずに、しかも一撃で粉砕されるような敵がいるなど彼の覚悟の埒外だった。

力への信頼は、それを圧倒的に凌駕する存在に出会った時に崩れ去ってしまう。

信頼できるものが無いまま戦場に出ること、寸鉄を帯びずに飢えた虎の前に立つに等しい。

結果、恐慌状態に陥った彼は恥も外聞も無く生き残る道を 残る

学友を囮にしての逃走を選んだ。

しかし運命の女神は容易にはディートリヒを見逃さなかつた。突如、グウエールの速度が落ちる。

全く冷静さを欠いているディートリヒだが、それでもすぐにその原因に思い至つた。

先ほどの戦闘とあわせての全力疾走。

しかも彼は常日頃の訓練の成果を出すとともになく、とにかく我武者羅で効率の悪い走り方をしてしまつた。

当然その結果に待つのは魔力貯蓄量の枯渇だ。

動けなくなることへの恐怖がディートリヒを襲うが、それでもこの状況で何を出来るわけでもない。

グウエールを立ち止まらせてから駆機姿勢をとらせ、魔力貯蓄量が

回復するまでその場での休憩を余儀なくされる。

彼はひとまずベヘモスに追われていない事を確認し、荒れた呼吸を落ち着けた。

しかしいざ立ち止まつて少しでも冷静さを取り戻すと、次に襲つてきたのは猛烈な後悔の感情だつた。

彼は首を振つてその思考を振り払おうとするが、動くことも出来ず、にその場にいる状況では、後から後から思考が湧いて出でばディートリヒを追い詰める。

そつ、自分は味方を見捨てて逃亡した

くつわ
轡を並べて戦つてきた友を見殺しにするなど、騎士たる者として恥

すべき行いだ

…。

「（だつ、だから何だつて言つんだ！　あの場にいたんじや、殺されるだけだ！

私は生き残る道を選んだだけだ！ 騎士の心得だって無駄死にしろなんて言つていなー！」

他の誰でもない、ディートリヒ自身の内からの声 良心の呵責といふ名の声を必死に否定する。

一度は落ち着けたはずの呼吸が再び荒くなる。

操縦桿を握り締めた手は強張り、力の入れすぎで白くなっていた。それにも気付かずディートリヒは目を見開き、滝のような汗にまみれながら自分の思考を肯定し、否定していた。

自らの思考に振り回されていたディートリヒは、突如聞こえてきた音で我に返った。

圧縮空気の噴出する鋭い音。

バカッ、と言う金属の摩擦音が続き、彼の正面の視界が広がった。余りに突然の事態にディートリヒの思考が追いつかない。

幻晶騎士の胸部装甲は操縦席へ乗り込むために圧縮空気の力を用いて上下に開くようになっている。

今、突然それが開いたのだ。

勿論彼は装甲の開閉操作などしていいない。する理由が無い。

そして外部から開くための方法は、誤動作で装甲が開かないように複雑なレバー操作を必要とする。

つまりは何者かが外から装甲を開くためのレバーを操作したとしか思えない。

その推測を裏付けるように、開いた装甲の上に飛び乗るよつに人影が現れた。

初等部としても小柄な体躯に、紫銀の髪が眩く映える。

呆然とするディートリヒに向けて、エルネスティは涼しげな表情で微笑みかけた。

「やつと追いつきましたよ、先輩」

エルの口調はまるで忘れ物を届けるかのように軽なものだった。小首をかしげながら、さらりと問いを口にする。

「单刀直入にお聞きします、先輩はあの場から逃げ出したのですよね？」

エルにとつてはまさに確認のためだけの問いかけだったが、問われたディートリヒはびくんと震える。

突如として現れた後輩からの、しかもあまりにストレートな問いかけに彼は再び興奮状態へと陥つていった。

「……！　くつ　ああ、そ……くそ……

そ、そうだ！　逃げて何が、何が悪い！　あの場所で一人増えようが減ろうが、結果は全く変わらない！

だつたら何故私が無駄死にしないといけないんだ、騎士の心得とて、命まで捨てるとは言つていない！」

口から泡が飛ぶのもかまわずディートリヒは繰り返す。

それはエルの言葉に対する答えではなく、自分自身へ言い聞かせる言葉だ。

興奮するディートリヒに対し、エルは笑みを崩さずに頷いた。

「よかつた」

「……なに？」

予想もしない反応にディートリヒが呆気にとられる。よかつた？　今の彼の台詞のどこに、喜ぶ要素があったというのだろう。

「先輩からならば、僕も安心してグウエールを借りれそうです」

エルがワインチェスターを引き抜く光景を最後に、『ディートリヒ』の意識は途絶えた。

大氣彈丸ニア・バレットで『ディートリヒ』を撃した後、エルは操縦席の中を一通り回した。

幻晶騎士は全高10mの巨体でありながら、骨格と各種機材を詰め込んだ操縦席内は狭く、雑然としている。

最も目立つのは中央のシート、その左右の肘掛の部分に2本の操縦桿がある。

シートの下には鎧アーマーがあり、騎操士は両手を操縦桿に、両足を鎧に置く形で操縦を行つ。

エルは以前見せてもらつたことのある操縦席の機能を軽く思い出しながら、操縦に必要な手順を脳内で再確認していく。そしていざ気絶した『ディートリヒ』を退かせようと、固定帶をはずしながら彼はふと気付いた。

「（さすがに気絶したまま）ここに放り出した日元や、獣とかに襲われて死ぬんぢゃうん？」

一人で逃亡した『ディートリヒ』に怒りを感じていたのは事実だが、さすがに生命の危険に晒すのは彼の本意ではない。

少し悩んだ後、エルはシートの後ろの空間に目をつけた。

幻晶騎士の操縦席には一般的に、サバイバル用の物資が備え付けられている。

毛布や携帯食料、簡易医療セットなどがあり、作戦行動中にはぐれても数日は単独で行動できるようにするためだ。

大抵の場合はシートの後ろ側に邪魔にならないように詰め込まれている。

「（まあちょっと勿体無いけど、此処しか空いてへんしな）」

エルは無造作に荷物を引き抜き、外へと捨てる。

背後の空間にいくらかの余裕が出来たのを確認した後、シートの上で伸びていたディートリヒを其処へ詰め込んだ。

やや人としてとつてはいけない態勢のような気がするが、気にしたら負けだ。

ディートリヒを片付けた後、エルは改めてシートに向き直る。

シートは高等部の生徒の体格に合わせたものであり、そこに座るとエルの体格では操縦桿にも鎧にも届かない。

勿論地球における車のように、シートの位置調整などという便利な機能は存在していない。

しかしこれは既に想定済みの問題であり、その対策も考えずに操縦席に乗ったわけではなかった。

徐にシートの左右のコンソールを切りつけ、外装を破壊する。別に八つ当たりしている訳ではない。

事前に一般的なコンソールの形式は調査しており、破壊したその下から操縦桿へと伸びる銀製の配線シルバーナイフ 銀線神経を引っ張り出した。

それをワインチエスターに巻きつけると、彼はシートに座つて固定帶で自分の体を固定する。

ワインチエスターの魔力伝達用の銀部分と銀線神経を直結することで簡易の入出力端末にしたのである。

銀線神経は魔力と共に魔法術式を伝達する。
スクリプト

本来、幻晶騎士の操縦には操縦桿と鎧からの入力と、そして魔法術式を利用する。

しかし幻晶騎士の制御システムたる魔導演算機^{マキウスマエンジン}は、最終的には魔法術式のみを使用して全身を制御している。

つまりは極論すれば操縦桿を使用しなくても、魔法術式さえ利用できれば幻晶騎士は動くのである。

では何故操縦桿と鎧が存在するのか。

それは操縦に必要な負担を減らし、操縦を簡易なものとするためである。

幻晶騎士を制御する魔法術式は極めて複雑で規模の大きいものであり、そのままではとても人一人の処理能力で処理できるものではない。

そのため、魔導演算機から操縦者に伝達される魔法術式は、機能を限定することで処理の軽い形になっている。

ある程度の条件を変数として持つ、入力専用の関数で本体の処理を隠蔽しているのである。

ただ、完全に魔法術式に依存する方法では操縦者にとって感覚的に理解しづらい操縦法になってしまつ。

そのため操縦桿と鎧がある。

感覚的に理解しやすい操縦者の四肢に対応した物理的な入力装置をトリガー^{トリガ}とし、限定的な魔法術式の関数から動作の詳細を入力する。半思考制御とも言える、この二つを併用する方式により操縦の簡易さと動作の自由度をある程度両立させているのである。

エルが幻晶騎士を操縦するに当たつての問題点は物理的な入力機器が利用できない点にある。

ならば、最初から全てを魔法術式のみで処理してしまえばいい。

それは魔導演算機で処理される膨大な魔法術式を個人の魔術演算領域^{マキウスマ・ザーキ}で処理しようというものだが、エルの処理能力はもはや人外の域

にある。

勝算の低い賭けではなかつた。

エルは軽く息を吐いて氣を落ち着かせると、目を閉じて意識を集中させる。

銀線神経と接続したワインチエスターを通じ、魔導演算機へアクセスを開始。

送られてくる動作用の関数を読み込むと、そのまま関数の本体へと意識を潜らせてゆく。

本来、騎操士は魔導演算機から術式を受け取り、必要分を追加して返答することしかしない。

普通の騎操士は魔法術式の処理による負担が低いほど良いと考えるため、魔導演算機側も騎操士からの直接操作など想定していなかったのであらう。

拍子抜けするほどあつさりと経路^{バイパス}が確立され、魔導演算機に蓄積された魔法術式が次々に読み込まれてゆく。

目を閉じて術式の解析に没頭するエル。

彼の意識上では空中に魔法陣が積み重なり、縦横に展開されている。彼は意識上で腕を伸ばすと、魔法陣をなぞるよつとしてその内容を読み取つていく。

「（ああて、こつからが本職の腕の見せ所や）」
（プログラマー）

これまでにエルが学び、記憶している術式と、魔導演算機内の術式を比較する。

極めて迅速に、魔法技術の精髓を解体にかかる。

「（パターン解析開始……類似術式検出、身体強化、拡大術式……）」

内容の多くが既知の術式との類似を見せ、エルの認識下に置かれてゆく。

そして術式の配置からその意味を把握。認識が広がるほどに加速度的に内部の把握が進んでゆく。

「（いつちゃん根っこにあるんは、身体強化か？ 確かに筋肉動かすんやつたら似たような話になるか）」

基礎となる術式を下敷きに、個別の制御部が連結されている構造。エルの意識上ではすでに空中を埋め尽くさんばかりの魔法陣が展開されていた。

「（クリスタルディッシュ結晶筋肉の動作制御……配置のマッピング。
部位ごとにモジュール化して連結。
出力制御、これが魔力^{エーテルリアクタ}転換炉の入出力……）」

駐機姿勢をとり、立膝を突いていたグウエルが僅かに震えた。指先が微かに動き、それまでは視線が定まらなかつたその瞳がしっかりと周囲を認識し始める。

「（動かすには……俺の体を動かす身体強化術式と幻晶騎士の動作用術式を連結。）

動作用パラメータを幻晶騎士にあわせ^{コンパート}変換、併せて入出力制御を初期値で動作開始）」

全身に張り巡らされた銀線神経を伝い、魔力^{エーテルリアクタ}転換炉で生成された魔力^マがコクピットからの魔法術式を乗せ伝播してゆく。

幻晶騎士は与えられた術式の指示に忠実に従い、結晶筋肉が貯蔵された魔力を消費し、伸縮を開始する。

ゆっくりと、震えながら、まるで生まれたての小鹿のような動きで機体が立ち上がる。

「（動作パラメータのコンバートを完了）、駆動開始……。

出力制御の変数調整、魔力貯蓄量は十分、まずは一步……」

ゆらりと、一歩一歩と踏みしめるようにグウエールの巨体が歩みを始めた。

だがその動きはまるで死者のように覚束なく、ゆっくりとしたものだ。

「（動作差異の反映^{フィードバック}、最適化を開始）」

実際の動作から情報を反映し、機体を動かしながらも結晶筋肉の余計な動作を走査し、次々と術式に修正^{パッチ}を当ててゆく。

既存の魔法術式の面影を残しつつ、思考と同速度で行われるデバッギにより、短時間の間に術式は極限まで最適化されてゆく。数歩の歩みを刻む間に、その姿は優雅ささえ感じるほど滑らかなものになっていた。

エルが魔導演算機へアクセスを開始してからおよそ30分。

幻晶騎士^{シリエットナイト}　人の英知の結晶とも言つべきその魔導兵器は、完全に

エルの制御下に入った。

エルの意思に従い自在に動くグウエール。

エルの思考は魔術演算領域上で直接術式へ変換され、幻晶騎士へ伝達される。

そこには物理入力装置による遅延も、関数に隠蔽されていたが故の無駄も存在しない。

操縦者の思考と同速度で動く、完全なる直接制御が此処に実現していた。

今は非常事態である。

こつしている間にも高等部の騎操士達は死線の際で戦っている。ここには一刻の猶予もなく、エルもそれが故にグウエールに命じる。エルの意思を受け、グウエールは此処までかかった時間を取り戻すかのように猛烈な速度での疾走を開始した。

しかし。

走るに連れてエルの表情が緊張感を感じるそれから、笑みの形に変わつてゆく。

この時のエルが感じていたのは、焦燥でも重圧でもなかつた。今エルはロボットに乗つている。

ロボットはエルの思うとおりに動き、力強い走りを見せている。グウエールを追つている間は、考える暇がなかつた。

魔導演算機へとアクセスする間は、思考がいっぱいで考える余地がなかつた。

今、実際に移動を開始して余裕が出てきたところで、エルは自分自身がとつていてる行動の意味を、冷静に振り返り始めたのである。こんなときに不謹慎だ、とはエルも思う。

しかし彼は自らの感情を止めようがなかつた。

「（うおお口ボヤ、俺口ボに乗つてる、走つてゐー。）

機体が走るたびに伝わつてくる振動も、幻像投影機に映る景色が恐ろしい速度で流れでゆくさまも、そして今エル自身にかかる慣性も、その全てが彼にとつては幸せといつても過言ではない。

ホロモリータ

彼の表情が喜色満面の笑みになるのを、果たして誰が止められようか。エルはこの先に待つのが強大な魔獣との戦闘であることも忘れ、幻晶騎士を動かす悦びに浸っていた。

そうして一歩(い)とくに目的を見失い行くエルと、泡を吹いて気絶したままのディートリヒを乗せ、グウエールは戦場めがけて駆け抜けてゆくのであった。

#18 戰鬪準備（後書き）

11 / 2 / 27 表現微修正。

#19 駆け抜けでみよう

開けた草原から徐々に木が増え、いすれ木々は森と呼ばれる密度になる。

その中を石畳に覆われた街道が一直線に東へ向けて伸びていた。フレメヴィーラ王国東部へと続く最大の街道である“東フレメヴィーラ街道”。

国内における街道の中でも特に、カンカネンからヤントゥネンまでを結ぶ“西フレメヴィーラ街道”と、ヤントゥネンから国境へ向かう東フレメヴィーラ街道は石畳による舗装がなされている。その歴史は古く、国境線に皆が建築される際に物資輸送を簡易にする目的で舗装されたのが始まりである。

それは現在まで国内の物資輸送を助け、まさに大動脈として活躍していた。

普段は商人の馬車と護衛の幻晶騎士シリエットナイトが活発に行き交うこの街道も、今は閑散とした印象を受ける。

それは多数の魔獣の暴走が発生したためかもしないし、商人達の噂話に大型魔獣の目撃情報が上がっているからかもしぬなかつた。緊張感にも似た静けさが漂つている街道に俄かに騒がしさが訪れる。数十台の馬車の群れによる蹄の響きが辺りを満たす。馬車にはクロケの森を脱出したライヒアラ騎操士学園の生徒達が乗っていた。彼らは高等部の騎操士ナイトランナー達の必死の足止めにより、辛くも巨獸の襲撃から逃げ延びてきたのである。

脱出当初は馬車を全力で走らせていたが、さすがに馬の消耗が激しいため今は通常以下のペースで進んでいる。

それでも通常はヤントウネンまで約1日の道程の凡そ半分程度を踏破していた。

馬車の中では生徒達がそれぞれに疲れた様子で座っている。

ここまで間背後から魔獣が追つてくる様子も無く、走り続けるうちに大分と落ち着いてきては居るもの、生徒達が胸に抱いた不安感は容易に拭えそうにはなかつた。

「エル君、どうじてるのかなー？」

そんな重苦しい空氣の中、最後尾を走る馬車の中ではキッドとアーティがぼんやりと後方を眺めていた。

クロケの森からの脱出際、馬車を飛び出し森へと入つていつたエル。それは彼らが止める暇もないほど唐突で、そして後を追う前にその姿は視界から消えていた。

「……なあ、もしかしてよ」

「？」

微妙に上の空のキッドが、何かを思いついたよ^{ギギギ}うと呟く。

「あいつよ、幻晶騎士奪つて殴り込みに行つたんじゃねえか？」

まさか、と返そつと口を開けかけて、アティはそのまま考え込んだ。彼女の脳裏にありありとその光景が思い浮かぶ。

常識的に考えれば、騎操士課程の学生でもないエルが幻晶騎士を動かせるはずもない。

しかし彼ならば、あの彼ならば独自の学習で動かし方を知つていてもなんら不思議ではない 事実、動かせたのだが。

となれば、彼がそのまま陸^{ヘルモス}皇亀に突撃することは想像に難くない。

「ああー……うん、なんだかすゞく納得しちやつた。エル君ならやりかねないよね」

「何にせよ心配いらねえだろ。いざとなればあの脚で逃げ切るぞ」

キッドはエルとともに歩いていた走り込みの様子を思い出していった。エル自身が大気圧ヒアロースラスト縮推進と名付けた魔法を使用して、恐ろしい速度で走り去るその姿。

狼の疾走より尚早く、空行く鳥と同じ速度で地を駆ける彼を果たして誰が捕まえられようか。

しかも恐ろしいことに彼はその勢いのまま優に1時間は走り続けられるのだ。

かの巨大な魔獣を相手にしても逃げるだけなら早々に視界の外へと逃げおおせるだろう。

そこまで想像して、一人は顔を見合わせ「イツ」と笑いあう。

ちょうどこの頃エルがグウエルを奪取し、彼らの予想通りにベーモスへ突撃しているのだが、幸か不幸か馬車に揺られる一人にそれを知る術は無かつた。

群れの先頭を行く馬車に乗つた教師が、突如後方に注意を促した。進行方向の遙か彼方に何者かが進む土煙が見え、ほどなく馬車の方より馬の蹄とは違う音が響いてきた。

重量のある物体が、多数集まっているかのように重なった音。地響きの原因は直ぐに知れる事になる。列を成し、整然と進む巨人の群れ　それは、フレメヴィーラ王国で制式採用されている幻晶騎士である“カルダトア”だ。

フレメヴィーラ王国の国民にして、その姿を知らないものは居ない。そしてカルダトアがここに居る意味がわからない者もまた、居ない。

「ヤントウネン守護騎士団……」

先頭の馬車に乗る教師の声は、すぐさま後ろにも伝わってゆく。

次々と馬車から顔を出してその光景を確認した生徒達の顔が希望と興奮に輝いてゆく。

此処にいる部隊は幻晶騎士2個大隊規模にも上る約90機、その後ろには輜重隊と野戦整備隊。

これはヤントゥネンの戦力の大半であり、バルゲリー砦からの使者を迎えてより一日も経たない内に揃える事が可能な戦力としては最大限といえる。

カルダトアは制式採用された量産機の常で飾り氣には乏しいが、長きに渡つて使い込まれ、磨き上げられたその姿は一種独特の迫力を持つ。

両肩に飾られたフレメヴィーラ王国の国旗と、ヤントゥネンの都市旗の紋章はこの地を守護するものとしての誇りを感じさせた。

ライヒアラの生徒達はもはや不安など感じていない。

例えあの魔獣^{ベヘモス}が如何に強大であろうとも守護騎士団がそれを打ち破ってくれる。

そう信じるに足るだけの信頼と力がそこには存在した。

馬車を発見した騎士団のほうでも、生徒たちとは別の安堵感が広まっていた。

可能な限り急いで準備し出撃してきた彼らではあるが、ライヒアラの生徒達はその時点で全滅すら覚悟されていた。

それがざっと見たところその大半が無事に脱出してきたのである。そして、ライヒアラ側からはベヘモスの位置情報を含む、貴重な情報がもたらされた。

「そうですか……高等部の騎操士達が……」

そしてその中には、ライヒアラの生徒達が無事に逃げられた理由も含まれる。

騎士団にもライヒアラ騎操士学園の出身者は多い。

彼らは自分達の後輩が見せた騎士の鑑たる行動に、決意を新たにする。

「『安心ください。我らが國家を守るため、そして犠牲を無駄にしないためにも彼奴は必ずやこの地で討ち取ります』

騎士団は意氣を上げてクロケの森へと向かう。

ライヒアラの生徒達が遭遇してからまだ半日と経っていない。

ベヘモスとの遭遇戦は目前と予想され、騎士団の緊張感は一歩いじとに高まつてゆくのであった。

鬱蒼とした森の中を、紅い幻晶騎士（グウエール）が駆け抜ける。

走る、走る。ディートリヒが逃げてきた道を、それに倍する速度で戻つてゆく。

グウエールの性能は、勿論ディートリヒが乗つっていた時から変わらない。

ではこの差は何によるものか。

魔法術式（スクリプト）を利用した操縦法を行つに当たり、エルはグウエールの制御に、自身の動作パラメータを変換して適用している。

現在のグウエールは彼と同じく高速機動を主体とした動作に最適化されているのである。

更に、彼は完全に魔導演算機（マギュスエンジン）とシステムと直結した状態にある。

彼の思考は直接魔法術式（スクリプト）に変換され、タイムラグなく機体の全身へと伝達される。

元々幻晶騎士の結晶筋肉は生物の筋肉組織よりも出力や応答速度といつた性能が高く、伝えられる命令を遅滞なく実行することができるのである。

結果としてグウエールは並の幻晶騎士の倍近い反射速度と移動速度

を叩き出しながらの行動が可能となつたのである。

前方から聞こえる地響きが徐々に大きくなり、暴風吹き荒れる音に混じつて爆発音や雷撃と思しき音も聞こえ始める。

あと数分もしないうちにベヘモスと接敵することになる。

思わずエルの顔が笑みの形に歪む。

抑えきれない歓喜を滲ませながら、彼は人生初の幻晶騎士による戦闘に突入していく。

ゴガアッ！！

金属同士の重々しい打撃音が響き、吹き飛ばされた巨人が宙を舞う。ベヘモスの突撃に弾き飛ばされた機体は、あまりの衝撃にそのまま地面を転がってゆく。

内部の騎操士の安否を確認する暇もないが、地面に打ち付けられ、胴が潰れ腕がひしゃげている様子を見ると無事とは思えない。

「くそつー！」

初・中等部の生徒が離脱した後も高等部の騎操士達は戦闘を続けていた。

すでに疲労の色が隠せない彼らに対し、ベヘモスはさすが要塞とも称される魔獣、その動きには全く衰えが見えない。

元々圧倒的だつた力の差に加え、一刻と持久力の差まで現れ始めてゆく。

国境守護騎士団でさえ耐え切れなかつた圧力を前に、高等部の機体は1機、また1機と倒れ、最早残るのは3機に過ぎなかつた。

吹き飛ばされた味方機に一瞬氣を取られたエドガーを、ベヘモスの鞭のようにしなる尾を避けきれないと直感したエドガーは、アールカンバーを可能な限り下がらせながら左手の盾を大きく振るわせ、危ういところで尾の一撃を受け流した。

それは正にアールカンバーの性能と高等部有数の技量を持つエドガーハーの力が合わさってこそ可能な離れ技であつたが、尾の先端が掠つた、その威力だけで盾を弾き飛ばされてしまった。不用意によろめかない様に衝撃を受け流しながら、アールカンバーがベヘモスから更に距離をとる。

「（盾を持っていかれたか！　まずいな、どんどんと追い詰められていく……）」

それでもアールカンバーはまだ無事な方で、残る2機は魔力貯蓄量マナ・ホールや損傷が限界に来ている。

エドガーは脳裏を過ぎる最悪の予感を振り払えない。後どれ位もつだらうか、悪くすると5分と経たず全滅している可能性すらあるのだ……。

ベヘモスから既に何度目かもわからない竜巻の吐息が放たれる。
暴風渦巻くブレスは効果範囲が広く、大きめに回避しないと気流に巻き込まれる。

それまでの疲労と損傷が蓄積していた機体が最後の力とばかりに直撃こそ避けたものの、周囲の気流に煽られて大きくその体勢を崩した。

「ヘルヴィイイツ！！　くそ、間に合えッ！！」

叫びつつ、エドガーは倒れた機体めがけて突撃し始めたベヘモスの氣をそらすべく、僅かな可能性にかけて魔導兵装・アークウェイバスを撃つ。

必死の攻撃も虚しく甲殻に弾かれるばかりで、ベヘモス意識は目の前にいる幻晶騎士^{エモ}にそそがれたままだ。

ベヘモスの速度が上がり、立ち上がるうとあがく機体へと迫つてゆく。

そして、誰もが次なる犠牲を覚悟した、その時。

「ツツツ　ツチエエエエエストオオオオオオオオオオ！……！」

ついに、グウエールが戦場に辿り着く。

森から出れば、其処にはいましも倒れた機体を轢かんとするベヘモスが目に入る。

瞬間にさらに速度を上げたグウエールは、紅い弾丸と化しながらベヘモスの左手から迫る。走りながら抜剣。

斬ることなど考えない。

選ぶは突き、勢いを一点に集めた攻撃。

狙うは一点、要塞とも称される魔獸の数少ない急所、眼球。

並みの機体には到底辿り着けない速度を叩き出しながら、グウエールの動作は精密極まりない。

しかし、ベヘモスはグウエールの剣が直撃する直前に紅い影に気付いた。

気付いてしまったが故に、ベヘモスは反射的に首をそちらに向ける。既に不可避の間合い、グウエールの剣は振り向いたベヘモスの目を正確に追う。

吸い込まれるように剣が眼球へと突き出され、剣と甲殻がぶつかり合つ。

それはただの偶然。

ベヘモスの眼を守るはずの甲殻には、僅かな鱗^{ひび}が入っていた。

凡そ半月前に、ある騎士が、命と引き換えに刻んだ、鱗が。

ただ横から攻撃を受けただけならば、もしかしたらベヘモスの甲殻は突きを弾けたかもしれない。

しかし振り向いたが故に、偶然に剣は鱗を正面から捕らえ……貫いた。

通常の幻晶騎士に倍にも達する速度で、金属の塊たる自身の重量全てを一点に集中した突き。

金属同士が摩擦する耳障りな音を立て、火花を散らしながら剣がその眼を貫いてゆく。

そのまま根元まで差し込まれるかと思われたが、しかし。

ガツッ、と硬質な音を残して剣が半ばから砕け散る。

乾坤一擲の一撃は確かにその眼を穿つたものの、その奥にある頭蓋を貫くには至らず、両者の衝突の勢いに耐え切れなかつた剣が砕けてしまつたのだ。

エルは剣が砕けたことを悟るや、正に一瞬であるにも関わらず宙へと飛び上がり、衝突を回避する。

突撃の勢いが残るベヘモスの巨体を掠るようにグウエルがすり抜けて行く。

高々と宙を舞い、空中で綺麗に縦捻り回転を決め両足から着地。

そのまま更に2回バク転を繰り出し、ベヘモスから離れるとやつと停止した。

ベヘモスが、それまでにない激怒の咆哮を上げる。

左目からはとめどなく血が噴き出し、その身をこれまで経験した事のない衝撃が駆け抜ける。

ベヘモスは魔獣の中でも圧倒的な防御力を持ち、攻撃を受けても傷つくという事が少ない。

それ故に、眼を貫かれるという激痛と、視界の半分が失われたことによる衝撃は計り知れなかつた。

ベヘモスは残つた右目を血走らせ、左目を奪つた怨敵を探して暴れ狂う。

最早その場にいる全てがベヘモスの興味から消えうせる。求めるのはただ一つ、左目に最後に映つた光景、紅いヒトガタの姿のみだつた。

高等部の騎操士達は、戦闘中にも関わらずそれを啞然とした表情で見ていた。

状況に、彼らの理解が追いつかない。

逃げたと思われていたグウエールがありえないほどの速度で駆け抜け、それまでびくともしなかつたベヘモスの甲殻を穿ち、その眼を潰してを見せた。

今、目の前の巨獣は憤怒の咆哮を漏らしながら、紅い機体と向かい合つている。

「！ ヘルヴィ！」

ベヘモスの注意が逸れたのを幸いと、アールカンバーが倒れた機体に駆け寄る。

ヘルヴィ機は転倒による損傷もあり、歩行もやつとの有様だ。

振り向けば、ベヘモスがグウエールに襲いかかっていた。

片目を失つたにも関わらず、それまでより尚激しい勢いで突撃するが、グウエールの動きはそれを上回る速度だ。

エドガーの目には本当にデイートリビが乗つてゐるのか疑わしいほどに映つたが、彼にそれを気にする余裕はない。

グウエールがベヘモスの猛攻を凌げるというのなら、損傷の激しい味方を救出する時間ができる。

「（すまない）ディー、少しだけ持ちこたえてくれ……！」

巨獣と踊る紅い機体に背を向け、彼らはその場を離脱した。

エドガーは今グウエールを操っているのがエルだとは知らない。そしてエルがどのような状況にあるかも知らない。

グウエールの中では正面幻像投影機に映る、迫り来る巨体を睨み据えながらエルは唸っていた。

「これがベヘモス。これが魔獣。これが戦闘。これが……幻晶騎士での！戦！闘！！」

その顔には凶暴なまでの笑顔が花開いている。

隙を突いての奇襲は望外の成果を得た。

しかし、手負いとなつた巨獣は更なる殺意に血塗られながら迫り来る。

山としか形容できない威容が、景色をゆがめそうなほどの殺意が、致命の威力を以つて迫り来る。

熟練の騎士でも恐怖を拭えないだらうその光景に対しても、エルが感じているのは狂喜であり狂気だ。

ロボットに乗つて巨大な敵と戦う。

メカラタクにしてそれを夢想しないものが居るだらうか。それを望まぬものが居るだらうか。

実際にそれを前にして萎縮する気持ちなど彼の中には微塵もなく、身の内を歡喜が逸り立てる。

それ故に彼が命じるのは唯一つ。

「前進！！」

Go ahead

僅かに身を沈ませたグウエールが、爆発しそうな勢いで大地を蹴立て走り出す。

ベヘモスへと向けて。

瞬く間に両者の距離が詰まる。

互いの相対速度に一瞬で過ぎる時間の中、突如グウエールの姿がベヘモスの視界から消えた。

片目を失つたベヘモスはそれに気付く事が出来ず、そのままグウエルがいた場所を粉碎する。

あろうことがグウエールは衝突の直前にジャンプし、剣山のように刺々しいベヘモスの甲羅を蹴りたてて飛び越えていた。

軽やかに空中で宙返りしながらエルは素早く思考を走らせる。

「（全身ほぼ隙間無く甲殻。よほど助走がないと斬るだけ無駄。魔法も撃つだけ無駄。）

ならば巨大兵器破壊の心得・その壱ッ！…）」

着地の衝撃を膝で殺し、グウエールが予備の剣を引き抜く。

「（多脚式ならば狙うのはまずは脚、そして関節！…）」

軽く助走すると、恐るべき精密さで以つて後ろ足の膝の甲殻の僅かな隙間へと剣を突き立てる。

剣は確かに肉へと突き立つたが、その手応えは予想以上に硬かつた。それを悟つたエルは剣を抜き、即座にグウエールを下がらせる。

「（ほとんび刺さつとらん！ 中身まで硬いんかい！）」

エルとしても予想外だったが、ベヘモスの“フィジカルベース身体強化”は内部組織すら恐るべき耐久性に引き上げていた。

この重量を支えるには四肢全てを強化するしかないので、当然といえばそうなのだが、戦う側にとつては悪夢というほか無い。

突然ろ足に加えられたダメージに、ベヘモスが更に猛り狂いながら振り返る。

再びベヘモスの視界から外れるべく走りながら、エルは先ほどの攻撃を思い出す。

確かに一撃で関節を破壊することは出来なかつたが、甲殻へ攻撃するよりは手応えを感じられた。

クスッ、とそこだけは何故か可愛らしく、嬉しそうにエルは笑う。

「持久戦になりそ�ですね……まあ、それはそれで構いません。嫌いじゃありませんから」

激情に猛る巨獣を前にしながらも、軽やかに、そして楽しそうにグウエールが駆け出した。

#119 駆け抜けてみよう（後書き）

11 / 2 / 27 表現微修正。

彼は意識を取り戻す。

視界に入るのは薄暗い空間

ほんやくとしていた意識がハリ、汗に溼るはれで
勢をとつていた全身を痛みが襲う。

呻き、狭い空間でなんとか体勢を立て直そうとすると、目の前の壁に押し当たられるような独特の圧力が襲ってきた。

ナイトウハナ
箱歌一は、おまえがおのの感覚

ただし今のは彼の記憶にあるそれよりも随分と強烈だったが。

なうは、ここに幻晶騎士の操縦席と言ひ事になる。

そこまで考えて彼
デイートロヒは記憶にある最後の光景を思い
出す。

そう、小柄な新入生が目の前に現れて、そして彼は慌てて無理矢理に体勢を立て直し、座席の後ろから首を持ち上げるが、その時に彼の目に入つたものは幻像投影機を埋め尽くさんばかりに迫り来る陸皇亀の姿だつた。

突如として座席の後部から響く絶叫に、さすがのエルも驚いて操縦を誤る。

「ま ずいつ！ とつ！」

崩れかけた体勢を無理矢理立て直し、あわやという所で突進してきただべへモスの左側に滑り込むように飛び退いた。

距離を開け、再びべへモスが振り向くまで落ち着きながら、エルはチラリと後ろを見やつた。

「えー、おはよう御座います先輩。只今死地です。できればお静かに願いますね」「

穏やかな口調とは裏腹の内容に、ディートロヒは開いた口が塞がらない。

言われた内容もさうだが、彼の思考は逃げ出したはずの自分が再びこの場所にいることへの疑問で埋め尽くされていた。

「お、お前！ なんて事を！ 正気なのか！？ いや、そもそも何故戦っている！？」

彼はその後も矢継ぎ早に質問をしようとすると、再び走り出したところで口を閉じざるを得なくなつた。

ホロモニターに映るべへモスの凶相。

逃げる前よりも確実に凶悪な気配を撒き散らし、邪魔物を払う等といふものではない本物の殺意を滾らせながら巨獣が暴れていた。

本来の騎操士である彼も体験した事のない速度でグウエルが走り、間一髪の間合いで襲い来る魔獣の攻撃を避けてゆく。

普通なら幾たび死んだかもわからないその光景に、彼はいつそ恥も

外聞も捨てて泣き出したかつた。

しかし彼は必死に声を押し殺して歯を食いしばり、今にも白目を剥きそうな壮絶な表情で耐えていた。

なぜなら彼が余計な事をして、エルが操縦を誤ればすぐさま本当に死にかねないからだ。

「（こ）れは……なんだ!? 私一人逃げた罰なのか?」

今この場所にいるのはグウエルだけだ。皮肉にも彼が逃げ出した状況とはほぼ真逆である。

そして機体を操るエルが戦い続ける以上、再び逃げることはかなわない。

「（逃れられない定め……私を連れて、一体どうするつもりなんだ?）の戦いを、最後まで見届けろと言つのか!?

仲間を見捨てた、

この私に!—」

捨てるに困ったから、などと言つ真実は流石に彼の想像の埒外だった。

彼の心情になどまるで頓着せず、巨人と巨獣の戦闘は続く。
ベヘモスの強靭な脅力による一撃は大地を砕き、破壊的な竜巻の吐息は木々を薙ぎ倒し、吹き飛ばす。

その全てが致命の威力を持つというのに、グウエルは……そして今それを動かしているであろう小柄な少年は、楽しげにすらしながら攻撃を掻い潜り、巨獣の四肢を狙い反撃まで行っている。

ディートリヒは目が覚めた当初こそ恐怖心に冷静さを全く失っていたが、その状況が続けばいずれ違う心境に至る。

信じがたいことに、この少年が操るグウエルは防戦が主体だが巨獣に抗して見せていく。

グウエールの騎操士だった彼だからこそわかる。

この機体はそれほど性能の高い機体ではない。ライヒアワの実習機は元々どれも2線級の代物なのだ。

他の高等部の幻晶騎士がどれも敵し得なかつたことからもそれは明白である。

何か違いがあるとすれば、当然、この騎操士が原因だろう。彼も見知つてはいる、時たま騎操士学科で見かける小柄な新入生。こんな幼い少年がこれだけの操縦技術を持つてはいるなど、普段であれば到底信じられないだろう。

しかし現実に巨獸を相手に一歩も引かない奮戦を見せてはいる。

「（私が……生き残るには、このままこいつに戦つてもひつしかない……！…）」

一時は絶望に沈みかけた、ディートリヒだが、現状に一縷の希望を見出していた。

ディートリヒの目には危なげなく戦つているように見えるグウエールとエルだが、実を言うとそこまで余裕があるわけではない。

2つの大きな問題が徐々に状況を圧迫し始めていた。

1つは、グウエールの魔力貯蓄量の問題だ。

通常、幻晶騎士が全力で戦闘し続けられるのは長くて1時間程度である。

それ以上は魔力の消費量に供給量が追いつかず、十分な能力を発揮できなくなつてゆく。

グウエールが戦闘を開始してから、既に2時間が経つ。

通常の倍にも及ぶ時間を、しかも高速機動を駆使しながら未だに戦い続けているのだ。

それは偏にシステムを掌握したエルの緻密な制御の賜物だつた。
魔法術式の最適化による必要魔力の軽減、動作に必要な結晶筋肉^{クリスタルティッシュ}を限定して駆動することによる消費の節減。

さらに彼は常にグウエールを動かせているわけではなく、動きの中に細かく“息継ぎ”を入れていた。

ベヘモスの視界からそれている間、更にはほんの僅かな滞空時間まで利用して魔力貯蓄量を回復させている。

彼は持久戦を決意してからは、一見激しく動きながらも裏ではリソースを極限まで節約した戦闘を行っていた。

しかしそれも完全と言つわけではなく、魔力貯蓄量は最大時の半分を割り込みつつある。

このペースが続けば、戦闘可能な時間は多く見積もつても後2時間は無いだろう。

2つ目の問題が、武器の損耗だ。

2時間に渡りベヘモスへ攻撃を加えた結果、グウエールの剣は刃こそれでガタガタになり、只でさえ通じにくかつた攻撃は最早ほぼ通じなくなってきた。

武器であればまだ魔導兵装^{シルエットアームズ}があるが、グウエールが装備する風の刃^{カマサ}は一点集中の攻撃には向いていないため、この状況では有効とは言えなかつた。

一度はエル自身が戦術級魔力を構成しての使用も考えたが、さすがの彼も幻晶騎士1機を制御しながら魔法術式……しかも戦術級のそれを構成するのは負担が大きく、断念していた。

彼の戦意は全く衰えていない。しかし、攻撃手段の不足ばかりは如何ともし難かつた。

「（んなことになるなら、ハリネズミみたいに剣持つとて欲しかつたな）」

苦々しく思いながらも、グウヘルは回避を中心させざるを得ない。

反撃の頻度が減っている事に、ディートリヒも気付いていた。

単純に生存を重視するなら回避を中心にするのは悪いことではないが、それでは持久力の差で負ける。

いずれこの場を離脱することを考えれば、脚を攻撃し巨獣の機動力を殺いでおく事が必要になる。

しかも、エルの操縦ならば反撃も十分に可能なのだ。
にも関わらず、先ほどから何度も十分なチャンスがあつたが攻撃していられない。

「（何故だ、何故反撃しない！）このまま逃げてばかりでは追い詰められる一方だぞ！」

開き直ったディートリヒは、自身のことは棚に上げて憤っていた。
焦れた彼はついに十分に回避した隙を見計らい、エルへと質問を始める。

「おい、君、何故反撃していないのかね！？」

それまで静かだったディートリヒの突然の質問に少し驚きながらもエルは現状を説明する。

「べヘモスが硬過ぎて、剣がボロボロなのですよ。既に攻撃が通りません」

ホロモニターの隅に映る剣は確かに刃毀れが激しく、完全に鈍ら化していた。

「た、確か予備の剣があるはずだ！ そちらを……」

「最初に一本折れまして。これが予備の剣ですよ」

ぐぬう、トライートリビが唸る。

「（なんとか、なんとか武器を探さねば……… ジリまできてやら
れるなど、冗談ではない！…）」

彼はホロモニターに映る光景を必死に探し始めた。

エルも周囲を調べてはいるが、ベヘモスの攻撃を回避しなければなら
ないため優先順位は下がる。

それゆえにティートリビの方が先にそれに気がついた。

それを発見した瞬間、状況も忘れて彼は叫ぶ。

「そこ倒れている、幻晶騎士！ あれの武器拾つんだ！…」

エルが一瞬だけ指差された方向へ視線を送れば、そこには先に倒れ
た高等部の幻晶騎士があった。

即座にティートリビの意図を把握したエルは、ベヘモスの攻撃をか
わしきまぐわ埃尔を加速させる。

地面を擦るかのように姿勢を低くし、最高速での疾走。

そのまま削り取るように地に倒れた機体から剣を抜く。

高等部の騎操士達は主に魔導兵装で攻撃を行っていたため、剣は殆
ど消耗していない。

「ありがとうござります先輩。こればかりは、困っていましたから
ね

「れ、礼などいい！ わざと奴の脚をしとめるんだ！」

エルはすぐさまベヘモスへ向き直り、改めてその状態を観察する。幾度も数え切れないほど斬り付けられたベヘモスの脚は、何箇所かは血を流しそのダメージが決して軽くないことを示していた。

「（魔力の残量は50%を割つてゐる。脚の一本でも潰してからやないと逃げるにしてもきつそうやな）」

新たな剣を構え、グウエールの反撃が再開される。

巨躯を誇るベヘモスはどうしても細かな動きを苦手としている。速度と精密さを武器とする今のグウエールとは、そもそもの相性が最悪だ。

無限とも思えるスタミナに支えられ、ひたすらに攻撃を繰り返すがそのどれもが当たらない。

逆にグウエールが攻撃を繰り返すうち、ベヘモスの脚の傷は無視できないレベルになりつつある。

塵も積もれば山となる。

片目と四肢から血を流し、さしものベヘモスもその動きが鈍り始めていた。

そして。

再び、それに先に気付いたのはティートリヒだった。

後ろから聞こえた驚愕の叫びを聞き、エルも素早く周囲を見回す。そこにいたのは幻晶騎士。

チラリと見ただけでも見間違えようのない、それはフレメヴィーラ王国における幻晶騎士の代名詞、“カルダトア”。

それがグウエールとベヘモスを包囲するように展開していたのだ。彼らはその機種と、それらの間にはためく旗を確認し、即座にその正体を悟る。

「カルダトアだと！？」あ、ああ……あの旗は！　ヤントウネン守護騎士団！！

護騎士団！

よかつた！
助けだ、ついに助けがきたあああ！！！！！！！」

「（こ）で現れるなんか……予想よりも早い、先になんか情報得てたんか？」

エルは素早くこの後の行動を思考する。

グウエールは確かにまだ戦えるが、魔力貯蓄量は3割を割り込み、余裕に乏しいのも事実だ。

余裕に乏しいのも事実だ

に騎士団に任せて下がるべきだ。

ケウエール一機では不足して いた火力も、こ れだけの戦力が有るなら十分な物があるだろ う。

未だ執拗に迫るベヘモスをいなし、わざと騎士団に背を向けるよう
に誘導する。

団の陣へと駆け出した。

導兵装を構え始める。

魔獸にはいまだ憎き紅いヒトガタしか見えず。ついに決戦の舞台へと誘い込まれるのであつた。

舗装された東フレメヴィーラ街道の上ではなく、街道沿いの森の中を数騎の騎馬が駆けてゆく。

この騎馬はヤントゥネン守護騎士団の斥候部隊だ。

本隊に先駆けてクロケの森を偵察し、目標である陸皇亀ベヘモスを確認することが目的だった。

街道からそれで暫く進むと、一層木々の密度が上がる。

クロケの森と呼ばれる場所は馬車ならば街道から半日ほどだが、単体の騎馬ならば更に短い。

学生達との遭遇時よりベヘモスの位置がさらに街道よりになつていた為、斥候部隊はさほど時をかけずに本隊へと帰つて来た。

「そりが、もはや田と鼻の先と言つてもいいが……街道まで来ないのはありがたいな」

斥候からの報告を聞き、ヤントゥネン守護騎士団長であるフイリップ・ハルハーゲンは唸る。

ベヘモスの進攻具合によつては街道上の戦闘も覚悟をしていたが、その心配は無さそうだ。

そして斥候からもう一つの報告を聞き、微かに渋い表情になる。

「3機を保護、まだ1機が戦闘中か……」

グウエールの乱入によりその場を離脱した高等部の幻晶騎士シルエットナイアは、街道まで出たところで騎士団に保護されていた。

うち2機は疲労、損傷とも激しく、後方で修繕を受けている。

残る1機……アールカンバーは比較的損傷が軽かつた為、魔力貯蓄マナ・パ量を回復させた後戦列に加わる事になっている。

そしてまだ戦っている機体とは、グウ エールだ。

斥候部隊が見たそれは、並の幻晶騎士をぶつちぎる勢いで戦闘していたのだが、彼らはそれについては云々あぐね、結果として位置と戦闘の事実だけを報告していた。

報告を元に、フィリップは騎士団へ作戦を伝達する。

中隊単位（9機）に分かれて目標^{ベヘモス}を半円状に包囲。

実際に戦闘を行つた生徒たちから得た情報により、巨獣に対する接

近戦は危険と判断。^{シリエットアームズ}

魔導兵装の波状攻撃を中心とした遠距離攻撃により、可能な限り打撃を与えることになる。

ベヘモス側からも突撃や竜巻^{フレス}の吐息による反撃が予想されるが、彼らも元より無傷で倒せるなどとは考えていない。

最悪、狙われた隊を囮として魔獣を足止めし、その間に撃破する

文字通り決死の覚悟をもつて騎士団は森へと進んだ。

巨獣の咆哮が木々を震わせる。

騎士団がそれを包囲にかかる間も、巨獣はその場でぐるぐるとたうつように暴れておりほとんど移動していなかつた。

予想外に包囲が簡単に完了したことに彼らは若干の訝しさを感じるが、その原因がはつきりと確認できるに至り、一様に絶句する。

信じられないほどの速度で走る紅い幻晶騎士。

片目から血を噴き、激怒の咆哮を上げながらそれを追う巨獣。

ただの一撃で幻晶騎士を碎きうる巨獣の攻撃を、紅い機体は速度でもって翻弄する。

騎士団随一の腕前である騎士団長であつてもあれほどの動きができるかどうか。

彼らの間で思わず感嘆の声が漏れた。

巨獣がその場から動かなかつたのは、ひたすら紅い機体を追つていたためと理解する。

目の前の敵に集中するあまり、巨獣は周囲の状況に気付いてすらいないようだ。

俄かに、紅い機体が騎士団の存在に気付いたように立ち止まつた。次の瞬間には走り出し、ベヘモスを騎士団に背を向けるように誘導すると、そのまま脇を駆け抜け騎士団の方へと向かつてくる。

即座に意図を理解したフィリップが全軍へと指示を出した。

「総員、炎の槍構え！」
カルバリン

高々と剣を掲げたフィリップの号令を受け、カルダトアが一斉に魔導兵装・カルバリンを構える。

紅い機体が凄まじい速度で走り、騎士団の包囲の間を駆け抜けて行つた。

入れ替わるようにしてフィリップが剣を振り下ろす。

「第一列、法撃開始！！」

ベヘモスをめがけ、一斉に魔導兵装が火を噴く。

中隊はそれぞれ3機ずつ3列の形態をとつていて、同時に攻撃するのはそれぞれ1列の3機ずつ。

次に2列目の3機が撃ち、そして更に続いて3列目の3機が撃つ。交互に攻撃することにより幻晶騎士の魔力貯蓄量の消費を抑えながらも、間断なく炎の槍による攻撃を可能としていた。

紅い機体を追いかけることしか眼中になかつたベヘモスを、突如と
グエール

して無数の炎の槍が襲つた。

轟音と共に炎の槍が次々にベヘモスに突き刺さる。

戦術級魔イバード・スペル法による炎の槍が炸裂して火柱を上げ、いくらも経たずに

ベヘモスの巨躯を炎が包む。

それはまるでバルゲリー砦の光景の再現。

しかしかつての数倍の規模で炎は燃え盛り、森の一角を紅蓮に染め上げた。

巨獣の影は完全に炎に飲まれ、その姿は見えなくなつてゐる。

それでも騎士団は攻め手を緩める事無く、炎の槍を撃ち込み続けた。

「は！ うはははは！！ どうだ！ どうだ魔獣め！！

これが我らが守護騎士団の力だ！！ はははははははは－－－！」

騎士団の間を抜けたグウエールは攻撃が始まると同時に立ち止まり、その様子を見ていた。

隊の後ろに陣取つた後は機体を休め、魔力貯蓄量を回復させている。シートの後ろで笑い狂うティートリヒに顔を顰めつつも、エルは油断なく目の前の地獄を観察していた。

いまだ撃ち続けられる炎の槍。全てを焼き尽くせんと炎は更に規模を増してゆく。

これだけの攻撃だ。如何に頑丈さが売りのベヘモスといえど、決して無傷では終わらないだろう。

「（でもこれで終わるほど、安くないんやろなあ）」

エルの思考が契機になつた、などと言つことはないが俄かに炎に満ちた空間に変化が発生する。

それまでは轟と燃え盛るばかりだつた炎が渦を巻くような動きを見せる。

渦を巻いているのは炎だけではない。

むしろ周囲の大気が渦巻くように荒れ狂い始め、炎はそれに巻き込まれているのだ。

それはすぐに炎の竜巻とも言える状態になる。

一拍の後、それは攻撃を続ける騎士団へと向けて放たれた。

フレス

考えるまでもない、ベヘモスの竜巻の吐息。

意図したわけではないだろうが、炎を巻き込みより凶悪になつたそれが騎士団を襲つた。

「なつ、何だ!? あれは!—」

騎士団はある程度距離をとつて法撃を行つていたため、竜巻の吐息も完全な致命の威力は持つていなかつた。

のたうつ炎蛇が騎士団を舐めてゆき、元は彼ら自身が放つた炎を盛大に周囲へと撒き散らす。

フレス

竜巻の吐息の存在は把握していたが、まさかあの炎の中から放たれるとは思つておらず、彼らは動搖し大きく体勢を崩していった。

一角が崩れた分、炎の槍による攻撃が緩む。

その瞬間に残る炎を弾き飛ばしながらベヘモスの巨体が飛び出していく。

鉄をも溶かすような獄炎の坩堝にあつた甲殻は所々が赤熱し、少な
くないダメージが見て取れる。

グウエールによりつけられた四肢の傷は炎を浴びたことにより更に
焼け爛れ、四肢へのダメージは相当なものになつてゐるはずだ。
実際にベヘモスの動きは最初に比べ明らかに勢いが落ちていたが、
それでもさすがは耐久力ならば並ぶ物なき魔獸である。

その突撃は体勢を立て直す途中の騎士団を蹂躪するのに十分な力を持つていた。

隊を組んでいるがゆえに、騎士団の動きが鈍いことも災いした。

中隊のど真ん中にベヘモスの巨躯が突き刺さる。

進路上の機体は跳ね飛ばされ、倒れた機体は踏み潰され鉄屑へと変わつてゆく。

何機か迎撃を試みた機体も居た。高熱で脆くなつた甲殻を剣が削るが、それでも内部に届く前に尾に薙ぎ払われ、無残にも粉砕されてゆく。

如何にダメージがあるうつと近距離での戦闘能力には絶望的な差がある。

一個中隊が見る間に壊滅に追い込まれていった。

突撃の途中にも加えられていた法撃は、さすがに味方部隊との混戦となつた事により徐々に散発的な物になつていた。

「2番、4番、8番隊！ 鎧用意！」

残る中隊もその様子を指をくわえて見てゐるだけではない。もとより彼らは被害は覚悟の上で此処にいるのだ。

フイリップの号令が戦場に轟き、動きの止まつたベヘモスへと彼らの切り札が突撃を開始する。

ベヘモスを左右から挟みこむように、数機の幻晶騎士が大型の武装を抱えて走る。

それは4機もの幻晶騎士を必要とする対大型魔獣用改造破城鎧詰まる所、至極単純な巨大な杭だ。

巨大な金属の塊を杭の形状に成型しただけの代物。

しかしその名が示す通り、幻晶騎士4機でもつて打ち付けられるそれは、堅牢な城壁すら打ち碎く破壊的な威力を秘めている。まさに要塞の異名を持つ魔獣への切り札として用意された武器だが、実は武器としてはかなりの欠陥品である。

当然のことながら破城鎧は重い。この武器は重量を破壊力に変換す

る類のものだからだ。

そのため運用には幻晶騎士が4機は必要になり、巨大さもあり取り回しは劣悪極まりない。

原理が単純なだけに、威力を高める為にもある程度の速度まで加速して叩きつける事が望ましいが、走りながら動く目標を狙うなどと言つ芸当は到底望めるものではない。

幻晶騎士にも劣らぬほどの速度で移動する魔獣に対して命中させるためには、何よりも相手を足止めする必要があるのだ。

さらに突撃という攻撃の方法上、至近距離での危険性は非常に高い。特にベヘモスは大半の攻撃が幻晶騎士にとつて致命的である。下手な使い方をしてはただの特攻に成り果ててしまう。

これらを併せて、十分な効果を発揮しなかつた場合は反撃で倒れる危険が高く、その場を直ぐに離脱しなければならない。

つまりかなりの場合において使い捨てにされる。

当てるは難しく、機会も少ないと極めて使いどころが限定される武器だが、ベヘモスの防御を貫くだけの威力を持つ武器はそうはない。味方の犠牲の上にでもこの攻撃は成功させる必要があった。

事前に全ての騎士団員に破城槌の問題点を通達してある。

それは今ベヘモスと交戦中の中隊も例外ではなく。

彼らは壊滅を目前にしながら一歩も引かず、むしろベヘモスへと喰らい付くようにしてその動きを止めていた。

破城槌を抱えて走る機体からもその光景は見えている。

その操縦席では操縦桿を握る騎操士の手が軋みを上げ、脚が鎧を蹴り飛ばしている。

犠牲は覚悟の上とは言え、仲間を蹂躪する魔獣への怒りが収まるわけではない。

彼らの犠牲に応えるために、雄叫びを上げながら破城槌部隊は走る。

1本目の破城槌がベヘモスへ辿り着く。

そもそも細かな狙いの効く代物ではない。最も巨大な部位である横つ腹めがけて、破城槌を叩き込む。

4機もの幻晶騎士を必要とする重量が生み出す破壊力は凄まじかつた。

火炎に炙られ甲殻の強度が落ちていたとは言え、ベヘモスの甲殻をあっさりと貫き腹部に突き刺さる。

一瞬その巨体が揺れたかのようにベヘモスが震え、一拍置いて眼を討たれたときよりさらに苦悶を滲ませた咆哮が響き渡った。天を仰いで上げた咆哮が大地を揺らし、破城槌の突き刺さった腹部からは夥しい血が噴き出す。

それを見た騎士団から歓声が上がる。

使いどころの難しい武器だが、その威力は十分に通じることがわかつた。

破城槌はまだ2本あり、今しも巨獣へと到達しようとしている。巨獣はいまだ苦悶に呻いており、破城槌を避けるどころか気付いたそぶりも無い。

残る2本が狙うのは逆側の腹と頭部。これが直撃すれば如何な要塞とて致命傷だ。

騎士団の大半が勝利を確信し、期待を背負つた破城槌部隊が巨獣を撃ち貫かんと、最後の距離を詰める。

それまで苦悶の声を上げていたベヘモスが突如下を向いた。

騎士団はおろか、エルもその行動の意味がわからず、行動の意味を訝しむ。

ましてや破城槌を抱え走る騎士団員がそれを悟れる訳は無く^{ブレス}。

そこでベヘモスは、あらう事か下を向いて全力を込めた竜巻の吐息を放つた。

極至近距離の地面へと放たれた暴風は荒れ狂うままに大地を抉り、

狭領域内で圧縮された大気は岩石を撒き散らしながら爆発と化す。

命中を目前にした破城槌部隊にそれを避ける暇などない。

頭部を狙っていた部隊は岩石に打ち据えられ、爆発に巻き込まれそのまま地面と共に粉砕される。

更に信じられないことに、爆発と竜巻の衝撃の全てを下面で受けたベヘモスが、その勢いを利用して立ち上がった。

離れたところにいた騎士団員が、唖然とした表情でホロモーターに映るその光景を見つめる。

全長50mにも及ぶその巨体が、莫大な重量にも関わらず前足を完全に浮かし、起き上がりしている。

あまりの事態に、全員それに対する反応が遅れた。

「！！ しまった！！ 逃げてくれ！！」

フィリップが叫ぶまでもなく、腹部を狙っていた部隊は突然の事態に混乱しながらも回避を試みていた。

しかし彼らは破城槌という超重量の武器を持ち、全力で走っていたのである。

その一瞬での急な回避など望むべくも無かつた。

そこへ重力に従つたベヘモスの巨体が、落下してゆく。

魔獣の巨大な重量が生み出した破壊力は、破城槌とは比較にならないほど莫大だった。

それは周囲に小規模な地震を引き起こし、その身が叩き付けられた地面は碎け抉れ、周囲に散弾のように岩石を撒き散らす。逃げられなかつた破城鎌部隊はひとたまりもなかつた。

金属の塊であつたはずの破城槌すらひしゃげ、それを持っていたはずの幻晶騎士は既に原形を留めていない。

余りに壮絶なその攻撃に、放つたベヘモスも無傷とはいかななかつた。

破城鎧に貫かれた腹部から流れる血は勢いを増し、全身あちこちの甲殻に罅ひびが入っている。

外からは解らないが、いくつかの内臓器官が強化を突き抜けたダメージにより損傷を受けている。

ベヘモスとてはや相当に追い込まれているのである。

しかし、騎士団が被つた被害はさらに深刻だ。

最初に襲われた中隊とあわせ、騎士団は凡そ2割の戦力が完全破壊、飛来した岩石により1割が中破。

何より切り札である破城鎧を失い、騎士団の打撃力は大きく落ちている。

その上必殺の攻撃を無力化された衝撃は、むしろ彼らの心に打撃を与えていた。

騎士団を最初に倍する緊張感が包む。

単純にその力のみならず、巨獣の存在と言ひつ圧力が、彼らの心を蝕んでゆく。

「…………」

その光景を見ていたグウェールの中では、ディートリヒが声もなく震えていた。

守護騎士団の一部を犠牲にした必殺の一撃すら、その力の前に粉砕された。

果たしてこの魔獸を倒すことなど可能なのだろうか。

実際にはベヘモスのダメージも決して浅くはないのだが、信じていた力が通用しなかつたと言う事実の前に動搖する彼に、そこまでの判断は不可能だ。

震えるディートリヒを正気に戻したのは、前の座席から聞こえてきた咳きだつた。

「……許せませんね」

ディートリヒにはエルの後姿しか見えない。しかし、エルから立ち上る尋常ならざる気配だけは理解できた。

「僕の目の前で、ロボットを壊すなんて」

「えつ」

「ロボットを壊していいのは……ロボットだけなのですよ……？」

「ええつ！？」

ディートリヒには全く理解できない理屈を呴きながら、エルはグウエールを立ち上がらせる。

その表情は薄く微笑んでいるが、並々ならぬ意思を込められた蒼い瞳の輝きが、彼の雰囲気を修羅のそれへと変えている。

エルは素早くグウエールの状態を確認する。

魔力貯蓄量の残量は5割強、武器はまだ使用可能、損傷は無いに等しい。

一人の悲鳴を後に引き、グウエール紅い幻晶騎士は再び戦場へと走り出す。

ベヘモスはまだ動く。

もはや満身創痍といつてもいいダメージを負いながら、まだ行動可能なその耐久力は驚嘆に値した。

冷静に見ればそれも最後の足掻きにも近いものだと解ったかもしれない。

しかしだすでに精神的に圧倒されつつあった騎士団は、ベヘモスがまだ動くと言う事実の前に積極性を失っていた。

炎の槍による法撃が応戦を始めるが、まとまりを欠いた攻撃は十分な効果を發揮しない。

カルバリン

騎士団の包囲自体がベヘモスの動きに圧され、崩れかけていた。

馬鹿長であるハーリーが盛んに櫻を飛ばしているか 一度下がつた士気は容易には上がらない。

歪な包围を紅い風が突き抜けた。

金属地そのままの色をしたカルタニアの中にあって、一際目を引く
紅い幻晶騎士。

誰もが止める暇もなく、それは一直線にベヘモスへと向かって疾走する。

グウエール操るエルは騎士団の様子など頓着してはいない。

だつた。

騎士団を後方に突き放し、グウエールはベヘモスへと迫る。

び咆哮を上げた。

近寄るに一れ玉川はへへ丑次の様子をはっきりと確認していた。

最も巨大な破壊跡は腹部の破城槌による攻撃部分だが、エルはあって轟つて二日殴を攻撃する。

る。 紅い機体が疾風と化し、速度を乗せた斬撃がベヘモスへ繰り出され

剣の軌跡は正確に鱗の一つを捉え、硬質な音と火花を残して甲殻の破片が飛び散った。

「（速度乗せたら斬撃も通じるんか）」

両足で滑るように勢いを殺したグウエールは反転し、そのまま再びベヘモスへと踊りかかる。

脚だけでなく全身のあちこちに攻撃は通用する。

回避を中心とした動きから攻撃へ。此処に来て攻守が逆転を始めていた。

その光景は、魔獣に気圧されていた騎士団員に衝撃を与えた。彼らからすれば、グウエールはライヒアラ騎操士学園の生徒が乗つている機体だ。

騎士団員よりも若いはずの人間が、恐るべき魔獣に対して未だ戦意が衰えることなく立ち向かい、しかも果敢にそれを攻め立てている。一見蛮勇とも取れるその行動。

しかしそれ故に、その姿は幾万の言葉よりも遙かに雄弁に騎士団員を説得していた。

「各隊、包囲を再構成！ 列を立て直せ！ 攻撃を再開する！…」

騎士団員は実際に目にした巨獣の力に押されていた自分を恥じ、一層奮起した。

次はベヘモスを中心とした円形包囲。

各中隊はそれぞれに移動し、紅い機体を巻き込まないようにながらべヘモスの足止めとダメージを意図して法撃を再開する。

紅い騎士の剣が魔獣の甲殻を削り、炎の槍の爆発がその脚を縫い付ける。

巨獣はその攻撃力を封じられ、逆に巨体は攻撃の的になる。

一挙に形勢は傾き、次はベヘモスが追い詰められてゆく。

それを見た騎士団の士氣は上がり、グウエールはもとより縦横無尽

に駆け回っている。

もはや魔獸に抗する術は無いと思われた。
しかし、誰もが想像だにしないところで、唐突に結末の頁が紐解かれる。

突如、エルはガクッと沈み込むような感覚を覚えた。
回避行動を取つたグウエールを反転させようと、両足で踏ん張つた
ところで片足の力が抜け、大きく体勢を崩してしまつたのだ。
殺しきれなかつた勢いに振り回され、グウエールが地面を転がる。
それまでは無傷だつたグウエールの紅い装甲が歪み、一部が宙を舞う。

「なんつ！？ ですつ！？ かつ！？」

転がりながら地面を叩くようにして無理やり姿勢を立て直す。
膝立ちのような姿勢を取りグウエールがなんとか安定を取り戻した。

「（ベヘモスから攻撃はくらつてない！！ 何故、どうからダメージきたんやー！）」

予想外の事態に、エルは素早く機体状況を走査する。
地面を転がつたことにより幾つかの装甲が破損したものの、それだけでは致命傷には程遠い。
しかし脚部の反応が鈍い。

関節の各部が軋みをあげ、装甲の隙間からは^{クリスタルティシュー}結晶筋肉の欠片が毀れる。

それを見たエルが事態を悟る。
攻撃を受けたわけではない。

既存の操縦方法よりも自由度が高く、精密な制御が可能な直接制御だが、反面エルが要求する高度な機動戦法の負荷にグウエールの機体が耐え切れなかつたのだ。

その上通常の幻晶騎士の想定を大きく越えた長時間の戦闘によりダメージは過剰に蓄積し、最も負荷の大きな脚部が、此処に来てついに限界を超えて自壊を起こしていた。

生物であれば痛覚と言う形でその異常を事前に悟れたのかも知れない。

しかし機械である幻晶騎士に異常を訴える機能はなく、限界を超えて破壊を起こすまでそれを知る術はなかつた。

エルの額を汗が流れ落ちる。

それまでのエルとグウエールの優位を支えてきたのは取りも直さず機動性に因るものだ。

脚が自壊し、機動性が死んだ今、もはや戦闘の継続は不可能である。エルに出来ることは機体を捨て、脱出する事だけだった。

事態に悩む時間すら残されていない。

ベヘモスが、これまでと同様に、憎き紅い機体へと、既に突撃を開始していた。

突如膝を突き、動けない紅い機体を助けようと騎士団から撃ち放たれた炎の槍が浴びせられるが、その歩みを止めるには至らない。ベヘモスの残された右目が怒りのために血走り、口からは憤怒の雄叫びが漏れ出でる。

亀裂の走つた甲殻も、流れ続ける血も構わず、魔獣は全てを粉碎すべく突き進む。

その速度は見る影もなく衰えている。

しかし、動けない今のグウエールにとっては死を告げる存在に他ならなかつた。

「（まさかのタイミングやな。脱出せんと……）」

彼の能力ならば機体を捨て、突撃の範囲外へ逃げることは可能だ。

「（そう、俺は……俺だけは）」

彼ならば。だが彼の後ろで恐慌状態の、ディートリヒにはそれは不可能だ。

固定帯を解き、エルはホロモニターに映るベヘモスを睨む。もはや幾ばくの余裕もなく、巨獣の突撃はグーエールを蹂躪するだろ？

その思考は一瞬。

「（！」で見捨てるのも寝覚めが悪い……けど、揃つて生き残るのは並大抵やない」

彼は可能性を模索する。

エルに可能なこと、ディートリヒに可能なこと、グーエールに可能なこと。

「（突破口は、ある。いけるやうか？ チャンスは一度きり、チップは命……。

まあ、口ボと共に死ねるなら、最悪それも、有りか）」

メカラタクも此処に極まつっていた。

「先輩」

エルの言葉は場違いなほど静かだ。

後ろのディートリヒに果たしてその言葉は通じているのか。

彼は目前の絶壁に恐怖し、喘ぐよつて向かをつぶやを続けていた。

「今すぐ操縦を代わってください」

エルの語調は変わらない。

だがそれまでは違う、声にこめられた異様な気迫にディートリヒがびくりと震えた。

その様子を確認もせずエルは銀線神經^{シルバーナーブ}とワインチエスターを引き抜き、ホロモニターにぶつかるように前に出す。

「も、もう無駄だ！　ここで、私が操縦などして何になるって言つん」

「そんなことはどうでもいいです。死にたくなければ今すぐ席に着いてください」

死にたくなければ、の言葉にディートリヒが反応する。

限界の状況に、それでも彼は這い出すよつてシートへと滑り込む。

「や、それでどうするんだ！　なにが出来ると言つんだ！？」

「説明は一度しかしません。まず……」

銀線神經の一部はワインチエスターと共に引き出されているが、何本かは未だに操縦桿に繋がっている。

現時点でも通常制御の操縦は可能なのだ。

ディートリヒが操縦桿に手をかけるのを確認し、エルは自身の魔術^{マギカ・サー・キット}演算領域からグウエールの制御を手放す。

ベヘモスは目前に迫っている。
傷を負い、追い詰められては居るがそれでも尚その巨体の迫力は圧倒的だ。

エルは深く息を吸い、ホロモニターを埋め尽くすそれを見据えながらも集中を開始する。

エル自身が持つ最大の異能、幻晶騎士すら完全に制御しうる莫大な処理能力を最大限に振り絞り、恐るべき速度で極大規模の魔術式^{スクリプト}を構築する。

その規模は戦術級魔法^{オーバード・スペル} 幻晶騎士で使用されるそれと同様か、更に巨大だ。

彼は通常の人間としては大きな魔力^{マナ}を持つている。
しかしそれもあくまでも人間としては、であり戦術級魔法を実行可能なほどの容量はない。

幾ら構築が可能でも彼だけでは戦術級魔法は使えない。
だが魔力ならば、グウエルのそれを利用すればいいのだ。
幻晶騎士だけでは任意の魔法を構築できない。エルだけでは戦術級魔法を使用するには魔力が足りない。

操縦に関する処理を放棄した今、エルはその能力を最大に駆使して活路を開こうとしていた。

「～～～！～～～？～～～！～～～！」

ディートリヒは自身が気付かぬうちに何かを叫んでいた。
エルは只管に演算する。より巨大に、身を守るために、限界まで強力な魔法を。

ベヘモスの顔面が、グウエルの機体を粉碎すべく迫り来る そして

捧げるよう伸ばしたグウエルの両腕から前方に圧縮された空気の弾丸^{エア・バレット}が生成された。

巨大な大気弾丸^{エアバッジ}。しかしそれは発射されない。
エルが狙つたのは衝撃吸收装置だ。

彼自身が高速機動の緩衝材として利用することの多い魔法、大気衝^{エアサス}ション

撃吸収を戦術級規模まで拡大し、実行する。

大気の壁と巨獣が激突する。

元々圧縮された大気は両者の衝突により更に圧迫され、緩和されたとは言え激しい反動がグウエールへ襲い掛かる。

「今だ！ 後ろへ飛べえええーーー！」

エルの叫びに反応し、思考ではなく反射的な行動でディートリヒが
鎧あぶみを蹴り飛ばす。

グウエールの脚部は歩行が困難なほど損壊していたが、それでも僅かに残る無事な結晶筋肉が指令に従い最後の力を振り絞る。大気の壁を押し切り、ベヘモスがその身体に突き刺さる寸前にグウエールが後方に飛んだ。

その時点で脚部の結晶筋肉は完全に断裂したが、それ自体は既に役割を果たしきっている。

「まだだ！！ 耐えろ！ 外装硬化ハードスキン！！！」

エルがグウエールの前面装甲へと、硬化魔法を偏向形成する。ほぼ同時にベヘモスの頭部が叩き付ける様にグウエールへ到達する。大気で減殺され、動きで衝撃を緩和し、硬化魔法で防御しても尚その突撃の威力は殺しきれず、周囲の装甲が弾け飛び接触した部分が歪む。

操縦席ではホロモニターに鱗が入り、目前の光景が歪むのを見てエルが息を呑んでいた。

「（こ）れだけじゃ足りないんか！ーーー！」

死力を振り絞つての抵抗も破られたかと諦めかけるが、しかし最後

の幸運がベヘモスの突進を受け止めきる。

ライヒアラで使用されている実習機は、搭乗者の保護を重視して胴体部の装甲が特に厚いのである。

硬化魔法を併用した前面装甲はその目的どおり、歪みながらも搭乗者を守りきった。

誰もが紅い機体の最期を覚悟したが、グウエールはベヘモスの頭を抱えるようにして五体を残したまま存在していた。

自らの突撃を受けても壊れないそれを見てベヘモスは何を思ったのだろうか。

突撃は続き、グウエールを押すようにしてベヘモスは前進する。そして此処からがエルの攻撃の始まりだつた。

エルは操縦桿からの制御に割り込み、グウエールの機体を一部操作する。

操るのは機体の右腕だけ。それを振り上げ、そのままベヘモスの頭部を殴りつけた。

如何に甲殻が脆くなつているからとて、拳でそれを破壊することは出来ない。

しかしその腕が突き刺さつたのはかつて左眼があつた部分だ。其処には半ばで折れた剣が刺さつている。

エルはそれを掴むと、そのまま後のこととは一切考えずに全身の結晶筋肉、そこに貯蓄された全ての魔力を動員する。

安全装置も全て解除、その時機体に残っていた全ての魔力を使い、自身の持てる演算能力の全てを以つて最大規模の魔術を構築した。

「チェックメイト
王手」

過去、この世界で発現したことのない規模の雷撃が、機体の腕から剣を通りベヘモスの頭部へ直接叩き込まれる。

べへモスとて生物である以上、頭部には脳が存在する。

眼窩で放たれた雷撃は視神経と血液を伝い、その脳髄を直撃した。ベヘモスの頭脳を途轍もない電流が蹂躪し、無慈悲な電子の流れに内部組織が灼かれ、破壊される。

ベヘモス

生命活動の中核たる頭脳を灼かれ、ついに陸皇亀が絶命する。

電流はそのまま神経を焼き、ベヘモスの全身が一瞬痙攣するように出鱈目に動作する。

その動きに頭部に抱きつくような状態だつたグウエールが投げ出され、地面へと叩き付けられる。

魔力貯蓄量が完全に尽きたその機体は、自身の構成を強化することすら出来ず衝撃でそのまま分解し、完全に大破した。

巨獸がゆっくりと地に沈む。

壯絶で、そして呆気ないその幕切れに、誰もが言葉を失っていた。やがて魔獸が再び動くことがないとわかると、徐々に騎士団に歓喜が広がつてゆく。

彼らが勝ち鬨を上げるまでに、さほどの時間は必要なかつた。

「（最後はやばかったなあ。下手したら挽肉んなつて死んどるわこれ）」

大破したグウエールはひどい有様だつた。

四肢がもげたのは当然として、接合強化の途絶により金属内格^{インナースケルトン}が分解、操縦席回りまで半分崩れていった。

無事な装甲は一枚としてなく、紅い色はまちまちにしか残つていなかつた。

操縦席も激しくシゴイクされたのだが、吹っ飛びながらエルが自身

の魔力で周囲に大氣衝撃^{エアサスペンション} 吸収を展開し事なきを得ていた。

反動でディートリヒはシートに押し付けられ圧死寸前だったが、挽

肉になるよつはましとこつものだらう。

殆ど刺し違えるような行動だったとは言え、エルも生き残ったことに安堵していた。

深く息を吐き、直後にその表情が痛恨に曇る。

「（……あああああ……ばらばらだ、グーエールばらばらんなつちまつた……）」

白田を剥いて氣絶するディートリヒを一顧だにすることなく、エルは的のずれた後悔に首を振る。

「（ああでも悲しんでばかりではいられん。

グーエール、ちゃんと俺が修理したるから、待っててくれ！）」

さらにこずれた決意を胸に、エルは半壊した操縦席から出てゆくのだった。

#22 戦いの結果

ミシミシッ パキイツ！

枯れ木を折るような音が断続して周囲に響く。

音の発生源は小山の如き巨大な塊ヘモス……陸皇亀の死骸だ。

死亡し、魔力マナの供給と身体強化魔法の維持が途絶したため、50mを越す巨体が自重に耐え切れず崩壊を起こしていた。

戦闘により多くの罅ひびが刻まれた甲殻が崩れ、内部の骨格が砕けたためにその高さが徐々に低くなる。

特に重量の集中する胴体付近は完全に下面が潰れ砕けていた。

地に沈んだ巨獸を包囲した布陣のまま、騎士団が勝ち鬨を上げている。

槍にも似た魔導兵装シリエットアームズ・カルバリンを高々と掲げ、巨獸に対する勝利を誇る。

犠牲も大きかつた。だが犠牲が出たが故にその勝利を捧げるが如く示していた。

歓声止まぬ騎士団から離れ、3機の幻晶騎士シリエットナイトが歩いていた。

大多数をカルダトアで構成された騎士団の中にはつて、3機とも機種が違うその集団はある種の異彩を放っている。

1機は騎士団の長たるフイリップの専用機“ソルドウオート”。

実用性を最重視したカルダトアに比べ豪奢な外見をしており、さらには外部につけた外套型追加装甲により集団の中でも特に目立つていた。

その脇を行く副団長ゴトフリートが乗るのはカルダトアをベースに

しながら一回りがつしりとした機体、“カルディアリア”。

彼らの後ろを進むもう1機はライヒアラ騎操士学園の実習機である

“アールカンバー”。

全身を純白の装甲に包まれ、無骨でありながら整つた形状はカルダトアとはまた別の機能美とも言えるものを感じさせる。

彼らは地に倒れるベヘモスの横を通り過ぎ、その先にある物体に近づいてゆく。

近づくごとに、紅い塗装を施された金属片が地面に散らばる様子が見えてきた。

そこに散らばっているのは、幻晶騎士・グウェールの残骸だった。

先頭を行くファリップの視界に飛び込んできたのはグウェールの腕だ。

骨格部分が崩壊したそれは、元の形を想像することが困難なほどに破壊されていた。

それを横目に見ながら彼らは無言で先に進む。そして、ついに目的の物へと辿り着いた。

四肢と頭部を失った胴体部分。

装甲はところどころ剥離し、内部の結晶筋肉^{クリスタルティッシュ}は粉碎されている。

胸郭を形成する骨格が崩れ、全体的に形が歪だつた。

さらに正面装甲は歪んでおり、それが受けた衝撃の凄まじさを物語つてている。

「（もしゃと思つたが、この様子では中の騎操士^{ナイトランナ}は……絶望的か……）」

言葉にはしないが、全員の胸中には大差はない。

一縷の望みを抱いてはいたが、原形を留めぬほど衝撃を受けながら

ら、内部の騎操士が無事などとは到底思えなかつた。

フィリップとゴトフリートは、無言で幻像投影機に映るそれを見ている。

ライヒアラ騎操士学園高等部に所属し、ベヘモスの襲撃から後輩を守る為に最後まで立ち向かった機体。

ベヘモスの攻撃に圧倒される騎士団よりも前に立ち、烈火の如く巨獸に立ち向かい、そして相討ちに散った機体。

フィリップは思う。

この機体に乗つっていた騎操士はどんな人物だったのだろうか。ホロモニター
乗つっていたのは学生のはずだ。それならば、彼はどれほど将来有望だつたことだろうか。

巨獸を圧倒する高い技量、他人の為に命を賭して戦う高潔な姿勢、不利を跳ね返す強靭な精神力、どれをとっても騎士として理想的なまでの姿だ。

一言も交わしていない相手ではあるが、巨獸の襲来に果敢に立ち向かい、そして散つた英雄に、彼は静かに黙祷を捧げた。

アールカンバーが、グウエールの傍らに膝をつく。

圧縮空気の噴出音が響き、アールカンバーの正面装甲が開いた。エドガーは装甲の上に立ち、しばし静かに眼下の残骸を見つめていたが、ゆっくりとそれに話し掛け始めた。

「ディー……最早、手遅れだが俺はお前に謝らねばならん。

……俺はあの時、お前が俺たちを見捨てて逃げたと思つた」

それを語るエドガーの静かな口調とは裏腹に、彼の表情は後悔に歪

んでいる。

「一瞬、俺はお前を見損なったんだ。……だが同時に納得もした。あの状況は絶望的だった。ディーならそんなことには付き合わないだろ?」

だが……お前は、戻ってきた

握り締めたエドガーの手が震える。

「そして……お前は……。

すまない、ディートリヒ。

お前が何故これだけの力を隠していたのか、俺には想像もつかん。それでも、お前が命をかけて俺たちを助けて」

ガボオツ!!

独白を遮るように、突然の破裂音と共にグウエールの胸部装甲が高々と宙を舞つた。

そのまま放物線を描いて飛んだそれは、くわんくわんと音を立てて地面を転がる。

3機そろって呆然と吹っ飛ぶ装甲の軌跡を目で追い、そして足元の残骸に視線を戻した。

呆気にとられる彼らの前に、操縦席から小柄な人影がひょっこりと顔を出す。

「やれやれ、正面装甲が歪んで開かないなんて、お陰で外に出るのに苦労しまし……

ええと? 皆様どうなされたので?」

「…………えつ？」

守護騎士団が全軍で出撃し、厳戒態勢にあつたヤントゥネンは、今その城門を大きく開き、彼らの帰還を受け入れていた。

凱旋を飾つた守護騎士団が整然と列をなし、行進する。

騎士団の出撃と共にベヘモス襲来の報が伝えられていた市民は、無事に帰つて来た騎士団へと惜しみない喝采を浴びせていた。まるで戦争に勝利したかのことき熱狂ぶりだが、実際にベヘモスに対する勝利はそれと同等以上の価値がある。

そして列が進み、門をくぐつた物体を見て市民がどよめく。それは、幻晶騎士の胴体よりも巨大な魔獣の首　ベヘモスの頭部だ。

台車に乗せて運ばれるそれは、圧倒的な迫力で直接それが動くところを見ていなくては、魔獣の脅威をまざまざと知らしめた。

一瞬の静寂が観衆の間を走り、直後、それまでに倍する歓喜が爆発した。

市民は口々に巨獣を打ち破つた守護騎士団へ賞賛を浴びせ、彼らの守護たる騎士団への尊敬を深くする。

ヤントゥネンの興奮は頂点に達していた。

騎士団が行進する中央通から少し離れた場所に、町中の熱氣から外れるようにひつそりと喫茶店が存在していた。

市民の大半が大通りに居る状態では店の中は閑古鳥がないでおり、客らしきものは数名の少年少女が居るだけだった。

彼らはライヒアラの生徒だ。

騎士団が街に戻ってきたため、彼らも数日之内にはライヒアラへ戻る手はくなっている。

それまでは街中であれば自由行動を許されていた。

今は大半の生徒は中央通りで市民と共に騎士団の凱旋を祝っている。ここにいるのは喧騒を逃れた一部の生徒。

その中でも今回の事件の関係者を含むエドガー、ステファニア、キッド、アディ、そしてエルだった。

「全く、出鱈田にも限度がある……」

溜息と共にエドガーは手に持つ紅茶を呑る。

彼の言葉はその場に居るエル以外の全員の心境を代弁したものだ。陸皇亀事件でのエルの行動について、軽く説明した直後の言葉だった。

「むしろ巻き込まれたディーに同情したくなってきたぞ……」

魔導演算機のハッキング、幻晶騎士の直接制御による機動戦闘。

それだけでも常識が金切り声を上げて悶死しそうな話だ。

エドガーは頭を抱えてしまい、ステファニアも目を見開いて驚きをあらわにする。

キッドとアディも呆れ気味ではあったが、何かを納得すると顔を見合わせて笑った。

「「ほらやつぱり幻晶騎士奪つてた」」

「二人とも、やつぱりとは何ですか。その通りですけど」

エルは少しムスつとしていたが、双子に睨み返されついと視線を逸らした。

エドガーはこの中でエル以外で唯一実際に幻晶騎士を操縦したこと

のある人物である。

それだけにエルの説明はショッキング極まりなかつたが、実際に彼の記憶にあるグウエールの機動はそれくらいの無茶をしないと実行不可能なものだ。

何度も頭を振り、何とか自分を納得させていた。
そして彼はふとある可能性に思い至る。

「エルネスティ、あの時ティーが逃げなかつたらどうするつもりだつたんだ？」

「どうもしませんよ、あれは半ば勢い任せな行動でしたし。そのまま皆と一緒に馬車で逃げていたでしょうね」

エドガーの表情が苦々しいものになる。

あの戦闘でエルとグウエールの存在が無かつたらどうなつたか。
少なくともここにエドガーはおらず、騎士団が彼つたであろう被害は数倍に跳ね上がつていたであろうことは容易に想像できる。
下手をするとベヘモスを倒せていたかどうかも怪しい。

今回の戦闘の殊勲賞は間違いなく目の前の小柄な少年なのだ。

しかし、それだけの功績がありながらも彼自身の立場が事態を複雑にしていた。

エドガーは一つ溜息をつくと意を決し本題へと入る。

「我々……高等部の生存者は、このあと王都カシカネンにて行われる叙勲式へ出ることになつてゐる」

語る内容に反して、エドガーの心中はどこかすつきりとしなかつた。

「ヤントゥネン守護騎士団からも代表が、恐らくハルハーゲン卿と何名かが出るだろう。

師団級魔獣の討伐ともなれば国中、いや諸外国へ喧伝してもいい

レベルの話だ。

かなり大々的に執り行つらじい

「やうですね、おめでとつぱれこます……といつ割には表情が晴れないようですが？」

「この事件における紅い幻晶騎士の存在は、恐らく伏せられる。

つまり、エルネスティとティーの功績が評価されることはないだろ？」

キッドとアティが睨むようにエドガーへと振り向く。

ステファニアは申し訳なさそうな表情のまま、手元の紅茶へと視線を落としていた。

一人エルだけが全く気にするそぶりも無く平然と頷いていた。

「やはり、ですか。これが騎士団の一員か、正式に高等部の騎操士ならば問題は無かつたのでしょうか？」

「おじおじ、エルがいなけりややばかったんだろ！？」

「どうしてそこで評価されねーなんてことになるんだよ……」

思わず立ち上がったキッドをステファニアが目線だけで抑える。一つ息を吐くと、彼女はゆっくりと説明を始めた。

「落ち着きなさい。

正騎士が活躍したのなら昇進や褒賞が出るわ。高等部の生徒なら正騎士に取り立てることになるでしょう。

……でも、今のエル君を同じように騎士にするわけにはいかない

の

「どうして？ エル君その辺の騎士よりよっぽど強いのに…？」

「騎士になる、と言つことは騎士団に入るということなのよ。

飛びぬけて強いだけなら何とかなるのでしようけど、10歳の子供と一緒に働く騎士は、多分居ないでしょうね。

組織に所属するということは、片方だけがいいと思つていってもま
まならないことなの」

「せめて成人していればやりよつはあつただろつが……。

それに仮にも正騎士たる騎士団を差し置いて10歳の子供が殊勲
賞などと言つてみる、彼らの面子がズタボロになる。

彼らの面子は国の面子だ。誰もそんなことは望むまいよ

エルはくい、と首を傾けながら、微笑を浮かべつつ聞き返した。

「なるほど。それで、先輩達はその説得を頼まれたのですか？」

エドガーとステファニアの表情が僅かに引き攣る。

エルはそれには頓着しないまま言葉を続けた。

「さておき、僕としては実際に幻晶騎士を操縦できたのである程度
満足しましたし。

褒賞関係で下手にこじれるよつは何も無いほつがましです。

勝手に首を突っ込んだのはこちりですしね。ただし

すつと、紅茶を一口飲みながらエルの瞳が細められる。

年下の少年を相手にしているというのに、エドガーもステファニア
も圧されるような感覚を覚えていた。

「この後、勝手に利用されるよつなことは、防いでおきたいですね

ステファニアが力強く頷く。

「そんなことはさせない。セラーティの前においてそれは保障する

わ

「ああ、それについてはハルハーゲン卿にも一言言つておこう

わ

頷くエルに対し、キッドとアディは納得しかねる表情だ。

「いいのかよ、エル?」

「そうよ、そもそもエル君は騎士になつて幻晶騎士に乗るのが夢でしょ?」

「ここで退いてもいいの?」

「今回は言わばイレギュラーです。報酬をたかるつもりはありますよ」

不満たらたらのキッドとアディを宥めつつエルが締めくくつたことにより、エドガーとステファニアはこつそりと安堵の吐息をついた。実際にグウエルはベヘモスとほぼ相打ちになつており、エルが受けた危険に対してなんの褒賞も無いというのは彼らにとつても心苦しい。

反面、騎士団側がエルというイレギュラー要素を扱いかねているのも理解できるため、彼らはせめて命令ではなく直接説得し、エルにも納得してもらおうとこうして説得役を買って出たのだ。

二人ともエルが暴れるとまでは危惧していないが、話の内容が内容である、拗れることを覚悟していただけに予想以上に物分りのいい彼の姿勢はありがたいものだった。

「（いやーあつぶな。今回は突発暴走やつたしなあ、縊られんかつただけありがたい所やな）」

傍から見れば平然と紅茶を含むエルだが、内心ではかなり冷や汗をかいている。

実を言うと今回の決着に悩んでいたのは彼も同様だ。しかも立場的にエルから働きかけることは容易ではない。

そういう意味でも、相手が穏当な手段に出てくれたのはエルにとつ

てこそ僥倖と言えた。

「（実際に動かした上になによりも魔導演算機の制御術式を入手できた訳やから報酬という意味では悪うない。）

今回の件にしても考え方によつちや騎士団への貸しになるやうじ。これ以上下手に突つ込むには話がでかすぎるし、向こうを立てておひや。

後は騎士団とか、現場の人間に多少のコネもつけたら、結果オーライでとこひやう（）」

にこやかな微笑の下で今回の事件の処理を考えつつ、エルはゆっくりと紅茶を飲み干す。

緊迫した話を通り過ぎ、全員の間には落ち着いた空気が流れていた。遠くから響く、パレードの歓声は今だ途切れる事はない。それから暫くは全員でゆっくりと雑談に興じるのだった。

⋮⋮⋮

ゆっくりと、意識が浮上する。

最初に感じたのは疑問。

「（私はどうなったんだ？　あの時……魔獸に……）」

次に感じたのは苦痛。

全身あちこちから鈍い痛みを感じ、その刺激で彼の意識がはつきりとする。

「へへ……ひい……」

呻きながらティートリヒは目を開いた。

目に入るのは木造建築の天井だ。

横を見れば、清潔な白いシーツが視界に飛び込む。

彼は軽く混乱しているものの、何となく状況が理解出来た。

どこかしら病院のような施設に収容されている つまり彼は救助されたのだろう。

「（……と、言つ事は戦闘は終わったのか……）」

記憶に残る巨獣の姿を思い出し、彼は身を震わせる。

アレを放つておいたまま彼が助け出されるのは困難な状況だった。ならば戦闘は何らかの決着を見ており、そして彼がこうして生存している以上、勝利という形であろうと予測できる。

「あら、気が付いたのね」

安全圏に居ることがわかり、彼が呆けた様子で寝転がつてると、横から声をかけられた。

「ここはヤントゥネンの騎士団詰め所よ。あなた、戦闘の終了から一日以上氣を失っていたの」

振り向いたティートリヒが目を見開き、その体が小さく震え始める。かけられた言葉の内容が原因、ではない。

その言葉をかけてきた相手が

「打撲が何箇所があつたけど、そんなに大した事なかつたから安心していいわ。

君、若いんだから怪我の治りも早そつだしね」

頑強そうな体躯を白衣に押し込め、頭はせりぱりと刈り上げ、内股
気味にしなを作りながら、野太い声で女性の口調で喋る 男性だ
つたからだ。

医務室の一角から悲痛極まりない声が響いた。

#23 家に帰り着くまでが

ヤントゥネンから王都カンカネンまで通じる石畳の道、西フレメヴィー^{シルエットナイト}ラ街道の上を馬車と幻晶騎士^{ハニテルリアクタマギウスエンジン}が移動していた。

馬車の群れはライヒアラ騎操士学園騎士学科の生徒達のもので、幻晶騎士はヤントゥネン守護騎士団のものだ。

騎士団の騎士達は王都カンカネンで行われる叙勲式へと出席するため、ライヒアラの生徒の護衛をかねて移動している。

馬車の列の中に1台、屋根の上に人を乗せた車両があつた。日向ぼっこでもするかの様に座り込むその人物は、後ろに連なる馬車を眺めている。

馬車の列の最後尾には回収された幻晶騎士の残骸を詰めた荷車が続いている。

陸^{ベヘモス}皇亀^{ベヘモス}に倒された機体はほぼ例外なく屑鉄と化していたが、最悪でも幻晶騎士の部品でも最も高価な部品を積んだ胴体は回収された。

損傷の程度にもよるが、魔力^{ハニテルリアクタ}転換炉^{マギウスエンジン}と魔導演算機^{マギウスエンジン}が無事ならば本体の再生は比較的容易だ。

最悪、新規の筐体に中枢部だけ入れてしまえばいいのである。

ヤントゥネン守護騎士団の残骸はヤントゥネンへと送られたため、此処にあるのはライヒアラの物である。

馬車の屋根に居る人物 エルは茫漠とした視線を後方に送っていた。

この荷車のどこかにグウ^{ホール}の残骸もあるはずだが、幌を被せられているため場所までは判然としない。

石畳を行く馬車の振動を感じながら、エルはベヘモスとの戦闘の最終場面を思い返していた。

「（思い返してみたら最後のアレは完全に運任せやつたなあ）」

「（同じ轍を踏まんためにも、せめて全力で動かしても壊れん機体を作らんと。）
……しかもこれはあんま他人任せにできんし）」

現状、彼以外にこんな短時間で機体が限界を迎えるほどの操縦が出来る人間は居ない。
となればこの問題を把握し、対策を考えることが出来るのも彼だけということになる。
いずれ自身の機体を作成する時に向け、アイデアを練る必要がある。

「エル君、こんな所で考え方？」

まとまるでもない思考で漠然と悩んでいると、後ろから誰かが抱きつきながら問い合わせてくる。
そんなことをする人間には一人しか心当たりが無い エルは後ろに居るアディへと振り返った。

「ええ、こないだの戦闘で明らかになつた欠点を改善しないといけませんから」「またそんなのばっかりなんだー！」

微妙に不機嫌そうなアディがそのままもたれかかる。
アディのほうがエルより背が高いため、体重をかけられるとエルは

あつたりと押し込まれてゆく。

「や、そればっかりといつか、こいつこいつとは時間のあるひじに考
えておかないと、次に困るのは僕自身ですから」

ピクリ、とアーティの動きが止まる。
むすつとした表情が消え、代わりにアーティが浮かべたのは何かを悩
んでいるような顔。

「……エル君、やつぱつまた……。ねえ、約束して欲しいことがあ
るんだけど」

「なんでしょうか？」

「今度は一人で飛び出していくかないで、私達も連れてってよ」

「それは……」

エルからは後ろに居るアーティの表情は窺い知れない。
そのまま何となく振り向きづらげ感じ、正面を向いて少し悩む。

「確かに、私達じゃ役に立たないかもしれないわ。でも」
「そんなことは……場合によるのではないでしょうか」
「どうかな、私幻晶騎士乗れないし。それでもせめてエル君が何を
するかくら」、教えてよね！」

そこまで言われて、エルに反論の余地はなかった。

「わかりました……できるだけ。本当に緊急の時とかは、無理かも
しないんですけど」

「もう。なーんかその言い方するい！」

「そりや、私達が居たからって何があるわけじゃないけど、絶対1
人より3人のほうがいいんだから！」「

「はは、そうですね。3人のほうが……3人?」

苦笑気味に返答していたエルの表情が突如真剣味を増す。

「エル君?」

「1人より3人……1本より3本、1本の矢ならすぐに折れるが、3本なら折れない……。

そうです、1本ずつだからもうひとつにはふるんれふは」

ジト目のアディがエルの頬をつまんでむにゅっと広げている。

「話しててる最中に全然関係ないこと考えるとか、しつれーよね。うん

「いたた……うう、そうですね、失礼しました」

エルがつねられた頬を押さえているのを見ながら、アディはさも何かを思いついたように、ニイツと笑い出した。

彼女はエルを横から覗き込むようにしながら満面の笑みを浮かべている。

何故だか、エルはその笑みに嫌な予感が広がるのを抑えられなかつた。

「そうだ、私達にも幻晶騎士の動かし方、教えてよー。」

「うわー、そうきましたか」

エルの操縦方法は余りにも特殊だ。

完全に個人のパフォーマンスに依存したその方法は、エルの弟子とも言えるこの双子をしても利用できるかは微妙なところだ。
それ以前に現状では手元に幻晶騎士がないのだから如何ともし難い。アディに苦笑を返しながら、内心でエルはどうしたものかと頭を悩

ませるのだった。

広めのテーブルの中央に置かれたポットローストから食欲をそそる香りが漂う。

その周囲には所狭しと料理が並べられ、今もエルの母親であるセレスティナ・エチエバルリア（ティナ）がスープを大皿へと移している。

その隣では双子の母親、イルマタル・オルター（イルマ）が焼きあがったパイを並べていた。

普段の食事よりも豪勢な料理の数々が並ぶ中、彼女達は忙しくも楽しそうに盛り付けを進めている。

「そろそろアーティさんに料理を教えないといけないかしら？」

「ふふ、そうね、あの子つたらキッドと一緒にやんちゃなばかりなんだから」

話しながらも鮮やかな手さばきで準備を整え、それが終わったところでそれぞれの家族を呼ぶ。

エチエバルリア邸ではエチエバルリア、オルター両家の間が集まり、子供達の無事帰還を祝つてささやかなパーティーが開かれていた。元々子供達が野外演習から戻つて来たときはこうして迎える予定だった。

それが今回はただの演習ではなく、魔獣の暴走、巨大魔獣の襲来と未曾有の事態に巻き込まれたのだ。

突如降りかかった災厄は報せを受けた家族の顔色を真っ青に変じさせたものの、事態に比して被害は少なく、騎士学科の生徒の大半は無事に帰りつきその家族は慌てるやら喜ぶやらと大忙しだった。それはこの両家も例外ではなく、特にイルマは双子と3人で暮らしき

てはいることもあり、当時の心配様は生半可なものではなかつた。さすがにその状態で一人で待つことはできず、暫くの間子供同士だけではなく親同士も付き合いの深くなつていたエチエバルリア家で過ごしていたのだった。

子供達の全員が無事に帰りついたこともあり、久方ぶりの両家揃つての食卓は安堵に包まれている。

「でも全員無事で、本当に安心したわ」

並べられた料理を端から平らげてゆく子供達を見、イルマは溜め息をつくよう呟く。

「ご心配をおかけしました。」の通り僕達は特に怪我もあつませんでしたし（わざと奇跡的に）」「

おばる元氣があるのでするもの。

「本當、全然大丈夫そうね」

「二人とも、せめて飲み込んでから喋りましょう……」

残る一人は無心に料理を頬張つてゐる。

何せ移動中は保存食を中心とした味気ない食事が多かつたため、彼らはまず何よりも田の前の料理に関心が行っていたのだった。

けていた。

「大変な事になつていたと聞いたのだけれど、大丈夫そうね。

「はい、ベーモスと殴り合つてきました」

「ングツカツ、ゴホッゲホツ、ゲフゲフツ」

そして母息子の余りにもドストレーな会話にマティアスが食べ物を喉に詰まらせる。

「まあ、とても大きかったのでしょうか？ 大丈夫？ ちゃんと殴れたの？」

「先輩から幻晶騎士を借りたので、大丈夫です。少し危ない場面もありましたけれど、ちゃんと殴り勝つてきました」

「あら、幻晶騎士を貸してもらえたの？ よかつたわね、エル。でもあまり無茶をしては駄目よ。いつも貸してもらえるとは限らないのでしょうか？」

「そうですね。その時はいい先輩がいて助かりました」

マティアスは必死に明後日の方向を向いているが、この場にいる他の人はその会話を普通にスルーしているあたり、ある意味で訓練の行き届いている家庭なのだつた。

食卓にいる人物のうちでただ一人、エルの祖父であるラウリは食事中は特に喋るでもなく穏やかにそれを見守っていたが、食後にエルを呼び出した。

「それでだ、エル。明日のことなんだが、わしと少し出かけて欲しいんだが、よいか？」

「はい、お祖父様。何処へ行くのですか？」

「うむ、それはな……」

フレメヴィーラ王国の王都、カンカネン。

元々この街はオービニエ山地の山裾に前線基地として作られた要塞都市だった。

その名残を残した町並みは堅牢な石造りであり、王城を中心として何重かの城壁がその周囲を囲んでいる。

現在は最外周の城壁のみが防壁として機能し、内側の城壁は区分け程度の意味しかないが、それでもその存在がこの国の歴史を物語っている。

街の中央にそびえるのがフレメヴィーラ王城、“シユレベール城”。前身たる砦としての風貌を色濃く残したその外観は、莊厳でありながらも無骨さを残し、現在でも十分に要塞として通じるだけの威容を誇っている。

それは“騎士の国”であるフレメヴィーラ王国の氣風に実に良く馴染み、カンカネンを訪れた者はみなこの城を誇りに感じていた。

シユレベール城の中心部には王への謁見のための間がある。四方に豪奢な垂れ幕が掲げられ、巨大な柱が並び立つ。天井は高く、幻晶騎士自体が入れるだけの空間があった。

中央には真っ赤な絨毯が敷かれ、その先には玉座がある。玉座の背後には恐ろしく巨大な座席がしつらえられ、そこには一機の幻晶騎士が周囲を見下ろすように座っている。

国王専用幻晶騎士“レー・デス・オル・ヴィーラ”

フレメヴィーラに現存するどの機体よりも優美な姿に、国旗と同様の模様を編まれたマントを肩から垂らした様は正に騎士の頂点たる王の姿を体現していた。

左右に近衛騎士団を配置し、中央にレー・デス・オル・ヴィーラを据えたその光景は勇壮の一言に及ぶ。

時には兵士、幻晶騎士にて埋め尽くされる事もあるが、今この場所にはほんの数名の人間がいるばかり。

レーデス・オル・ヴィーラの前にある玉座に座る壯年の男性は、フレメヴィーラ王国第十代国王アンブロシウス・タハヴォ・フレメヴィーラ。

その横にはセラーティ侯爵領を預かるヨアキム・セラーティ侯爵が控えていた。

そして玉座の正面にはヤントウネン守護騎士団長フィリップ・ハルハーゲンの姿がある。

本来ならば片膝をつき、頭を垂れるのが謁見の儀礼だが、この場では許しを得て頭を上げアンブロシウスに対して報告を行っていた。

「以上が、陸皇亀ベヘモスとの戦闘における報告になります」

フィリップから報告を聞いたアンブロシウス王はふむ、と鷹揚に頷き返す。

その手には報告内容をまとめた書類があり、アンブロシウスはざつとそれに目を通していた。

「ベヘモスの死骸の回収はどうなつておる?」

「は、さすがにベヘモスほどの大物になりますと回収者ガーベッジコレクタだけでは足りず、我が騎士団からもいくらか人手をまわしております。数日のうちに大半が回収されるものかと」

「此度の戦いでの損失を彼奴の死骸で少しでも埋めておきたいところじやな。

まあ、師団級魔獣を相手取つた被害としては、実に少ない被害と言つべきなのじやがな」

「陛下、確かにヤントゥネンの戦力はいくらか減つておりますが、一時的に我がセラーティ領より騎士を回しておりますれば、埋め合わせを含め一月もあれば持ち直す範囲かと」

報告を補足するヨアキムの言葉を聽きつつ、アンブロシウスの視線

は報告書の一角で止まっていた。
そこに記載されているのは紅い幻晶騎士とそれを操ったエルネスティニアについての情報だ。

彼の顔に浮かんでいるのはなんともいえない表情。

「エチエバルリア……ラウリメの孫か。よもや斯様な活躍をしようとは」

「陛下……」

「のうフィリップ。俄かには信じがたいことじやが、いやつは本当にかの魔獣を圧倒して見せたのか」

「恐れながら、我が目で確かに見届けた事実でござります。お疑いになられるのも当然の内容とは思いますが……」

さすがにこればかりはフィリップも強くは言えず、ニアキムは表情を表には出さないが内心では大いに疑っていた。

「お主が斯様に益体の無い嘘をつくと思いつてはおらぬ。おらぬが、こればかりはな。

特にこのくだり。魔導演算機の術式をその場にて変更したと報告にはある。

「事実だとすればもはや正氣の沙汰ではないぞ」

「半ばは伝聞ですが、実際に田撃した動きを見る限り……事実ではないかと」

「私のほうにも同様の報告が入っております……実際に田撃したのはハルハーゲン卿と守護騎士団のみになりますが」

アンブロシウスは静かに眼を閉じ、その意味に悩む。束の間の思考の後、彼はポツリと呟いた。

「「」の者、危ういのう」

それに慌てたのはフイリップだ。

あの戦闘においてエルの働きは実質的に何十人の騎士団員の命を救つたに等しい。

さらには様々な事情からエルに褒賞を出すわけにも行かず、その上拍子抜けするほどあつさりとそれを承諾された事もあり、フイリップはエルに対し負い目に感じる部分がある。

相手が遙かに年下の少年であろうと、共に戦い、さらには助けられた相手を蔑ろにするほどフイリップは薄情ではなかつた。

「陛下、恐れながら申し上げます。

この少年、10歳の年齢でありながらその知識は優れ、態度は聰明そのもの。

また礼儀もわきまえ、周囲のものに聞く限り人物評は良好にござります。

なにより彼はべへモス戦で先陣を切り戦つておりますれば……」

フイリップの言葉を、アンブロシウスが軽く手を振り遮る。

「案ずるな、今すぐにどうこうするつもりは無い。

それに今はそれでよいかも知れぬが、聞けば齡10となにもかかわらず実に恐るべき能力といつとこひじやが……それでも所詮は10の童よ。

いづれは己の力に溺れるやも知れぬ。わしが危惧するのはそこよ

アンブロシウスの懸念は尤もだ。

どんなに有能であり現在は清廉潔白であると、時の流れにあって人は変わるものである。

特に10歳ともなれば、精神的にもこれから多感な時期であり、ここで力に驕るようであれば有能さはむしろマイナスにしかならない。

実際にはエルの中には40年近くの時を経た精神が存在するため、一般的な考えは当てはまらないのだが、そんなものは当然ながら彼らの想像の埒外である。

故に彼らはその才が失われること、道を踏み外しはしないかと危惧する。

「それでは、如何いたしましょつ」

「この心を失わぬなら良き騎士となるじやろつが……導かねばならぬ。

ラウリメの元にいるならば要らぬ心配やも知れぬがの。

ふむ、そうじゃな……まずは時を設け、一度会つて見ねばならぬな

アンブロシウスの言葉に、ヨアキムとフライリップは礼を以つて返した。

「お祖父様もいかがですか?」

「ふむ、わしは遠慮しておこつか」

露店で買ったパンケーキをぱくつきながら、エルは隣を歩く祖父、ラウリに問いかけていた。

ラウリの言葉に頷くと、そのまま薄めに焼き上げ果物をはさんだクレープに近い菓子を食べかる。

軽く視線を上げると、そこには王都カンカネンの中心に聳えるシユベル城が視界に入った。

「（現実逃避してゐる場合や無いよなあ）」

今カンカネンではヤントゥネン守護騎士団とライヒアラの騎操士への叙勲式が行われてゐる。

近年稀に見る強大な魔獣の襲来と、それを打ち破つた騎士団、そして果敢に立ち向かつた学生（準）騎士達を褒め称え、街は活気に溢れていた。

吟遊詩人は早速勇猛果敢な騎士団の活躍を歌いあげ、それを肴に酒場では昼間から酒を飲み交わす者達がいる。

商人達はここぞとばかり出店を出し、浮かれた住民達によるお祭り騒ぎが続いているのだった。

そんな騒がしい街中をエルとラウリはシユベル城を目指し移動していた。

「（まさかの王様からの呼び出し。褒章何も無いから、てっきり話はアレで終わりかと油断してたなあ）」

エルとしては終わった話が地雷に変わったようなものである。

単に事情を聞かれるだけならば兎も角、国王クラスに呼び出されるとなると、嫌な予感が止まらない。

薄くついた溜め息は通りの騒ぎに溶けて消える。

彼らは人ごみに逆らうようにすり抜けながら中心部へと進んでいった。

シユレベール城の正門前は空前の賑わいを見せており、裏門周辺はかなり人がまばらになつていて、

そこへ辿り着いた二人は兵士に案内されながら城内へと入つていった。

「（えらいええ、なんで爺ちゃんに連絡きたんや）お祖父様」

城内の長い廊下を歩く間、エルは少し前を行くラウリに問いかける。

「お祖父様は陛下とお知り合いなのですか？」

「つむ、わしと陛下はこれでも長い付き合いでな。わしらは昔（じこ）カンカネンの王立貴族院学園に通つていた。

陛下はその時の、所謂学友と言つやつなのだ。

その縁で相談役紛いのことをやつていた時期もあつてな……今まで時折助言を求められる事がある」

「そうだったのですか。お祖父様は今でもフレメヴィーラ最大の学び舎の長ですから、陛下も信頼されているのですね」

「まあ、陛下としても気が合うだけやもしれんがな。ほれ、着いたよつだぞ」

彼らが案内されたのは会議室のような場所だった。

今現在は叙勲式の後始末の中であり、その場所でしばし待つようにとの伝言を伝え兵士が下がつてゆく。

「緊張しているのか？」

「それは勿論。陛下に拝謁する機会があるなどと、想像もしていませんでしたから」

「エルならばそれくらい平然としておるかと思つたがなあ

「それはなんだか、ひどいお言葉です。お祖父様」

そうは言いつつも國の長に会うとに殆ど緊張を感じさせず、2人が益体も無い会話を交わしていると再び兵士が現れ、國王が訪れることを告げる。

それを聞いた彼らは姿勢を正して部屋の入口へと向き直った。扉から数名の人間が入ってくる。

先頭に立つのはフレメヴィーラ王国においてその姿を知らぬものはない、國王アンブロシウスその人だ。

すでに壮年を過ぎつつあるが、それを感じさせない威風堂々とした雰囲気を纏っている。

その後ろには貴族然とした雰囲気の男性が一人、続いている。アンブロシウスはラウリと目を合わせると一瞬だけにやりと笑つた。

「」苦労、待たせたようだの、ラウリ」

「お久しぶりに『ぞい』ます陛下。陛下『ぞい』お忙しいと聞つてお時間を頂きありがとうございます」

「よし、この場はわしの好奇心から出たようなものでもあるしな。して、そちらが例の子供か」

アンブロシウスとあと2人の視線がラウリの横へと滑り、エルへと向けられる。

わずか10歳にして幻晶騎士シリエットナイトを駆り、陸皇龜ベヘモスと渡り合つ それだけを聞けば、彼らはきっと到底10歳の子供とは思えないほどの者が来ると思っていたのだろう。

実際にそこに居たのは平均的な10歳の子供よりも小柄で、しかも

少女と紛うばかりの風貌をした少年だった。

国政の場において鍛えに鍛え上げられたはずの彼らの顔面がしつかりと引き攣るのが見えた。

報告にはその容姿までは記載されていないこともあり、無理ながらぬことだったが。

しかしそこは王もさるもの、最初は驚いたようにピクリと片眉を上げたが、すぐに面白がるような顔になる。

「つむ、報告書から勝手に男子と思つておつたが、まさか女子であったか」

「いいえ陛下、いつも見えてもれつきとした男子にござります。

申し遅れました、お初にお目にかかります、ラウリ・エチエバルリアが孫でエルネスティと申します。

本日は陛下への拝謁の誉れに与り、恐悦至極に存じます」

「ほう、齢10の子供と聞いていたが随分と堂に入つたものではないか。

「無闇に堅苦しくしても話しこそからう、この場合は楽にするが良い」「はい、ではお言葉に甘えまして」

本当にせらりと返すエルに、アンブロシウスの後ろに控える一人の表情が驚愕から呆れに近いものに変わる。

大物と言つべきか、礼儀がなつていないので、彼らにも判断しづらいところだった。

「さて单刀直入に行くか。本日こうして来てもらつたのは他でもない。フィリップめより話は聞いておりや。

おぬしの此度の働き、聞き及んではあるが表立つてそれを賞す訳には行かぬ」

アンブロシウスは無遠慮にエルを観察する。

「おぬしがそれを納得したことも聞いてはいるがのう、べヘモスと戦いうる有能な騎士を無碍に扱つような真似はどうかと思つてな。そこで表にせぬところで働きに見合つた代わりの褒賞を出そうかと考えたのじや。

さりとて未だ成人もせぬ童に、如何なる褒賞を出せばよいかとわしらも悩んでな」「

説明するアンブロシウスの表情はにこやかな笑みが浮かんでいる…が、それはどう見ても“人の悪そうな”笑顔だ。

一度無しとなつていたものを後から出すとする、それはまるで

「（試されどるんか……？）」

エルは普段どおりの態度をとしながら、裏では徐々に警戒レベルを上げている。

「何しろ騎士に取り上げるにも、身分を『えよつともお主の年齢が問題になる。わかるか？』

「御意。僅か10歳の人間には過分な処置と存じます」

「ふむ、中々理解は早いようじやな。まあそこでじや……

「お主、何が欲しい？」

アンブロシウスの余りにも簡潔な言葉に、一瞬エルの表情が揺れる。

「何が……で『えこしますか？』

「やはり本人に聞くのが手っ取り早いかと思つてな。

此度の功績に見合つものであれば褒美として取らせよつ。まずは何が良いか申してみよ」「

アンブロシウスの提案を受け、エルの思考がトップスピードで回転を始める。

「（単純に好意……つてのは考えづらいかなあ。物で釣れる人間かを見ようとしてるんか？
こまわり出すつのがなんか怪しいよなあ）」

棚ぼた、濡れ手に粟、しかして口より怖いものはない。
それは前世も今世もわほじ変わらぬ人の世の共通認識だらう。

「（だからと言つて国王陛下の好意を無碍にするとかむしろ難易度高いし、なにかしら出さんとね）」

しかし、“べくモス討伐への貢献”これに釣りあつ報酬と言つのが意外と難しい。

金銭にすればどれほどなのか？ 物にすればどれほどなのか？ 地位以外で他に望めるものはないか？

ここは子供であることを盾に無茶な要求をしてみるか……そう考えたところでエルは自身の考えを振り払つ。

「（こやあの表情は子供に対するものとは思えんし）」

アンブロシウスの表情は、エルの記憶の中に思い当たるものがある。既に風化しつつある、前世で働いていた時の記憶の中。

一見にこやかな表情を浮かべながら裏で少しでも話の穴を伺おうとする 営業マンの表情。

「（あれこそ幻晶騎士の一機ぐらい要求してみるか？ 基準を伺うにはひとつ見ええかなー。）

……実際働きからすれば通りそつたとき、彼の脳

さり気無く欲望に負けつつエルが答えを返そつとしたとき、彼の脳裏に一つの閃きが走る。

「（しかしこれほどの好機、直接国王に請い願う機会なんてこの先一度とあるかわからん。

ここは一つ国王へと願わなければ手に入らないレベルのものを吹っかけるべきやないか？

そう、それこそ今必要としてる最高難易度の代物とか……」

時間にすればたゞひとつの事もなく、エルは思考から浮上する。駄目なら駄目で次を考えれば良い、彼はあえて気楽に考えてそれを口にした。

「では、陛下にお願いいたします。……僕が今一番欲しているものは知識。

魔力転換炉の製造方法、に御座います」

あまりにも予想外の願いに、アンブロシウスは虚を突かれた顔になる。

無理もないだろ？、齡10の子供から出る願いとしては奇妙極まりない。

彼だけではなく、それまでは悠然と構えていたラウリの表情は引き攣っているし、残る一人の表情は理解が追いつかない、と言った風だ。

さすがに相手は子供であり、単に予想外の要求であるならば彼らもここまで醜態を晒はしなかつただろう。

しかしエルが願つたものは、単純に個人で求めるものとして有り得ない代物だ。

アンブロシウスは機転に優れた人物だ。しかし、予想外も度が過ぎると反応が遅れてしまう。

そのため、そこに生じた奇妙な沈黙の中で最初に動き出したのは、彼の背後に控える貴族のうち片方 クヌート・ディクスゴード公爵だった。

「なつ……貴様、自分が何を言つてゐるかわかつ……」

「静かにせよ」

混乱の余り激昂しかけたクヌートの言葉を、我に返つたアンブロシウスが遮る。

それまでのどこか気楽だった雰囲気とは打つて変わり、国の長としての威を纏う国王の姿に、すぐさまその場の全員が姿勢を正した。

「エルネスティよ」

「はい」

「魔力転換炉の製法……と、予想外よな。確かにわしに願わねば手に入らぬものではある。

だが、普通はそのようなものを欲しがりはせぬ。当然であろう、そんなものを知つてどうすると言つのか」

国王の目が細められる。

無言のままエルにかかる精神的重圧^{プレッシャー}が強くなり、視線を交わすエルの背に冷や汗が流れる。

通常の10歳の子供には耐え難いであろうその視線も、エルにとっては腹を据える契機になつただけだった。

「是非はまず横に置いて……理由を、申してみよ。何故そのようなものを欲しがる？」

「は、僕は……ライヒアラにて騎士を田指し学ぶ身でござりますが、そもそもは自身のためだけの幻晶騎士を欲しておりました」「ほう、己のための幻晶騎士をな。それも随分と剛毅な願いじゃが、それであればまだわからぬ訳ではない。

今それを願えればよかつたのではないか？ 叶つたやも知れぬぞ？」

アンブロシウスの言葉に、エルはゆっくりと首を振った。

「確かに、以前は単に幻晶騎士が手に入れば良いと考えていました。しかし今は違います。僕は……僕のためだけの幻晶騎士を、最高の幻晶騎士を、自身の手で作り上げたいのです」

想像の斜め上の返答に、再び国王が言葉に詰まる。

彼の脳裏では、報告書にあつた一文が思い浮かんでいた。

この者、マキウスエンジン獨力で魔導演算機の魔法術式を改変したとあり。

「（もしや、この者本氣か。戯言でなく、本氣でそれを望んであると言つのか？）

……それだけの能力を、もつと……言つのか？」

アンブロシウスが沈黙したこと、エルは説明を続けていた。

「そのためにライヒアラ騎操士学園にて様々な知識を求めてまいりました。

魔法の知識を得、幻晶騎士の構造を学び、そしてその動かし方も。その身を形作る技術は既に調べ上げております。

しかしながら、その完成には後一つ部品が足りません。魔力転換炉でございます。

「存知の通りその製法は一般には流布しておりませぬので」

「……」

「もし可能ありましたら、魔力転換炉の製法を『ご教授』いただきく。それが解れば、あとは作るのみにござります」

ラウリも、孫の言葉を固唾を飲んで見守っていた。

エルが幻晶騎士に傾倒していることは知っていたが、まさか『ご』でそれを願うほどとは、彼にも予想外だった。

すでに賽は投げられている。事こうなつてはフォローも難しいだろう。彼はちらりと国王へと視線を向ける。

アンブロシウスは口く言いがたい表情で考え込んでいた。

「……つまり、その理由は？」

「趣味に御座います」

その場にいる全員の顔が、何か恐ろしく奇妙なものを見たような、名状しがたい表情になる。

なんとも言えない沈黙が降りる中、突如として漏れ聞こえてきた忍び笑いに、全員が驚いたようにそちらを見やつた。

アンブロシウスはしばらくは黙つて肩を震わせていたものの、すぐ

に我慢できないとばかりに破顔する。

「なんと… ふはっ、なんと馬鹿馬鹿しい！ 言つに事欠いて趣味と申したか！」

「はははっ、これは愉快な事よ…！」

國家の秘事ぞ、それを趣味で聞くと… そのほう真に10の子供か？

ふははっ、これは傑作よの、おぬしの様な面白き者には久々に出会ったわ…！」

溜まらないとばかりに笑う国王を、後ろの一人が呆然と見やる。付き合いの長いラウリには、国王が本気でそう思っているのがわかり少し胸を撫で下ろしていた。

「良からう、その願い聞き入れた！！」

「な、陛下、いけませぬ！ このような不得体の知れぬ子供に教えてよいものではないですぞ！」

「得体なら知れておひつ、我が学友の孫ぞ」

「し、しかし……！！」

「まあその方の疑惑も当然よな。のう、エルネスティよ」

エルは説明の後はじつと事態の推移を見守っていたが、アンブロシウスの言葉にさつと表情を引き締めた。

「確かにその願いは聞き入れよう。しかしながら、あれは本来門外不出の秘よ。

べヘモス討伐程度の功では、いささか釣り合いが取れておらぬといふもの」

エルの表情が怪訝なものになる。

一度受け入れると言いながら、功績が足りないと言つその真意をいぶかる。

エルの表情によぎった懸念を読み取り、アンブロシウスがにやりと笑う。

「案ずるでない、国王たるもののが一度口にしたこと反故にするつもりはないぞ。

……つまりそれに見合つだけの功が積もった暁に、おぬしに知識を伝えると約束しよう」「

数瞬、アンブロシウスとエルの視線が絡む。

「（一聞しただけやと単に褒賞の予約を盾に只働きが続くとも取れる。

しかし望外の成果つづるべきやな。何せ秘中の秘を、条件はともあれ知る可能性が出てきたんやから）」

エルにとつてはそれは幾万の金銭に勝る褒賞足りえる。ゆるりと笑うその可憐な表情の中に、燃え滾るような渴望と熱意の炎がちらつき始めていた。

「（Jの表情、まさしく本氣であつたよつじやな）
くく、これだけでは具体性が足りぬよな。よつてその方法を申し付ける。

先程おぬしは幻晶騎士を作ると申したな？ なれば魔力転換炉の製法を活用できるという根拠を示して見せよ

「根拠……それは如何にして？」

「知れたこと、実際に幻晶騎士を作ればよい。

おぬしの思う、最高の幻晶騎士の筐体を作り上げて見せよ。

それがわしを満足させるものであれば、此度の約束を果たそう

それを聞いたエルの表情はまさしく獲物を見つけた肉食獣のそれであつた。

彼の求める最後のピースを手に入れる条件が提示されたのだ。
しかもそれは、彼にとつてはいずれ到達する必然の先にあるもの。
果たして受けることに迷いは必要なかつた。

「拝命いたします。必ずや、陛下の御目に適う幻晶騎士を用意いた

しましょ「

エルの謁見が終了してからしばし後、玉座の間とも会議室とも違ひ、王の私室の一つにアンブロシウスはいた。

室内にはもう一人の人影がある。

「くく、久方ぶりに実り多き日であったことよ。

ラウリよ、これはまた随分と愉快な孫を持つたものだな」

ワインを口に含むアンブロシウスの表情は、思い出すたび笑みの形をとつていた。

「はつはつは、いや教育方針は娘に一任しておきましたからな。昔より幻晶騎士の好きな子ではありましたが、まさかあれほどとは。

わしも把握してはおりませんでしてな」

「10の子供がベヘモスと戦つたと聞いて呼びつけてみれば、有り得ぬな。

アレは最早子供と呼べぬであろう」

「いやあ、我が孫は学園に通う、れっきとした子供ですが」

「子供の夢は壮大にというが、あれほど奇矯な願いを誰が語るつや。これまで人の願いを聞く機会は多々あったが、今日のアレは飛び切りであつたぞ！」

互いにグラスを交わしつつ、どこまでも上機嫌に会話は続く。

「あまりの面白さゆえつゝ愉快な約束をしてしもつた

「そこには我が孫ですからな。

陛下のお見立てを損なうことが無きよう、しつかり育てていきま
しょう」

「おお、さういえば有能さゆえ先の心配をしておつたのだつたな。
実際に会つてそんな物すっかり吹つ飛んでおつたわ」

アンブロシウスはにやりと笑う。

「それはそれは。陛下に先を見込まれると、我が孫も中々の氣骨
者ですな」

「ふふふ、お主の孫だから、ではないが……興味が湧いてきたのう。

あの者が何を為すのか。

よき幻晶騎士を作るなど、それ自体が夢物語の一つであるうに、
あの者全く躊躇なく頷きおつた

言いながら、アンブロシウスは一つの確信めいた予感を感じる。

「それを持つてくるのも、そつ遠い話とは思えんのう」

「あのよつな約束を軽々と、陛下には少し道楽の氣を抑えていただ
かねばならん」

先程の謁見で後ろに控えていた貴族のうち一人 クヌート・ディ
クスゴード公爵はそのもう一人であるヨアキム・セラーティ侯爵へ
と愚痴つていた

「滅多なことを言ひなさるな」

「陛下は苦言を受け入れぬほど狭量な方ではない。

それとも貴公もあるのよつた得体の知れぬ子供に、國家の機密を教えてよいと思うのか？」

「思いませぬが……それゆえ陛下もさうに条件を増やしておられます。

新たな幻晶騎士を作り上げるなど、如何にライヒアラの学長の家族と言えど、容易なことではありませんよ」

「事の難易度の如何を問つてはいるのではない、そのよつた約束をすることが問題だと言つておられるのだ」

クヌートは憤懣やるかたない、と言ひ様子で廊下をのしのしと進んでいる。

それに続きながら、ヨアキムが脳裏に浮かべていたのは彼の子供達のことだ。

ヤントゥネン守護騎士団長フィリップ・ハルハーゲンの報告を補強したのは彼の娘であるステファニア、そして彼女から伝えられた内容には彼の愛人の子供達が、エルネスティと共にあることも含まれていた。

なんとすればエルネスティは彼と全く縁のない人間ではない。いま少し情報を集めるか、もしくは彼の庶子に何かしらの指示をする必要があるかもしけない。

思考にふけるヨアキムの横で、クヌートは徐々に表情を険しくしていた。

「たかが子供一人であれ……これは放置するのは危険やも知れぬな

その弦きは誰にも届かず、静かに空氣に溶けていくのだった。

#25 まず最初に作るのは

シリエットナイト
幻晶騎士を運用するライヒアラ騎操士学園・騎操士学科には当然な

がら、幻晶騎士を整備するための場所がある。

インナースケルトン／アウタースキン
金属内格や外装といった金属部品を加工するための鍛冶場。

クリスタルティショウ
結晶筋肉を接続し、全身の組み上げを行うための作業場。

それら諸々をあわせて、幻晶騎士の製造・整備を行う施設は一般的に“工房”と呼ばれている。

工房の内部は、10m級の人型を扱うだけあって、面積、高さ共に広大な空間が広がっている。

椅子のような形の整備台に据えられた幻晶騎士の足元で、大勢の生徒が作業を行っていた。

外装のつけられていない幻晶騎士の腕が台車に乗せて運ばれてゆき、鍛冶場では巨大な鎧の一部を作り上げるための槌の音が響く。

あちこちで怒鳴り声が飛び交い、中にはテンションが上がりすぎたのか、本当に喧嘩を始める者すらいる。

慌しく走り回る生徒たちの間をのっしのっしと進んでいく大柄な人影があった。

いや、大柄と言うのは些か語弊があるかもしれない。

彼は身長自体は160cmほどであり、同年代の男性の平均身長からすればむしろ小柄だ。

しかしその体躯は常人の倍はあろうかと言つほどの太さを持ち、周囲に強烈な存在感を示していた。

脂肪で膨らんでいるのではなく、その身を覆うのは強靭で分厚い筋肉だ。

そして細かく編みこみ後ろに垂らした髪の毛と、それ以上の長さを誇る立派な髭が、彼の出身を示している。

ドワーフ族、鉄鋼と鍛冶の民。

彼は言い争いをしている生徒のそばに行くと、人間の脚よりも尚太い腕を振り上げ、その2人を無言で殴りつけた。

手加減をしたとはいえ、ドワーフ族の強烈極まりない拳を受けた2名はそのままのた打ち回る破目になる。

「つたく、どいつもこいつも、このクソ忙しい時に余計な仕事を増やしやがって……！」

「動かす暇があったら手え動かしやがれ……！」

「ゲフッ、を、親方！ すまねえ、すぐ作業に戻る……！」

「冗談ではなく、ドワーフ族が本気を出せば、その拳は岩をも碎く。これ以上“親方”と呼ばれたドワーフの機嫌を損ねてはかなわない」と、言い争いをしていた2人は慌てて作業へと戻つていった。

「ただでさえ全身作り直しが7つもあるつてえのに、まったくよう

ここには陸^{ベヘモス}皇亀と戦い、大破した学園の幻晶騎士の残骸が運び込まれている。

大半の機体が中枢部と骨格が無事なだけという状況に、学園側は全会一致で修理よりも新造する事を決定していた。

確かに整備班に所属する学生達の知識と技術があれば、機体を1から作り上げることも可能だ。

しかしそれも一度に7機分の全身新造となると必要とされる作業量は膨大なものとなる。

今回機体を失つたチーム以外の人員も借り出され、今整備班は総力戦の構えで作業を行つていてのだった。

新造とはいえ、比較的無事な部分の多いものから優先的に組み上げられている。

自然、損傷の大きなものは後回しにされていく事になる。

「(イ)いつ一番最後だな」

親方はとある機体の前で立ち止まる。

運び込まれた残骸はどれも酷く損壊しているが、その機体は一味違
い、金属内格自体が分解している。

大半の箇所が部品単位でバラバラになっている様は、運び込まれた
残骸の中でも一際酷い状態だ。

逆にここまで来ると、魔力転換炉マジウスエンジンと魔導演算機テルリアクタの再利用が可能だつ
たのが奇跡としか言いようのない状態だつた。

「しかし、よくよく見ると少しばかり見事すぎるほどの壊れ方だな」

先ほどから残骸を睨む、彼の視線は厳しい。

「魔力マナ切れで自壊しやがったか。骨格構造から崩れてやがる」

横でその呟きを聞いていた生徒が首をかしげる。

彼は親方が何に驚いているのか、理解できていなかつた。

「はあ？ そんなの珍しくもないじゃないっスか。魔力転換炉が潰
れちゃあ仕方ねえつて……あれ？」

言つた生徒がふと自身の言葉を訝しむように残骸をしげしげと眺め
始めた。

そうだ、この残骸は魔力転換炉は無事なのだ。

にも拘らず魔力の供給が切れて骨格構造が自壊した形跡がある。

そこまで考えその生徒は漸く親方の疑問に合点がいったが、同時に
別の疑問に首をかしげることになる。

「あー……銀線神經シルバーナーブでもきれやしたかね？ 珍しいやられ方するもんつスねえ」

「おお、そうだな……全く珍しい、やられ方だ」

親方はじっと、残骸のうち脚部にあたる部分を見つめる。

装甲が外された脚部の露になつた結晶筋肉には縦横に罅クラックが入り、途中から断裂していた。

何度も機体の修理を担当してきた彼らにとつてはおなじみの症状、耐久性を超えて使用し疲労断裂を起こした跡だ。

幻晶騎士は生物ではない、結晶筋肉は使用と共に疲労し、いつかは疲労断裂を発生する。

それ自体は珍しい話ではない。しかし …

「こいつらは出発前に全身オーバーホールしたばかりだ。なんでいきなり疲労断裂なんてしてやがる？」

おかしい、こいつのやられ方は何かがおかしい」

髭に埋もれた顔を顰め、親方は唸つている。

彼の直感とも言うべき部分が目の前の残骸から違和感を伝えていた。この機体の壊れ方は明らかに、彼らが知るとの場合とも違つていて。整備班の仕事とは何も機体の修理を行うだけではない。

使用者のミスで機体が壊れたのならともかく、構造的に改善できる部分があれば対策を行うのも彼らなのだ。

そのため機体に起つたりつるトラブルの原因はできる限り把握していく必要がある。

「機体名はグウホール。ナイトランナー騎操士は、ディーの野郎か……あいつ一体何をしやがった？」

ぶつぶつと囁きながら、親方は目の前の残骸の騎操士である、ディートリヒを呼びつけるのだった。

フレメヴィーラの王都カンカネンには、貴族街と呼ばれる区画がある。

基本的に国内の貴族はそれぞれ領地を持つており、普段は領地内の屋敷で過ごしている。

それとは別に、行事や国政への参加など王都で行われる活動に参加しやすいように、王都内に別邸を構えるのが常であった。

それらの別邸が集まる区画が貴族街と呼ばれる場所だ。

屋敷の主たる貴族自身がない場合が多いため、1年のうち大半はひつそりと静まり返っている場所である。

その貴族街にある一軒の屋敷に、アーキッド、アデルトルートの双子がいた。

そこは彼らの父親であるセラーティ侯爵が使用している別邸だ。庶子である彼らは、本妻の意向もありセラーティ家の活動とは全くと言っても良いほど関わっていない。

この別邸に来るのも何年ぶりか、そして今彼らの前の前にいるヨアキム・セラーティ侯爵と顔を合わせる事自体、数年ぶりのことだった。

双子が別邸を訪れると、そのままヨアキムの書斎へと案内される。書斎にはけはけしならない程度に品のいい調度品が並んでおり、持ち主の性格を反映してかどこか堅い雰囲気が漂っていた。

数年ぶりに父親と顔をあわせる双子には、明らかに緊張の色が見て取れた。

彼らを呼び出した本人であるヨアキムはしばらく軽く書類を確認し

ていたが、ややあつて口を開く。

「二人とも久しぶりだな」

「……お久しぶりです、父上」

「元気そうだな。イルマも息災か」

「はい。母さんも病気一つすることなく、元気にしております」

親子というには硬さの残る雰囲気が漂う。

双子も実家からはやや疎まれ立場にあるとは言え、父親から直接そういうことを言われたことはない。

単純に接触時間の短さとアキムの纏う雰囲気が場の空気を支配しているのだ。

「ティファから聞いた話だが」

ティファ 双子の異母姉ステファニアのことだ の名前が出たことで、双子の緊張が高まる。

数ヶ月前のバルトサールとの諍いについて、結局あの後彼らには何の連絡もなかつた。

これだけの時間を空けてまさかその話を続けるのかと訝しむ隙を突くように、アキムの口から双子にとつて予想外の名前が飛び出す。

「お前達の知り合いで、ヘルネスティ・エチエバルリアという者がいるな？」

「！？ ……はい」

「どのような人物だ？ 話せ」

有無を言わざぬ父親の言葉に、困惑を押し殺しつつも彼らは自身の印象を述べる。

幼馴染で魔法の師匠、魔法だけなら国内でも唯一と思われる能力に、

幻晶騎士への多大な興味。

話を聞くだけなら非常に奇妙に思える内容だが、ヨアキムは途中否定するでもなくじつと耳を傾けていた。

「そうか、そういうえばお前達も正騎士に匹敵する力を持っているのだったな。

それもティファから聞いた話だが

「父上、兄様は……」

「アレについては、今は良い。騎士団の者に性格を叩きなおさせていいる」

もしかして呼び出された目的は本当にエルについてたずねるためだけなのだろうか？ だとしたら何故？

疑問が表情に出ていたのだらう、ヨアキムは少し考えた後説明を続けた。

「ベヘモスとの戦いにおける功労者として名前が挙がっていた。歳に見合わぬ能力を持っているようだが……今後の働き次第では何らかの褒賞を出すことになっている」

「え、では、エルもちゃんと評価されるのですね！？」

「早まるな。今後次第、だ」

あの時、危険を冒したにも拘らずエルへの褒賞や評価はなされていない。

それについてエル本人は納得してあっさりと引き下がったが、双子にとつては十分に納得のいく話ではなかつた。

「（やつぱ見てる奴はちゃんと見てんじやねえか）

今まで父親のことを多少苦手に思つていたキッドも、その話だけで

もこれまでに比べ随分と打ち解けた感じを持っていた。

厳しい人物ではあるが、ヨアキムは話のわからない人間ではない。

「ひとまず、今後彼が何かしらの成果を出したならば、まず私に伝えて欲しい。いいな？」

「わかりました、父上」

彼らの師匠たるエルならば、きっとそのうち何らかの成果を打ち立てるだろう。

エルがそれをどうするかはわからないが、それを父親に伝えればいずれエルのためになる。

それはこれまで魔法を教わった彼らにとって、一種の恩返しのようになされた。

そしてここを訪れた時の緊張した雰囲気が和らぎ、明らかに嬉しそうな表情を浮かべている双子を、ヨアキムは表情を変えないまま見つめていたのだった。

「（一つ書いては俺のため、二つ書いては口ボのため……）」

騎士学科の生徒達がライヒアラ学園街へと帰り着いてから1週間ほど、学園は休校になっている。

怪我をした生徒があり、また子供達の安否を心配した親がその無事を確認したり、面会に来るための時間を作るためである。

無事な生徒も思い思いに過ごしているであろうが、ここに出来た時間フルに活用する人物がいた。

彼 エルネスティは今、一心不乱に机へと向かいひたすらに何かを紙へと書き付けている。

先日の国王への謁見の場において、彼は自身の知識を反映した幻晶騎士を作り上げると宣言した。

彼としては、すぐさま機体を製作して持ち込みたいといひではあるのだが……。

「（まあぶつちやけ幻晶騎士を作る当てなぞ全くない訳で）」「

結局のところ、今彼に出来る事はいずれ役に立つ事を考えてアイデアを書き溜めておくことくらいだった。

「（国王陛下に啖呵切つた以上はそれなりの事やつてのけなあかんしなあ）」「

インク壺にペンを突つ込み、エルは一心不乱にアイデアを書き連ねる。

これまでに学んだ座学による構造論、他者が動かしているときに観察した結果、そして何よりも彼自身が動かしたときの経験を元にして多くのアイデアの実現性を検討してゆく。

緩やかな午後の日差しが差し込む空間に、ペンの奏でる微かな音だけが満ちていた。

「（ああそりや、ついでに双子の特訓方法も考えんと）」「

長時間机に向かっていたせいで凝りに凝った肩をほぐし、大きく伸びました。

そのまま背もたれに体重をかけ、漠然と天井を見つめながらつりちらと考えを連ねている。

「（実機は使えないから、シミヨンレーター仮想操縦装置見たいなのが作れたらいいんやけど、さすがにむずいなあ。）

幻晶騎士の操縦特訓に役立つて、それでいて個人で扱えるもの……。

幻晶騎士はあのサイズだから、駆動に膨大な魔力を必要とする。
ならば規模を縮小すれば必要な魔力を少なくして……やってみる
価値はあるかなあ）」

「わざとまとめたアイデアをわざとノートに書き足していく。

「（……しかし）」

ひとまずの部分まで書き終えて、ふと氣を緩めた瞬間に忍び寄る誘惑。

頭の片隅から染み出したそれは、まるで真水に墨を流したよし、急速にエルの思考を蝕んでゆく。

手に持つペンを握り締め、まるでそのまま黙つていってはそのまま思考を乗っ取られるといわんばかりに、彼はついにそれを言葉として吐き出した。

「幻晶騎士に……乗りたい……」

なまじ関係のあることを考へていたのが仇になつた。

考えまいとすればするほど、それはこびりついた様に脳裏から離れなくなる。

これが前世であれば、幾らロボットのことを考へていようともそれは所詮妄想の域を出ず、精々が漫畫を読むなり、アニメを見たくなる程度だろう。

しかし、一度幻晶騎士に乗つてしまつたのが運の刃だった。

目を閉じれば今でもはっきりと思い出せる。

エルの思考に応じ、力強く踏み出す鋼鉄の足、数々はある巨大きな剣

を振り回す腕、前進を命じるたびに襲い掛かる慣性、破壊的な巨獸との戦闘。

それら、実際に体験してしまった全ての記憶が幻のよみHORLを襲つていた。

「また……動かしたい……」

HORLの中に、新作ゲームを買った直後にやめるときにも似た、強烈な渴望感が沸き起つ。居ても立つても居られなくなつた彼はうつむいて部屋の中を往復し始めた。

「（あああかんマジヤバイこれヤバイメカ乗りたい動かしたい眺めたい頬ずりしたいバラしたい）」

意味もなくスクワットを始めたかと思えば突如ブリッジ。腹筋で体を跳ね上げ四つん這いになり、またのけぞりブリッジに。バタンバタンバタンバタンビタン

それを繰り返して部屋の壁に衝突したところでHORLの動きが止まる。

「（ああさすがに緊急事態じゃないから幻晶騎士借りもせんやうしなあ。なんか代わりになるもんがあれば……）」

代わりになるもの、前世ではひどいことをして過ごしていたか。

そこまで考えた時に、彼の脳裏に天啓が走つた。

「（やつや、ザザモヤ）」

倒れたままのエルの瞳に熱意と言ひ名の炎が灯る。

「（全高10m？なら1／60サイズが一般的……ってあかん、
熱可塑性樹脂がない！！

金属か！？ 金属加工か！？ ドワーフ族に頼んで伝統工芸（？）
幻晶騎士一刀彫を……！！

つてそれ結構いけるんとちやう？」

両腕を支点にくるりと回転して起立。

何の意味もなく右腕を左上方へ伸ばし、左腕を曲げて脇を占めるボ

ーズで決め。

「（ちょうど友人に手先の器用な人間がいる… ここは頼まねばなるまい…）」

エルは机に戻り、そのまま意気揚々と図面を引き始めた。

「と言うわけで時代はプラモモデルだと思つのですよ」

「すまんがいきなり何の話だ？ と言つかプラモモデルつてなんだ？」

所変わつてここはテンドー一家が所有する鍛冶工房。

相も変わらず突然やつてくるエルをバトソンが出迎えたところである。

多量の紙の束を抱えたエルの様子を見て、バトソンは諦めたように溜息をついた。

「前置きがさっぱりだがどうせまだぞろ怪しいものを作るのだろう。

話してみる。」

「え？ 怪しいことは前提なのですか？ そんなに変なものを持ち込んではいないと思つのですが……」

半天になりつつもエルは紙の束を広げ説明を始める。
幻晶騎士を1／60サイズで再現した置物。一個原型を作った後、
鋳造で複製量産できないか 等。

一通り話を聞いたバトソンは考え込んでいた。

「お前にしては随分とまともな話だな。なるほど、幻晶騎士の置物
……悪くないな。

それなりに手軽な値段に出来れば、カンカネンやライヒアラ、大
都市ではそこそこと売れる余地はある。

よし、これは親父達に掛け合ってみよう」

「ありがとうございます。後、試作が出来たらすぐ」に教えてくださいね。真っ先に欲しいので」

「もしかしてこれはお前が欲しいものなのか

「はい、勿論毎日眺めたり頬ずりしながら過ごしますとも」

言いたいことは色々とあつたがバトソンは敢えて飲み込み、目の前の図面と説明を読み直す。

一通り見て領いた後、確信を持つてエルに問いかけた。

「で？ お前のことだ、これだけつて事はないんだろう？」

エルはにこやかに頷くと紙の束のうち別の図面を開いて解説を始める。

そこに書かれていたのは先ほどのような商品とは違つ、かつての銃ガンライ
グロッケ杖のように異様な発想で作られた道具。

「やつぱり来たか……」こいつはまた、銃杖に輪をかけて複雑な代物だな

「どこのまで実用的に出来るかも難しいところですけど。使えるならかなり面白い事になると思いますよ」

髪に覆われたバトソンの顔が笑みの形に歪む。

「そして随分纖細だ。また職人として腕が鳴るところだな。
まあ、幻晶騎士の置物の話も貰つたことだしな、こいつも何とか仕上げて見せようじゃねえか」

「よろしくお願ひしますね」

製作を依頼してしまえば、どちらも後は完成待ちである。

「完成が待ち遠しいですね。暫くは何も手につかないかもしれないです」

「そんなにか。どの道すぐできるようなものじゃないぞ」

「それでも、気分転換に必要なものですから。このままだとどこかで暴走します」

バトソンにはエルが暴走している時としない時の差が今一わからなかつたが、ふと思いついたことを勧めてみた。

「そんなに気分転換が必要だつたら、騎操士学科の工房にでも行つたらどうだ?」

「工房に?」

「ああ、ベヘモスとの戦いで、多くの幻晶騎士が壊れたんだろ?
だったら今修理の真っ最中じゃないのか」

バトソンとしてはほとんどただの世間話のノリだったのだが、それ

はエルにとつては恐るべき重要性を持つ情報だつた。

エルは一瞬ぽかん、とした表情を見せたがすぐに満面の笑みへと移行する。

「そうです……その通り、今修理の真つ最中なんですね！」

「だつたらきっと、むしろもつと幻晶騎士のことを調べるチャンス。ならばいつそ加えてもらつ勢いで……！」

「（うわしました、これは余計なこと口走つたんじやないか？）」「

「ありがとうございます、早速見できますね！」

「ああ、うん。あんまり暴走して邪魔しないように……な……」

バトソンの言葉が終わりきる前に、そこからは小柄な少年の姿が搔き消えていた。

彼はしばらく複雑な表情を浮かべていたが、すぐに割り切る。

そう、彼も伊達にエルと武器製作を行つてきたわけではない。時に諦めが肝心なのだ。

「……ま、いいか。いつはこつちで作業に入らないとな」

「そら、見つけたぜ」

「エル君確保ーー！」

「えーと、キッド、アティ？ 何故こんなところにいるのですか」

バトソンと別れ、ライヒアラ騎操士学園を目指して移動していたエルは、途中でオルター兄妹に捕まっていた。

二人とも現時点ではエルより頭一つ分背が高いため、両腕をそれぞれ持ち上げるようにして捕まるとエルの体が完全に宙に浮く。エルの銀髪も相まって、まるで連行される某宇宙人状態だ。この世界に宇宙人がいるかは不明だが。

「いや、此処にいるのは単に偶然なんだけどよ」

「見つけたからには捕まえないとね！」

「え？ 僕は珍獸か何かですか？」

「似たようなもんだる。あー、んで、どこに行こうとしてたんだ？」

二人の間でぶらーんと浮いたエルが観念したように溜息を吐く。

「いま学園では壊れた幻晶騎士^{シリル・ロット・ナイト}の修理が行われているはずですから。ちょっと見学に行こうかと言つところです」

「なんだ。じゃ、このまま学園まで行っちゃおう！」

「二人とも、行くのはいいですけどその前に離してください」

そして3人は授業のある日でもないのに学園へと辿り着いていた。しばしば騎操士学科に入りしているエルにとって、この場所は勝

手知つたる何とやらである。

迷いなく目的地にたどり着くと、慌しく作業に勤しむ整備科の生徒達の邪魔をしないよう、じつめりと工房の内部へと侵入する。

工房の内部は喧騒に満ちていた。

槌を振るう音、部品を吊り上げるクレーンの滑車の音、怒鳴り声、そして幻晶騎士の駆動音。

エルにとつては組み上げ作業を近くで見学したいのはやまやまだつたが、鬼気迫る様子で作業する整備科の生徒達を見ていると、邪魔をするのは流石の彼でも気が引ける。

そのため、勢い作業の行われていない方向へと進むことになる。

彼らはまだ作業の行われていない機体の前に来ていた。

そこに据えられた幻晶騎士整備用の巨大な椅子の上には、天井からクレーンで吊るされた残骸としか表現できない金属の塊が鎮座している。

恐らくは幻晶騎士の胴体部なのだろう。しかし外装がひしゃげ中身は骨格から歪んでいるため、エルはともかく双子はそれが一体何なのか、即座には把握できなかつた。それが置かれた場所、そしてこびり付くように僅かに残る装甲の紅い塗装がヒントとなり、彼らは漸くそれの正体に思い至る。

「こいつが……その、エルが乗ったグウホール、ってやつか？」

じつと残骸を見上げるエルの横顔を伺いつつ、キッドがぽつりと問いかける。

「ええ。この装甲や、壊れ方には見覚えがあります。

本当に派手に壊れたことで……さすがに修理は後回しだされたようですね」

アディは言葉もなく、その完膚なきまでに破壊された残骸に見入っていた。

目の前のそれは、万の言葉よりも尚雄弁に、陸皇龜ベヘモスとの戦いの激しさを物語っている。

それは幻晶騎士を操つたことのない双子にも、容易に想像できるほどだった。

キッドもアディも、以前にエルの話を聞いて、彼がどれほどの危険に立ち向かってきたか、わかつているつもりだつた。

しかし現実に目の前に示された残骸を見て、その想像以上の姿に言葉を失つていた。

まるで飴細工のように滅茶苦茶に歪んだ巨大な金属の塊。

それを為しえる力とは、果たしてどれ程強力なことであろうか。

それに立ち向かうという事は、果たしてどれ程危険なことであろうか。

キッドは自分がいつの間にか血が引き真っ白になるほど強く拳を握り締めていた事に気付いた。

アディの目には、うつすらと涙すら浮かんでいる。

ほんの少し何かが違つていれば、エルはある戦いで死んでいたかも知れない。

唐突に思い至つたその考えは、彼らの背筋を一瞬で寒からしめた。

何よりも、エルがそれだけの危険に立ち向かっている間、知らなかつたとはいえ何もせずに居た自身への憤りが、彼らを内側から圧迫する。

言葉を失つたかのような二人の耳へと、エルの漏らした微かな咳き声が届く。

「……しい」

「え？」

「壊れた機体もまた、美しい……」

「「……」」

ほつ、と溜息をつくエルの横顔はまさに恍惚のそれ。
二人の表情が一気に曰く言いがたい微妙なものになつていく事に気が付かず、エルは言葉を続いている。

「そう、形あるものが崩れ、後には残骸だけが残る……これが詫び寂びというもの。」

「この漂う寂寥感、廃れたものの想い……ふつくしい……」

双子の視線が一瞬だけ交錯し、第132回オルター兄妹会議は満場一致を見て無言のままにエルへの攻撃を決定した。

「！？ いつ……いひやいいひやい、いひはりらにするんれふは」

両側から頬をつねられたエルは珍しく涙目で抗議の声を上げる。
それを聞く双子は無表情で頬をつねり続けていた。

「やれやれ、どこのどいつだ、こんなとこではしゃいでやがるガキは」

しばらく頬をつねり続けられた後、漸く開放されたエルが両頬を押さえて一人に講義していると後ろから声がかかる。

彼らが振り返るとそこには、頑強な体躯のドワーフ族……親方の姿があつた。

野太い親方の声は、騒音の絶えない工房内でもよく響く。

「なんだ、銀色坊主^{エルネスティ}じゃねえか、まつた入り込んでやがるのか。

おめえも好きだな、おい。あんま作業の邪魔すんじやねえぞ」

しかし、エルはやや呆れた雰囲気の親方を見てもおらず、その視線は親方の隣にいる人物へと注がれていた。

そこに居るのは幽鬼も斯くやとばかりの蒼白な顔色を浮かべ、目の中には色濃く隈が残り、以前は丁寧に撫で付けられていた金髪は見る影もなくボサボサとなつた。ディートリヒだった。

一瞬記憶の中のディートリヒと印象が合わず、エルは思わず目を擦るもの、何度見直しても目の前の前のディートリヒはボロボロだった。その雰囲気にも霸氣はあるか、尊大ともいえた自信の一欠けらも残つてはおらず、ただ焦燥だけが感じられる有様だ。

「え、えーと……ディートリヒ……先輩？」

微妙に引き攣つた笑顔で問うエルも自信がなさそうだ。

それくらい、今のディートリヒは変わり果ててしまつていてる。

「…………ああ、エルネスティか」

「え、えっと、一体何があつたのですか？」

エルの言葉にディーは軋むように笑顔を作り、錆び付いたような声で話し始める。

「ふ、ふふ……少し……そう、少し、ちょっと、だ。

最近よく悪夢を見るんだよ……医務室の悪魔が、来る……。

おかげで、最近、寝不足でね。

そう、気を抜くと、奴が、ぐ、やつが、奴がぐぶべつ

喋っている間に悪夢の記憶がよみがえったのか、徐々に田の焦點が怪しくなり、世界の向こう岸へと届きかけたディートリヒを親方のチョップが引き戻す。

ディートリヒはしばらくその場で悶絶していたが、親方の一撃が効いたのかちゃんと正気に返っていた。

「ぬ」「おおお……ハツ、私は今ど」「く……。

「おつほん！」

まあ私の事は良い。それで、エルネスティも居るという事は、君も説明に呼ばれたのか。

それなら手間が省けそうだな

「ああ？ 銀色坊主が何を説明するんだ？」

「何つて、グウエールが壊れた原因が知りたいのだろう？だからその原因を呼んだんじゃないのかい？」

彼はしばらくな間怪訝そうにディートリヒとホールの顔を交互に見ていたが、言葉の意味を理解するにつれ、むしろ怪訝な表情が深まってゆく。

「待て、ディートリヒ。それだと銀色坊主が原因でグウエールが壊れたように聞こえるぞ」

「えつ？ その通りじゃないか……もしかして、知らずに呼んだのかい？」

「いや、そもそも呼び出したんじゃなく」「ここの勝手に居たんだがな

」「……え？」「

微妙に噛み合わない会話に全員が首を捻る。

数瞬の間を空けて、ディートリヒがぽん、と手を打つた。

「ああ、これはひょっとして非常に余計なことを口走ったのかね？」

「見事にその通りだと思いますよ」

「まあ、何でも良いが」

親方は長く伸ばした髪を撫でつけながら、一人に向けてギロリと鋭い視線を送る。

「「」の際、洗いざらい説明してもらおうか」

全身の筋肉を唸らせながらにたりと笑う親方に反論できる者は、その場にはいなかつた。

エルがグウ エールを操縦していた時、ディートリヒもその場にはいたものの、彼はエルが行った操作の具体的な内容を把握しているわけではない。結局は説明の大半をエルが受け持つことになった。しかしいざ説明を進めると、間を置かず問題へと突き当たる。

「…………すまんがもう一度言つてくれ」

「ええ、ですから。僕が乗つても操縦桿や鎧に手足が届きませんから。

魔導演算機内の魔法術式マギクスエンジンを転写スクリプトして、自分で演算して幻晶騎士を

動かしたのですけど」

豊かな髪を蓄え、普段から厳しい表情を崩さない親方が珍しいことに目を見開いて驚愕している。

それも無理なからぬことで、そもそも幻晶騎士を動かす魔法術式は到底人一人の力では制御しきれないからこそ魔導演算機というものが

が存在するのである。

それを使わず自力だけなどと言われても、普通は信じられるものではない。

実際に背後でグウエールの動きを見たティートリヒはともかく、親方が半信半疑の表情となつてゐるのを誰が止められよつか。

「……百歩譲つて、それはまあいいとしよう。

それで？ それどここつが魔マナ力の途絶で自壊してると、ビリーヴ関係があるんだ？」

つまり魔導演算機を代替すると言つ事は、ありとあらゆる機能を自由に操作できると言つことです。

それでべへモスにトドメをさす際に安全装置セーフティを解除して、機体の持つ全ての魔力を攻撃に回しまして。

構造の強化を維持できないほど魔力を使つてしまつたのですよね「無茶苦茶じやねえか！！ そんなもん如何やつて対策しろつて言うんだ！！

そもそもが対策としての安全装置だつてのに

口調は荒くとも、親方はエルのしでかした無茶にしきりに頭を振つている。

彼が吐いた、諦めを多量に含む吐息はどこまでも深かつた。

「確かに。それについてはこの操作は僕くらいしかやらないでしょうし、対策はいいのでは？」

「当たり前だ！ そんなもんぽんぽんと出来てたまるか！！

ああもういい、後は、だ。脚の結晶筋肉が疲労断裂してやがったが、アレもお前のせいか。

いやお前のせいだな？」

「間違つては居ませんが……何だか言い方が訛然としません

「つるせえ、やつぱりお前のせいだ！」

「あれは、直接制御の反動ですよ。

幻晶騎士のレスポンスを最大にして、普段想定される以上の負荷をかけてしまったために限界を超えて、断裂してしまったのです」

「お前なあ……全身張り替えなんぞやつた日には、普通一月は無事に動くつてのによ」

親方はついに額に手を当て天を仰いだ。もはやここまで来ては処置なし、の一言に及ぶ。

この時点でも十分に頭が痛いが、彼はふと最悪の可能性に気が付いてしまった。

「するつてえと何か、坊主が本氣出せばどうこつも壊れるつてのか？」

「現時点ではその可能性が高いですね。

騎士団のカルダトアならば結晶筋肉の品質が高いので、もう少し長持ちはするかもされませんけど」

結局は負荷の問題ですね、などとのんびりと咳くホールを横田に、親方は渋い表情になる。

「ちつ、そいつあ改善しねえと鍛冶師の面倒つてもんが立ちゃしねえ。

とは言えそんなもんを今すぐどうにかする手段なんてねえしな

これまでにこんな無茶をした騎操士など存在しないため、対策が存在しないのも当然と言えば当然の話だ。

その上これほどの問題に対応するためには応急処置ではなく、相当根本的な部分での対策が必要となる。とても一朝一夕に改善できるものではなかった。

一先ずは今回の修理での対策は見合せよう、後から対応策を練れ

ば良い……そう親方は現実的な方針を心の中で決めようとしていたが、あいにくとその場には非現実的を地でいく存在が居る。

「ある程度の対策は考えてあります。要は結晶筋肉の耐久性を上げればいいのですから」

さういふとおっしゃってのけたエルに、全員の視線が驚愕を乗せて集中する。

「結晶筋肉の耐久性をあげるだと？」

簡単に言うがお前、それをするために鍊金術師の野郎どもがどれだけ研究に没頭してると思つてんのだ。

実際の話としてここ数十年はほとんど改良されてねえんだぞ」

「ああいえ、耐久性をあげるのですけど、結晶筋肉自体は変えません。

僕も、鍊金術に関する経験は乏しいわけです。

なので、結晶筋肉の使い方に一工夫してはどうかと思いまして

「使い方で？」

「ええ、一先ずですね……」

疑問符を浮かべる面々を前に、エルが解説を始める。
彼が提案したのは結晶筋肉の纖維を束ねて編み、綱^{つな}とする、と言つたのだつた。

一本一本では脆弱な纖維も、縫り合わせて使えば耐久性が上がる。
さらに縫り合わせて捻りを入れた事により、結晶筋肉の纖維ごとの全長を長く取れるため出力の増大も見込める。

例えるならゴム紐をそのまま使つよりも、捻つて使つたほうが強い力が出るよつなものだ。

「名付けて綱型結晶筋肉と言つたところですか
ストランド・クリスタルティショ

一通り説明したエルは実際に結晶筋肉の纖維を編み、その場で伸び縮みさせていた。

双子は良くわかつていないので、そういうものなのか、と言つた感じだったが幻晶騎士に関わってきた人間の反応は劇的だった。これまで少なからず幻晶騎士の改良を試みてきたであろう親方が、綱型結晶筋肉を手に取る。それを調べつつ、何かに悩むようにしきりに頭を振つては考え込む、しばらくの間はそれを繰り返していたが、やがて諦めたように息を吐いた。

「結晶筋肉の纖維を縫つて使う……こいつは盲点だ」

日頃から重々しい彼の言葉だが、その一言はまさに万感の思いが籠つたものだった。

「そうなのですか？　今までやつていなかつたのも不思議でしたけど」

「確かに坊主の言つとおりだ。言われて見れば、無かつたのが不思議なくれえだ。

……でもよ、幻晶騎士の改良つてのは普通、骨格の形と筋肉の張り方を考えるもんだ。

後は材質そのものを向上させるか。筋肉の組み方まで変えるなんて発想は、ねえんだよ」

「（幻晶騎士つてのは良くも悪くも生物……人間に類似し過ぎてる。感覚的な扱い易さや理解のし易さを優先したのかも知れんけど、そのおかげで発展性が阻害されてる。

人体の常識から外れるつて発想がないんやな……）」

金属で骨格を作り、結晶で筋肉を構成しているというのに、幻晶騎士は根底では生物的な肉体と類似した扱い方をされている。

一種の矛盾ではあるが、それが長きに渡る慣習として染み付いているため、幻晶騎士の設計に携わる人間には根本的な変更を行うという発想がなかつたのだ。

ほんの単純なアイデアで新たな方法を得た親方は早速周囲を走り回る生徒達を集め始めた。

彼の表情は髪に埋もれわかりづらいが、中々見られない獰猛な笑顔が浮かんでいる。

「はは！ わかつてみりやこいつは面白えなー！」

ちょうど良い、今修理中のやつに早速こいつをぶち込んで見るか！――」

珍しく上機嫌極まりない親方の様子に、集まり始めた生徒達が軽く引いているが、彼は気にした様子もなく周囲を見回し。

「でしたらついでに」

これから行われる幻晶騎士の改良に思考を埋められかけていた親方の耳に、悪魔の囁きが届く。

「少し、人の形から離れてみませんか？」

ゆつくりと、言葉を咀嚼しながら時間をかけて親方が振り向く。果たして振り向いた視線の先には、眩しいほどに輝く笑みを浮かべたエルの姿があるのでした。

「背中に腕を増やそうかと思つのです」

少女然とした花の様な愛らしげ見えた目に、まさに花開くよつた輝く笑顔を浮かべたエルの台詞は、しかしあまりに酷いものだった。説明の過不足などと言つ次元をとうに越え、妄言か戯言に片足を突つ込む勢いだ。

確りとその言葉を聴いたはずの親方がその意味を把握するまでに先の言葉以上の時間が必要であり、しかもエルの言動に慣れているはずの双子すら訝しむような、呆れたような表情を隠せないでいた。

シリエットナイフ
幻晶騎士と言つものはそもそも“人の形をした”兵器である。

それは前提条件どころではなく、この世界においては至極当然の常識だ。

そしてこの世界でも“ヒト”的形は「腕に」一脚。それは不变の事実である。

世界広しと言えども腕の数が多い人間がいるなど、そんな話は聞いたこともない。

……万が一未開の地に存在していたとしても、それが人間と呼ばれるかは怪しい所だ。

今のところそれが存在し得るのは唯一、御伽噺や物語の中だけだった。

つい先ほどまで幻晶騎士の構造を変更すると言つ発想を持たなかつた彼らにとって、そんな奇妙な形をした機体は想像することすら困難だ。

故に幻晶騎士の背中に腕を増やすなどと言つ言葉がどうやら出て出で

きたのか、言い放った本人以外にその理由を理解できる者は誰も居なかつた。

親方は大量の呆れを含んだ溜息と共に言葉を返そうとして、ふと思いつどまる。

これが他の生徒から出した台詞ならばただの妄言だが、そこはつい先ほど網型結晶筋肉ストランド・クリスタルティッシュという新たなアイデアを示したエルが放った台詞である。

ほとんど罵声に近い言葉を力強くで飲み込み、親方は非常な努力を払い、できるだけ落ち着いた言葉で問いかけた。

「……一応、念のため、聞くぞ。な、何のために、どうやってだ？」

必死の努力にも関わらず、彼の声が多少震えていたのを責める事は出来ないだろう。

「何故かと言いますと。前回動かした時に気付いたのですが、幻晶騎士つて腕が2本しかないですね」

「え？ うん、勿論だけど、そんなの当たり前つて言うか、え？」

「まあ落ち着いて、アティ。まずは最後まで聞いてください、ね？」

……で、ここで問題に思つたのが魔導兵装シリウシットアーマーズの扱いです。

幻晶騎士が遠距離攻撃を行うためには魔導兵装を使用する必要があつて……そして、それを扱うには手に持つて使うしかない。

だから距離と状況によつて剣と魔導兵装を持ち変える必要が出てきます

「一日言葉を切つたエルが、軽く周囲を見渡す。

そこに居並ぶ面々の顔には、一様に「それは当たり前で、何が問題かわからない」と書かれている。

まだ早かつたかなあ、とHルは心中で一人ぐらうが、一度流れ出した水を止めることはできない。

こうなればとこととまでどばかりに氣合を入れなおし、言葉を続けた。

「ですが、それはかなり非効率的だと思つのですよね。

持ち替えると隙も大きいですし、当然至近距離になれば魔導兵装を仕舞わざるを得ませんし。

ですから、背中に魔導兵装を使用するための腕……のよひなものを見加したいのです。

わざわざ持ち替えなくとも、いつでも魔導兵装を使えるよつ

笑顔で語るHルの言葉に対する反応は芳しくはない。周囲の全員が色濃い困惑を表情に乗せている。

誰もが違和感と疑問を感じ、それをどう言葉にすればいいか迷つてゐる。何とも言えないその空氣の中で動いたのは、やはり技術者の長、親方であった。

「……言わんとするこたあ、わからないでもない。

」の際腕を増やすなんて暴論の是非は、ちょっと横に置いといてやる。

しかしよ、仮に魔導兵装用の腕増やしたところでそんなもんどうやって動かすんだ？

言つまでもねえだろ、人間の背中に腕はねえんだよ。ねえもんは、どうやつたつて動かせねえ

親方が指摘する間でもなく、その疑問は当然、全員が抱いていた。

幻晶騎士の操縦方法は基本的に騎操士ナイトランナーの四肢の動きを基点としたものである。

そのシステム上、騎操士……人間に存在しない部位の操作は不可能

に近い。

いや、そんなシステム上の理屈を持ち出すまでもなく、彼らの感情が人に在らざる部位の追加に拒否反応を示しているのだ。

出来るならばこの奇妙な話を笑い飛ばして、終わってしまいたい。漠然とではあるが、それは等しく皆が感じていた。

しかしエルの顔から笑顔が無くなる事はなく、同時に彼は進む脚を止める事もない。

一人この世界の常識から遊離する、異世界の落とし子はついに幻晶騎士という存在そのものへとメスを入れる。

「懸念はございません。何も本当に腕そのものを追加するわけではありませんし、腕と同等に動かす必要もありません。

要は魔導兵装を保持し、それを撃てればいいのですから。

ですから……

集まつた全員の困惑と拒否を受けながら、エルは滔々と言葉をつむぐ。

小柄であることも、少女のような外見であることも関係なく、ただ自信と辿り着くべき明確な目標がエルの言葉を強力に後押しする。いつしかその場に居る全員が、彼の言葉とその勢いに呑み込まれ始めていた。

「同時に、専用の自動動作術式と、照準用の機能を作ります。

それらを合わせた、魔導兵装装備用の部位の追加、そしてその制御システムの追加。

これが僕の提案……背面武装と火器管制システムの、開発です」

バックウェポン ファイアコントロールシステム

整備場の一角に「会議室」と呼ばれる、仕切りで区切られたちよつとした空間がある。

そこには黒板と椅子が並べられており、主に整備班の打ち合わせ用に使用される場所だ。

余りにもそれまでの常識から外れたエルの提案を、それでも一蹴せずに検討するために一同がそこに集まっていた。

エルの鈴を鳴らすような声が説明を続け、カツカツカツ、とリズミカルな音を立てて動くチョークが黒板へと異形の機能の全貌を刻んでゆく。

「先ほどは腕としましたが、実際に僕が考えているのはもっと簡単な構造の……可動機構を持つ固定器具のよつなものですね」

背中に追加する腕 以下、補助腕とする に求められるのは、魔導兵装を使用しない場合に収納する機能と、そこから発射状態へと移行する機能だ。

展開した場合は魔導兵装が肩越しに正面を向くような状態になる。そして、火器管制システムは補助腕の収納、展開時の動作を制御する魔法術式^{スクリプト}を格納する。

この動作自体に大きな自由度を与える必要はなく、あくまでも収納と展開と言う一定の動作を行えばいいため、これは騎操士へ負担をかけずに入システム内で自動的に処理することが可能だ。

そこまでなら単に魔導兵装が前を向くだけだが、この後が火器管制システムの最大の特徴 照準機能の搭載である。

操縦席に映像を移す幻像投影機に照準線を表示し、照準と魔導兵装を連動させることで自動的に発射方向の制御を行うのだ。

エルがここまで説明を行ったところで、それを聞く生徒達の表情が

俄かに変化してきた。

両腕を自由にしながら魔導兵装を使用し、あまつさえ狙いをつけることすら可能になる。

幻晶騎士を動かす専門家は騎操士達だが、整備班の生徒が幻晶騎士を動かせないわけではない。

それ故に背面武装がもたらす利点 攻撃機会の増加、戦術の幅の増加、そして攻撃能力自体の増加 を、ゆっくりとだが把握し始めたのだ。

「火器管制システムについては、魔導演算機^{マギウスエンジン}の余り領域内に機能を追加します。

あ、勿論ここを作るのは僕がやります。

そして、この機能を使用する場合に騎操士に求められるのが……」

騎操士に追加で求められるのは照準を上手くつける技能だけになる。何故なら、わざわざ補助腕を自在に動かす必要がないため、展開収納、照準まで火器管制システムにより自動的に処理されるためだ。展開と収納の切り替えは操縦席からのごく簡単な操作で行い、処理上での実質的な負担の増加はないに等しい。

求められるのが技能であるならば、つまり後は訓練次第といつことになる。

「……と、以上が提案の概要です。

具体的な構造については後々詰めることになると思いますが……如何でしょうか？」

可愛らしく小首をかしげるエルに対し、反応を返すことが出来たものはその場には居なかつた。

今、工房の内部は恐ろしいほど沈黙に支配されている。

エルが語った“技術”は凡そ常識というものを丸ごと投げ捨てた代物だ。

人型から外れた部位の追加、それまで不可侵であつた魔導演算機への機能の追加。

事前に綱型結晶筋肉という提案を受けていても尚、エルの発想はその場の生徒達にとつて異様であった。

しかし、エルはそれを理路整然と説明して見せた。

黒板に並ぶ文字は技術者に共通の言葉である“技術”を語り、そこには夢物語も御伽噺も存在しない。

一笑に付すには現実的で、無視するには魅力的な、技術。

「（昔取った杵柄やけど、まだプレゼンテーション能力は落ちていな。）

さて、もう一押しやろか？」

整備班の生徒達は、明らかに迷っていた。

せめてそれがあやふやな説明であつたなら彼らは苦もなく拒否できただのだが、なまじ実現性を検討できるだけにたちが悪い。

彼らの中でこれまでに培つた常識が盛大に違和感を訴えかけ、それでも提示された技術がもたらすものを考えて理性が賛成を勧める。思考の板ばさみ状態に陥り、言葉に詰まる彼らの背中を押すべく、更にエルが話を続ける。

「幻晶騎士とは、人の姿を模してはいれど、つまるところ道具であり、機械です。

ただ闇雲に人の姿に拘泥する必要はありません……。

求める機能があるなら、それを実現するに相応しき姿をとつても、良いと思いませんか？」

御伽噺に出てくる悪魔が現実に存在すれば、きっとこんな感じに違いない。

見目麗しき姿で、魅力的な誘惑を囁き、知らず知らず、この世の理から外れてゆくのだ。

期せずして全員の思考が揃つて斜めにずれだしたところで、親方が大仰に息を吐いた。

「全くおめえ、何もんだ？」

随分と幻晶騎士が好きなガキだとは思つてたが、中身は悪魔か何かか？」

「えええ、その言いようは酷いです。流石に僕も傷つきますよ」

よよよと泣き崩れる真似をするエルに、親方の呆れた声が続く。それだけのことではあるが、その場に満ちた重苦しさを含む空気が徐々に弛緩していくのがわかつた。

「言つてやがれ。

……が、ハツ！　いいじゃねえか。機械、道具、人なんぞクソ喰らえつてか。

そういうのは嫌いじゃねえ。悔しいが坊主の話は理に適つてる。いいぜ、こちどら幻晶騎士を改良するのが本職の鍛冶師様だ。おめえの提案に乗つてやうづじゃねえか！－！」

豪快な笑顔を見せる親方の言葉が、残る全員の逡巡を吹き払つた。それをきっかけとして、彼らの中の技術者としての思考が常識の壁を乗り越える。

彼らは一丸となり、綱型結晶筋肉、背面武装、火器管制システム

その技術がもたらす、幻晶騎士の新たな姿へと向かつて一步を踏み出す。

それは小さな一歩ではあるが、確実に彼らの中の意識そのものを変化させていた。

ライヒアラ騎操士学園から生まれた波紋は、いずれ国内、そして世界へと伝播する。

異世界の理をその身に取り込んだ幻晶騎士という存在は、この時を起点として新たなる進化を始めたのだった。

時刻は夕方を過ぎようとしている頃、ライヒアラ騎操士学園の学長室の扉を叩く者達がいた。

中から応じる声がかかり、彼らは室内へと入ってゆく。室内には学園長であるラウリ・エチエバルリアがあり、来客　彼の孫エルネスティ、そして騎操士学科・鍛冶師学部の親方ことダーヴィド・ヘプケンを迎えていた。

「ふむ……これは……」

ラウリの手元には資料が握られている。それは綱型結晶筋肉を使用した機体の構造から背面武装、火器管制システムの内容までをまとめた仕様書だ。

「学園長、仕様書にあるとおりだ。

我々騎操士学科整備班はエルネスティが発案した機能を搭載した幻晶騎士の製作を提案する」

ラウリは最初、一人が学長室を訪れた時はその珍しい組み合せに目を丸くしていたが、仕様書を読み進めるに従い表情が険しくなり、そして最終的に突き抜けた。

仕様書を机に置いた彼は知らず遠い目で彼方を眺めている。

「やれやれ……予想外と言つたか何と申つか、とんでもないことをやらかし始めたの」

「やらかしてるのは学長の孫だ」

「だから予想外と……いや予想以上かの？ まあしかし、随分と突飛な話じゃが実現できるのか、エルや」

エルはやはり笑顔を浮かべている……が、家族であるラウリにはわかる。

エルの瞳は常に無い熱意と自信に溢れんばかりであり、今なら多少の常識くらい軽く曲げてしまいそうな勢いであることを。

「はい、時間さえいただければ、必ず」

そしてその返答も予想に違わぬものだった。

「（拜啓陛下、うちの孫は予想以上に暴走しどります。わしこれ御するの無理じやね？）」

「……お祖父様？ それで、如何でしょうか？」

より遠く、具体的には王都^{カンカネ}に向けて念を飛ばしていたラウリはそのまま葉に我に返る。

「学園長、機体の構築、改造については生徒の自由裁量に任せられているはずだ。

ただ、こいつは今までの改造とはモノが違う。製作のリスクを考えると一応アンタの許可が欲しい」

「いいじやうひ。ちよどほとんどの機体が組みなおしそうな状況じゃ、多少の失敗は恐れずともよい」

しかしじゃとすると、しばしば騎操士達が窮屈になるの

「まあ、修理が遅れるのは仕方ねえところだ。新型を組むのに人を使っちゃうしな」

「そりゃのう……彼らには基礎練習を中心こよつてもうつしかないかの」

「それでしたら」

一人の会話に二じんとばかりにエルが割り込む。

「幻晶騎士の操縦訓練用に考へていた方法がありますので、そちらにもご協力いただけますか?」

エルの笑顔が、ついに悪魔の微笑にしか見えなくなってきた二人だった。

とっぷりと日が暮れたライヒアラ学園街を三つの影が並んで歩いている。

真ん中を歩く小柄な人物 エルは今にも鼻歌を歌いだしそうであり、その様子は上機嫌の一言に尽きた。

浮かれに浮かれた彼だが、その外見も合わさってそれでも傍から見れば微笑ましく見えるのは、幸か不幸か。

エルとは対照的に、その横を歩くキッドとアーディの表情は晴れないものだった。

「なあ、エル

「はい?」

「今日の説明、正直全部わかつたわけじゃないんだけどよ。

あれをやつたら、幻晶騎士は強くなるんだろ?」

「はい勿論!」

キッドはそれに言葉を返そうとして、しかし一瞬言ひよどる。

「……その、だつたらよ。エルって、あれで……幻晶騎士を強化して、また魔獣と戦いに行くん、だよな？」

ほんの瞬くほどの間、エルの表情が笑顔のまま引き攣つた。

「（やべ、戦闘とか以前に改造することしか考えてなかつた！）

心中で咳払いしながら焦りを振り払い、エルは笑顔のまま答える。

「そうですね。僕の場合は単純に動かしたいというのも強いですけど、幻晶騎士を動かす理由の大半は、それでしょう？

それに騎士、騎操士になれば否応なく魔獣との戦闘は避け得ませんし」

「そうだよな、エルはやっぱ戦つよな。……もう、戦えるんだな」

キッドの様子を訝しむ間もなく、エルは横から腕を伸ばしてきたアディに捕まつた。

「エーリー君！ 約束、忘れないわよね！…」

「え？ え……あ、一人にも、教えるんでしたよね？ 幻晶騎士の動かし方とかを」

「そうよ、私達だってやれば出来るの！」

もう駄目、エル君一人で戦うのなんてもう絶対許さないからね

エルは苦笑を禁じえない。

「覚えていますよ。ちゃんと、方法も考えていますから。

そうですね……まずは魔導演算機の制御術式を学ぶところから始めて、いざれば直接制御まで辿り着けるようにしましょうか」「望むところよ！」

「おう、そうだな、そうだよやつぱそういうなくつかやな！アティもやる気まんまんだしよ、任せとけ相棒、すぐに追いついてやつからよ」

「（その言葉も久しぶりに聞いたなあ……んじゃまあさて、我が愛弟子達のために一肌脱ごうかね）」

後日

「なつ……何？　これ、何！？」
「ええ、ちょ、エル？　なんだこれ、何をするつもりだ！？」

双子の前には、これまでに見知った並の教科書など遙かに凌駕する、重質量鈍器と化した紙の束が置かれていた。
その厚さたるや地球で言つところの広辞苑をも上回り、読むのも一苦労する代物だ。

「何つて……折角やる気を出した大事な大事な幼馴染のために、僕が身を粉にして書いた手製の幻晶騎士制御用の魔法術式教科書ですよ。

それはもう、僕は一人のやる気を最大限尊重していますから

双子の顔色は真っ青になつてている。

これまでもエルから魔法を習つてきた一人ではあるが、それは理論実践相半ばのものであり、極端な座学オンリーではない。

しかし今回は見るからに座学だけで別の世界に到達できる勢いだ。
教科書の厚みを見ただけで魂の抜けかけていた双子を、エルは手拍子一拍で呼び戻す。

「さあ、みつしつと、お勉強を、始めましょ！」

双子は後に述懐する。

あの時初めて、笑顔とは実は恐ろしいものである、と知ったのだと
……。

ライヒアラ騎操士学園に、授業の終わりを告げる鐘の音が響く。

授業中は静まり返っていた教室に、途端にざわめきが満ちる。授業の続行が不可能であることを悟った教師は小さく嘆息すると挨拶を残し、教室から出て行った。

授業から開放された生徒達は思い思いに放課後の時間を過ごし始める。

街から出れば魔獣の脅威に晒されかねない、そんなシビアな世界であっても、学生と言うものはそつは変わらないものであるらしい。それは学生の一人であるヒルネスティ・エチエバルリアにとつても例外ではない。

彼は傍らに置いた鞄の中身を確認すると席を立ち、幼馴染である双子の元へと向かっていた。

「キッド、アーディ」

「あー、おう、エル。あれか、今日もあれの勉強か」

「あれね、きっとあれね。今日もあれなのね」

心なしかキッドとアーディの顔に元気がない。

周囲のクラスメイト達は開放感に溢れた様子だと言うのに、彼らはまるで試験期間中の学生のように余裕を失っていた。

「それについてですけど、今日僕は工房のほうでやつておきたいことがあるので、勉強会は中止にしようかと。

それでその間に二人にはあの本を読んでおいてもらおうかと思いまして」

「そ、そうー？ そうよね！ ヒル君にもやらなきゃいけない事は

あるしね！

とりあえず続きを読むでおくわね～

「はい、こちらの作業の進み具合によつては近々実演に入れるかと思ひますので……。

その前に、500ページほど読み進めておいてくださいね」

「「えつ」

愕然とした表情の二人を残し、ぱたぱたと足音をたててエルは工房へと向かう。

取り残された一人は周囲のざわめきも気にせず、ゆっくりと崩れ落ちていった。

工房の内部は相も変わらず喧騒と騒音に満ちている。

慌しく行き交う生徒達の間から田当ての人物を見つけ、エルは人ごみをすり抜けるようにすとすと進んで行く。

「親方、少しお願いしたいことがあるのですけど……

……えーと、親方？　何故皆様こんなにぐつたりしてるのでですか

？」

「おう坊主……いや、ストランド・クリスタルティショ 綱型結晶筋肉を作つてたんだがよ」

「はい」

「……まさか俺らも、騎操士学科に来て糸巻き機を回す事になるた
あ思わなかつたぜ……」

「ああ……あの、お疲れ様です」

「だがまあ、その甲斐あつたつてところだ。ほれ、こいつを見てみる

親方が投げて寄越した資料には、様々な数字が並んでいた。

それは結晶筋肉^{クリスタルティッシュ}を普通に使用した場合と、綱型^{ストランドタイプ}にして使用した場合

に発揮する出力のデータをまとめたものだ。

そしてその後には同じ綱型でも、編み方を変えた場合の出力の比較が続いている。

「服飾学科の生徒に、結晶筋肉で色々な編み方を見させてくれって言った時には危うく医者を呼ばれかけたぜ」

「無茶しますね」

達成感とも何ともつかないものを含む、親方の眼差しは遠い。

しかし彼らの尊い犠牲を乗り越えて集められたデータはまさに値千金、万金の価値があつた。

最も効果的な編み方をした場合の最大出力は従来の1・5倍に達している。

そして強固に縫り合わせ編まれた綱は、伸縮の繰り返しに対しても従来の10倍近い耐久性を示していた。

「予想以上ですね。僕の予想だと行つても出力2割り増しの、倍の寿命程度と思つていたのですけど……」

「は、言い出したのは確かにおめえだが、俺らも何もしねえただつてもらつちや困るつてもんだ。

まあ実際効果があつたもんだから段々悪ノリじみたのは否定しねえがよ。

それとやつてみて思つたんだが、使い方一つで相当効率に差が出るもんだな。

「こりゃあこれまで漫然と使つてた部分も、見直しやまだまだ改善できんじゃねえかと思えてきたぜ」

そう言つて笑う親方はまるで子供のように一カツと笑つている。

静かに笑みを浮かべるエルと並ぶどちらが子供かわからない雰囲

氣である。

そうして一人が結果について話しあっていると、整備場のざわめきが一層大きくなつた。

その中から、油に塗れた生徒が大声で親方を呼ぶ。

「親方あ！ 腕の張替え、終わりやしたぜ！」

「おう！ 今いく！ …… よし坊主、ちょうど綱型の試作を動かすところだ、一緒に見てけ」

「勿論拝見させていただきますとも」

そこに在るのは、右腕だけ外装アウタースキンを外され、結晶筋肉を剥き出しにした巨大な人体だった。

右腕に張られた筋肉は纖維の太さが太く、綱型を使用した部位であることがわかる。

これがもし生物の肉と同色であつたならぞぞかし精神衛生上良くなイい光景だつたのであるうが、結晶筋肉はくすんだ白色をしており、その巨大さと相まって一種の彫像のようにも見えていた。

「よおし！ おめえら離れる！ これから動作試験を始めるぞ！」

周囲で作業していた生徒達が蜘蛛の子を散らすように離れてゆく。整備用の椅子に座つた状態の機体に騎操士ナイトランナーが乗り込み、圧縮空気の音を残して前面装甲が閉じてゆく。

綱型を使用した側である右手には、巨大な金属の塊が握られていた。これまでに綱型結晶筋肉単体での出力データは取られているものの、実機に装着しての動作実験はこれが初めての事だ。

周囲の生徒たちも期待に目を輝かせ、固唾を飲んでその腕を見守つている。

合図に合わせ、幻晶騎士が腕を持ち上げる。

一の腕の結晶筋肉が収縮し、盛り上がるのが薄い一次装甲の隙間から見えていた。

「ほお……」いつあすげえな

その機体が持ち上げている金属の塊は、普通の幻晶騎士では両腕で持ち上げるので精一杯という代物だ。

それを軽々と片腕で持ち上げる、綱型を使用した筋肉の出力は流石と言つべきものだった。

ギィイイイイ……キイ

「出力の向上、耐久性の向上。上手くいきそうですね」

「おう、坊主が動かしても早々は死なねえ機体になりそうだな」

ギギィイイイ……ギギ……ギィイイイイイ

「ところで親方、何か聞こえませんか？　いつ……何かが軋むような音が」

「おめえにも聞こえるのか、なら」いつは空耳じゃねえってことだな

「」

「」

二人が顔を見合わせ、機体のほうへと振り返った瞬間、乾いた炸裂音と共に機体の右腕が文字通り炸裂した。

結晶筋肉が広がり、金属の塊が地面に落ちるが、そんなことを気にするものはその場にはいなかつた。

何故なら右腕に装着されていた一次装甲がまるで散弾の「」とく周囲へと飛び散つていたからだ。

幻晶騎士を覆う巨大な装甲による散弾。そんなものに当たれば当然、

ただでは済まない。

一瞬で整備場は阿鼻叫喚の地獄と化していた。

「……!? ……！」

「冗談じゃない！！」

直前に割り込んだエルが、抜き放ったワインチエスターで装甲の破片を迎撃する。

低い姿勢で下から多量の圧縮空気弾を撃ち放ち、飛来した装甲の軌道を変える。

甲高い爆裂音を残し、装甲は上に大きく弧を描くとそのまま後ろの壁へと突き刺さった。

騎操士学科に所属すれど親方の本職は鍛冶師である。その上元々ドワーフ族自体が素早さに欠ける事もあり、とつたの反応は望むべくもない。

彼は暫くの間身を庇うよつたポーズのまま彫像のようにならっていながら、ややあつて引き攣った表情で後ろの壁に刺さった破片を見上げた。

壁にめり込んだ破片の様子にさすがの親方も俄かには声が出なかつた。しばらくはそのまま呆然としていたが、やがて我に返ると今しがた炸裂した機体の検分を始める。

そこにある機体は、右腕が無残にもぼろぼろになつていて、結晶筋肉インナー・スケルトンが外れ四方八方に散らばり、中の金属内格が剥き出しになつている状態だ。

熱心に右腕の状態を確認する親方に、エルがおずおずと声をかけた。

「……親方、ご見解を、どうぞ」

「あー、こりやあれだな。結晶筋肉自体は無事だが根元の固定が吹
っ飛んでやがる。

筋肉の出力だけ上げすぎて、他のところが耐えられなかつたつて
え事だな。

なるほど、いやあこいつあ参つた参つた

はつはつは、と乾いた笑い声を上げる親方もすぐに黙り、再びエル
を顔を見合わせると一人して深い溜息を吐いた。

「一筋縄じゃいかねえ、つつつかこりや最低でも全身見直しだな」

周囲の機材への被害は出てしまつたものの、作業前に全員がある程
度離れていたこともあり奇跡的にその事故での人的被害はなかつた。
恐る恐る這い出してきた生徒たちも、呆然と右腕の壊れた機体を見
上げては溜め息を吐いている。

綱型結晶筋肉の実用化までは、まだまだ越えねばならない障害は多
そつなのであつた。

綱型結晶筋肉自体は十分なものが出来上がつてはいる以上、まずは固
定方法を含む構造の見直しが行われることとなつた。

当然ながら、根元からの見直しには時間がかかる。

設計に関わる人間は暫くてんてこ舞いであろう。しかしそれ以外の、
主に実際に組み上げを担当する者などは少し手が空く形になつた。

「そこでもう一つ、別の作業をお手伝いいただけないかと思いまし
て」

ここは工房内の一角、会議室。

やはり黒板を前に解説モードに入っているエルの手の前には、親方と他数名の鍛冶師がいた。

つい先ほどまで工房内に飛び散った装甲の破片の撤去にかかりており、今は漸くひと段落着いたところである。

「まあ、実際少し手隙が出てるからいいけどよ、何を作らせようつてんだ？」

例の背面武装（バックウェポン）とやらとはまた別のものか？」

「はい。こないだ言いましたよね？ 幻晶騎士以外に騎操士の訓練に使えそうなものを用意すると」

「ああ、のことか……。何を作るのか知らねえが、あんまり手間がかかる代物は厳しいがよ」

親方の言葉を背にエルは黒板へと紙の束を広げ、貼り付けてゆく。そこには様々な部品と、それを組み合わせた何物かが書かれている。そこはやはり技術者の性で、親方達の視線は吸い寄せられるように図面へと向かひ。

「（幻晶騎士の図面？ いや、そいつにしちゃあ随分と……小せえ。しかも心臓部がねえのか？）」

最後に貼られた図面には、それまでに書かれた部品を組み上げたものであるが、全身鎧の形をした機体が書かれている。

しかしそこに添えられたサイズは全高約2・5mと言つといひ。一般的な幻晶騎士の1／4程度である。

かと言つて普通の人間が着る鎧としては随分と巨大だ。彼らは今一その正体を掴みかねていた。

「随分と大柄な奴の鎧を作るんだな……？　いや、おいおい坊主なんだそりや、結晶筋肉を使ってるだあ！？」

図面を張り終えたエルが振り返る。

彼の顔に浮かんでいる笑みに、条件反射的に親方達の表情が引き攣るがそれは余談である。

「ふふ、そうですよ。とても簡単に言いますと、これは小型の幻晶騎士です。

人間が直接着込んで動かす、極小サイズの幻晶騎士」

その場にいる全員の沈黙は、長かつた。

微かに緊張感すら孕む沈黙のなか、暫く髪を撫でながら図面を睨んでいた親方が漸く口を開く。

「…………おお、うん。あれだ、形の次は大きさを変えときやがつたな」

固睡を飲んでその言葉を聽いていた周りの生徒が盛大に息を漏らす。

「つて親方あ、そんな一言で片付けるにはこいつはとんでもなさすぎるんじやあ？」

「鍛冶師の沽券つてもんに賭けて、そつ何度も坊主の台詞に驚いてられるか！」

「…………ふむ、構造は確かに幻晶騎士のそれを応用してるのか。そいつは後でじっくり見せてもらうが……」こいつで騎操士の訓練するつてのか？

ああいや待て待て、そつだ、こいつは心臓部を積んでねえ、動くのか？」

幻晶騎士の心臓部 エーテルリアクタ 魔力転換炉 マキウスエンジン
魔導演算機 マナ 分をあわせてそう呼ぶ。

そこに書かれているのは確かに小型の幻晶騎士のよつたものだが、簡潔に言えばやや大きめの鎧を外装として、その中に結晶筋肉を張り巡らせた構造をしている。

人間が着込む、という言葉からもわかるように内部はがらんどうになっていた。

「はい。幻晶騎士に魔力転換炉や魔導演算機が必要なのはあくまであの巨体を動かすのに必要な魔力、そして魔法術式を人間一人の能力で支えられないのです。

ならば……乱暴な言い方になりますが、機体自体を小さくすれば負担もはるかに小さくなります……計算上は、人間一人の能力でも動かしつる程度まで」

熱心に説明を聞く鍛冶師達の顔に、以前のよつた拒絶の表情は見られない。

既に新しい技術と共に一步を踏み出している彼らは、新しい概念に驚愕こそすれ、次には貪欲にその内容を吟味し始める。

「確かに理論上はそうだ。が、なあ……魔法術式の負担は具体的にはどれくらいだ？」

「身体強化が使えるならば十分なくらいかと」

「おいおい、かなり厳しいんじゃねえかそいつあ……。

しかもだ、魔導演算機を用いた幻晶騎士と動かし方が違つてやしねえか？ そいつあ。

これを動かせること自体は良いけどよ、肝心の練習にやならねえんじや仕方ねえぜ？」

問い合わせつつも親方の表情は一ヤリ、と音がしそうなものだ。

からかっているのか試しているのか。果たしてエルは笑顔を崩すことはなく、すらすらと答えを返す。

「操縦方法は実はさほど変わりません。

元々、幻晶騎士の操縦も四肢の動きを起点にして、魔法術式の併用によるものです。

こちらはより直接的に自分の動きに追従して機体を動かし、魔法術式 자체も自分で演算するだけです。

正確には術式の演算による負担は大きくなっているのですけど…

…その辺は訓練といふことで」

ふむう、と親方が一言唸り、他の鍛冶師達も後ろで意見を交換しあう。

「何よりです。小型といふこと必要な資材が少なく済む上に、幻晶騎士の中でも高額貴重な部品である心臓部がないことにより更にお安く…

今なら1機作る」とにもう1機つけちゃいますよ」

「何をだよ? ……ともあれ背面武装の時よりや、言いてえこともわかりやすいな。

まあ簡単に作れるってのは確かだ。ここは一つ実際に作つてみるつてのも良いだろ?」

そこで思ったように動かねえってのなら考え方直すなり何なり、他に手もあるだろ?」

親方の脳内では、この小型幻晶騎士による効果がはじき出されていた。

幻晶騎士の構造を簡単にしてそれは、サイズも相まって製造の手間は非常に小さい。恐らくは幻晶騎士に対して1割どころか、5分にも満たない程度だろ?」

それで簡易的とは言え幻晶騎士の操縦訓練が出来るならば、異常なまでにコストパフォーマンスに優れていることになる。

それこそ騎操士学科の生徒の人数分用意しても良いレベルだ。何より……

「おい坊主、確かにこいつは騎操士の訓練用なのかもしだねえけどよ。

それ以外に用途がねえってわけでもないんだろ？」

「何せ……鎧はともかく、生身に結晶筋肉が加わってるんだ。こいつは結構な代物になるんじや、ねえか？」

はつとした表情の親方に、エルは頷きながら返答する。

「それは勿論。魔力の利用法として、身体強化よりも結晶筋肉による力の増幅のほうが高効率です。

それが綱型を使用したものなら、尚一層のことでしょう」

わしわしと頭をかいた親方がついに耐え切れなくなり、ガツハツハと高笑いを始めた。

「ここ最近は本当にまったく、面白すぎていけねえな。

おじおめえら、どうやら油を売ってる場合じゃなさそうだぞ」

「まったくで。いやあ、鍛治師としては腕が鳴つて仕方ないとこで」

鍛治師達が一斉に頷きを返す。

その誰もがやる氣に満ち溢れた表情をしている。

「全員やる気みてえだな。よし、いっちょこつもやつてやるひつじあねえか！」

工房での打ち合わせを終えたエルが自宅へと帰りついたのは完全に日が落ちた後だった。

ギリギリ滑り込むように夕食の時間に間に合い、軽くティナに怒られながら食事を済ませて自室へと向かう。

ある意味勉強熱心な少年であるエルの自室は壁際に並んだ本棚、後は机とベッドという構成になっている。エルが部屋に入るときにはキッドが、ベッドにはアディが倒れ伏していた。

「二人ともこちらに居たのですね。どうですか？ 参考書は読み進んでいますか？」

この一人が勝手に入り込んでいることなどすでに日常茶飯事であり、エルも特に気にした様子はない。

部屋の主が帰つて来た事に気付き、うなだれていた一人がゆっくりと再起動する。

「……たぜ」

「？」

「勿論、500ページキックチリ読み進めてやつたぜ」

珍しいことに、驚きに束の間エルの動きが止まった。

彼の予想では提示した量の半分を越したぐらいだろ？と思つていたところだったのだ。

それが既に全てを終えていると言つ。決して内容が簡単なものでは

ないだけに、エルの驚きは大きなものになつた。

それを見て取つたキッドがニヤリと笑い、椅子を回して正面から向かい合つ。

彼らの師匠であるエルの予想を上回れたことは、彼にとつても少しばかり痛快なことだつた。そのために払つた犠牲が結構なものだつたとしても、だ。

「（キッドの性格からして誤魔化すような真似はせんやろし、これは本気か。

予想以上に頑張つてくれるな）」

エルは驚くと同時に、幼馴染で弟子でもあるキッドの頑張りを嬉しく感じる。

自然、彼の表情にはじんわりと笑みが浮かんでゆく。

「どうやつたのです？ 斜め読みなどはしていないのでしょうか？ 正直なところ、内容を把握するのにもそんなに簡単なところではなかつたはずなのですから」

「ん？ へへっ、そりやな、読んでるうちにちよつとした事に気付いたのや」

「ちよつとした事？」

「おう、魔法術式が大量にあつてそりやあ把握が大変だつたけどよ、あれつて法則性があるだろ？」

「……法則性」

「前にエルから習つた身体強化や制御術式、あと拡大術式とか、結構知つてる魔法術式と似たのが多いし、大半はその組み合わせで出来てる……違うか？」

それに気付いてよ、後は注意していけばかなり捗つた……

……つておいエル、なんだその顔は」

得意げになつてゐるのはキッドのはずが、話を聞くついにエルがどんどんと笑顔になつてゆくのを見て言葉を切る。

「んー、いえいえ。キッド?」

「なんだよ」

「ふふ、すごいです、偉いです。それって自分で気付いたのですよね。本当にすごい、大正解です。もつそこまでわかるようになつたのですね」「

エルがそれに気付いたのはあくまでも前世の記憶に根ざした、プログラマーという経験を駆使してのものである。彼が教えた知識の素養があつたとは言え、キッドはこの世界で初めて、自力でその領域に追いついてきたのだ。

これを喜ばずにいられようか。

エルは自身の頬が自然と緩んで行くのを止める事など、できそうもなかつた。

「（うーん、なんか最近は本当に嬉しい事と楽しい事が多すぎるなあ）」

その時、それまでベッドに倒れ付したままだったアティイが凄まじい勢いで起き上がつた。

「エル君！ 私も！ 私も一緒に頑張ったんだから、キッドばっかり誉めるとかするいわよ！」

突然拳手を始めたアティイにキッドとエルがそろつてずつこけかける。

「えー……いやおい、だつたら何故ずつと突っ伏してんだよ

「それは……だって、エル君のベッドだし……つい」

「アーネティイーイー。ちょっとここに来て座りなさい」

おつかなびっくり、それでもアティイは言われたとおりエルの前まで来て座る。

腰に手を当ててそれを待つエルは溜め息を一つ吐き、そしてアティイの頭を撫で始める。

「うん、アティイも偉い。良くここまで来てくれました。

本当に一人とも凄いですよね。これなら後は実践あるのみです」

不敵に笑うキッドと、何やら縁側の猫みたいな表情になっているアディを見回し、エルもその頑張りに応えるべく次の行動を決める。

「丁度、親方達とも話がついたところです。

これから幻晶騎士の操縦訓練用の強化甲冑を……幻晶甲冑シルエットギアを開発します。

キッドとアティイには、僕と一緒に試験操縦者として、手伝つてもらいますよ

双子が揃つて腕を振り上げたのは、言うまでも無い。

#29 次なる難形・前

ライヒアラ騎操士学科の工房で、ストランド・クリスタルティシュー 綱型結晶筋肉の暴発事故が発生してから1月後。

設計担当の生徒達の不斷の努力と、整備班総員の力を結集し、1機シリコットナイト の幻晶騎士シリコットナイト が組みあがっていた。

整備場より、台車に乗せられた機体が運び出されてゆく。

その外見は幻晶騎士としては一種異様だ。

全身のほとんどの箇所が“1次装甲”と呼ばれる、あくまでも内部の保護のための最低限の装甲のみになつており、場所によつては結晶筋肉シリコットナイト が露出している箇所もある。

胸部や手足の一部にわずかばかりの外装アウタースキン が装着されたその姿は、見るものに未完成と言つ言葉を思い起させるものだった。

「やれやれ、やつといこまで漕ぎ着けたか……」

声に隠せぬ疲労を滲ませながら、親方がぼやく。

周囲に居る他の生徒達もある者は田の下に隈を作り、ある者は肩を叩いてほぐしているなど、その雰囲気に色濃い疲労を漂わせていた。

彼らが疲労困憊の様子であるのも無理は無い、この1カ月はまさに修羅場シリコットナイト であった。

設計班が様々な構造を書き上げ、製造班がそれを実際に作成して試す。

最終的な構造に辿り着くまで、更に数回の失敗と事故を乗り越えながら、漸く形になったと言つといふのである。

未だ学生身分とは言え少くない回数幻晶騎士の組み上げを行い、既に最前線でも活躍しうるだけの能力を備えた彼らをして、この機体を作り上げる事は困難を極めた。

死者が出なかつたことが色々な意味で不思議なまでの過酷な戦いであつたが、それでもここまで士気を落とさずに進むことが出来たのは、やはり彼らが技術者として新しい技術が形になることに至上の喜びを感じていたからに他ならない。

その証拠に、彼らの瞳には疲労では塗りつぶしきれないほど力強い光が宿つていた。

まるで円形闘技場のような幻晶騎士の訓練場へと“試作機”が運び込まれてゆく。

仰向けに寝た体勢で台車に乗せられた試作機の胸の装甲を開き、操縦席へと騎操士ナイドランナーが入つてゆく。

試作機は訓練場の中央に配置され、円形闘技場の観客席の部分に相当する場所からそれを見守る整備班の面々の前には、人の全身を隠して余りある巨大な盾が並んでいた。

数回の事故を経て、彼らも学んだのである。

部分ごとの動作試験は何度も重ねて来たものの、全身を組み上げての動作試験は今回が初めてになる。彼らの警戒も当然だった。

そして試作機が外装をつけていないのはそのためだ。

まずは、幻晶騎士の部品の中でも重量的に嵩張る外装を除いた状態で動かそうとしているのである。

「ようしヘルヴィ、準備はいいか！？…………おひ、いくぜ、ま
ずは立ち上がり！」

拡声器を片手に親方が声を張り上げ、それを合図に試作機が身を起こし始める。

整備班の面々も盾の影から覗き込むようにしながら、食い入るよう にその動作を見ていた。

力を込められた筋肉が膨張するのが遠目に見て取れる。軋むような音を上げながら、試作機が立ち上がった。

その動きは通常の機体に比べると幾分ぎこちなく、そして極めてゆっくりとしたものだった。

「立った………」

誰かから押し殺したような声が漏れる。

立ち上がる。これだけのためにつき込まれた労力と、乗り越えてきた苦難と、払われた犠牲を思い、その声はやや震えていた。

脚の筋力を十分に必要とするその動作に耐え切ったことで、今回の構造は綱型結晶筋肉の出力に最低限、耐え切るだけの耐久性があったことが証明されたのだ。

「まだだ、油断するな……そこー、身を乗り出すな！ 危ねえぞ！… ようし、落ち着いてだ……ヘルヴィ、そのままままずは歩いてくれ。ゆつくじと、ゆつくじとだ！」

試作機の首が了承を表し、ゆつくじと上下に動いた。

そこからしばしの溜めを作り、やがて意を決したように歩き始める。石畳の広がる訓練場の中だと、その歩みはまるで今にも壊れそうな吊り橋の上を歩くがごとく慎重極まりなかった。

歩き方を確認するかのように動きはぎこちなく、歩む速度は牛歩のごとくだ。

幻晶騎士としては信じられないほどの時間をかけ、重い足音と軋むような筋肉の駆動音を響かせながら試作機は訓練場を半周する。

動きのぎこちなさは取れではないが、最終的に歩く速度は上がりそれなりのものまで上がっていた。

「固定も吹っ飛ばねえ、これなら何とかなりそうだな

外装をつけていないため油断は出来ないが、少なくとも今すぐに壊れそうな様子は無い。

試作機はそのまま整備班の生徒達がいる場所の前まで歩いてくると、これまたゆっくりとした動きで片膝をついた。

駐機姿勢と呼ばれる幻晶騎士を止めておくための姿勢をとり、動きが完全に停止したところで漸く整備班の生徒全員が大きく息をついた。

次いで、彼らは互いに抱き合わんばかりの勢いで声を上げる。歩行試験が成功し、これまでの試行錯誤が報われた瞬間だった。

胸部装甲が開いて中から騎操士が現れ、開かれた装甲の上に立つ。

「おう、どんなもんだよ、ヘルヴィイ」

試験の成功に喜色を滲ませた親方の問いかけに、しかしヘルヴィイと呼ばれた女性騎操士は渋い表情を返した。

「文字通りのじゃじゃ馬ね。力を余しそぎて、歩かせるだけで跳ね回りそうよ

「そんにか?」

「ええ、今までの機体と比べて使い勝手が全然違う。

これだけ感覚が変わると、正直全員訓練をやり直しになるわよ?」

「そいつあなあ……歩けるようになつたのは大した成果だが、操縦

系統まではまだまだ手が回りそうにない。

その辺の調整は後回しな。

……さて、跳ね回れたあ言わねえが、歩くのは大丈夫つてのなら
残る項目を進めるぞ」

ヘルヴィイが頷き、再度操縦席へと戻つてゆく。
盾を構えていた整備班の面々も、安全が確認されたことで次の行動
に移つた。

改造されていない学生機体が訓練場へと大型の標的を持ち込み、設
置してゆく。

自身も訓練場の石畳へと降りながら、親方は周囲の生徒へと指示を
飛ばしていた。

「よし、魔導兵装持つて來い。訓練用のだぞ！」
標的は端っこに設置だ！

それとだ、誰か銀色坊主エルネスティを呼んで來い！
今は工房のほうで幻晶甲冑エルナイトギアの試験やつてるはずだ

「……なんだこれ」

親方の指示に従い、1人の生徒が工房へと戻つていた。

大半の生徒が試作機の歩行試験のため出払つているため、今この場
所には殆ど人がいない。

扱うものが扱うものだけに、やけに広大な空間は普段の様子を思え
ば不気味なほどに静まり返つていた。

そしてエルネスティを呼びにきたはずの生徒は、工房内へと入つた
直後に視界に飛び込んで来た光景に、思わず言葉を漏らさずには居
られなかつた。

「（最近寝不足だったからな……疲れてるのかな、俺）」

彼が見たままを端的に表現するならばそつ、全身鎧を着た騎士が二人、腕を組んでダンスを踊っている。

そして行動もさることながら、その全身鎧の騎士は異様な風体をしていた。

まずその身長が一般的な成人男性よりも遥かに高く、凡そ2・5mに達する。近くに居る対比物が小柄なエルである事がその姿を實際よりもさらに巨大に見せていた。

次に異様な点が、体のバランスの歪さである。

頭や胴体は比較的普通の人間と同じ大きさであるにも拘らず、手足が奇妙に長い。さらに付け加えるならば腕が4本ある。

内側に小さな　と言つても通常の人間サイズの　腕があり、その腕が外側の巨大な腕についた取っ手を握つて動かしている。

そう、そこに居るのは幻晶甲冑シリエットギア　小型幻晶騎士とも言つべき、魔導仕掛けの機械鎧である。

新技術の結晶が軽やかに踊つている、目前の光景の意味不明さに軽く頭痛を感じながらも、その生徒は手前にいるエルネスティへと声をかけた。

「おいおいお前ら、動作試験やつてたんじゃないのかよ。なぜダンスしてるんだ」

「あら先輩、お疲れ様です。勿論動作試験を進めていますよ。

今は“ダンスを踊れるくらいの自由度があるか”の試験中です

「……ああそうかい。そりや試験は成功っぽいな

「成功は、成功なのですけどね」

彼らが話している間に、踊りをやめた2機の幻晶甲冑が近づいてく

る。

2機はそのまま立ち止まるとその場で膝立ちのよだな姿勢をとる。鋭い圧縮空気の噴出音と共に幻晶甲冑の上半身の装甲が跳ね上がる。腹から腰周りの装甲は下を向いて展開し、同時に太股の装甲が大きく左右に開く。

そして跳ね上げた装甲をぐぐるよだにして操縦者が降りてきた。

「おっし、良い感じで動くぜ、エル」

「そうやつ、次はエル君も踊らうよー。」

幻晶甲冑を動かしていたキッドとアーティは試験の成功もあり上機嫌だ。

「アーティ、遊んでばかりでは駄目ですよ……。まあ、概ね僕らならば動かすのに問題は無いようですね」

「おお、動く動く。まあちょっと負担はあるけどよ、これくらいなら問題はねえな」

「そうですね。僕も一人の心配はしていないのですけど……」

エルが視線を二人からそらしたといひで、彼らの後ろからさりげにもう1機、幻晶甲冑が歩いてきた。

「それっ、ふう。随分とつ……つそい、楽しそうな！ つと話をしているじゃないか！」

「あ、俺も混ぜてもらおつかな」

乗っているのはエドガーである。

ただし、軽やかにダンスを踊っていた双子の時とは比べ物にならないほどその動きは遅く、そしてぎこちなかつた。

小さな掛け声と共に脚を振り上げ、大きく踏み出して進む。それの

繰り返しで漸くここまで来たのだ。

まるで出来の悪い人形劇を見ているようだが、動かしている当人は必死である。

「ふう、やつとこここまで来れたか……」

「お疲れ様ですエドガー先輩。どうですか？」使い心地は

「見ればわかるだろ！」

「楽しそうですね」

「……」

皮肉ではなく、エルは本当に羨ましそうな視線をエドガーと彼が乗る幻晶甲冑に注いでいる。

エドガーが四苦八苦しているのとは全く別の観点から、その状態が羨ましくて仕方ないらしい。

ちなみに何故エルが動かしていないのかと言つと、彼では大抵のものはすんなり動かしてしまつたため、試験にならないからだった。エドガーは何かを抑えるように頭に手を当て首を振つていたが、すぐ振り切る。

「なあ、エルネスティ。前から思つていたんだがな」

「はい」

「この幻晶甲冑……決して悪いわけじゃない、これ自体はすごい代物だと思うんだがな」

「はい」

「動かしづら過ぎる……」

幻晶甲冑の筐体は、エルの作成した図面を基にすぐさま組み上げられた。

途中で多少改良したことを鑑みても完成まで1週間程度である。製作した鍛冶師達の技術力の面目躍如と言つたところであろう。

しかし順調なのはそこまでで、いざ動かした途端重大な問題に突き当たった。

幻晶甲冑は当初予想していたほど動かし易い代物ではなかつたのである。

それは偏に高難易度の上級魔法である**身体強化**を基本とし、しかもそのアレンジ版を使用しなければならないことに起因する。要求される魔法能力の負荷が大きく、現在の操縦方法は一般の生徒にとつては荷が重すぎるものだつたのだ。

テストパイロットには双子の他にエルと付き合いのあり、事情もわかつているエドガーとディートリヒが借り出されたものの、二人ともまず動かすだけで3週間の時間が必要だつた。

埒が明かないので途中でエルによる“幻晶甲冑操縦のための集中講座”を開いてそれである。

それを尻目にキッドとアディの一人は1週間程度の訓練でダンスを踊るくらい自由自在に動かして見せたのだが、逆にそれは「人がエルと同じ括りの側であることを確認しただけだつた。

一般的な騎操士では、動かし方の違いに慣れないなどと言つ問題ではなく動かすことすら限らない……正直に言つて失敗作である。ちなみにディートリヒは今現在エドガーよりも更に後ろで唸つている。

「率直に言つてこいつに必要な制御は複雑すぎる。身体強化に近い魔法術式など、普通はおいそれとは使えないはずだ。

とてもじゃないが幻晶騎士の操縦訓練に使える代物じゃないぞ」

「そうなのですよね……そのあたりは見積りが甘かつたですね」

「うーん、それは努力でカバーとか！　ね、先輩？」

エドガーは順にエル、キッド、アディを眺めた後小さく溜め息を吐

いた。

「無茶を言ひな。一朝一夕でどうにかなるもんじゃあるまい。まつたく……」

とりあえずお前達が何かおかしいのは十分に確認させてもらった。今更そこはどういう言わんが、せめてそれを普通の人間に求めるな

「んーむむむ……それでは残念なことに、これは使えない事になってしまいます」

「このままでは、な。幻晶騎士の小型版なのだろう? だつたら魔導演算機を積め。

アレがあれば、制御の負担は軽減できるはずだ」

「仕方ないところですね。製作費用が上がってしまいますが、背に腹は代えられません」

エドガーの台詞も尤もである。このままではエルと双子にしか使えない欠陥機が出来上がるばかりだ。

さすがにそれでは当初の目的に対して不十分に過ぎた。

「(魔導演算機の仕組みも調べんとなあ。

実際サイズも違うから幻晶騎士用ほど処理能力も必要ないし、大体そのままの大きさだと積めんし。

小型の魔導演算機とか用意できんのかな? 後で親方に相談だな)

「

エルが解決策を黙考している横で、彼らの話に聞き入っていた、エルを呼びに来た生徒がはたと我に帰った。

「ああ、そうだエルネスティ。つい話に聞き入っていたが、親方が呼んでるぞ。

そろそろ背面武装^{パックウェポン}の動作試験を始めるらしい」

「ということは歩行試験は成功だったのですね。わかりました、すぐに向かいます」

エドガーは幻晶甲冑を降り、反対にキッドとアディは再度搭乗する。エルはキッド機の肩にひょいと飛び乗ったところで、その場に居るもう一人の存在をふと思いつ出して振り向いた。

「あ、ディー先輩は……」

振り向いた先では、少し離れたところにいるティートリビが幻晶甲冑の操縦に悪戦苦闘している。

「はあ、はあ、上手く動かん……何とか、エドガーのいるところまでは……！」

そして全員が移動しようとしているのを見、気合を入れなおしたティートリビ機が大きく一歩を踏み出し……そして彼を悲劇が襲う。

「あ、あれ？ なんだこれ、やばい、やばいぞ止まらなアーッ！？」

制御を間違つたらしいディートリビの上半身が突如として「ゴリッ、
と言ひ重い音と共に向いてはならない方向を向く。

そして彼のほうを向いていたエルが決定的瞬間を目撃した。

「ディー先輩……？ うわ、これはまずいかも、先輩を医務室へ……」

エルが禁句に触れた瞬間、凄まじい勢いでティートリビが再起動した。

のみならずそのままギュルツ、と音がしそうな勢いで華麗にターンを決めるビシットポーズを決め、言い放つ。

「それには全くこれっぽっちも及ばないともーー！」

幻晶甲冑を装着したまま器用にポーズを取りつつも彼の額を流れる汗が物凄いことになつてゐるが、果たしてそれは肉体的なダメージによるものか、それとも精神的なものなのか。

周囲の人間は啞然としたままそれを見ていたが、本人の様子から大丈夫だろうと判断する。

「えーと、大丈夫そうで、すね？ まあ無理はしないで下さいね。僕らは先に訓練場に行つていますから」

「ああ、わかつた」

エルを肩に乗せたキッド機とアーティ機が軽快に訓練場へと走り出していった。

「……で、ディー？ いつまでそのポーズを取つてゐるんだ？」

「ははは、何故このポーズを取れたのか自分でも解らなくて……これから動けなくて、ポーズを変えれないのさー！」

「威張るな。俺たちも移動するぞ」

#30 次なる難形・後

騒々しい足音をたてながら2機の幻晶甲冑シリエットギアが走つてゆく。

それを操つているのはキッドとアーディの双子である。

それなりの魔力マナを消費するものの、直接制御フルコントロールに準じた制御方法で動作するこの幻晶甲冑は、やるうと思えば生身よりも遙かに速度が出せる。

前を行くキッド機の肩に乗つているエルの紫がかつた銀色の髪が、前方からの風にもてあそばれるままに暴れている。

全高2・5mもの騎士が子供を肩に乗せ爆走するという光景に、幻晶甲冑の事など知らない一般の生徒達が目を剥いているのを感じせず、2機は軽快に訓練場へと駆け抜けていた。

訓練場に近づくほどに、整備班に所属していると思しき生徒が増えしていく。

その横では、未改造の幻晶騎士シリエットナイタが補修部品や機材の運搬を行つていた。

「（実は幻晶甲冑急がなくとも、騎操士ナイトランナーもやる事いっぱいだつたりせん？）」

今までのようない小規模の改造ではなく1から新たな機体を作るという作業は、結果的に整備班、騎操士の別なく作業に借り出される状態を生んでいた。

それは試作機の構成が予想以上に従来のものからかけ離れてきたため、既存の機体を基にした訓練を進めるより新たな機体を完成させることを急いだためである。

現在、騎操士学科はその全力を挙げて試作機を稼動させるために活動している状態だ。

ちょうど（？）幻晶甲冑の開発に躊躇っているエルは一先ずそれ以上は考えないことにした。

エル達が訓練場へと辿り着くと、石畳の敷地の中央に、アウタースキン外装を装備していない幻晶騎士の姿が見えてきた。

歩行試験までを終えた試作機である。

「歩いただけで爆発、なんてことにならなくてよかったですね」

「心配するところ根本的すぎんだろそれ……本当に大丈夫なんだろうな？」

やばくなつたら逃げれるようになりつつに乗つたままにしておくか

幻晶甲冑の騒々しい足音と共に聞こえてきた、鈴を鳴らすような声に親方が振り向いた。

「おつ坊主、来たか。んじゃおつぱじめるとするか

「よろしくお願ひします」

先ほどまではスチーランダ・クリスタルティショウ綱型結晶筋肉バッカウェポンを使用した歩行試験が行われていた。

この部分は親方を筆頭に鍛冶師達が試行錯誤し、組み上げた部分である。

そしてこの後行われる背面武装の動作試験に関しては、基礎理論だけでなく設計までエルが担当した部分になる。

そのため、ここからはエルに確認を頼みながら作業を行う事になっていた。

「見た感じ問題なさそうだが……こいつの完成度はどれくらいだ？」

「組み上げ前の時点では、運動、照準共に思い通り動作しましたよ。後は照準精度の問題と配置による最適化でしょうか」

「照準……精度ってなあ、なんだ?」

「ああ、えつと……照準機能を用いて、どれくらい正確に的を狙えるか……かな?」

「ほおう、そいつあ大事だな。とにかくにもまずは動かしてからの話だがよ」

幻晶甲冑から降りたエルが少し焦ったように答えるながら親方の横へ並ぶ。

双子は結局幻晶甲冑に乗つたまま見学しているが、さりげなくその巨大さが後ろの邪魔になつていたりする。

「おうしー、それじゃあ魔導兵装の取り付けから始めんぞ!…」
シルエットアームズ

親方の合図を受け、魔導兵装を持つた学生機が試作機に近づく。試作機の背中には、それまでの幻晶騎士には見られなかつた機構が増設されている。

無骨な、鉄骨と橋げたを組み合わせたかのような機構が、人間ならば肩甲骨に相当する部分に左右2つ。どうも一つ折りにしてあるらしいその先端部には、まるでペンチのよつやな形状をした簡易的な手がついている。

全く洗練されてはいないものの、それは地球における産業用ロボットアームを想像させ、そして機能的にもそれに近しい存在である

背面武装の主たる機構、補助腕。

動作試験は魔導兵装の取り付けから始まっていた。

魔導兵装自体は、既存のものをそのまま使用している。

補助腕側に様々な魔導兵装を扱うための“手”が用意されているため、どのような魔導兵装でも使えると言うのが本機能の売り(?)

の一つである。

試作機の後ろに立つた学生機が、その手に持つ魔導兵装を補助腕に持たせている。

補助腕の手は形状こそ簡易であるが、複雑な取り回しは求められないが故に魔導兵装の保持だけならばそれで十分な効果を持っている。

左右2本、手によつて保持された魔導兵装が真上を向いて固定された。

「うん、補助腕の動作は問題なさそうですね」

今のところ魔導兵装を持ち変えるためには他の機体の協力が必要になるが、補助腕側の機能に問題は見られなかった。

背面より伝わつてくる軽い振動を感じ、ヘルヴィイは幻像投影機の表示を確認していた。

「ん、魔導兵装設置完了。続いて展開機能の試験、いくわよ」

彼女は試作機の騎操士ナイトランナーを担当しているが、それ以前に開発中の背面武装の動作確認にも参加していた。

操作方法や機能については、以前よりレクチャーを受け十分に理解している。

「魔導兵装を展開、照準器表示」

彼女は操縦桿横に増設されたレバーを引く。

命令を受けた魔導演算機マギウスエンジンが補助腕に内蔵された筋肉へと指令を送る。

軽い振動と共に背中の補助腕が展開し、魔導兵装を持ち上げていった。

砲身が90度回転して水平に移行し、試作機の両肩の上に浮いた状態で正面を向いて固定される。

「おお……」

予想以上に滑らかな動きを見せる補助腕の様子に、整備班の生徒達の間から低いどよめきが漏れた。

この機構自体は組み上げ前にも何回か動かしてみたことはあるが、実際に機体上で動いているのを見ると、感慨もひとしおである。

操縦席ではホロモーターの表示に変化が起きていた。

それまでは外部の光景を映すだけだったその上に今は照準用のマークーが表示されている。

目盛と円形を組み合わせた極めて簡単な表示だが、それまでは何もなかったことを思えば格段の進歩だと言える。

「照準あわせ……発射

ヘルヴィイは照準器内に標的を捉える。外から試作機を良く観察すれば、その頭部の動きと砲身の方向が連動していることに気付けたであろう。

彼女は照準内に標的が入っていることを確認し、操縦桿のトリガーを押し込んだ。

指令を受けた魔導兵装から法弾が発射される。今搭載されているのは標準的な炎弾を飛ばすタイプだ。

赤く輝く魔法の弾丸が砲身から飛翔し、そのまま吸い込まれるように標的に命中した。

演習用の武装のため威力は低く、標的はその形を残しているものの、着弾による焦げ跡があるのが見て取れる。

全てに完璧を期した上で試験では無かつたにもかかわらず、命中まで至つた望外の成果に歓声があがつていた。

「あら、当たつてしましましたね」

「いーことなんぢやないの？ それって」

「勿論問題になるわけではありませんけど、もつと調整が必要かな、と思つていましたので」

彼らの前ではなおも数発、法弾が発射されていたが、最終的には命中率は6割程度だった。

撃ち終えた後、そのまま試作機は魔導兵装を収納する。

展開の手順と逆に補助腕が折りたたまれ、魔導兵装が垂直の向きに背中へと仕舞われていった。

今回の試験の主眼は展開、収納機能の確認であり、後はとりあえず撃てれば良い程度だつたため、結果として十分以上の成果と言える。

「ほおう……」いつが、背面武装か……。これは予想以上にすげえ代物かもな」

目の前の結果に、親方すら髪を撫でつつ唸つていた。
動作試験としてはほぼ完璧な結果を残した試作機に、それを見守る生徒達は感極まつたように喜び合つ。

綱型結晶筋肉、背面武装、火器管制システム……新たに開発された機能のほぼ全てに対し、完成が見えてきたのだ。

目指したもののが形になる、技術者として最も喜びを感じる瞬間であった。

「……どうして皆こんなに感動してるのよ？」

生粧の騎操士ではなく、そして鍛冶師でもない双子には周囲の感動の意味が今一理解できていなかった。

盛り上がる生徒達の間で微妙に浮いてしまっている。

頭上から聞こえてきたアディの疑問に、苦笑しながらエルが答えていた。

「幻晶騎士の形が変わり、機能が変わり……その第一歩目を踏み出したからですよ。

これから、新しい道を切り開くことが出来る。それを自らの手で、実現できたのですから……」

幻晶甲冑の大きな腕を器用に組み合わせ、腕組みのポーズをとったアディは暫く悩んだ後、納得したように顔を上げる。

「うーん、良くわかんないけど成功したからおめでとうって事ね！」「間違いではありませんけど、アディ……」

整備科の生徒達が努力と苦労が報われた喜びに包まれている頃、それとは別種の視点から、試作機を見つめる人物がいた。

「……あの機能、どう思つ？ アディー」

エドガーとアディートリビ……他にも、騎操士達は様々な感想を抱きながらその結果を眺めていた。

「ふん、やうだな……まずは遠距離では苦戦しそうだな。

」こちらはどうしても片手を魔導兵装の操作に割く必要があるが、

あちらは盾にでも身を隠しながら撃てる。

何より、そこで両手持ちの大盾あたりを構えてね

「ああ、しかも危険を冒さず2本を同時に使える。今までは、持ち替える隙をカバーするために片手一本が常識だったからな。

単純に火力は倍だ。撃ち合いなど考えたくはないな」

「いいね、安全に相手を撃ち倒せる。素晴らしい機能じゃないか」

「お前な……確かに魔獣を相手にするなら心強いが、俺たち自身があれを相手にすることもあるかも知れないんだぞ」

少し呆れたようなエドガーの言葉に、ディートリヒが反論しようとしたところで、横から別の声が割り込んできた。

「そうよ。まずはあたしがあんたらを燐してあげよつか?」

二人が振り向くと、そこにはいつの間にか試作機の騎操士であるヘルヴィイが立っていた。

彼らが話し込んでいる間に試験は終了していたようだ。

「あり得ないとは言わないが、あの機体はまだ未完成だろ?」

「今はね。でも今日の試験で大体の部分は確認できたから、後は完成までは早いらしいわ」

既に筐体の基本は完成しているため、実際に完成は目前である。

「だつたら、まずはやるべき事があると思わない?」

「何をだ?」

強気な笑みを浮かべるヘルヴィイが、その眼差しを細くする。

「陸皇亀との戦いすら無事に乗り切った、学科最強の騎士とどこのま
で戦えるか、試すのよ」

エドガーが僅かに目を見張る。ここにいる彼も、彼女も、ある意味
ディートリヒもべくモス戦の生き残りである。

「まあ、確かにどこかで模擬戦の必要は出てくるだろうが……俺か?
それとヘルヴィ……お前もあの戦いを生き残つたじゃないか」「
何とか、ね。でもあたしが生き残つたのは偶然。あの子が偶然間
に合つたから、なのよ」

「だから、悔いているのか?」

「何をよ? それについては感謝してもし足りないわ。
むしろそれで……あの子の作った、この機体に興味が湧いたの

彼らの視線が、運び出されてゆく試作機へと向けられる。

「出来上がる前から関わってるから、よくわかるわ。
この子の性能があれば、あたしでもあんたを倒せる」
「……それは恐ろしいな」

少しも恐ろしそうではなく、むしろ困ったかのような態度のエドガ
ーにヘルヴィは小さく息をついた。

「だから、これが完成したら……あたしでもあのデカブツと、最後
まで戦えるかもしれないわ」

「……それが理由なのか?」

「ま、単純に幻晶騎士が強いのは、良い事よね」

一瞬でにやりとした表情に戻ったヘルヴィに、エドガーが肩透かし

を食らつたよつぱりこけた。

「首を洗つて待つてなさい。まずはあんたからコテンパンにしたげるわ

ひらひらと手を振りながら歩き去るヘルヴィイを、エドガーが小さく溜息をつきながら見送っていた。

実用上最も困難だつた綱型結晶筋肉を使用しての動作と、背面武装が完成したことにより、その後の作業は極めて順調に進んだ。外装を装着しての動作実験、背面武装も動きながらの射撃をこなすなどその完成度を高めてゆく。

そして歩行試験より2週間ほど後、ついに試作機は正式な名称を付与された。

技術試験用試作機体第一号機“テレスター”レ　　それが、かつて試作機と呼ばれた次なる世代の雛形の名である。

工房内部の暗がりから、ゆっくりとテレスターがその姿を現す。外見はそれまでの学生機と大差ない。以降も様々な調整を行い改装を施すことを前提としているが故に、それはむしろ他に比べ地味であるとさえ言えた。

唯一その背中に装着された2本の魔導兵装が、既存の機体との差異を声高に主張している。

テレスターはそのまま訓練場へと歩を進める。

それに乗る騎操士は、それまでの試験騎操士であつたヘルヴィイがそのまま担当している。

現時点では新型の操縦に最も習熟しているのは間違いない彼女である。

操縦方法の改善、筋肉配置の見直し、そして彼女自身の慣れを合わせ、テレスター^レの動きは最初のそれとは比べ物にならないほど滑らかなものになっていた。

だがそれでもまだ調整が足りない部分があり、幾分微妙な動きが混じっている。

テレスター^レが訓練場の門をくぐるとそこには1機の幻晶騎士が待ち構えていた。

アールカンバー　　テレスター^レより更に飾り氣に乏しい外見、オーソドックスな剣と盾の装備。しかし現在の騎操士学科最強と田される、エドガー・C・ブランシュが操る機体。

「ようし、ヘルヴィも準備できたようだな。

ではこれより、新型の動作試験の仕上げとして、アールカンバーとの模擬戦を行う！！」

審判役の生徒の口上に合わせ、詰め掛けた騎操士学科の生徒達が歓声を上げる。

革新的な機構を搭載した新型機と、既存機体の最強格との模擬戦否が応にも観客の期待も高まろうと言つものだ。

ホロモーダ
幻像投影機に映るアールカンバーの姿を睨みながら、ヘルヴィの口元には自然と笑みが浮かんできた。

訓練場での宣戦布告どおりに彼女はテレスター^レを駆り、アールカンバーに相対する。

技量では確実にエドガーに劣る彼女が、どこまで戦えるかを確認するのだ。

彼女の見たところ、まだ試作の域を出ないとは言え、様々な面で既

存機を遙かに上回るテレスターの性能を以つてすれば十分に勝機はある。

「この子はまだまだ未完成だけど……舐めない方がいいわ」「勿論手を抜く気など毛頭ないさ。むしろ期待している……新型の実力をこの手で確認できるのだからな！」

双方が剣を抜き、構える。

「よつし、準備はいいな？ それではこれより戦闘を開始する！！！
模擬戦闘の規定に則り、双方、礼！ 構え！」

……始めえっ！！

審判の合図を皮切りに、2体の鋼の巨人が雄叫びと共に走り出した。

#3.1 模擬戦をしよう

石畳の広がる訓練場にて、巨人が剣を構え相対する。全身を包む鉄の鎧が鈍く光を反射し、結晶質の筋肉が奏でる軋みが場内を満たす。

これから行われるのは模擬戦闘であり、つまりは訓練や試験の一環である。

しかし向かい合う当人達にとつては紛れもない戦闘であり、彼らが使用するのは人が持ち得る最強の兵器である幻晶騎士だ。（シルエットナイフ）漂う空気は気楽なものではありえず、幻晶騎士操る騎操士達も高まる緊張感のなかで静かに闘志を燃やしていた。

そして双方の準備を確認した審判が、声を張り上げ戦闘の開始を告げる。

幻晶騎士同士の戦いにおいては、距離が離れている場合は魔導兵装（シルエットアームズ）を使った法撃を行い、距離が近づくと近接武装に持ち替えて戦う、それが基本的な戦法である。

魔導兵装は紋章術式（エンブレム・グラフ）を使用しているという構造上、耐久性はさほど高くない。近距離で使用することは破損の危険性が高く、攻撃の選択肢を失う破目になりやすいからだ。

エドガーもテレスターに装備された背面武装の存在と機能は把握している。

魔導兵装を2本同時に使用しての遠距離攻撃能力は脅威である。それ故にエドガーは不利な遠距離での応戦を度外視し、試合開始直後に速攻で近距離戦に持ち込もうとした。

しかし彼の予想を外れ、テレスターも試合開始直後に前進し間合

いを詰めて来る。

「（どうこいつもりだ？ 折角の遠距離での有利を生かす気はないのか？

だが、それならそれで好都合だ！）」

初撃は勢いを乗せて斬撃を見舞おうとアールカンバーが踏み込みを強くする。

そして剣を振り上げた直後、エドガーは背面武装の機能を読み違つていたことを知る。

双方が今正に激突に移らんとする直前、突如テレスターの両肩へと魔導兵装が展開された。

操縦席では幻像投影機に映る照準機を睨み、ヘルヴィイがにやりと笑みを浮かべている。

「まずは挨拶代わりね。至近距離での法撃、これが背面武装の真価よー！」

テレスターに装備された魔導兵装が2本同時に火を噴く。まさに剣を組み合わせんとする直前に法撃を放たれてはさすがのアールカンバーも回避できず、法弾のうち1発は盾で防いだものの1発が盾を構えていない右肩へと突き刺さった。

演習用の魔導兵装である以上一撃で右腕が吹き飛ぶような威力は持つていいが、それでもアールカンバーは体勢を崩し、同時に接近してきた勢いを失う。

「まだまだあー！」

魔導兵装を背面へ収納しながらテレスターが剣を振り上げる。

工夫などとは無縁の勢い任せの一撃。しかし自身の速度を乗せ、相手の体勢を崩して放たれたその一撃は生半可な工夫を凝らした一撃より遙かに恐ろしいものとなる。

それを受けるエドガーは敢えて体勢が崩れるのに逆らわなかつた。右半身を後ろに流し、同時に左に構えた盾を押し出してテレスターの一撃を受ける。

辛うじて攻撃は防いだもののアールカンバーはほとんど吹き飛ばされるように後ろへと下がつた。

体勢が崩れ、踏ん張りが利かなかつたこともある。しかしそれ以上に相手の剣戟の威力はエドガーの予想を超えて強力だつた。

「……ツ！！ なんて威力ツ！ これが綱型の力かつ！？」
ストランド・タイプ

ステップをするように下がり、距離を取りながらエドガーが呻く。
背面武装によるこれまでの常識を外れた魔導兵装の使用タイミング、
ストランド・クリスタルディショウ
綱型結晶筋肉による圧倒的なパワー。

エドガーは体勢を立て直しながら、何よりも脳裏からこれまでの戦闘のセオリーを追い払つていた。

「ああ全く、嫌なことに最近常識を投げ捨てるのに慣れてしまつた！」

ホロモニタ
幻像投影機に映るテレスターはアールカンバーを追撃すべく再び前進を始めている。
もはや奇襲じみた真似はやめたのだろう、その肩の上には既に魔導兵装が展開されていた。

「だが、私にも意地があるからな！！」

直線的に攻めては再び法撃の的になるだけだ。

アールカンバーは盾を構えつつ、テレスターの射線から逃れるべく移動を開始した。

初手より予想外の白熱を見せる2機の戦いに訓練場に詰め掛けた観客達は大いに沸いていた。

鋼鉄の巨人が剣を打ち合つたびに歓声が上がる。

そんな熱狂に包まれる観客席とは別に、整備班用のスペースの一角で静かに戦いを分析する者達がいた。

「さすがはエドガーだな。並の乗り手だと一発目で勝負がついてるぜ」

「ヘルヴィイ先輩も中々上手く機体を乗りこなしていますね」

「そりやあ伊達に試験騎操士やっちゃいねえだろ」

エルと親方ダーヴィドである。

二人にとつては実戦に近い状態で動くテレスターの姿はまさに動く金塊の如し。

その一拳手一投足を注意深く観察し、分析していた。

二人の視線の先では再び2機が正面からぶつかつっている。

剣同士を組みあい鍔迫り合いにいくかと思われたが、テレスターがパワーに物を言わせてアールカンバーの剣を押し込む。

アールカンバーもさるもの、パワー負けは予想通りとばかりに間合いを取り、追撃を許してはいなかつた。

「ヘルヴィイは随分と力押しに見えるが」

「出力の差は歴然としていますからね。有利を最大に生かす方法かと。

それに、正直まだ操縦系統の調整が全然追いついていませんから。細かな技術で戦うと負けますよ

「なるほど、違ひねえ」

エルの言葉通り、操縦系統に粗を残すテレスター^レは有り余るパワーにより瞬発力には優れるものの、細かな動きは苦手としておりどうしても大雑把な攻撃が多くなる。

相対するは仮にも学科最上位の騎操士であるエドガーである。そう易々と剣の直撃を許してはくれない。

それでもテレスター^レは背面武装とのコンビネーションにより開始直後より優勢を保ち続いている。

対してアールカンバーは苦境に立つていた。

エドガーはテレスター^レの動作の粗さには気付いているが、それを生かすことが出来ないでいる。

これまでの幻晶騎士が相手であれば、相手の攻撃を誘発した後反撃する事も、エドガーの技量を以つてすれば十分に可能だ。

しかしテレスター^レを相手にした場合は背面武装の存在がその隙を埋めて余りあつた。

両腕による近接武装の攻撃をかいぐぐつたとて、今までに存在しないタイミングで追撃や牽制が飛んでくるのだ。

だからと言つて下手に組み合つてはパワー負けが確定している。

多少の技量差など関係ないほど機体に性能差が出てしまつてゐるのだ。

2機の戦いを観戦する生徒達にも、アールカンバーが悪手を打つているわけでも、ましてや手を抜いているわけでもないことはわかる。それ故に粗削りな動きながら学科最強の一角を圧倒する新型機に、彼らは沸きに沸いていた。

「厄介すぎる！ 魔導兵装を抑えないと厳しい……」

エドガーは焦りの中にも冷静に状況を分析していた。

テレスターはまだ試作の域を出ないだけあって粗も多いが、ヘルヴィイはよくそれを把握し、不利を補い有利を生かした動きをしている。

そしてそれを支える最大の要因が、背面武装による手数の差であることにエドガーも気付いていた。

多少以上の無茶をしてでも背面武装を黙らせなければ、このままでは彼に勝機はないだろう。

「あまり賭け事は好きじゃないんだが……このまま追い込まれるのも芸がないな」

ホロモニターに映るアールカンバーが動きを止めたのを見て、ヘルヴィイは小さく呟いていた。

「……そろそろ痺れを切らしたのかしら。博打に出る気みたいね、エドガー」

彼女は自分がエドガーよりも技量に劣ることを把握している。

それ故にこれまで機体の有利を前面に押し出した戦いをしてきた。ならば、エドガーの狙いも自然と推測できる。

「綱型による出力差はひっくり返せない。だったら……狙うのは恐らく背面武装」

背面武装が機能しなくなれば、いくら綱型によるパワー差があるつと精度が甘い点を突かれ技術でひっくり返され得る。

2人の騎操士は互いに敵を知り、己を知るが故にその認識は一致していた。攻防の焦点は自然と収束してゆく。

剣先を向け合つたまま2機とも動きを止めていた。

激しい戦闘の後に訪れた静寂に、まるで弦を引き絞るかのように互いの間の緊張感が高まってゆく。

場の空気を見て取つた観客達もいつしか静まり返り、近づきつつある決着の予感に固唾を飲んでいた。

不意に場内に響く、一際甲高い吸氣音。エーテルリアクタ魔力転換炉の全力稼動を示す駆動音を響かせたのはアールカンバーだ。

それは機械であるはずの幻晶騎士が上げた雄叫びの様にも聞こえる。それを合図として引き絞られた弓から矢を放つようにアールカンバーが走り出した。

様々な選択肢の中でエドガーが取つた行動は真正面からの突撃。石畳を踏み碎かんばかりの重量音を響かせながら鋼の騎士が疾駆する。

「こういう時に真正面なのがあんたらしいね！　いいわ、テレスターの全力で相手してあげる！！」

幾らパワーに差があるつとも勢いに差があつては攻撃を受けきれない。ヘルヴィもテレスターへ前進を命じる。

開幕直後の一幕を髪髪とさせる、双方走り寄つての激突。

当然テレスターは先んじて自身の有利を使用する。両肩の上の魔導兵装が火を噴き、2発の法弾がアールカンバーを襲う。

アールカンバーは片方を盾で防ぎ、そして片方を剣で切り捨てた。

法弾を剣で切り払う技量は賞賛されるべきだが、激突を目前に剣を振つてしまつたのは誰の目にも失策である。

何故ならアールカンバーの目前にはテレスター・レが迫り、そしてそのパワーを存分に生かすべく剣を構えているのである。突撃をかけておきながら一方的に斬られるだけでは余りにお粗末ではないか。誰もが そう、ヘルヴィすらそう思った。

そしてエドガーは当然、ただのヘマでそのような行動を取つたわけではない。

剣は最初から防御用と割り切つてゐる。彼は本命である構えた盾を握りなおし、腕を肩につけ完全に固定する。

アールカンバーはそのまま姿勢を低くし、左半身を捻じ込むように前進した。

「……違つ！？ シールドバッシュ！ サラに力押しでくる
なんてつ！？」

直前でアールカンバーの動きに気付いたヘルヴィは慌てて剣を引く。盾を押し出したアールカンバーに対して剣で攻撃しては、剣による一撃が届いてもこちらのほうの被害が大きくなる。

エドガーが取つた手段はシンプルなものである。

攻撃手段、そして純粹なパワー。そのどちらで負けたとしても、アールカンバーがテレスター・レに劣らないものがある。

それは質量だ。

パワーの差は勢いでカバーし、アールカンバー自身を弾丸とした渾身の一撃をテレスター・レへと叩き込んでいた。

技量を抜いた単純な押し合いでは、出力に勝るテレスター・レが絶対に有利である その事実を確信していたが故に、ヘルヴィは正面

から攻撃を受ける選択肢を選んでしまった。

エドガーの狙いに気付いたときには既に回避できる間合いではなく、そして自身も勢いをつけたが故に同様の行動を取らざるを得ない。テレスターも盾を構え、そして2機の幻晶騎士が激突した。瞬間、まるで衝撃そのものであるかのような硬質の音が響き渡る。2機の衝突の勢いをまとめて受けた盾が歪み、互いの左腕から衝撃で砕けた結晶筋肉^{クリスタルティッシュ}の欠片が飛び散る。

そして次の行動に移るまでのほんの僅かな間、ここで攻撃を仕掛けた側と、受けた側での明暗が分かれた。予想外の攻撃を受け怯んだヘルヴィと、最初から意図してぶつかったエドガー。

エドガーの狙いは最初からこの零距離の間合いで近寄ることである。そのために全身でぶつかっていったのだ。

多大なる左腕の犠牲を支払つてつかんだ僅かな好機。アールカンバーは無事に動く右腕を振るい、テレスターの肩越しに魔導兵装へと鋭く、渾身の突きを繰り出した。

「やつてくれたわね！… でもこれ以上はつ…！」

アールカンバーの左腕は深刻なダメージを受け、ろくに動かない状態だ。だがテレスターの左腕は驚異的なことにこの衝撃を受けてもなお稼動した。

さすがに全く無事とは行かないものの、それでも生き残った綱型結晶筋肉がそのパワーを發揮し、激突の衝撃でひしゃげた互いの盾を持ち上げるようにしてアールカンバーを押し返す。

「なんという！？ 出力だけでなく耐久性までもかつ！ だがこの機会を……ツ！」

「気合入れなつ！ テレスター！…」

一瞬早く、アールカンバーの突きが左肩越しに魔導兵装を折り碎く。しかし乾坤一擲の反撃もそれまでだつた。

テレスターの余りある出力がアールカンバーを押し返し、攻撃後で体勢を崩し氣味だつたアールカンバーはその勢いで完全によろめいてしまう。

「くつ、無理をしそすぎたか！」

「もうつたよ！ エドガー！..」

テレスターが裂帛の気合と共にアールカンバーへと斬りかかる。完全に体勢を崩したアールカンバーにその攻撃を避ける術なく、左腕の損傷により盾による防御もままならない。

万策尽きたアールカンバーへ、振り上げられた剣が襲い掛からんとし

その剣は振り下ろされることはなく、その場でテレスターが膝をつき、倒れていった。

その時に訓練場内に流れた空気を、正確に表現することは難しい。

唖然、や呆然、と表現するのが一番近しいだろうか。

何故、止めを刺さんとした側であるテレスターが膝をついているのか？

これが奇跡的なタイミングで放たれたアールカンバーの反撃によるものでないことは、同じく呆然としたその様子を見ればわかる。戦いが最高潮に達し、そして決着せんとした瞬間に訪れた、誰もが

全く予想だにしない結末。

目前の状況にどう反応すればよいかわからず、異様な沈黙が訓練場を支配する。そして

「……ああ！ 魔力^{マナ}切れ！」

唐突に何かに気付いたような、素つ頓狂なエルの声だけが静まり返つた訓練場に響き渡った。

「さて、これより第一回整備班大々反省会を開催したいと思います」

神妙な様子のエルが、厳かに開会を告げる。

工房内にはエル、親方と愉快な仲間達が勢ぞろいし、そして誰もが気まずげな表情を浮かべていた。

いつもはマイペースを崩さないエルも、今は少し目が泳ぎがちであり 僅かな逡巡の後、気まずさの原因をちらりと見やつた。

視線の先では、ヘルヴィイが工房の隅で三角座りをしながら長大な溜息を吐いている。

彼女からは気まずい、と文字が見えそうなほど濃密な瘴気が吐き出されていた。

全てが彼女のせいではないとは言え、大見得を切った末の魔力切れという呆氣ない結末である。

まだしも戦つて負けたほうが気も楽だつただろう、彼女が落ち込むのも無理ながらぬことであつた。

試作機であるテレスターに欠陥があること自体は十分に予想の範

疊だつたが、何もあのタイミングで発覚しなくとも……周囲の人間の心境を正直に語るならば、そんなところだろうか。

いや、決着を目前に双方が死力を振り絞つたが故に表面化してきた欠陥であるとも言えるのだが、そんな事実は何の慰めにもならない。

「え、エドガー先輩。ヘルヴィ先輩のフォローをお願いしたく……
「よりによつて俺か！？ ……つ、ぬつゝ、善処しよつ……」

さすがに堪りかねたエルがエドガーを彼女のほうへと押しやる。ほとんど決死の表情で歩みだすエドガーを見送った後、エルは爽やかに振り返った。

「さてこちらでは新たな問題への対処を考えましょつか

「生きる、エドガー。
……さてまあ起こうてみると簡単な事なんだけどよ。出力が上がつた分、燃費が悪くなつた。
実に当然だな」

整備台に設置されたテレスター^レを前に、全員が頭を抱えていた。綱型結晶筋肉^{コス^ト}を使用し、出力が上がつたゆえの必要魔力^{マナ・ブル}の増大。それによる魔力貯蓄量の消費速度の増大。

その上魔導兵装が使いやすくなつたことにより、そちらに取られる魔力も予想以上に増大していた。

それに比べて綱型を使用しても、結晶筋肉の純粋な物量はほとんど増えておらず、全体的な魔力貯蓄量は微増に留まつてしまつていた。結果としてテレスター^レは稼働時間の大軒な短縮という欠陥を抱えてしまつっていたのだ。

模擬戦の結果は発覚したタイミングが最悪であつた以外は、冷静に考えてみれば順当なものであつた。

「色々な要因を鑑みて、ざつと稼働時間は半分程度でしょつか。えつと……まずい、ですよね?」

「まあ過ぎる。正直致命的じやねえかとすり思つんだが……」

今回の改造は出力の強化や魔導兵装の発射タイミング追加など、とにかく外部へと放つものばかり増やしている。

現実的な問題として、改造点のバランスの悪さが浮き彫りになつた状態だ。

「（今思えば幻晶騎士はなつから容量^{キャパ}ギリッギリの設計しどつてんな。
この余力のなさはむしろ芸術的なもんすら感じる。
これで出すものばっかり増やしたらそらガス欠にもなるよなあ）」

とは言え嘆いても何も始まらず、ヘルヴィの尊い犠牲を無駄にしないためにも発覚した欠陥には対策を考えねばいけなかつた。

「何よりも消費に対し、魔力の供給が足りませんが……供給元である魔力^{エルリックタ}転換炉の改造は難しい、と言つより不可能です」

さすがのエルにも、動作原理不明の動力炉をどうにかする術はない。その台詞にこつそりと周囲の生徒達は安堵の息を吐いていた。これを軽く改造されたらさすがの彼らもすぐには立ち直れなさそうである。

「なら消費を抑えるか？ しかしなあ、抑えようにも仕組み自体が大喰らいじや意味がねえ。

動きを抑えたんじや本末転倒もいいところだ」

「後は魔力貯蓄量の増量ですか……。魔力貯蓄量は、どうやって増やしているのですか？」

「そりやおめえ、すばり結晶筋肉の量を増やすしかねえな」

「それで容量を増やすのは駄目でしょつか」

「結晶筋肉を増やしたんじゃ、結局消費もでかくなっちゃまつじやね

えか」

「綱型にも落とし穴がありましたね。」

筋肉の量 자체はほとんど増えていないから、出力と容量の釣り合
いが悪くなつてしまつています」

発覚した問題点の深刻さに、全員が完全に頭を抱える。

さすがにすぐに解決案はないかと思われたが、光明は意外などこる
から投げ込まれた。

「そこ」でほら、お得意のアレじゃないの？」

全員が悩み、静まり返つた場面で言葉を発したのは、それまで黙つ
て話を聞いていたアディである。

開発の場面では珍しい人物の発言に、エルは思わず鸚鵡返しに聞き
返してしまつっていた。

「……お得意のアレ？」

「そう、人の形してなくていーつてやつよ！」

「人の、形を……しなくとも、いい」

「えーとだから、筋肉は増やすけど、人の形はしなくていいんでし
ょ？」

彼女にしてみれば、その言葉はそのままエルの受け売りだ。
しかしそれを言われた当人は目を丸くして驚いた後、じょじょに目
を細めていった。

「うう、その通りなんですけど。なんだかアディに教えられると…

…凄く悔しい

「ひどいっ！？　どうしてよーーー？」

暴れ始めたアーティと逃げるエルを横目に、彼女の言葉をきっかけにして親方も同じ発想へと辿り着いていた。人の形を外れる、それは別に人とは違う形状をとることのみを意味しない。

「……そうだ、そうだつたな。結晶筋肉を増やしても別にそれを動かすこたあねえのか。

つまりは結晶筋肉の量だけ増やしゃあいい。

銀線神経で繋いで、どこか空いた空間に結晶筋肉を張りやあいい

のか！」

「ほつ、ですから悪かつたですつてつとつまつ……『めんなさい、謝りますから……ね？

……それなら親方、あとはひたすらに空間の密度を高めるべきでしょう。

だから纖維ではなく塊、できれば板状かな？　で用意したほうが良いかと

エルの提案を聞いた親方ががばつと顔を上げる。

「ようしそれだ！　そつと決まりやあ俺あちよつと鍊金学科に行つてくる」

「お供します」

「おつ、善は急げだ、走つて……つて坊主はつや！　おいまて、どこの行くか解つてんのか！？」

「おい坊主！！」

親方がドスドスと足音を響かせながら既に豆粒と化したエルを追い

かけていった。

余談だが、落ち着きはしたがむくれるアーティを宥めるのにキッドが四苦八苦したとかしないとか。

騎操士学科より程近い場所に、鍊金術師学科の校舎はある。整備班として常に作業に勤しむ鍛冶師や訓練主体の騎操士とは違い、研究職を志すものも多い鍊金術師学科の校舎は独特的の静けさに満ちていた。

鍊金術師学科に所属するラッセ・カイヴァントもどちらかと言ひつと研究職を目指す者の一人である。

彼はその日もいつものように研究室に籠り、触媒結晶を変質させる様々な薬液の研究を行っていた。

試薬を熱する静かな音だけが聞こえる部屋に、突如として外からの無粋極まりない雜音が響いてくる。重量のある物体が連續で叩き付けられるような音……もしくは体重のある人間が全力疾走しているような足音、である。

研究を妨げられた不快感に彼は僅かに眉を上げ、しかし関係ないとばかりに手元へと視線を戻す。そうとしたところで突如部屋の扉が乱暴に開け放たれた。

「おうラッセ！ いるか！ 生きてるか！？ ちょっと頼みがある！」

部屋の広さを全く気にしない大音量の誰何にラッセの鼓膜が痺れる。扉を開け放つ音源 ダーヴィド 親方に向けて、今や不機嫌そのものの表情となつたラッセが応えていた。

「ダーヴィド……こつも言つていいだろ？、そんなに大声を上げずとも聞こえる、ちょっと静かにしてくれたまえむしろとつと居なくなれ」

「すまねえ、つい癖でな。まあそんなことよつちよつとお前に頼みたいことがあつてよ」

「全く何の用だ、結晶筋肉の追加分ならこないだ馬鹿筋肉のお前が潰れるほど渡しただろ？」「ひう。

「今日はちつとばかり違う用だ。どちらかつてーとお前に新しく作つてもらひてえもんがある」

びつや、りラッセのもの言いにも慣れたものらしく、親方は顔色一つ変えずに用件を切り出した。

その台詞に不機嫌一色だったラッセの表情が変わる。研究者としての性格の濃いラッセにとって“新しい”と言つ言葉はその機嫌を直して余りある魅力を持った言葉だった。

「ほひ、新しい、ね……。特別に聞いてやるつじやないか。

どうでも良い内容だつたら薬でお前の髪を固めてやる」

「なつ！ てめえ、ドワーフ族の髪は神聖なんだぞ！？ ケツまあいい、聞いて損はさせねえよ……」

一通り親方の説明を聞いたラッセの表情は、傍目には口くちがたいものになつていた。

興味と悦びと思考と疑問を混ぜて炒めればこんな感じになるだろ？ か。

「というわけで結晶筋肉を塊で用意してもらいたい。できれば板状にしてもえりやありがてえな」

「ふむ、確かに面白い。」

お前の鉄製の脳味噌で良くそんなことを思いついたものだと誉めたいところだが……」

ラッセの視線がついと逸れ、それまでは親方の横で静かにしていた人物へと移つて行く。

「……お前か？ 元凶は？」

「少し助力はしましたが、これは親方の案が基礎になつていますよ」「ほう……ダーヴィドの鉄塊も、ずいぶん進化したじゃないか」「てめえはいつか全力で殴る。で、どうなんだ？ 用意できそつか？」

「待て。これまでの生産設備が使えん以上すぐさま作れるものじゃない。研究室でいくらか作つてみるからまずは時間を寄越せ」

言いつつ、すでにラッセは作業に取り掛からんとしている。すでに彼から余計な興味は消え、目の前の作業へと沈みつつあった。こうなると長いことをわかつている親方はエルを促し戻りつとするが、エルにはまだ確認すべきことが残つている。

「最後にもう一つお聞きしますが。

魔力貯蓄量に特化した性質を持つ結晶筋肉……か、それに類するものはないのでしょうか？」

どつぶりと作業に沈むラッセにも、興味ある言葉は届くらしい。

「……無いな。これまで結晶筋肉は収縮による出力の増大を主眼に研究されてきた。

魔力貯蓄量はあくまでも副次的な要素だ」

「では、つくれませんか？」

「何とも言えんな……これまで口クに研究されていないこと言つ事は逆に研究の余地が多いともいえる。

が、面白い。実に面白い……」

ぶつぶつと呟きながらも作業を進めるラッセは、それつきり研究の海から還つて来る事はなかつた。

「しかし他にも落とし穴ねえだろうな、新型？」

「保証はしかねますね。もう少し新型を増やしてじっくり動かしたほうが良いかもですね」

「腕が鳴るつてえか、肩が凝るな、まつたく」

#32 小さな前進と大きな到達

軋むような駆動音と、甲高い吸気機構の音を響かせながら鋼鉄の巨人がその身を起こす。

巨人の全高は10mに及び、周囲にいる人間の5倍以上の巨躯^{ヨコ}を誇っている。

金属地そのままの色をした無骨な鎧^{イニヤク}が陽光を反射して鈍く煌めく。動くたびに鎧同士がぶつかる硬い音が鳴り、騒々しさが更に増していく。

立ち上がった巨人は軽く身を動かして調子を確認すると、足元の人間に對して頷きを返した。

周囲から人が離れたのを確認すると、巨人は一拍の間氣合を入れてから「えられた試験項目に従い動作を開始する。

巨人の両腕に張り巡らされた結晶質の筋肉が魔力^{マナ}と反応し、収縮を開始する。

そのまま全身を緊張させると、両腕を力強く上げ、肘を突き出すようく曲げる。腕、その付け根、胸を張り背に力をいれ、両脚は力強く大地を踏みしめるポーズ ダブルバイセップス・フロント。

そこから軽く足を前に出し、腕を下げ腹の前で拳を合わせる。やや前かがみ気味の姿勢で全力を込めて腕の筋肉、そして胸の筋肉を振り絞る、最も力強さを表すポーズ モスト・マスクュラー。

鋼鉄の巨人は力強くも流れるように、見事にポーズを決めていた。

「…………あれは一体全体、何をトチ狂つて……いや、何の試験なんだ？」

「ん？ 説明によると、普段使いづらい部位の結晶筋肉^{クリスタルティッシュ}を動かす試験らしいよ」

「誰だよそんな項目作つたのは」

某銀髪の少年が設定した試験に従いひたすらにポーズを決めまくる
ジルエットナイト
幻晶騎士を見ながら、呆れたようにぼやいているのはエドガーであり、それに答えているのはヘルヴィイだ。

「ああいや、眞面目な試験項目ならいいんだが……いいのか？　いいか……」

「そう？　それより、2号機の試験は順調なの？」

「ああ、さつき交替してきたが順調に消化している」

エドガーの視線の先では2号機と呼ばれた、先ほどの機体と同型の機体が、また別な試験を行つていて。

彼は2号機担当の騎操士の一人であり、つい先ほど交代したところだった。

ここ数日は天候のいい日が続いているため気温も上がる一方であり、長時間稼働した幻晶騎士の操縦席は蒸し風呂状態になつてしまつ。一応吸気機構と連動した空調設備はあるのだが、周囲の気温も高くてはまるで焼け石に水だった。

そのためある程度で休憩を挟まないと、動かす人間がもたない。二人とも汗を拭いながら、水分を摑つて休息しているところである。

訓練場にはその2機だけではなく、見渡せば様々な動作をしている機体がいた。

そのどれもが設定された動作を行い機体の確認をしているのであり、つまりは動作試験の最中である。

この状況は、過日のテレスターレとアールカンバーの模擬戦に端を発する。

試作機テレスターレの稼働時間の激減と言う欠陥により幕を閉じた、かの模擬戦。

欠陥があること 자체は問題ではない　見つかれば、修正すればい

い　が、あまりに劇的に発覚したことにより、他にも致命的欠陥の存在を危惧され始めたのである。

その結果、微に入り細を穿つ恐ろしく膨大な数に及ぶ動作試験が予定された。

動作試験の追加には誰もが賛成したが、さすがにその莫大な項目をテレスター・レー機でこなせるはずもなく、急遽同一仕様機を増産して対応することになった。

おかげで整備班は模擬戦後も全力稼働を続けており、そろそろ一部生徒に過労死の危険が心配されている。

新型機は都合5機生産され、機体の完成後は騎操士達による地道な試験の消化が続けられており、今もその真っ最中と言つわけである。今のところ新たな大きな欠陥は見つかっていないが、地道に改良を続けられた新型機は着実にその完成度を高めていた。

訓練場を吹き抜ける、熱気をはらんだ風にうんざりしながらエドガーとヘルヴィは雑談に興じていた。

最近の二人の会話はどうしても新型機についての内容に偏りがちだ。彼らは休息をとりつつ、操縦感覚の調整についてとりとめもない議論を交わしていたが、途中エドガーがふとしたことに気付いた。

「そういえば、最近エルネスティを見ないな」

「あ、そういえば。あの子なら張り付いて試験の様子を見てそういうに、どうしたのかしら？」

「……まるでない事をしでかし始めたんじゃないだろうな」

「そんなことないですよ？ 僕もこれで中々に忙しいのです」「ほう。そう言う割には最近はうちに入り浸りじゃないか」

エルネスティの台詞にバトソンが呆れたように応じる。

彼らがいるのはテンドー一家所有の個人工房だ。幻晶騎士用ではな
いそれは、騎操士学科の工房に比べると遙かに狭く、雑然としている。

「それはそれ、これはこれです。どんなに忙しくとも、友人と遊ぶ
時間があつてもいいでしょう？」

「前から疑問に思つてたんだが、遊ぶと言つより作業してるよな?
俺ら」

「それもそれ、これもこれです」

彼らの目の前には1体の幻晶甲冑シリエットギアが鎮座している。

今は両膝をついて装甲の前面部分を四方に展開した状態で静止して
いる。周囲には何かしらの作業に使つたと思しき工具や材料が散乱
していた。

その幻晶甲冑は最初に親方達が作つた時よりも、幾分姿が変わつて
いる。

何よりも目立つ差異は、鈍い金属色そのままであつたはずが今は全
身が蒼く塗装されていることだ。

そして乗り込む部分が身長が小さい人間に合わせて調整されている。
有り体に言つてエル用に調整された機体である。

「いやしかし、遊び半分とは言え随分いじつちまつたな」

会話しつつも作業を続けるバトソンの手際は明らかに手馴れた職人
のそれだ。これだけでもこの二人がどれだけ幻晶甲冑を弄り回して
きたか、わかると言つものである。

「もう既に、先輩達よりもバトさんのはうが詳しそうですね
「それもぞっとしないな」

ずっと作業を続けるバトソンに対し、それを眺めるエルは投げ出した手足をぶらぶらと振り見事に退屈を表現していた。

場合によつてはエルも作業に参加するが、今はバトソンが仕上げに入つてゐるためエルにはやることが無い。

「……そんなに暇なら、そつちに新作があるから、見とけ
「新しいのを作つたんですね。是非拝見させていただきます!」

視界の端にちらりヘルの動きにややつとぞりしてきたのか、バツソンは追い払つように工房の一 角を指差す。

彼が指した先にあるのは“1／60スケール幻晶騎士の銅像”である。

フレメヴィーラ王国の制式採用幻晶騎士であるカルダトアの形状を緻密に模したそれが、量産されて工房の端に並べてられていた。ずらりと並んだその光景は、まるで本当に騎士団がそこに在るかのようだ。

「うーん、やはつ素晴らしいですね! 良い、凄く良いです!」

エルは全高160cm程度の銅像の周囲をぐるぐると回り眺め回している。
撫でたり、這い蹲つて見上げたり、手を持つて回して眺めたりと中々忙しい様子だ。

「さすがはドワーフ、匠の技。あの大きさでの精度は素晴らしいの一言に尽きます」

「それはなあ……親父が異様に乗り気になつてな。ツテを辿つて、

実際にカルダトアを模写しながら作つたらしき

バトソンはテンションの高めなエルに嘆息を挟みながらも、やや機嫌を上向きに応える。やはり彼の父親の仕事に対する贅辞は嬉しいようだつた。

その銅像は大きさ以外は本物と寸分違わぬレベルの出来だ。どこの世界にも凝り性と言つものほいいらじこ。

「まあ、お陰様で銅像はなかなかの売れ行きだ」

「そのお礼として、こいつしてタダで改造してもうつてゐるのですから、いい事です」

エルがついに模型を拝み始めた頃に、バトソンの作業が終了する。彼は手ぬぐいで額の汗を拭うと、一つ満足感に満ちた顔つきを残してエルを呼んだ。

「とりあえず幻晶甲冑への取り付け、終わつたぞ」

「幻晶甲冑。そのままですといま一つ風情がありませんね。そろそろちゃんとした銘をつけますか。

……そう、“ジュゲムジュゲムゴコウノスリキレカイジャリスイギヨノスイギヨウマツ”とか

「長いわ！ もつとわかりやすいのにしる」

「では略して“モートルジー”と」

「おい、略する前と一文字もあつてないぞ！－！」

じやれる様に雑談を続けながらもエルは機体の周囲を回り、取り付けの様子を軽く確認してゆく。

一通り見て回ると手慣れた様子で幻晶甲冑に乗り込んだ。金属が噛み合つ音と空気が抜ける音が続き、開いていた装甲が閉じられ固定される。

エルはゆっくりと目を閉じる。

彼はこの世界の生物に独特的な器官、魔術演算領域にて、望む現象を発現すべく魔法術式^{スクリプト}の構築を始める。

構築するのは身体強化^{フィジカルブースト}に似た高度な強化魔法、発現対象は彼の身を纏う蒼い鎧だ。

彼は己の体が広がったようなイメージを思い起し、そしてそれに魔法を適用する。

流れる魔力と魔法術式に従い、各部に仕込まれた網型結晶筋肉^{ストランド・クリスタルティショウ}が収縮を始める。

膝立ちの格好で停止していた蒼い幻晶甲冑が一瞬ぶるりと震え、一拍の間をおいて立ち上がった。

動くための魔力、そして動かすための制御。

そのどちらも操縦者であるエル本人により賄われるそれは、つまりは魔法能力を直接物理的な力へと変換する機械だ。

彼は幻晶甲冑の巨大な拳を開閉させて軽く動きの調子を確認していた。

その動きは滑らかで、まるで中に生身の腕が入っているかのようだが、幻晶甲冑の腕は骨骼であるメインフレームへと接続されており、そもそも内部に生身の腕は収納されていない。

金属と結晶の塊でしかない幻晶甲冑が滑らかに動き出す。すでに見慣れているはずの光景だが、それでもバトソンは感心した様に笑っていた。

「何度見ても面白いな……で、モートルビートでいいのか？ そうか。

幻晶甲冑、便利そうに思うんだがもつと作らないのか？ できれば俺も使えるようなやつを」

モートルビートは幻晶甲冑の例に漏れず、全高は2・5m近い。ドワーフ族であるバトソンはその半分を超す程度の身長であり、最初は上を向いて話そうとしていたものの、すぐに諦めていた。工房から移動しながらエルは説明を始める。

「ご存知の通り、製造自体はそう難しくはないのですけどね。

動作系統をちゃんと仕上げないと僕達以外の人には使えない物なので、増やす意味がないのですよね」

幻晶甲冑は最終的に5機製造されたが、この人力制御の“初期型”はそのあまりの扱いにくさから現在はお蔵入り状態になっている。改良しようにも、親方を始め整備班の鍛冶師達は新型機の製造、改良に総力を注いでおり、とても幻晶甲冑にまで手が回らない状態だつた。

そのため彼らが手一杯になつている間、エルはこうしてバトソンと共に幻晶甲冑をいじり倒しているのだった。

「魔導演算機マギウスマシンを小さくする、なあ。まったくさっぱりだな」

二人とも最大の問題点である、操縦の難易度をさげるための魔導演算機に関する知識を持たない。

彼らが行つた改造は主に幻晶甲冑の筐体の調整、改造に終始しており、やはり量産化の目処はついていなかつた。

「まあそれはおいおい。まずは新装備の完成披露と参りましょ！」

エルはモートルビートに乗つたまま工房から出ると、射撃用の的と

して用意された丸太ではなく、工房の外壁のところへと来ていた。周囲の住宅よりも一段と高くそびえる外壁を前に、彼はモートルビートの腕を天に向けて差し伸ばす。

「ワイヤーアンカー、射出！」

掛け声と共に、伸ばした腕の手首の装甲内から軽い噴射音を伴つて
鎌状^{やじり}の物体が飛び出した。

鎌の後端にはワイヤーがつけられており、勢いよく飛翔する先端部に引っ張られてしゅるしゅると腕から引き出されている。

重力に逆らつているにも関わらず、鎌は勢いを弱めずにそのまま工房の屋根の上まで飛翔すると、突如鋭く方向を変えた。

そのまま屋根に突き刺さったところで鎌の内部に仕込まれた機構が作動し、鎌はまるで錨^{いかり}のような形状へと展開する。

鎌が突き刺さったことを確認したエルはワイヤーを引っ張り、先端が十分に固定されていることを手ごたえから確認する。

「よつと」

続いてモートルビートの腕の内部で何が回転し、噛み合う歯車の音が響き始める。

ワイヤーの基部には巻き上げ機構が仕掛けられており、発動したそれが長く伸びたワイヤーを腕の中へと収納してゆく。

先端部を固定した状態でワイヤーを収納すればどうなるか。当然、モートルビートはワイヤーに引っ張られことになる。

そのまま工房の壁へと走り寄ったモートルビートは直前で飛び上がり、ワイヤーに引かれるままに上昇し始める。

何度も壁を蹴つて飛び上がる間に見る見るうちに屋根へと上り詰め、そのまま最後を一気に踏み切ると空中で身を捻つて回転。

着地の瞬間に大気衝撃吸収の魔法を発動、足元に圧縮空気の塊を作り出し、それをクッシュョンとして屋根へと軟着陸する。

足元を確認しながらモートルビー^{エアサスペンション}トがゆっくりと身を起こす。

彼は会心の笑顔を浮かべると周りを見渡す。周囲の建物より頭一つ高い工房の屋根の上からの景色は中々のものだった。

エルは刺さったままの鎌へ向けて、魔法術式と魔力を送る。

鎌へとつながるワイヤーの中には銀線神経^{シルバーナーブ}が寄り合わせられており、それによって鎌の内部に仕込まれた結晶筋肉へと術式が伝達される仕組みになっている。

展開していた鎌を収納し、元の鎌の形となつたところで屋根から引き抜かれて、腕の中へ収納されていった。

この鎌を飛ばす推進力も内蔵された結晶筋肉を触媒として、断続的に^{エアロスラスト}圧縮大気推進の魔法を使用する事で得ている。噴射方向を制御することで、ある程度は飛翔方向をえることも可能だ。

この機構 ワイヤーアンカーは以前模型と共にバトソンへ製作を依頼していたものである。

元々は某怪盗の真似がしたくて考えたお遊び装備であり、当然個人での使用を想定していたのだが、後に幻晶甲冑の製作に伴いそちらに装備すべく仕様を変更したものだった。

工房の庭では全高2・5mもの巨大な鎧の騎士が高速で屋根の上へ移動する、その一部始終を見届けたバトソンが唸っていた。

鎧を着て建物の屋根に上るなど、例え身体強化を使用出来たとしてもかなりの無茶だ。それをこなす巨大な鎧の存在に、彼は苦笑いが止まらなかつた。

「（もしこれが量産できたらえらいことになりそうだな。エルネスティはその辺考えてるのかね）」

呆れ半分、心配半分に見上げれば、当の本人は屋根の上でがしゃがしゃと腕を降っている。

それに応えながら、バトソンは先ほどの心配を少し脇においておくれた。

ライヒアラ騎操士学園の周囲には学生向に日用品を売る店や、軽食を提供する店などが存在する。

経済的に余裕があるとは言いがたい学生達であるが、それでも人数が多いため、学園の付近には彼らの生活にあわせた店が多くなる。そして学園が放課後を迎える頃になると、周りの通りにはいくらかの出店がたつ。大抵は菓子や軽食を提供する店だ。

この時間帯はあちこちで、勉強から開放された学生達が蜜に吸い寄せられる蝶のように出店に寄り、軽食をつまむ光景が見られる。

そんな出店の一ついに、パンケーキにジャムを挟んだ菓子を売る店がある。

店主はその日もいつものようにパンケーキを焼いており、そこに女子生徒と思しき注文の声が入った。

「おっちゃん、パンケーキ二つ、ジャムはマンダリーナのお願いね！」

「あいよー。ちよいと待ちな、もうすぐ焼きあが…………」

愛想よく振り向きながら答えた店主の声が、尻切れトンボに小さくなつてゆく。

何故なら、店の前にいたのは学生と言つかむしろ巨大な全身鎧の騎士だったからだ。

当然幻晶騎士ほどは大きくないが、それでも天幕を越える大きさの
その騎士は、屈むようにして店先を覗き込んでいる。

呆気に取られる店主と目線を交わしながら騎士が首を捻る。しばらく
く何とも言えない空気が流れていだが、その後ろから同じような体
躯の騎士がもう一人現れ、先にいた騎士を窘めた。たしな

「おいおいアーティ、乗り込んだまま声かける奴があるかよ
「ん？ あ、そつか！ 「めんなさい、びっくりさせっちゃったの
ね」

重装の騎士から年若いと思しき女子生徒の声が聞こえてくるという
怪奇現象に、未だ店主は動搖から帰つて来れないなかつたが、突如
鎧が開き中から本当に女子生徒が出てくるのを見て完全にぶつとん
だ。

「な、な、なんじゃそりやあ！！」
「あ、おっちゃん、ケーキ焦げてるわよー！」
「え？ あ？ なああーー？」

我に返つた店主は慌ててパンケーキを引き上げてゆくが、何枚かは
既に残念なことになつてしまつている。

「あー、『めんなさい』、驚かしちゃつたからねー。私達のは、その
焦げたのでいいから」
「え？ いやまあ、驚いたつつつても焦がしたのは俺のミスだ。客
がそんなの気にするない」

無事なパンケーキに注文にあつたジャムを挟み、渡しながら銅貨を
受け取る。

女子生徒はお礼を言つと再び鎧に乗り込み、もう一人の騎士とパン

ケーキを食べながら歩き去つていった。

「……最近の学園じゃあ、えらい鎧使つてんだなあ…………」

後には銅貨をしまいもせず握り締めた店主が、驚愕覚めやらぬ様子でその後姿を見送つていた。

「うーん、おーしー。やっぱマンダリーナのジャムがいいわよねー」「俺はフリラのジャムのほうが好きだけだな」

パンケーキを食べ終えたところアーキッド、アデルトルートの二人は本格的に幻晶甲冑を走らせていた。

大通りを馬車並みの速度で爆走する巨大な鎧に周囲の住民達は一瞬驚くが、すぐに気にしなくなつた。

この二人が幻晶甲冑で走るのも最近よく見る光景であり、彼らもすでに慣れっこになりつつある。

実は単純に街中の目的地に移動するだけならば、わざわざ幻晶甲冑を持ち出す必要はない。

彼らの能力を以つてすれば、馬よりも高速で移動するくらいわけはないし、大げさな装置を使うよりもむしろ気楽であろう。ご存知の通り幻晶甲冑を動かすと言つことは、高難易度の魔法術式を使用し続け、相当量の魔力を消耗すると言つことである。魔法に関する能力は基本的に使つて伸ばすしかない。そしてより効率的な上昇を望むのであれば、相応の高い負荷をかけることが望ましい。

つまり幻晶甲冑を使うのは訓練的な意味合いが大きい。

彼らはかつて身体強化の魔法を使いながらジョギングをした時のよ

うに、日々の生活の中で徐々にその能力に磨きをかけていた。

その調子で大通りをひた走ると、彼らの進む先に他の建物よりもやや大きい建物 テンドー一家所有の工房が見えてくる。

同時に何故かその屋根の上には蒼い鎧が立つて居るのが見えるが、鎧の主のことを考えればまた何か面白いことを始めたのだろうと予想はつく。

キッドはにやりとした笑みを浮かべると、直接工房の裏手の庭へと向かった。

「おーっすバトソン、今日は何やつてんだ？」

「エルくーん、どうやつてそこまで上つたのー？」

二人は既に勝手知ったるどばかりに遠慮なくがしゃがしゃと庭へと入ってゆく。

場所の主たるバトソンも特に気にした様子もなく、むしろ一人のタイミングの良い登場に指を打ち鳴らした。

「おー、ちょうどこいつに来たな。重い荷物がある、運ぶの手伝え」

「うわいきなり？ 人使い荒いわねー」

バトソンの指示に従い、二人は荷物を取るべく工房へと向かつ。

その間にエルは屋根から飛び降りていた。さすがにこの高さからそのまま飛び降りてはモートルビーートが無事では済まない。

途中に圧縮大気推進を逆噴射することで勢いを減衰させ、そりに大気衝撃吸収の魔法を使用しての着地だ。

盛大な土ぼこりを巻き上げながらモートルビーートが着地したあたりで、キッドとアディが工房から荷物を引っ張りながら出てきた。

二人はそれぞれに違うものを持っており、キッドが持つのは細長い四角柱の形をした道具だった。

本体の大部分は木製で、ところどころに金属を使って補強が施されている。先端部には弓のように左右に突き出た部分があり、その根源には歯車を有するいくつかの機構が設置されていた。

キッドは自分が持ってきたそれを眺める。形状から見るに、その正体は一目瞭然だ。

「弩か……？ つづーか、でかいな。攻城兵器じゃねえのか、これ？」

「ええ、概ね間違いではありません。

攻城用大型弩砲を多少小型化したと表すべきものですからね」

エルが説明した通り、その弩は幻晶甲冑に持たせても尚わかるほど巨大だ。

当然重量的にもかなりのもので、幻晶甲冑がなければ据え置き式で使うことになるだろう。

「あー、なるほど。幻晶甲冑を台座の代わりにする気なのか」

「それもありますが……アディ？ 弹倉^{マガジン}は持つてきますね？」

「ではそれを取り付けてください」

アディが持ってきた荷台には箱型の弾倉が何個も用意されていた。横幅は人が両腕で抱える程度であり、そこそこ大きい。幻晶甲冑の手で持つてみ出している。

「簡単に説明しますと、これは弓の弦の部分と、その巻上げ機構に

綱型結晶筋肉を使用した携行用大型弩砲です。

結晶筋肉の収縮を操作するだけで自動的に矢を撃つところまで動

^{ボルト}

作するようにしてあります

「なるほどねえ。それで、この弾倉ってのは？」

「中には矢が並べてあって、弓の巻上げに連動して一発ずつ矢を装填する仕組みになっています。

これ以上は、口で説明するより実際に動かしたほうが早いでしょうね」

エルの説明に従い、キッドは弩砲の中ほどよりやや前にある部分へ弾倉をはめ込む。

それに連動して固定レバーが跳ね上がり、内部の機構が噛み合つ音がした。

弾倉が設置されたことを確認して、キッドは弩砲へと魔法術式と魔力を送り始める。綱型結晶筋肉が限界まで伸縮し、弓のしなる音と筋肉を引き絞る、独特の音が聞こえてきた。

同時にクラシク機構により連動して動く歯車の駆動音が聞こえて来る。本体を覆う機構の外装に邪魔されて外からは見えづらいが、弾倉から取り出された矢が本体に刻まれたレールへと設置される。

発射方法は少し独特だ。

結晶筋肉それ自体を弦としているため、通常のクロスボウにあるトリガーに該当する機構が存在しない。

代わりに弦と、巻き上げ機構にある結晶筋肉の伸縮を操作することで矢を発射するのだ。

キッドは力を蓄え限界まで撓んだ結晶筋肉に、その開放を命じた。豪快な飛翔音と曳きながら高速で矢が飛び出す。比較的近い距離で撃つた事もあり、それは狙い違わず標的である丸太へと突き刺さった。

一般にクロスボウで使用される矢は弓のそれに比べ短く、太い形状をした物が多い。それが小なりとは言えバリスタともなれば、矢と

いうよりももはや矢羽を付けた短い槍に近い代物になる。

綱型結晶筋肉の力を限界まで引き絞り、更に弓のしなり、筋肉自体の収縮までを加えて撃ち放たれた矢は本物の攻城兵器には及ばないものの、それでも十分な威力を發揮した。

つまり結果として、矢は標的である丸太を半ば破碎しながら貫通した。

「…………」

「もう少し頑丈な標的を用意すべきでしたか」

「……いや、つうか、これ街中でぶつ放していいもんじゃねえだろ」

「試射用に後ろに分厚い土壁用意してるから、大丈夫だ。それこそオバド・スペル戦術級魔法でも撃ち込まない限り」

矢を撃つたポーズのまま固まるキッドを他所にエルとバトソンがのんびりと話し合っていた。

弾倉を抱えたアディは興味深々な様子で丸太を貫く矢を眺め回していた。

「ああ、それと先ほど言った通り結晶筋肉を使って素早く巻き上げができますので、ある程度は連射が効きますよ」

「ぶつ！ 本気かよ！！」

「多少慣れにもよりますが、最高で5秒に一発と言ったところですか。

弾倉には一つにつき10発矢が入っていますので、大体1分で撃ちきる計算ですね」

キッドは恐る恐ると言つた霧岡氣で弩を構えなおすと、息を吐いて気を静めてから連射を行つた。

駆動音と矢が風を切る音がリズミカルに続き、次々に標的に矢が突き立つ。

それは5発を数えたところでついに丸太が折れ砕け、残りの矢は直接土壁に突き立っていた。

「連射できる手持ち攻城兵器かあ、凶悪だねー」

「ですがあくまで持ち運べると言つだけで重量もあるし、取り回しは悪いですね。」

かなり無理矢理な代物なので精度も低い。連射はむしろ数で精度を補っている部分もあります」

今後の課題ですね、と丸太を見ながらエルが呟く。彼らも当分は暇をせずにするようだ。

ラッセ・カイヴアントが騎操士学科の工房を訪れたのは、新型機の動作試験が一通り完了を迎えるとしていたころだった。

彼は工房の門をくぐるなり親方へと詰め寄り、完成した板状結晶筋肉の出来栄えについて暴風のような勢いで語り始めたところで拳で鎮圧されていた。

のびたラッセを放置して工房には板状の結晶筋肉が運び込まれてゆく。

膨大な動作試験による確認の結果、幸いにも新型機には稼働時間以外の大きな欠陥は見つからなかつた。

板状結晶筋肉は、新型機の欠陥を埋める最後のピースということになる。ついに目前まで迫った完成へと至るべく、鍛冶師達は幻晶騎士の魔力貯蓄量の増加改造を開始したのだつた。

当初彼らが想定していた方法は板状結晶筋肉を装甲の裏側の空いた

空間に設置する、と言つものだつた。

しかし実際に検討を始めたところで、思つたよりも余裕が少ないことが判明する。当然のことながら、装甲内部の余裕とは駆動用の結晶筋肉の干渉を避けるために在り、簡単に埋めてよいものではなかつた。

そこで彼らは一旦全ての外装を外し、板状結晶筋肉による層をつくりた上で更にその全体を外装で覆う、複層式の外装を構築する方法を取つた。

駆動用の筋肉に干渉しないように板状結晶筋肉を配置するためだ。全体的にボリュームアップした筐体は十分な魔力貯蓄量の増大を示し、稼働時間の延長という観点ではかなりの成果があつた。

しかし現実は甘くなかった。

結晶筋肉の層が追加され、全体的に一回り大きくなつたテレスターを前に彼らは唸る。

「着膨れて、格好悪い……ツ！！」

彼らの美的感覚は少し横においても、全体を複層式とする方法は問題点多かつた。

まず全体的な重量の増加が激しすぎるため、網型結晶筋肉による出力の増大を踏まえても機動性に相当な悪影響が出ていた。
更に厚みの増した装甲は動きを阻害し、肝心の格闘戦能力の低下も無視できない範囲になる。

結晶筋肉の層を一応装甲として考えて防御力が上昇したことを鑑みても、デメリットが多くると判断されこの方法は却下される。

ここでの問題点は主に激しい重量の増加である。

彼らは次に、複層式とする部分を限定すればそれを抑えられると考

えた。格闘戦能力への影響も考慮して、関節部に干渉しない装甲を限定期に複層式にする方法が取られた。

この方法により重量の増加は問題ない範囲に抑えられたものの、肝心の魔力貯蓄量の増加という点に対しても十分とは言えなかつた。ただしこの複層式の^{キバシティフレーム}装甲を使用する方法自体は継続して採用されることになり、後日“蓄魔力式装甲”と名付けられる事になる。

「内側に結晶筋肉を増やすのはこれが限界だな……」

「これ以上は重くなる上に、鎧が干渉しちまいやすからねえ」

残る方法は、板状結晶筋肉を外付けにする方法である。

どこまでもつきまと重り的な問題を少しでも回避するため、外付け部分については装甲すらつけられず、鋼線でまとめられた上に布製の覆いがつけられるという構成になつた。もはやからうじて剥き出しではないというレベルだ。

設置場所は実際に人間が荷物として持てる場所を参考として背中、もしくは腰周りが選ばれた。

そのうち最も荷物を設置するのに適した場所は背中である。彼らもそう考へ、十分な量の板状結晶筋肉をテレスターレに背負わせた。

しかしこの方法も別種の問題を生じる結果となる。

背面武装を撤去してまで板状結晶筋肉を設置したが、背中に大重量が集中した結果、どうしても重心が背中側に偏つてしまつたため格闘性能に無視できない悪影響が発生したのだ。

背面武装の装備により遠距離攻撃能力も増したとは言え、幻晶騎士の本分は格闘戦である。騎操士達に扱いづらさを訴えられては仕方が無い。

もしこの上背面武装を併用するとなれば、今以上に重心が偏ることは必至である。彼らは渋々別の方法を模索していくた。

「どうにも上手くねえな」

「情けない、情けないなダーヴィド。私がわざわざ板状結晶筋肉を用意してやつたと言うのに、このザマか」

親方は、殴られないようにわざわざ離れたところから離し立てるラッセを一睨みしたが、すぐにそれが何の解決にもならないと気付いて溜め息に切り替えた。

最終的に背中に設置するのは背面武装と干渉せず、重量的にも負担にならないサイズまで抑えられた。

その分腰周りにもポーチのように小さくまとめられた結晶筋肉が配置された。腰に剣を挿す場合には適宜配置は調整される。

蓄魔力式装甲と小分けにされた板状結晶筋肉を外付けする方法を併用し、ある程度は魔力貯蓄量が増加し欠点の改善が見られたが、未だに稼働時間に若干の問題が残る状態である。

結局、鍛冶師達はついに現時点での完全な解決を諦めることになる。根本的なところで、現行の結晶筋肉では十分な魔力貯蓄量を確保するためには必要な量が莫大なものになってしまい、それを保持しきれないのだ。

この解決方法は鍊金術師達が魔力貯蓄量に特化した新たな結晶筋肉を完成させるのを待つしかない、という意見で一致を見ることになった。

工房の前では、改装を終えたテレスター・シリーズが駐機姿勢をとり、ずらりと並んでいる。

試験用に製造したものも含め、その数5機。その全てが蓄魔力式装甲の採用により初期よりもがっしりとした姿をしている。

背中と腰周りにまるで荷物にしか見えない追加の結晶筋肉をつけた

その姿は、機械的な方向での改装が行われたというのに、むしろより一層人間くささが増したような印象を漂わせていた。

どうにも急造感が拭えないその姿だが、鍛冶師達はそこで思考を切り替えた。

テレスター・シリーズは問題点はあるが、それでも大きすぎる欠点をカバーする程度には改善されており、現時点では望める最大の完成度には達している。

ここにある5機は、漸く到達した新型機の完成形とも言つべきものだ。

現時点で既に従来の幻晶騎士を上回る能力を秘めたそれは、まさに幻晶騎士の新たな世代の雰形である。

通過点ではあるが、一つの到達点に着いたという実感が徐々に湧いてきた親方の顔に、じわりと笑みが浮かんでゆく。

それは周囲の整備班、騎操士の生徒達も同様だ。テレスター・シリーズを見る彼らの様子は様々だった。

達成感に浸る者、ようやく作業から開放されることに安堵する者、早くも改良案を思考し始める者。

ただ誰もが等しく、その表情は一つの難関を乗り越えた、自負と誇りに輝いていた。

親方は似たような表情を浮かべる生徒達を振り返り、にやり、と更に笑みを深くする。

「よつし野郎ども、良く頑張った！ むしろ鍛冶師は頑張りすぎたつてもんよ！！

まだまだ問題は残っちゃいるが、まずはこいつの完成を祝してやろうじじやあねえか！！

さあて、こんだけでかい仕事が終わつたんだ、後はやることたあ決まつてんだろ、なあ！？」

その場にいる全員が腕を振り上げ、気勢を上げて親方の言葉に応じる。

号令一下、その日は騎操士学科の総力を上げて、工房を舞台に夜を徹しての宴会が開催されることになる。

とつぱりと日が暮れ、色濃い闇に包まれる頃には宴会は魔境を迎えていた、とだけ述べておく。

ちなみにフレメヴィーラ王国では飲酒が可能なのは成人（15歳）してからである。当然エル達は参加しておらず、この宴会は騎操士学科一同によるものだ。

物理的な意味で何人か空を飛ぶ、お祭り騒ぎの只中より離れる人影があった。

喧騒に紛れて目立たぬように移動を始めた彼は、そのまま宴会場といふ名の魔界と化した工房を出て寮にある自室へと戻る。

日が沈み、静まり返つた寮の一室にランプの明かりが灯る。自室に戻つた彼は飲酒により多少浮つき気味の頭を振り、水を飲んで酔いを薄める。

彼と同室の生徒は、今も工房で飲んだくれていることだろう。彼は安心して机の中から紙の束を取り出した。

そこには幻晶騎士に関する技術　それも縄型結晶筋肉の使用以降の、新型機に関する事柄がまとめられている。

彼はそこに蓄魔力式装甲、そして完成したテレスター・レに関する内容を追加する。

それは詳細と言えるほどの内容ではなかつたが、それでも新型機に

関するあらましを知ることが出来る程度には情報が記載されている。
彼は酔いが遠ざかるのを感じながら、書き込んだ内容に満足すると
再び机の中へと紙の束を仕舞った。

#32 小さな前進と大きな到達（後書き）

11 / 06 / 13 本文改訂

#33 迫り来る風の予感

ふと日差しを遮る影が手元にかかつたことに気が付いて、エルネスティ・エチュバルリアは窓から空を見上げた。

そこでは、ここしばらくは気持ち良い通り越して恨めしいくらいに青色しかなかった空を、白から灰へとグラデーションを描く雲が徐々に侵食している。

薄い雲に遮られ、直射日光による突き刺すような暑さが和らいだことに、彼は少し感謝していた。

それだけで気温がいきなり下がるわけではないが、それでも日光がないだけで大分とましだ。

彼は手元のノートを見やり、肩の凝りと共に酷使され疲労した思考をほぐしていた。

「（ここ最近暑かったしなあ。）」のまま考え続けるとまず脳味噌が物理的に煮えそうだ。少し休もか……」

空の果てまで視線を向ければ、そこには上空に見えるそれよりも黒く、暗く分厚い雲が見える。

紗を引いたような薄い雲から、あの暗幕のように重い雲に変わるまでそう時間は必要ないだろう。

暑さがやわらぐことには賛成するが、あまり雨が激しく降るもの厄介だなあ、とエルはぼんやりと考えていた。

「エルネスティ君

気が抜けていたからか、茫漠たる思考に陥りつつあったエルを横から呼びかける声が引き戻す。

彼が慌てて振り向くと、そこには少し硬い表情の教師が立っていた。

「授業中に余所見をするのは、感心しないね」「すいません」

誤魔化すように愛想笑いを浮かべながら、エルはしつかりと黒板へと向き直る。

教室では教師による授業が再開され、チョークで文字を書く軽快な音と、フレメヴィーラの歴史の説明が彼の耳に届きはじめた。周囲のクラスメイト達は珍しそうに一瞬だけエルに視線を送ったものの、すぐに板書に追いつくべく手元へと顔の向きを変える。教室の雰囲気はすぐにこいつものそれに戻っていた。

「（危ない危ない、疲れたからと言つて氣を抜いたらあかんね。それとも暑さのせいか）」

エルも手元のノートへと視線を戻す。他の生徒達が至極真面目に授業を受ける中、だが極めて残念なことにエルのノートには黒板に書かれていらない別の内容　具体的には奇妙な形状をした幻晶騎士の姿が書かれ、それに数々の説明や走り書きが添えられていた。

「（さてテレスターも完成見えてきたし、漸く土台が固まつたってトコか。」

国王陛下の度肝をブチ抜くためにも最低でも後一つ、このビックリでドッキリなギミックを組み込んでおきたいところやけど。

……問題は阿呆ほどお金かかるんやなあこれ。その上作るにしても親方達は疲労困憊やし。
急いても仕方ない、準備はしておいてせよじぱみらへは暇潰しにモートルビーートのまつを……」

明らかに授業とは関係ないことを考えつつ、しかし念の入ったこと

に時折黒板へと視線を向けペンを動かすエルは、周囲からは普通に授業を受けているように見える。

そもそも普通10歳の子供はそんな熟練の擬装を施しはしないだろう。それは嫌な意味で彼の中に蓄積された経験の賜物であった。当然その授業態度に不審を覚える者はおらず、授業は静かに進むばかりだ。いや、正確にはそれを悟りうる者も居るには居たが。

「（うーん、幻晶甲冑の動かし方にも大分と慣れてきたしな。次は俺の機体にもワイヤーアンカーつけてもらうか。）

アレ面白そうだよなあー。動かすの結構面倒つつてたけど）」

「（今日はエル君も連れて食べ歩きしようそうじよう！ あんまり根を詰めても逆効果だしね！）」

その一人とも別の方に向に授業態度を間違つていいのでをして問題にはならなかつた。

余談ではあるがこの有様でも全員、魔法や体術以外の授業についてもちゃんとした成績を上げていることを、ここで補足しておく。

ここ最近の暑さにより、鍛冶場を擁する工房の内部はさながらサウナのようになつていた。

生徒たちも空気を循環させたり、風を送り込んだりと様々な対策を講じてはいるが焼け石に水なのが現状だ。

そういう訳でいつそ中にはおりましとばかりに、親方は工房の軒先の日陰で休憩していた。

吹きつける風すら生ぬるいざりするような状況を、同じく生ぬるい茶を啜り誤魔化す。

元々ドワーフ族は北方の出身である上、彼のその生まれに恥じない

濃い髭は見るからに暑苦しい以外の表現が浮かばない有様であり、本人の負担はいかほどのものか。

強い日差しにより明確なコントラストがついた地面は、明るい部分に出たら焼け死んでしまいそうな錯覚を与えていた。

その灼けつくような大地に徐々に薄い影が滲みだしてきたのを見て取つて、親方が思わず万歳しそうになつたのもむべなるかな。

「おーう、雲が出てきやがつた。漸くこのクソみてえな暑さと少しでもおさらばできる」

「テレスターの試験中にも、もう少し曇つてほしかつたがね」

その時を思い出したのだろう、隣でテーブルを囲んでいるエドガーはうんざりとした表情を隠しもしていない。

共に席に着くディートリヒは聞きたくないとばかりに首を振り、ヘルヴィイは苦笑を返す。

照りつける日差しに炙られながら幻晶騎士で試験を行つた記憶は、彼ら騎操士ナイドランナーにとつて少なからず嫌な記憶として残つていた。

「あれはねえ……おかげで変な意味での耐久試験にもなつたけどさ。あ、セット。次で上がりね」

言いつつ、ヘルヴィイがディートリヒから受け取つたカードと、手に持つカードから絵柄の合つたものを開いて場に出した。彼女の手中に残るカードは一枚である。

カードゲームに参加する残る2人のプレイヤーが、それまでとは別の意味で顔を顰しかめていた。

いくら工房内部がサウナ状態とは言え、つい先日までの嵐のような日々を思うと、何故彼らがこうも暢気にカードゲームに興じていらるのかと疑問を抱いてしまうところだが、これには理由がある。

この環境下で新型の完成から打ち上げまで辿り着いた鍛冶師達だが、その後反動でぶつ倒れてしまい、大半が休みを取っているのだ。組みあがったばかりの新型機を整備担当の人間がいない状態で動かすわけにも行かず、騎操士達もこうして無聊を慰めている。

鍛冶師の中でも親方 というか鋼の肉体を持つドワーフ族は暑さにだれつともまだ元気だったが、さすがに1人できることには限りがあり、中途半端にそれに付き合っているのだった。

「Jの調子だと、残る機体の修復と既存機の改修はいつ終わることやら」「……」

「あん？ まあ、そのうち進めらあ。今は俺達あ休暇中よ」

エドガーの言葉に、親方はどこか投げやりな調子で答える。その間にヘルヴィイが1抜けを決め、エドガーとティートリビが決戦に挑んでいた。

「そういえば我がグウ エールは未だに肩鉄の範囲すら脱していないのだが？」

「おおう、そうだつたな。まあ営業再開したら来てくれや」「いつからうちの整備班は独立したんだい……？」

「たつたいまからだ」

「…………」

これ以上親方にぼやいたところで仕方がない、そんな感想を抱きつつもエドガーとの決戦に敗北したティートリビが机に突っ伏した。

「一先ずティーは勝者のために食べ物を買つてきてもらおうか

「そうねえ、まあ安いパイでいいよ」

「俺は肉がつまみてえな、肉入りのやつにしろ」

「くう……仕方ない、待つていろ つて親方はカードに参加し

ていないうつー。」

「ケチケチすんな。日頃お世話になつてゐ代つてえもんよ」

ディートリヒの表情がめまぐるしく3回転ほどしたが、とうとう諦めたのか彼はそのままとぼとぼと食堂へと向かつた。

勝者の余裕でそれを見送る3人。哀愁漂う彼の姿が視界から消えた辺りで、親方が何かに思い至る。

「ここの程度で言つのもなんだが、アイツも丸くなつたもんだな。

前は負けたらガタガタぬかすから、そもそもカードになんざ呼べなかつただろう」

相変わらず髪に埋もれてわかり難いが、親方は苦笑を浮かべている。整備班、騎操士を問わずディートリヒの神経質を、気難しさは有名だった。

実力こそあれ付き合いやすいタイプではなかつたはずだが、ここ最近はそれが薄れだしていることに、共に行動する機会の多い彼らは気付いている。

「陸皇亀事件ベヘモスの後から、ディーは変わつた。概ね、良い方向にな」「ふーん。そういうば、実は新型の試験で一番熱心だつたのつて、あいつじゃない?」

ヘルヴィには思ひ至る節がある。操縦経験の長さならば試験騎操士から担当していた彼女が一番であるうが、ディートリヒがそれに次ぐ勢いで新型機を動かしていた事を。

彼女の言葉にエドガーは神妙な表情で頷いた。

「ああ、恐らくは、あれを見たからだうつな

「? 何を?」

「……エルネスティ、だ。ディーは、あの時唯一その操縦を、直接見ている」

エドガーの視線が細められる。そこには確かに、彼の騎操士としての矜持と熱意が垣間見える。

偶然とは言え、師団級魔獣を相手取れるだけの技量を真後ろから見た、友人への僅かな嫉妬。その友人がそれ以来明らかに実力を伸ばしていることにに対する、素直な賞賛。

エドガーの気質は良くも悪くもまっすぐだ。

間近でそんな努力を見せられれば彼自身も負けじと奮起するであろうことを、それなりに付き合いの長いヘルヴィは知悉^{ちしつ}していた。

「ふーん、あの子のねえ。小さい上にすばしっこいから、頑張らないとすぐに背中を見失っちゃうわよ」

やや癖つ氣の強い短めの髪の下から、愉快そうに細められた瞳がエドガーをからかう。

エドガーは一瞬キヨトン、とした表情を見せるが、それはすぐに不敵な笑顔へと戻った。

「そう易々と見失う氣はないさ」

「おう、それで思い出したぜ。そういう銀色坊主^{エルネスティ}にや相談してえ事があつたんだ」

唐突に親方が手を打つた。

「どうしたんだ?」

「いや、新型作つたのはいいんだけどよ、これからどうすんだよと思つてな」

「? 学園の機体の改修を進めるんじや、ないのか?」

「そいつはまあ学園長の許可があるからかまわねえけど。……まあ
かここだけの代物にやあ、すまいよ」

「あっ」

ぼやけ始めた地面のコントラストの境界を田で追いながら咳く親方
に対し、Hドガーとヘルヴィイが声を上げて顔を見合わせていた。

日が傾き始める頃、ライヒアラ騎操士学園の周囲には今日も今日と
て露店が立つ。

そして授業の終わりと共に生徒達が歩く姿がちらほらと見られるよ
うになる。

「おう嬢ちゃん、今日はでつかい鎧はもうここねえのかい？」

「うん、今日は食べ歩きよ！ とこわけでケーキ二つー。」

「あいよっ。何を挟むね？」

「えーっとね……」

大分と雲の面積が増えた空模様により、日光に炙られる事はないが、
それとは別に徐々に蒸し暑さを感じ始めている。

テンションは最高潮と言った感じで露店の主人に注文するアディは
ともかく、Hルとキッドは全身からだるさを放っていた。

「良く冷えたお菓子が、欲しいですね……」

「無茶言つなよ……そんなのあつたら皆群がるぜ。絶対」

「むしろ果物を直接食べるだけでも、ちよつとは涼しくなるような
『諦めろ、もうパンに挟まってる』

弾けるような笑みと共に振り返った彼女の手には、焼き立てでほつ

こつと湯気を立てるパンケーキが乗っている。

時間的にもおやつとしては丁度いいだろう。しかしながらまだ気温の高い屋下がり、できれば熱くない食べ物がいいなあと思いつつも嬉しい少女の姿の前に諦めるエルであった。

その後あちこちの露店を巡り、いい加減満腹かという所で彼らは工房へと立ち寄っていた。

特に理由があつての行動ではなつたが、彼らは偶然にもそこで珍しい光景と出会つた。

「……何をやつているのですか？」

「んむ？ 見ての通りクッケレンジや。いやダーヴィド君はこれで中々、手ごわいの」

工房の軒先では、ライヒアラ騎操士学園の学園長であるラウリと親方が、地球で言うチェスに似たボードゲームで勝負していた。盤面は恐ろしいほどにラウリの優勢、親方の駒は何かのいじめかと言つぽど追い込まれている。

「俺はむしろここからどう盛り返せばいいか、思いつきすらしねえんだがよ……。

もう少し手加減してもいいんじゃないか？」

「ほほほほ、仮にも教育者として、先達が手を抜くのはいかんの

う
「遊びだぞこれ……」

莞爾^{かんじ}と笑つラウリと対照的に、親方は頬杖^{こめく}がなければ今にも崩れ落ちそうだ。

彼は悔しさと呆れを半ばに混ぜたような空氣を滲ませながら、余つ

た駒をつまんで「コシコシ」とテーブルを叩いている。

「はあ、いえ、ゲームはいいのですけど、なぜお祖父様がこちひりいらっしゃるのかと……」

「んむ？　ああ、少しエルとダーヴィド君と相談したいことがあってのう。

呼び出してもよかつたんじゃが、どうせこちひりに集まるかと思つての」

意外と適當な祖父の考えに、エルが軽くずつこける。

そして暇つぶしの相手として熨された親方が深い溜息をついていたが、そんなものは些細な問題として流された。

「さて話といつのは他でもない。ダーヴィド君も悩んでおるようじやつたが……新型機の今後についてじゃ」

一通り親方の陣地を蹂躪し、王手に至つたラウリが満悦の様子で話を始めた。
エル達も適当に近く椅子を用意するが、出し抜けに飛び出した言葉に首をかしげる。

「テレスターの今後について、ですか」

「うむ、正直わしはもう少し、こり……じゃな、大幅でも改良の範疇に留まると思つておつた。

それにしては時間がかかるとなるなんぞ思つておつたが……蓋を開ければ別物になつておるのでのう」「紛つことなく新型機ですから」

上機嫌に応じるエルの言葉に、ラウリは困つたよつて眉尻を下げる。

「全く以つて、初手から新型機の完成に至るとは予想外じゃよ。ここまで作り上げたからには、これは陛下にお見せするつもりなのかの？」

ラウリの言葉は問いかけと詰つよりも確認の響きを帶びている。なぜなら、ラウリにとつて既存機を凌駕する性能を持つ新型機は、国王との約束にある“最高の機体”の条件を満たして余りあるからだ。

ならば新型機を国王へ報告し、然るべき報酬を受け取らうと考えるのは自然な流れだった。

しかし彼の予想に反し、エルは少しも悩むことなく首を横に振る。「ほう？ そのために頑張っていたのかと思つておつたが……違つたかの？」

目を丸くしたラウリが、工房の暗がりの奥にあるテレスター・レーチラリと振り返る。

「陛下にお見せするものは、また別に……あのお願いに意味があると、認めてもらえるようなものを考えてします。

それに陛下は“最高”を所望されたのです、お受けしたからにはこちらも人事を尽くさないと」

「おめえの人事はまだ尽くされてなかつたのかよつー？」

言い切つたエルの言葉に、親方が椅子ごと倒れそうになりながら慌てて突っ込みを入れる。

これまでの常識を見事に突き抜けておきながら、それが序の口に過ぎないなどと果たして誰が想像しようか。

少なくともそれはラウリと親方の予想の範囲は超えていた。

「ええ、テレスターは言わば土匂……しっかりと踏み固めたのですから、上には立派な城を作らないと。それでこそ陛下の度肝を抜けるというものです」

「その前にわしらの度肝が潰れそうじゃよ」

「大体、坊主は本気のことしか言わねえから怖ええな……」

驚愕と感心を呆れが塗りつぶしあじめたラウリだが、それは別に彼だけではなく、その場にいたほぼ全員の偽らざる心境だ。ラウリは一つ息をついて考えを切り替えると、ふむ、と唸つて腕を組んだ。

「エルがそう言うなら、そこはまあ、よい。

ともあれ、新たな機体まで完成させたのじゃからのう、何かしら

国への報告は必要じゃろつ

「それは勿論ですね。では、これも陛下に^{ラボ}報告を？」

エルの問いかに、今度はラウリが首を横に振る。

「陛下もお忙しい身じやからのう。エルとの約束であれば陛下にしか判断できぬことであらうが、これだけならばそんではなかろうよ。これまで通りの手順でもつて連絡することにならう」

「これまでじおつと言つと、^{ラボ}國機研か……」

“国立機操開発研究工房” 通称“國機研”はその名の通り、国^{ラボ}の下で幻晶騎士の技術を管理するための組織である。

新型機の開発と言つた大きな案件の他にも、新たに編み出した技術改良などは規模を問わずここに集められ、まとめられた後全国へと伝わるようになつてゐる。

これまでにも学園から技術改良を伝えた事もあり、鍛冶師にとつては馴染みの存在だった。

「うむ……それにしても、新たな機体を丸々持ち込むとなれば、ちと問題なんじゃがな」

「ん？ ラウリじいちゃん、何がそんなに問題なんだ？ 確かにこいつは強いんだろ？」

これからテレスターをいっぱい作れば、騎士だつて樂になるし、街も安全になるんだろ。

そこまで出来上がってるんだ、國の人の喜ぶんじゃねえの？」

横から疑問を挟んだキッドが首をかしげる。

彼の意見は間違つてはいない。強力な幻晶騎士の普及は国内の安全確保に対し有効な手段である。

今この間にも、国内のどこかで決闘級以上の大型魔獣による被害がおき、それに幻晶騎士が投入されている。

幻晶騎士が強くなると言つことは、これを解決するための期間を短縮し、ひいては被害を抑えることにつながる事である。

魔獣の領域に対する最前線たるフレメヴィー・ラ王国では、それは何よりも重要視されて然るべきものだ。

つまりテレスターが作られたこと自体は喜ばしいことと言えるのでは？ そんな素朴な疑問に、ラウリは口元に苦笑を残した笑みを浮かべながら答える。

「まざいわけではないのじゃがな……新たな幻晶騎士を作るには、まず小さな改良を積み上げ、それを元に幾人もの技術者が大きな形へとまとめる事が必要じやつた。

それを繰り返して、幻晶騎士は強化されてきたのじや」

その新しい幻晶騎士を構築するのは国機研の役目であり、そして規模から言っても国機研でしか無理なことだ。

その事を思い浮かべながら、ラウリは言葉を続ける。

「新たな幻晶騎士の開発とは、本来は國家事業じゃ。

まさか学園の設備で完全な新型が作られよつなどと、わしも予想外だにせんかつたよ。

そもそも普通は機体を一新するほどの技術を、まとめて思いついたりせんのじやが……」

ラウリの意味ありげな視線から逃れるよつに、エルと親方が一人そろつて明後日の方向を向く。

二人とも新しい機体を完成させることに夢中で、かなり暴走した記憶があるからだ。

「まあそれでじや、問題は小幅の改良を申し出ることはあるても丸々新しい機体を持ち込むことなど、未曾有の出来事と言つことじや。このままいきなり新たな機体を持つていつたところで、どうこう扱いになるのかさっぱりでな」

明後日の方向から戻り満面の笑みで迎撃を始めたエルを相手に、ラウリが小さく溜息をついていた。

「やつてしまつたものは嘆いても仕方がありません。

「これは皆で幸せになれる、未来への一步を模索するときです」

「全くだな。技術を形にしないなんざ技術者の名折れ。その後のことはその時に考えりやあいいことだ！」

「開き直りおつたよこいつ……」

不自然な笑顔を浮かべながらがつしおと腕を組み合わせるエルと親方に、ラウリはついに悟りの地平への扉に手をかけ始めた。とは言え傍目には戯けてはいるものの、彼らとて真面目に考えていないわけではない。

まあそれに、と前置いて親方は姿勢を改めた。

「鍛冶師としちゃあ、新しい技を伝え、民のためになるつてなあ名譽な事よ。ついでに褒賞も出るわけだし、懐にもありがてえしな。つて訳だから本来ならテレスターに乗つて国んと國まですつ飛んでくのが一番なんだろうけどよ、まあ残念な事にもう一つ問題がありやがる」

どこかおどける様な口調に大仰な振り付けを加えて、親方は語り続ける。

「テレスターを完成させるのには、大勢の人間が関わってる。そりやあもう騎操士学科の大半よ。

新型機一つ分の褒賞ともなりやあ、盛大なもんだろうけどよ。そいつを開発に関わった人間で分けるとなりやあ、これはちょいとばかり揉めるんじやねえか？」

親方の指摘も至極当然のものである。

国機研に新たな技術を持ち込んだ場合は、対価として然るべき褒賞が支払われることになっている。当然、それは開発に協力した人間の間で分配されるものであろう。

親方の言葉通り、テレスターの完成にはかなりの人数が関わっている。それこそ発案者たるエルを筆頭に、作り上げた鍛冶師達や試験を行つた騎操士、果ては素材の作成に鍊金術師の一部まで。

それらの功績を今から正確に把握するのは、実際の問題として不可能に近い。

単にテレスターの持ち込み方に留まらない、あまりに山積する問題の数々に、全員が思わず両手を挙げかねない気分だった。

「あー、いいか？ ちょっと思いついた事があるんだが」「

混沌とした様相を呈し始めた場の空氣を断ち切るよつこ、エドガーが小さく手を上げる。

勇者の登場を讃えるように拍手の真似事をする約一万名を黙殺し、遠くへ旅立ちかけていたラウリが学園長モードで再起動した。

「うむ、意見があるならどのようなものでも構わん、言つてくれたまえ」

「では失礼して。ひとまずの扱いはさて置き、テレスター・レはまだ未完成な部分もありますが、その性能は従来のものよりも高い。

これに用いた技術を普及させれば、国内の安全に対する恩恵は大きいでしょう。つまり最終的に国に伝えるのは決まっている……と考えてもいいですね？」

「うむ、それは当然じゃな」

それには全員が同意を見せる。新型機を学園だけの特産品にする気は、この場の誰も持つてはいない。

それを確認したエドガーは、少し言葉をまとめるよつこ田を伏せる。

「……ならば……報酬も確かに問題ですが、テレスター・レを渡す時の事も考えたほうが良いですね。

いえ、方法と言ひ意味ではなくて、渡してそれで終わりとは思えません」

「何か、まずいのか？」

「エルネスティが元々の案を言い出したときを思い出してくれ、親方。

今でこそ俺達も馴染んでいるが、テレスター・レを形作る技術はそもそも相當に異様だ」

その言葉に、長く闇わる間に馴染み忘れていた事実を思い出し、彼らははっと黙り込んだ。

彼ら自身、直接エルに説明されなければ、受け入れられたかも怪しい技術ではなかつたか。性能と機能の前に忘れがちではあるがテレスター・レは未だこの世界では異形の存在なのである。

それを思い出した親方が乾いた音を立てて手を打ち合わせた。

「おうそうだ、そう言やあ全員一回は坊主の正氣を疑つたな」

「（そんなことしつたんかい……）」

全員の理解が追いつくのを待つてエドガーは再び話の続きをに入る。

「つまりテレスター・レだけ渡しても、意味がないんじゃないかな？
形だけはそのものを真似れば良いかも知れないが、それではこれを形作る根本の発想という部分がちゃんと伝わるかは疑問だ」

期せずして全員の視線がエルへと向けられる。流石の彼もその圧力に少しのけぞつた。

「……言われてみりやあな。いや国機研の連中に“悪魔の囁き”を聞かせてやるもの良いかも知れねえぜ」

「皆様は僕のこと有何だと思つてるんですか……？」

「さしづめ、悪魔の使いつてどこが？」

「…………泣きますよ？」

「（あ、不機嫌なエル君ちょっと可愛い）」

エルは半目になつて親方を睨むが、残念ながら全く迫力が無く、精々が拗ねた子供にしか見えていなかつた。内面はともかく、年齢的にはその通りなのだが。

親方がそれを軽く流している間に、ラウリがエドガーへと振り向く。

エドガーはまだ軽く言葉をまとめるように、少し視線を宙に向けている。恐らくは問題に対する何かの結論か提案があるのだろう、それを見て取つたラウリが話の続きを促した。

「解決案……といつか、騎操士学科の鍛冶師達が、国機研へと説明する必要があると思います。

ならば新型機の開発者として、彼らをそのまま雇つてもうつのは選択肢としてありえるのでは？」

ラウリは思わず目を見張った。エドガーの提案とはつまり、配分に問題のある金銭的な褒賞に代わる形で、彼らの雇用を提案すると言うことである。

いずれ鍛冶師達は学園を卒業し、各地で鎧を振るつようになるとを思えば、それは決して悪い選択肢ではない。

「そうきおつたか……それはまた剛毅な提案じやのう」

「彼らには新型機を完成させたと言う実績があります。さらには既存の技術に対する知識も、言つまでもないでしょう。

今後新型機の開発を進めるならば理想的な人材と言えるのではないか」と

この提案はラウリを悩ませた。

正確な技術の伝達、そして生徒達の利益と言つ意味では共に実のある結果だが、比率的に学園側にとつての利益が大きい。

つまり国機研へとそれを交渉する必要が発生すると言つことであり、かつそれは相応に難易度が高いと言つことである。

そして当然の事として交渉を担当するのはやはりラウリや、幾人の教師で行う事になるだろう。詰まるところ彼らはあくまでも教師であり、交渉のプロではないのだ。道のりにはかなりの困難が予想される。

「魅力的な案ではあるがのう、さてそつ上手くいくか。わしらも精一杯は頑張つてみるが……結局は国機研の判断次第じゃからのう」

決定権 자체が完全に国側にある以上、これ以上はラウリにも確約はしかねるものだ。

ここは方向性が決まつただけでも良しとすべきか、彼は先に待ち受ける厳しい交渉の予感と、生徒達のために骨を折る教育者としての熱意を同時に感じ、小さく苦笑を浮かべるのだった。

場の話がようやく何かしらの方向を見出そつとしているとき、話し込む彼らの間で難しい顔で悩む者達がいた。

キッドとアティだ。彼らは話の内容 자체は把握しているものの、付いて行くのに精一杯と言う状態だつた。

エルのように見た目と精神の年齢が一致しないわけではなく、正しく10歳の子供である彼らにそれに加われと言つのも些か酷な話ではあるが。

「うーん、なんか私たちも力になれないのかな？」

「聞いてる限り難しそうじゃねーカ。しゃあねえ、大人しくしてよ

うぜ」

不自然な子供であるエルと行動を共にすることが多い彼らは、勢いこういった会話に参加する機会も多い。

そして彼らは彼らなりに、周囲の助力になれないか、ずっと考えているのだ。

「（あれだよね、親方とか皆で頑張つてテレスターを作つたから、

「これからも自分で作ることだよね」

アディの中では、何か引っかかる言葉がある。新しい、幻晶騎士、作る、結果。

漠然とした言葉をきっかけとして思考が記憶の中の通路を駆け巡り……それは数ヶ月前に、彼女が告げられた言葉へとつながる。

彼女はもどかしさの中辺り着いた閃きに、勢い良く顔を上げた。

「……ねえ、国つて、偉い人にお願いするって事よね？」

「んー？ そういうえば、そういうことになるな」

「だったら、あの約束、使えるんじゃない？」

あの約束。アディの言葉のニュアンスにしばらく悩んだキッドだったが、彼も正解を記憶の中から探し上げることに成功する。

「あ！ ……って、アディ」

「これも、エル君の功績に含まれるよね？」

それは以前、彼らの父親と会話したときの記憶。

彼らの父親であるヨアキム・セラー＝ティ侯爵は、“エルが何かを為したのなら、それを伝えるように”と彼らに頼んでいた。彼らにとっては、それは今この状況の協力者として頼むには、十分な理由に思われた。

「ラウリじいちゃん、俺達に良い提案があるんだけどよ」

「ほ、キッド？ なんじゃろうか

「？」

質問をしてくることはあっても、よもや彼らから提案が出てくると思つていなかつたラウリが軽い驚きをあらわにした。

キッドはその事に嬉しさよりも、悪巧みを考えているかのような表

情を浮かべて自分達の提案を話す。

「じじちゃん達がコウショウするのって、やっぱ難しいんだよな？
だったらセ、他にコウショウできる味方をつけるってのはどうだ
？」

「ほう？ 味方……とは誰か当てがあるのかの？」

「セラー・ティ侯爵」

さらりと言こ切つたキッズの言葉に、エルとラウリは更なる驚きを表し、騎操士学科の学生達は疑問を感じていた。

いくらかの事件により双子の素性を知る者はいるが、それは有名な話ではない。彼らはここで有力な貴族の名前があがる事に首を捻つていた。

「……！ そうか、そつじゃのう…… そういうばせラーティ侯爵といえ、確かあの場にもおつた。

ならば状況の説明も他の人間よりはやり易かりつい、としなしを頼むのもありうるの。

「じゃが……良いのかの？」

言外に、ラウリは双子の家の事情を問う。

彼らの立場はあくまで庶子であり、かつ実家との連絡は最低限であったはずだ。

ここで父親を頼るような行動を取れるのか、目線だけで問われたそれを、双子は正確に理解した。

「前にエル君、直接会ったのよね？ その時に何があつたら教えて欲しつて、言われたの」

「（なるほど）う、あの話を受けてか。ならばまず相談をするのには相応しからう」

「そうですか……侯爵が。一人が良いと言つのなら、僕も異存などありません。……皆様は？」

残る学生達はやや意外そうな表情をしていたが、話を振られたところで互いに顔を見合わせた。

視線だけで軽く確認し、大きく頷く。

「俺達も異存はねえな」

セラーティ侯爵と言えば、国内でも有数の貴族であり、かつ侯爵領はボキューズ大森海と領地を接しているため、幻晶騎士の性能向上に対する理解も大きい。

ここで名前が上がった経緯はさて置き、その助力が得られるのならば今回の話にも大きな力になる事は間違いないと彼らは考えていた。

「では、直接テレスターを待ち込むのもまずいでしょ？」「資料」という形で連絡を取るというのは？

「そうじやのう、その方法でよからう。ではダーヴィド君には資料の作成を頼めるかの？」

キッド君、アディ君、その後は君達の出番じや

「任せてちょうだい！ ばっちり渡してくるからーー！」

二人は仁王立ちで胸を叩いてそれを請け負う。

問題が解決した安心感もあってか、その様子につられるように全員の間に笑い声が上がる。

そんな彼らの様子を、工房の奥に安置されたテレスターが静かに見守っていた。

時刻が夕刻を過ぎ口が落ち始めると、街のあちこちでは営業を終えた店が徐々に閉まってゆく。

逆に酒場はこれからが書き入れ時だ。一日の労働を終えた住人たちが食事と共に英気を養うべく繰り出してくる。

ライヒアラ学園街に在るとある酒場でも、いつものように店内に客があふれる時間となつた。

客の大半はそれなりの歳をした男性だが、やや隅のほうの席に周囲とはやや毛色の違う人物が居る。

その客は見るからに歳若く、恐らくは二十歳は越えていないであろう、学生らしき青年であった。さすがに成人（十五歳）はしているであろうが、それでも年齢的には珍しい。

しかし彼はこのような場所も慣れている様子で、その雰囲気は違和感を生むことなく場に馴染んでいる。

彼は隅の方にあるテーブルで、ちびちびとホールを飲み進めていた。

彼が一杯目のグラスを空にしようかと言ひ頃、彼の向かいに腰掛ける人物が現れた。

ほどほどに混み始めた店内で今まで席を開けていたという事は、明らかに待ち合わせをしていたのだろう。

事実、後から来た男　肉体労働者と思しき、がつしりとした体格の男性だ　は、席に着くと自分もエールを注文してから、学生にニカツと笑いかけた。

「お前から酒に誘うなんて珍しいじゃないか。どうした、学園の勉強が大変なのか？」

届いたエールを一口含み、男はふう、と大げさに息をつく。
既に酒を含む学生は酔いが回つてゐるようで、はしゃぐように応えた。

「あー、そうなんだよ、最近忙しくてさあ」

「はつはつはつ、勉強でなあそういうもんだ。そいつを越えてお前もいっぱしの大人になるんじゃねえか!」

「それでもよつ、ここじばりくは特にやべーんよ」

互いに酒を含み、陽気に愚痴をこぼす。

騒々しさにつつまれる酒屋の中で、彼らの会話は完全に雑音の一つにまぎれていた。

「ようやく一段落かと思ったら、ちょっと問題があきてさあ
「ほはあ、学生も大変だな!」

客が声高に語り合っても誰もそれを気に止めない。ここはそういう場所であり、酔っ払いの騒ぎにいちいち注意していくは限がないからだ。

そもそも周りも大いに盛り上がっている 見回しても、酔っ払いばかりなのだ。今更うるさい人間が一人増えたところで何が変わろうか。

彼らもそんな酔っ払いの仲間になるかと思われたが、しかし周囲の様子を確認し、自分達が全く注目されていない事を確認すると、突如として声を潜め始めた。

「そりなんだよ! 本当に!例のものがある程度完成まで辿り着いたぜ」

「ほつ、思いのほか学生も優秀じゃないか

ざわめきに満ちた店内では、抑えた言葉は周囲まで届かない。学生の顔は今も酔いにより紅潮し、ホールを片手に持った姿はただの酔っ払いに見える。

しかし、彼らの口は明確で冷静な言葉を紡いでいた。

「熱意つてヤツは、侮れないねえ。」

見たところ、この技術 자체が元々完成を見越して組み上げられてる節もあるけど」

「詳細は？　まさか俺に口頭で伝える気ではないだろうな」

学生はまさかとばかりに首を振ると、何の気負いも無く鞄から紙の束を取り出す。

綴じられた表紙からでは窺い知れないが、そこに書かれているのはテレスターについての情報だ。

男は隠し立てすることも無くそれを受け取ると、中身も確認せず無造作に懐に仕舞った。

「つんだつかつらー　たまには酒でものんでもねーとー」

「そりゃあ仕方ねえな！　よつこ、今日はお疲れ学生さんこ、一つ奢つてやろう！」

「そうこなくちやあなあー！」

先ほどの雰囲気は既に無く、一人は再びただの客に戻り、酒を酌み交わす。

その場にいる誰もがそんな一人が居ることなど気にも止めず、時間と共に酒場はさらなる喧騒につつまれてゆく。

密かに交わされた言葉の意味を、知ることはなく。

叩きつける様な勢いで落ちてくる雨粒が、王都カンカネンに張り巡らされた石畳の道の上で踊っている。

未明に降り出した雨は、見る間に豪雨となつて街を覆いつくしていく

た。

予想以上の勢いで降り注ぐ雨に、いつもは活発な街の住人達も中々外に出る氣にもなれず、街の空氣からは活氣が抜け落ちてしまったかのようだ。

空を埋め尽くす雲が滑らかに石造りの堅牢な街につながり、両者は一体となってモノクロの景色の中に沈んでいた。

ヨアキム・セラーティ侯爵は、貴族街にあるセラーティ侯爵家の屋敷で外から響く雨音に囲まれ、とある書類に目を通していた。そこに書かれているのは、これから世界を塗り替えうる、異質な騎士の姿。

異世界の尖兵とも言うべきその本質とは別に、彼はその存在に否応無く重大な予感を抱かされる。

恐らくそれは“嵐”的予兆だ。これから街を、国を飲み込まんとする曰きな嵐の到来を予感させる、そんなざわめく様な空気だ。

内心を反映してか、彼は机の隅に置かれた小さなベルを乱暴に鳴らす。

常に冷静な彼にしては珍しい行動だが、長年彼に仕える老練な執事は日頃の落ち着いた様子を崩さず、しかしつもより迅速に執務室へと現れた。

「お呼びで」やつましうか、旦那様

「至急、この書類を『ディクスゴート公の邸宅へ。確実に公本人にお渡しするように」

「畏まりました。手配いたします」

ヨアキムは書類を執事へ渡し、彼が下がると共にポツリと呟いた。

「ディクスゴード公、これは思ったよりも厄介な事になるやも知れ

ませんぞ」

その呴きは執務室の重厚な扉に遮られ、激しさを更に増す雨音の中に掻き消されていった。

#33 迫り来る風の予感（後書き）

11.07.07 内容を改訂

「ヒーヒーヒー、唸るような音を立てながら風が吹き荒れる。

横殴りの暴風に煽られ、叩きつける様に降り注ぐ激しい雨の中、何台もの馬車が西フレメヴィーラ街道の上をひた走っていた。

晴れていれば周囲に響くであろう、馬蹄が石畳を打つ硬い音も今は嵐の中にかき消されている。

月の初めより崩れ始めた空模様は見る間に大荒れとなり、ここしばらぐの間はまるで地面を削るうとしているかのような勢いで雨が降り続いていた。

いかに石畳で舗装された西フレメヴィーラ街道とは言え、既に排水能力の限界を越えており、あちこちにできた広い水溜りが道行くものの障害と化していた。

決して屋外を行動するのに向かない天候と悪路の中、馬車は一心不乱に前へと進む。

その進路上には国内最大の学園施設、ライヒアラ騎操士学園を有するライヒアラ学園街の姿がおぼろげに見え始めていた。

「まつたく、よく降ることじやのう」

ライヒアラ騎操士学園の学園長であるラウリ・エチエバルリアは窓の外を見ながら、途絶える気配のない雨に眉根を寄せ鬚をなでさすつていた。

最近では珍しく長引く雨により一部の授業にも不都合が出始めている。晴天が続きすぎるのも問題だが、こうやって雨が続くのもそれ

はそれで問題になるものだ。

そうして物思いに沈んでいたラウリの意識を、唐突に聞こえて来たノックの音が拾い上げた。

「ふむ、どなたかの」

彼はぽつりと呟くと、学園長用の古めかしい作りの机へと戻り、椅子に腰掛けながら返答する。

扉の外からは学園の用務員を務める者がおずおずと来客の存在を告げた。

かすかに眉を寄せ、ラウリは来客の予定を思い出してもみるが、本日何かしらの予定が入っていた記憶はない。

彼は学園の長ではあるが、それはつまり教育者のまとめ役に過ぎず、特段強大な権力を持つているわけではない。

それでも学園長まで直接案内する必要がある来客というのは珍しいものだった。

そういう客が突然やつてくる事もないわけではないが、大抵そいつた相手は地位のある人物であり多忙である。その場合は時間の無駄を省くため事前に予定を調整してから会つものだ。

とは言え、と思い直してラウリは窓の外へ視線を向ける。そこでは降り止む気配もない雨が窓を叩き、時折強風が窓枠をガタガタと揺らしている。

この悪天候では多少連絡に不手際があつても仕方ない、むしろこの状況で出向いてくるほどの火急の用件があるのでどうと考へて、ラウリは来客を学園長室まで通すよう返事をした。

来客はすぐ近くに待機していたと見え、返答からまもなく部屋の扉が開かれる。

がしゃがしゃと騒々しい音を立てて入ってきた来客の姿を見て、ラウリは目を細め顔の皺を深くした。

「その紋章……ディクスコード公爵配下の騎士殿とお見受けしますが、斯様な悪天候の中、当学園にいかなる御用ですか？」

ラウリの前に案内されてきたのは3人の騎士だつた。
しっかりと鎧に身を包み、その上からマントを羽織り兜を小脇に抱えたその格好は、他の何にも見間違いようがない。

ラウリは彼らのマントに織り込まれた紋章からその所属を見て取つたが、しかし彼らがここを訪れた理由に見当をつけむには至らずに皺を深くする結果に終わる。

部屋に入ってきた騎士達は、その風体から独特の威圧感と真面目さを放ちながら、まずはラウリに対して綺麗に礼の姿勢をとつた。

「はい、我らはディクスコード公爵閣下配下、朱兎騎士団に所属しております」

3名の中央に立つた騎士が名乗りを上げる。

彼はこの中でも指揮官格にこころようで、話すのは主に彼だった。

「本日は公爵閣下の命によりここを訪れました。まずは閣下より文を預かっております、お改めください」

差し出された油紙の包みを受け取り、中より封書と思しきものを取り出す。

それにつけられたディクスコード公爵家の紋章を象つた封蠅がランプの灯りの中にはっきりと確認できた。
言うまでもなくこの紋章を使用することが出来るのは、ディクスコード

ード公爵家の人間をおいて他には居ない。

これが公爵家からの正式な文書であることを再確認したラウリの緊張が高まる。

ラウリは一言断つてから手紙の内容を確認する。そこに書かれた内容を読むにつけ、ラウリの目が驚愕に見開かれていた。

手紙を読み終えたラウリが何かを言おうと口を開きかけたその時、突如窓から飛び込んできた雷光が部屋を白く染めた。

しばし遅れて大音量の雷鳴が轟き、その場にいる全員の鼓膜を激しく震わせる。

それに続いた様々な感情を含んだ沈黙を、降り続く雨の音が飲み込んでいった。

教室の中には押し殺すような沈黙と、漏れ出した微かな咳き声が漂っている。

先ほど轟いた雷鳴はここしばらくの中でも特に大きなものだった。悪天候のため昼だというのに薄暗く、ランプの灯りに照らされた室内では生徒達が自らの驚愕を隣の席と囁きあつてている。

壇上に立つ教師も少し窓の外を伺うそぶりを見せたが、驚いたな、とぽつりと感想を漏らすと再び授業へと向き直った。

間もなく教室は雨の音に満たされる。

雨音にかき消されまいと教師がいつもより大きな声で授業を続けるが、飽くことない自然の力の前にいくらかの非力さは否めなかつた。そんな落ち着かない空気のせいか、それとも先ほどの雷鳴のせいか。いまひとつ集中力に欠ける様子の生徒達がそれでもしっかりと板書だけはとつてている。

むしろ説明が聞きづらい分、板書が授業の命綱になっている。彼ら

も必死である。

微妙なバランスをたもつたまま午前の授業が終わり、騒々しい昼食の時間が訪れる。

基本的に寮生活であるライヒアラの生徒達は昼食になると学園付属の食堂を利用する。天候が落ち着いていれば周囲の店や自宅を利用するものもいるだろうが、この悪天候では何をかいわんや。

エルネスティ達3人もその例外ではなく、席を立ち食堂へと向かおうとしたが、その時意外な人物が慌しい様子で教室を訪れた。

訪れた人物 マティアス・エチエバルリア戦闘技能教官は黒板の片づけを行っていた教師に何事かを耳打ちする。彼らの間で何かしらの了解が交わされた後、マティアスはそのままエルの前までやってきた。

「どう……エチエバルリア教官、どうされたのですか？」

エルは小首を傾げながら、近寄ってくる自分の父親であるマティアスへと問いかける。

マティアスは主に高等部、騎操士学科にて指導をしている。初等部であるこの場に用事があるとすれば、それはエルに対するものだと考えたほうがいいだろう。

「理由は後で説明する、いきますぐに一緒に来てくれ

頷きながらも少し急かすような雰囲気のマティアスの常ならぬ様子に、エルは首の傾斜を深くしかけたが、すぐに思い直すと小さく後ろを振り返った。

「二人は？」

「ああ、すまないなキッド君、アディ君。しばらくエルは借りてゆ

くよ

状況がよくわからずにとりあえず頷く双子に小さな会釈を残して、エチエバルリア親子は連れ立つて教室より出て行く。

「マティアスのおっちゃんどうしたんだ？ 珍しいよな……」

「なんだか、嫌な予感がするわね」

キッドとアディはしばらくの間彼らが出て行った扉をぼんやりと眺めていたが、ふと昼食時の食堂の混雑を思い出して慌てて移動を始めた。

何があつたのか後で聞けば良い、そう思つていた一人だが、彼らがそれを確認するのはずっと後の事になる。

午後の授業が始まつても、教室にエルの姿はなかつた。

エルネスティとマティアスが二人並んで、静かに廊下を歩いてゆく。片や短めの金髪をなでつけ隆々たる体躯をもつ戦闘技能教官、片やセミロングの銀髪を流した小柄な体躯の少年。

年齢が違うことを考慮に入れても、二人の見た目は対照的とも言つていいほどに違う。

エルは全面的に母親似なので仕方のないことではあるが。

そうして何もかもが違うようでいて、しかし彼らが纏う雰囲気には驚くほど似た部分があり、やはり親子である事をどこかしらで感じさせていた。

彼らは昼休みの慌しい人の流れに逆らつように移動していた。

食堂とは逆の方向、学舎からも離れ、その足は実習向けの施設がある区域へと差しかかる。

歩きながらエルは目的地を推測し、この急な呼び出しの内容にもある程度の見当をつけていた。

「（…）ちにあるんはアレか……と言つ事はあの人から連絡がきたんかな？」

エルは目的地についてから説明があるものと思い、特に質問をすることもなく静かに歩いていたが、マティアスには少し別の疑惑がある。

周囲を憚つてか、教室のある学舎から離れて人気のない区域に差し掛かったところで、彼は歩みを緩めて口を開いた。

「先ほど、義父さんのところへティクスゴード公爵から遣いの者が来た」

エルがそれに反応を返すまで一拍の間があった。

「……セラーティ侯爵から、ではなくてですか？」

過日、エル達はキッドとアディの案を受け、セラーティ侯爵へと新型機の扱いについて協力を要請する連絡を入れていた。

そのため誰かが来るとすればまずセラーティ侯爵の関係者だと考えていただけに、エルにとってマティアスの言葉は予想外のものだった。

エルは些か腑に落ちない部分を感じていたが、ひとまず自身の疑問を脇において状況の確認を優先する。

「その遣いの方はどうな用件で来られたのでしょうか？」

「エル達が作った新型の幻晶騎士シリエットナイトについてだそうだ。」

詳しくはまだ私も聞いていない。まずは関係者を工房に集めて説

明をする「りじー」

その内容 자체は予想が出来るものだったが、それゆえにエルは疑問に首を捻る。

「（セラー・ティ侯爵が連絡を入れたのは間違いないにせよ、なんでまた公爵にまで話が？

“侯爵位”では解決できんほどの難問があるんかな？」

こちらからの要求が何かしらの困難を伴うのか、それとも新型機の扱いが難しいのか？

エルは思考の海に沈みかけたところで、今それを考えるのは無駄であることに気付いて小さく首を振った。

エルが顔を上げたところで、視線を下げたマティアスと田が合図。常は鋭さを放つ彼の目つきは今は優しさを湛え、下げられた眉がそのまま印象を更に強めている。

「エルは本当に昔から幻晶騎士が大好きだな」

やや脈絡にかけた台詞を言いつつ、マティアスは自分の胸より下にある息子の頭をゆづくじと撫でる。

父親の態度に奇妙なものを感じたエルは少し首を傾げる。

「そうですね。父様も」存知のように僕はそのためにここにいるようなものですし。

こんなにも早く実物に触れる機会があるとは思いませんでしたけど」

「そうだな。そのためにエルが色々なことを学んでいるのも、ずっと頑張ってきたのも良く知っている」

だが、と言葉を続けながらマティアスは表情を引き締める。

その様子から、エルはこちらこそが父親の話したかったことだと気が付いた。

「エルの作った新たな幻晶騎士は、これから大きな波紋を呼ぶことになるだろう」

それは予想の形を取つてはいるが、半ば以上の確信を持つて語られた。

実際に、公爵位にある人物から遣いが来ていていると言つこの状況だけでもそれを肯定するには十分だ。

「それは良い」とばかりではなく、おそれらしくは困難も伴つことになる

「……父様」

マティアスの危惧に察しがついたエルは、その愛らしい顔に少しの苦味を混ぜた。

エルは自分自身にその困難が降りかかる事は覚悟している。降りかかる先が騎操士学科の学生たちであっても、彼らは共に戦ってくれるだろう。

しかしそれが家族にも影響があるかもしないことに、エルは一種の申し訳なさのような気持ちを持っていた。

エルの行動、ひいてはこの状況は純粋に彼自身のわがままに端を発している。

普通の子供のわがままであれば大したことは起こらない、精々が悪戯の範囲を出ることはないだろう。

しかしすでに事態はそれで済ませられる範囲を遥かに逸脱し始めている。

「エルなら、もしかしたらどんな困難も一人で解決してしまうかも
しない」

エルが内心大きく反省をしている間に、マティアスは前を向き再び歩き出していた。

咳きのよくな彼の言葉は、窓の外から響く雨音にも負けずにしつかりとエルの耳へと届く。

エルは小走りにその後を追いながらマティアスを見上げた。角度的にマティアスがどのような表情を浮かべているのかはわからなかつたが、彼は力強い聲音で断言する。

「だができるかも知れないと言つて、何もかも自分ひとりで全てをこなす必要はない」

振り向いたマティアスとエルの視線がぶつかる。

マティアスは、彼には珍しいことにやうと、まるで悪戯をしかける子供のような笑みを浮かべた。

「とここんまで思つとおりにやつてみなさい、エル。私もティナも、エルを信じて応援している。

勿論、義父さんだって応援してくれるぞ」

「……はい、父様。もしかしたらお力を借りるかもしませんけど、そのときはお願いしますね」

彼らの前に工房の入り口が見えてくる。いつもは嬉しさや楽しさと共にそれをぐぐるエルにも、今日ばかりはその扉がまるで戦場への入り口のように見えていた。

工房へと辿り着いた彼らが目にしたのは、いつものように壁沿いに並んだ整備台に乗せられた幻晶騎士であり、そしていつもとは違う作業の手を止めた鍛冶師達だった。

普段であれば慌しく行き来し、整備台に設置された幻晶騎士を整備すべく様々な作業を行っている彼らだが、今は突然の知らせに浮き足立つた様子で何事かを話し合っている。

良く見れば鍛冶師だけではなく騎操士ナイトランナーもあり、本当に関係者の大半がこの場に集められていることが見て取れた。

未だ内容が説明されていないことによる、期待と不安の入り混じった空気が工房の中を漂う。

エルネスティは例外中の例外であり、大半の生徒は公爵位にある人物との接点などもたない。

以前、陸皇亀討伐ベヘモスに貢献した一部の生徒が王都カンカネンで行われた叙勲式へと出席したが、それが精々と言つたところだ。

つまり伝えられたディクスゴード公爵の名は、彼らにとつては雲上人からの呼びかけに等しく、それが大きなプレッシャーとなつている。

様々な不安や期待を抱くのも無理なからぬことだった。

エルは小柄な体格を生かして生徒の間をすり抜け、見知った人物の元へと向かう。

「親方」

エルが声をかけると、エドガーと話しこんでいた親方が髭を揺らして振り向いた。

「おう、銀色坊主か。聞いてるか？ 早速連絡が来たようだぜ。エルネスティ

なにやら記憶よりも相手が大物になつてゐる気がするが
「それだけ評価されたと考へるべきじゃないか？」

横殴りに襲い掛かる暴風雨を避けるため、締め切られた工房の中は想像以上に蒸し暑い。

手に持つ杖からゆるい風を起こしながら親^{ダーヴィッド}方は器用に肩をすくめて見せ、エドガーは皮製防具の固定を緩めていた。

「思いのほか急展開でしたね」

「この雨ん中」苦労さんとしか言いようがねえがな

「間違つてもそれを直接言わないでくれよ、親方」

三人がやる氣のないやり取りを交わしている間に、周囲から抑えたざわめきが上がる。

何事かと振り返れば、今しも工房へと見慣れぬ集団が入つてくるところだった。

その集団が身につけているのは、明らかに作業をするのには向かない、全身をきつちりと覆う鎧に紋章の織り込まれたマント。学生の騎操士は動き易さを重視して主に皮の鎧を身につけ、一部のみを金属鎧にしている者が多い。これほどの装備を身に纏うのは間違いなく正騎士の身分にあるものだ。

集団の人数は20名に上り、その全員が同様の装備を身につけてゐる。小規模ではあるがそれは騎士団そのものだつた。

一步ごとに鎧を鳴らし、雨音に負けない騒々しさを立てながら入ってきた騎士団がその歩みを止める。

その威圧感に生徒達が思わず軽く後ずさつた。

それに合わせたわけではないだろうが、騎士団の中から一人の騎士が前へと進み出る。

彼は騎士団を代表する人物のようだつた。

「学園より連絡のあつた新型幻晶騎士製作に関係する生徒は、これで全てか？」

騎士の質問に、その場にいる生徒達の視線が戸惑いと共に交錯する。相手は騎士団の代表らしき人物、では学生のうち果たして誰が応じるのか。

あちこちで玉突き衝突を起こした視線は、ほどなく彼らの一角へと向けて収束していった。

背中に突き刺さるような多数の視線を受けた親方とエドガーが、嘆息を滲ませつつも風を受けた帆船のごとく前へと進み出る。それに巻き込まれるようにして、彼らと会話していたエルも共に前へ出た。

「全員じゃねえな。正確にいやあ、あと鍊金術師も何人か関わってる。

直接作った鍛冶師と動かした騎操士、そして発案者ならここにそろつてるがな」

後ろへと顎をしゃくりながらの親方の返答に、エドガーが思わず頭を抱え、エルがずつこけかける。

正騎士に対してすら持ち前のぶつきらぼうな態度を崩さない親方はある意味大物だった。

確認の言葉を聞いた騎士は一瞬表情の中に渋いものを含めたが、相手は基本的に大雑把な性格をしたドワーフであり何を言つても無駄だと判断して、そのまま話を進め始めた。

「よろしい、そこは十分だが……。

君たちは騎操士学科の生徒だとわかるが、この子供はなんだ？」

やはりとにかくべきか、エルの存在を見咎めた騎士が不審な視線を向ける。

親方とエドガーがエルの事を紹介しようとし、しかしその困難に開けかけた口を途中で閉じた。

思わず横を見た一人へとエルが笑顔で応じる。

騎操士学科の生徒にとつては、もはやエルがここに居るのも見慣れた光景であるが、冷静に思い出すと彼は初等部の生徒である。

今更ながら、ごく普通に彼がこの場に居ることの違和感を思い出し、親方の顔が引きつった。

説明しあぐねて停止した一人を見やり、なんとなく彼らの困惑が予想できたエルは普通に自己紹介を始めていた。

「僕は新型幻晶騎士に使われている技術の発案者兼、初期設計を担当した者です」

「…………子供の冗談にしては随分だな」

「んお、いや、事実だな。何ならここに居るやつらにでも、学園長にでも聞いてみたらいい。」

全員そろつておんなじ事をいつだらつな

再起動した親方の肯定を聞いても尚、騎士の疑惑は晴れない。

周囲にいる生徒たちも心なしか同情めいた視線を騎士へと送つていた。

我が家ことながら無理もない、とエルすら騎士の困惑に同情に近いものを感じるが、さりとてこのままでは埒が明かない。

「僕のことは後にでも確認していただければ。ひとまず、関係者に違いはありませんから」

「…………まあいい。さて学生諸君、私は朱鬼騎士団所属の騎士だ。

ディクスゴード公爵閣下より命を受けこの場に居る

学生の間に再びざわめきが走る。国王に次ぐ、国内でも最上位の爵位を持つ人物からの遣い。

事前に話は聞いていたが、それでも改めて直接名乗られると、その衝撃は軽いものではなかつた。

「閣下は新型の幻晶騎士について興味を持つておられ、実際に動いているところを見たいとの仰せだ。

そこで君たちには速やかに新型機をカザドシユ砦まで輸送してもらいたい。

機体の整備のために必要十分な人数を同行して、だ」

その騎士の言葉に対しての返答は沈黙。さきほじまでの興奮は一気に引っこみ、学生達を困惑に近い空気がつつんでゆく。

そんな気まずい空気を拭えないでいる生徒の中から、おずおずと親方が拳手をした。

「あー。ひとつ質問、いいか?」

説明を行つた騎士が目配せで許可を示すと、彼はそれに応じて豊かな顎鬚を撫でながら疑問を呈する。

「なるべく急いで新型機が見てえ、って考えにや異存はねえが、それでこの天氣だ。

どう見たつて幻晶騎士を動かすのには向いちやいねえが、それで もか?」「

「当然だ、これは公爵閣下より直々に下された命令である。

君らも騎操士課程まで上り詰めたものならば雨天行軍の修練も積んでいるだろ?」

そんなことは手を止める理由にはならない、ただちに準備にかか

つて欲しい

騎士の表情が徐々に険しさを帯びてゆく。

彼らがどのような意図を含んでいるのかはわからないが、彼の背後に従う騎士団はかなりの威圧感を伴っている。

そこにはまるで室内の空気が一気に粘り気を帯びたような、圧迫された雰囲気が漂い始めていた。

しかし親方は大仰に首と腕を振り、実に気軽に言葉を続ける。

「いや、勘違いしないで欲しいが。まあ天候がキツイってのも否定はしねえが、それよりも機体への負担が怖い。
いくら訓練してゐからつても、雨天行軍は困難だ。ましてやこの嵐だ。

新型はまあ、そんなにヤフじやあねえが、だからと云つて無茶をするにはまだまだ粗削りよ。

「ひらとしても見せるのならできる限り良好な状態で持つて行きてしまえ。

それにそのほうがあ互いにとつて有益だと、思つんだがよ?」

我が儘で嫌がつてゐるわけではないと言つ親方の言葉に、騎士隊長は小さく頷いたものの、あくまでも硬い態度を崩さずにいた。

「それも一理はあるな。だが閣下は可及的速やかにそれを持つてくれるようになると仰せだ。

強行軍になるだらうし、問題が発生するかもしれないが、機体であれば持つて行く先で修理すればいいだけの話。

君達にも一緒に来てもらつるのはそのためだ

そこまで言われれば、学生も否とは言えなかつた。

明確に不可能な命令ならばともかく、この場合問題は困難であると

言う事のみ。

もとより公爵位の人物からの言葉に学生の身分で抗うこととは不可能だ。となれば後は全力を尽くすのみである。

了承するしかないものの、それを実行するための労力を思い、親方は髪を揺らすほど重い溜息をつく。

「わかった、ひとつと準備をしよう」

今度こそ深く頷く騎士に踵を返し、親方は後ろでうんざりとした表情を隠そうとして失敗気味の整備班へと指示を始めた。

人間と同じく一本の脚で歩行する幻晶騎士は当然ながら地面の状態から強く影響を受ける。

長雨が続き、地盤が緩んでいるこの状況で動かすためには騎操士の操縦技術以外にも相応の準備が必要だ。

足回りにいくらかの装備をつけ、水の浸入を抑えるべく関節部へ覆いが追加される。

さすがに、これまでも十分な訓練を受けた整備班だけあり、この作業そのものはさほど時間もかからないだらう。

整備班が作業にかかる間に、マティアスが騎士へと話しかける。

「同行する学生は整備班と騎操士だけか？ 動かすのならばそれで十分だとは思うが」

マティアスは傍らのエルを気にしながら問い合わせる。
その意図に気づいた騎士の返答は明確だった。

「いいや、発案者にも来てもらひ。これほど小さな子供とは驚いたが……事実なのだな？」

……そうか、本当か。

ならば閣下が話を聞きたいといつてゐるやうにと厳命されている。

たゞ初等部の生徒だとしても例外はない。一緒に来てもひょい

発案者とこゝからには新型機開発の中心人物のようなものだらうと予想していた騎士は、目前の少年を見て未だに半信半疑の心持ちで居る。

こんなことで学生や教師が嘘をつく理由は無いだらうが、こんな子供が、というのが彼の正直な感想だ。

エルは何の気負いもなさそうな様子で笑みを浮かべ、騎士の疑惑の視線を受け流す。

思つたよりもややこしいことになりつゝある事態に、彼はすつきりとしない氣分でいたが、小さく首を振ると気合を入れなおす。

「（さて、公爵閣下はどんな話を始めるんやろな……）」

誰にとつても幸いなことに、準備の間に雨脚が弱まり、出発するころには暴風雨はいくらかその勢いを減じていた。

相変わらず空は厚い雲につつまれ、勢いを弱めたとは言え雨は降り続いているが、それでも嵐の最中を行くことを思えば随分とましだ

るや。

ライヒアラ学園街から馬車の群れが出発した。

朱兎騎士団が乗ってきた馬車を先頭にして、学生たちを乗せた馬車がそれに続く。

彼らの馬車を挟むようにしてテレスター・シリーズが横を歩いてゆく。

全高一〇三にもなる金属の塊である幻晶騎士を輸送する手段は、そ

れほど多くはない。

負傷機体を輸送するための特殊な馬車はあるが、それも機体を分解することで重量を分散して載せる形式のものだ。

自力歩行の可能な幻晶騎士は基本的に自走して移動する。いかに新型機が今回の目玉であるとはいえ、この場合も例外ではなかつた。テレスターの前方、そして集団の最後尾には朱兎騎士団所属のルダトアの姿がある。

この道中においても魔獸に襲撃される危険はある。

いざという場合に目的の新型機を戦わせるわけにもいかないため、これらは護衛戦力として随行している。

目的地であるカザドシュ皆はディクスゴード公爵領に存在する。

そこまでの道のりは、途中までは西フレメヴィーラ街道を行き、そこからディクスゴード公爵領へと向けて分岐した経路を進んでいく。その大半が石畳により舗装された道のりであり、悪天候を考慮してもかなり移動しやすいものだった。

特に自重があり一足歩行で移動する幻晶騎士にとって、雨によりぬかるんだ地面での行動はかなりの困難を伴う。

勿論、騎操士の誰もが雨天下の行動訓練を積んではいるが、だからと言ってその状況を歓迎する者は皆無であろう。

馬車と併走する幻晶騎士へと降りかかった雨が、機体の運動により発生する熱により蒸発してゆく。

その全身のあちこちから薄く蒸気をたなびかせながら、鋼鉄の騎士は黙々と歩行を続けていた。

順調に思えた道のりに変化があったのは街道から外れ、皆へと向か

う道へと入つてからしばらく後だつた。

森の中を切り開かれた道を行く彼らの耳に、明らかに馬車や幻晶騎士が立てるそれとは違う異音が届く。

「この音は……ちつ、こんなところで魔獸か。総員、周囲を警戒！
防御陣形を組むぞ！」

断続的に響く地鳴りのような低く、重い音。

フレメヴィーラ国内においてこのような音を立てる存在は2種類しかない。幻晶騎士か、そもそも魔獸だ。

幻晶騎士であれば吸気機構の駆動音が聞こえてくるはずである。そうでなくともこんな場所で突然現れるのはたいてい魔獸であると相場が決まっているが。

異音の発生源は明らかに彼らに向けて近づいている。

その規模から言って最低でも決闘級（幻晶騎士が必要な規模）と予想され、さらにそれが複数存在するかもしれない。

戦闘訓練をつんだ騎士はともかく、馬車を牽く馬はただの馬であり、明らかな異常の接近にパニックを起こしかけていた。

無秩序に暴走しないように御者が必死に手綱を取るが、馬の足並みは乱れ、それが結果として行軍速度の低下を招く。

速度を落とした馬車の列を囲むように防御陣形を組む幻晶騎士が、走りながらも周囲の森を警戒する。

これだけの音を立てる規模の魔獸であれば近寄れば必ず森に異常があるはずだ、そう予想しての行動だったが、異音がどんどん接近していくにも関わらず、森には目立った異常は見られない。

「……違う、これは周りじゃない……下からつ！？ クソッ、まさか！？」

騎士の一人が地響きの響いてくる方向に気付いたのと、それが現れるのはほとんど同時だった。

幻晶騎士による防御陣形の内側で、突如として吹き上がるよう地面が弾け、そこから細長い何物かが出現する。それは飛び出した勢いのままに空中で放物線を描き、地面へと接触すると石畳を粉碎しながら再び地中へ消えた。石畳を含む硬い地面に対しても全く抵抗を感じさせないその動きは、まるで水面から飛び出る魚を連想させるものだが、一瞬見えた姿は紐のように細長いものだった。

ただし直径は1mはあり全長は数十mほどの、といつ注釈が付くが。

1匹目を皮切りに次々と地面から魔獣が出現し、群れと化し地面を砕きながら馬車と併走を始める。

その数凡そ10匹。魔獣が移動した後には、石畳で舗装されていたはずの道が見るも無残に砕けていった。

「まずい、固まっていると下からやられるぞー！」

「幻晶騎士！ 防御陣形を変更して……」

予想外の方向からの襲撃に騎士団の対応が後手に回っている間に、魔獣が先手を取った。

馬車の左右に分かれるように現れた魔獣は、数が揃うと同時に馬車へと襲い掛かってくる。

現れたときと同じように、魔獣が放物線を描いて馬車へと踊りかかる。

固い岩盤をも砕きながら進むことを可能とするその先端部は、馬車を作る木材や騎士の着る鎧など全く問題とせずに一緒に粉砕する。

魔獣の何匹かは馬車のど真ん中を貫き、何匹かは直接馬を襲い、一瞬でその姿を挽肉へと変えて地面へと消えた。

牽き手を失った馬車が蛇行し、壊れた馬車が倒れこみ、障害物となって後続の移動を阻む。

俄かに混乱の只中に放り込まれた隊列は、完全にその動きを止めていた。

「固まつていいと一網打尽にされるぞーー！ 馬車から出て……」

混乱の中でも騎士団は対策をとろうとしていた。

だがそんな努力をあざ笑うように、更なる異変が訪れる。

カルダトアのうち1機が剣を引き抜きながら援護に駆け寄ろうとして、突如として足元で発生した異常により中断を余儀なくされる。

それまでとは比較にならない勢いでカルダトアの足元が盛り上がり、そしてその中から先ほど魔獸よりはるかに巨大な何かが現れた。

「な、なんだ……あれ？……！」

その光景を見た者は自らも危険の只中に居ると叫びのに、一瞬の自失を避け得なかつた。

カルダトアの足元から魔獸とおぼしき何者かが現れた途端、周囲には硬質な物体同士が擦れあい、音を粉砕する耳障りな音が撒き散らされる。

形状こそこれまでの魔獸と同じく細長い紐状だが、新たに出現した魔獸の直径たるやおよそ6m 幻晶騎士の全高の半分を超している。

その先端はびっしりと並んだ大量の甲殻によつて覆われており、幾

重にも重なつて配置されたそれが、高速で互い違いに回転し続けている。

まるで地球におけるシールドマシンのように、回転し続ける甲殻が

魔獸の進路上にあるものを粉碎し、挽き潰してその体内へと取り込んでいた。

それは地面であらうと、石畳であらうと、幻晶騎士であらうと一切例外ではなく。

現れた魔獸に“喰らい付かれた”カルダトアの脚部が、まるで濁流に飲まれたかのように一瞬にして粉碎される。

脚部を完全に失ったところで、残つたカルダトアの腰から上が宙を舞い、地面を盛大にバウンドして転がつた。

その間にも巨大な魔獸は他の小さな魔獸と同じように、自身の勢いのまま放物線を描いて着地すると、泥を盛大に吹き上げ再び地中へと姿を消していた。

騎士も学生も、幻晶騎士の一体が大破したことに大きな衝撃を受けたが、しかし彼らに悠長に固まつていられるほどの余裕は存在しない。

「馬車は放棄する！ 動けえ！ 立ち止まつていると足元から食われるぞ！」

壊れた馬車から這い出し、負傷者を移送しようとする彼らの足元から、無情にも地響きが近づいてくる。

相手が地中においては、いかに訓練をつんだ騎士であらうと有効な手段をとることができない。

彼らは思わず歯噛みするが、それは焦りを募らせるばかりで何の解決にもなつていなかつた。

「畜生！ このくそ魔獸め！ やつてくれやがつたな！！」

当然、被害にあつたのは騎士だけではない。学生が乗つた馬車も襲

われ、何名もの学生が巻き込まれている。

激昂する親方を引きずるようにして回りの生徒が馬車からはなれてゆく。

混乱の極みにある彼らをさらに追い込むよう、魔獸による包囲網は刻一刻と狭まっていた。

魔獸が岩石を咀嚼する、甲高い異音が地中から響いてくる。それは周囲の雨音を圧し、騎士団と学生を包囲していた。完全に足止めを喰らった格好の彼らは、動きの取れなくなつた馬車から脱出し、足元の様子に注意しながらも攻撃陣形を取つてゐる。魔獸が地中にいる間は攻撃することが出来ないため、襲い掛かつてきたところで反撃するつもりだった。

緊張に喉を鳴らす彼らの中に、一際小柄で、両手に奇妙な武器を構える学生の姿がある。

エルだ。

「地碎蚯蚓……また厄介な魔獸が現れましたね」

地碎蚯蚓 簡単に言うと巨大な**蚯蚓**の魔獸である。

その先端部は大量の小さな甲殻にびっしりと覆われておらず、一面に並んだそれを互い違いに回転させることにより、地面を破碎して体内に取り込んでいる。

その姿はながら生体掘削機と言つべきものだ。

取り込んだ土中の生物を、体内を貫通する長い腸で消化して養分をとつており、またそれを排出する際に推進力として利用することで、地中をかなりの速度で移動することが可能である。

そして何よりも、防ぎづらい地中から襲撃してくるため、魔獸の中でも極めて厄介な部類として認識されているのだ。

「しかし、シェイカーワームは最大でも直径2mもいかなかつたは魔獸の情報を簡単に思い出しながら、エルは疑問に首を捻つた。

「しかし、シェイカーワームは最大でも直径2mもいかなかつたは

す……。

あの巨大なのはなんなのでしょうね？ ヌシ？」

「知るか！ つうか何故おめえはそんなに落ち着いてるんだよ！」

「まあまあ、そう怒鳴らないでください、親方。やつらは地中にいることが厄介な魔獸。

しかしその移動にはかなりの騒音を伴うので、音を調べればある程度の位置がわかります」

ギリ、と音がしそうなほど歯を食いしばり、ダーウィード親方がその口を閉じる。その表情は怒気に染まり、今にもその手に持ったハンマーを振り回して暴れだしそうな雰囲気だ。

最初の襲撃で学園の生徒達が何名か負傷している。できることならば彼は、自らの手で魔獸の頭を潰して回りたい気分だった。

「そう、ですから親方、少し下がつていてください。ここと、来ます」

目を伏せるエルの呟きを聞いた親方は、返事すら返さずに、彼に可能な最大の素早さで走った。

その間にも地中の振動は急速に接近し、今やエルの足元では溜まつた水溜りが盛大に跳ねあがっている。

走りながら振り返った親方が何かを言つより早く、エルの足元から土砂を噴き上げながら魔獸が出現した。さすがの親方もその光景に肝を冷やす。

シェイカーワームの接近を把握していたエルが、まさかそのまま喰われはしないだろうと思つてはいるが、それでも心臓に悪い光景だった。

親方の心配を拭うように、シェイカーワームが飛び出してくる瞬間、エルは圧縮エアロラスト大気推進の魔法を炸裂させ、吹き飛ぶように宙へと舞い

上がった。

エルを追つのような形でシェイカーワームの細長い身体が伸び、空中へと躍り出る。

その勢いはかなりのものだつたが、空中で加速できるエルには届いていなかつた。

エルはシェイカーワームのほうを向いた姿勢のまま、両手に構えた
銃杖^{ガンライクロッド}・ワインチエスターをまっすぐに構える。

「いらっしゃいませ」

シェイカーワームは地中ならば自由に掘り進むことが出来るとは言え、空中に飛び出した後では向きを変えることができない。まるでおろし金のように、甲殻がびっしりと並んで回転する魔獣の先端部へ向けて、エルは猛烈な勢いで魔法を連射する。

一挺のワインチエスターから火線が延び、次々にシェイカーワームへと突き刺さつた。

撃ち放たれた徹甲炎槍^{ピアシングランス}の魔法が、着弾と共に炸裂する。

シェイカーワームの甲殻がいかに岩石すら碎く威力を持つとはいえ、連續して飛来する魔法攻撃の前に耐えることはできなかつた。

指向性を持つ爆炎の魔法が、びっしりと並ぶ甲殻を吹き飛ばし、穴を穿つ。

数発の徹甲炎槍があけた穴へと、後続の魔法が続々と飛び込んでゆく。

それは柔軟性の高い魔獣の体内で炸裂し、爆発による激しい圧力で周囲の組織を吹き飛ばした。

細長いシェイカーワームの身体が先端から2割ほど短くなり、千切れどんだ先端部の後を追つて地面へぶつかり、しばらく滑つてその全ての活動を停止した。

シェイカーワームの先端部が吹き飛ぶのを確認したエルは、そのまま身を翻して地面へと着地する。

大気衝撃吸收の魔法が泥と水たまりを吹き飛ばしつつ、エルの着地の衝撃を吸収する。

彼はそのまま、他のシェイカーワームに襲われる学生達を援護すべく、駆け出していった。

地中から襲い来る魔獣を相手にするため、騎士団も学生も密集隊形を取らずに、ある程度ばらけて構えていた。

シェイカーワームの攻撃で何より恐ろしいのは直接下から襲われることだ。彼らは予兆の知覚に全力を注いでいた。

「地響きに気をつけろ！ 近いと思つたら立ち止まらずに走れ！！」「来たぞ、右手だ！ 注意しろ！」

飛び退つた彼らを掠めるように、次々にシェイカーワームが地上へと飛び出していく。

地中でこそ凶悪なシェイカーワームだが、地上の生物を襲うためには土から出なくてはならない。

その時に自身の移動速度が仇となり、一瞬空中で無防備になる瞬間がある。そこに攻撃の機会がある。

「//://ズ野郎があ！ 調子に乗るなあー！」

奇襲を受けてこそ怯んだ騎士と学生達だったが、一度体勢を立て直した後は、彼らは猛然と反撃に出ていた。

彼らが杖を振るたびに爆炎球^{ファイヤーボール}の魔法が飛び、雨中に紅蓮の花を咲かせる。

爆発の衝撃で空中で姿勢を崩したシェイカーワームが地面に激突し、中には多数の魔法に直撃し空中で爆散するものもいる。

騎士と学生達は、シェイカーワームが地中に逃げないついで素早く止めを刺していった。

シェイカーワームの皮膚は、地中の摩擦に耐えるためにある程度強靭ではあるが、先端部の甲殻と比べると耐久性は落ちる。

親方は爆炎球の衝撃で地面へ衝突したシェイカーワームのうち1匹に駆け寄り、両腕に渾身の力をこめて手に持つ槌を振り下ろした。

「よくもつけのモンにかましてくれやがったなあ！！」

ドワーフ族の強力な筋力をいかんなく發揮した槌の一撃が、甲殻に覆われていない部分へと打ち込まれる。

金属製の槌は、それが持つ破壊的な運動エネルギーを存分に魔獣へと振舞つた。

耐え切れなかつた魔獣の皮膚が即座に潰れ、その内部へと槌の先端が埋まつてゆく。

浸透し、拡散する衝撃が内部組織をすたずたに潰し、槌を打つた部分で魔獣の身体を分断した。

发声器官をもたないシェイカーワームが、しかしまるで断末魔の叫びを上げるように一際大きく痙攣し、力を失いその身を横たえる。

親方は魔獣の身体に埋まり、体液にまみれた槌を力ずくで引っこ抜くと、それを軽く振り回してから構えなおした。

「おひらあ！ 次だ！ ジャんじゃん持つてこい！」

その気迫溢れる姿に、魔獣よりもむしろ学生達が恐れをなしていたのは余談である。

小型のシェイカーワームは騎士と学生の反撃により討ち取られつつある。

彼らが落ち着いて小型魔獣に対処することが出来たのは、幻晶騎士シルエットナイツの奮戦によるところが大きかった。

彼らが居る所から少し離れた場所では、エルに“ヌシ”と称された巨大なシェイカーワームが大暴れしていた。

幻晶騎士部隊は、ヌシが小さな人間よりも、巨大な幻晶騎士を目標にしていることを悟ると、即座に人のいるところから引き離しにかかりついた。

シェイカーワームにはろくな知能がない。ヌシはまんまと誘導に引つかり、森の中へと誘い出されていた。

幻晶騎士の半分以上の直径を持つ、ヌシの巨大な口吻が地面も、森も関係なく破碎しながら突き進む。

木々が移動の邪魔になり、幻晶騎士にとつては必ずしも有利な場所ではなかつたが、ヌシは生身の人間では間違つても相手に出来る存在ではない。

不利は承知でも、彼らから離れた場所で戦う必要があつた。

「こらのおおおおーーー！」

雄叫びを上げながらヘルヴィの駆るテレスター^レが突進する。

両肩の上に展開された背面武装バックエボンが唸りを上げ、矢継ぎ早に発射された法弾が宙に光芒の尾を残す。

法弾は狙い過たずヌシの胴体に直撃してゆくが、巨躯を誇るだけあつてヌシの耐久性は通常のそれの比ではなく、十分な効果があつた

ようには見えなかつた。

「なんなのこれ！ ちょっと反則じゃない！？」

「多少当てたところで、びくともしないな」

ヌシの全長は100mを越そうかというものだ。長大な体躯をうねらせながら泳ぐヌシ相手には、攻撃を集中せらるることが出来ず、散発的なものに留まつてゐる。

これほどの質量を持つていては、小型シェイカーワームに使つたような方法は使えないだろう。

魔導兵装シリエットアームズによる法撃の効果が薄いなら、とカルダトアが剣で斬りつけるが、幻晶騎士の剣をしてすらヌシには十分なダメージとはいえた。

幻晶騎士に比べて、ヌシからの攻撃はその大半が致命的な威力を持つてゐる。

ヌシの突撃に捕まりかけたカルダトアが、とつさに盾でそれを防いだ。

金切り声のような音が響き渡り、接触面から盛大に火花が舞い散る。盾の表面を、高速で回転する甲殻やすりが鏃のように削り取り、紙を千切るより容易くそれを破碎した。

カルダトアにとつて幸運だったのは、ヌシの突撃に吹き飛ばされ、盾と左腕を粉碎された代わりに胴体は無事だった事だ。

「無事か！？」

「ぐぬうつ、盾と左腕を失つたが、まだ動ける、剣は振れるぞ！」

ふらつきながらも腕を失つたカルダトアが立ち上がる。

それに乗る騎操士ナイトランナーの表情には、衝撃と状況による苦しさが滲んでい

た。

「テレスター、全員俺のところに集まってくれ！」

ヌシが全てを粉砕する凄まじい轟音が響く中、機体に設置された拡声器を使ってエドガーが叫ぶ。

うねり暴れるヌシの身体をかいぐぐるよにして、4機がエドガー機の元に集まつた。

「おい、何をするつもりだよ」

「ばらばらに攻撃しても効果は薄い。法弾を集中するんだ。

全員で4連装形態を取つて、やつを正面から叩く。動きを止めないと」

火力を集中させるためとは言え、真正面からの攻撃を提案するエドガーの言葉。

カルダトアに乗る騎操士達ならば、その言葉に正気を疑うか、そもそも提案されることすらなかつたであろう。

だがテレスターにはそれを為しうる能力があることを学生達は知つてゐる。

操縦席でざらつつくような笑みを浮かべた彼らは、力強い頷きと共に了解の返事を返していく。

「よし、いっちょやつちまつかね」

「テレスターの全力、とくど」覧あれってね

テレスター全機が構えていた近接武器を収納し、盾を投げ捨てた。そして腰に挿した魔導兵装を両手それぞれに持ち、さらに背面武装を展開する。

計4門の魔導兵装を構えるこの状態は、文字通りに4連装形態と呼ばれ、魔導兵装を同時に多数運用可能なテレスター^レの真骨頂ともいえる構えだ。

幻晶騎士が一箇所に集まつたことにより、ヌシは惹かれるようこそを狙つてきた。

のたうつ巨躯の進路上にテレスター^レが集合しているのを見たカルダトアが、慌てて警告する。

「何をする気だ！ 危険だぞ、散開しろ！」

「魔導兵装を集中させて撃ちます！ ヤツが怯んだら、追撃をお願いします！！」

ヌシを迎えるように横並びに展開したテレスター^レ部隊が、魔導兵装の照準を近づいて来るヌシの口吻、そのど真ん中に合わせる。

「撃てえ————！」

テレスター^レ5機で計20門、通常の幻晶騎士にして10機分以上に相当する魔導兵装が、一斉に火を噴いた。

蓄魔力式装甲^{キヤシティブーム}に板状結晶筋肉を追加搭載したことによる、莫大な魔力貯蓄量^{ナ・ブル}に支えられた凄まじい密度の弾幕が、降りしきる雨を灼いて撃ち放たれる。

煌く尾を曳いて飛翔する法弾が、ヌシへと殺到した。

十分に照準を合わせて放たれた法弾は、狙い通りにヌシの口吻へと直撃する。いかに悪食極まりないヌシとは言え、戦術級魔法^{オーバード・スペル}による法弾を食べることは出来なかつた。

一拍の後、ヌシの先端部が咲き乱れる爆発の花に包まれる。

テレスター^レの全力を懸けた絶え間ない法弾の嵐が、凄まじい勢い

で前進していたヌシの速度すら減殺し、そしてずりつと並んだ甲殻のいくらかを吹き飛ばす。

さしものヌシも、苦痛から逃れるよつて身を捻つた。爆発の衝撃にあわせて、先端部を地面へと向けると地中へと逃れようと掘削を開始する。

しかし地面を破碎するはずの先端部は、先の法撃によりかなりの損傷を負つていた。

一部が欠損したことにより思つように地面を掘れず、その巨体が大地に突き刺さったような格好でうねる。

「今だ！ 逃すなああーー！」

それほど大きな隙を見逃す者は、その場にはいなかつた。カルダトアが剣を振り上げ、槍を構えて突撃する。

テレスター部隊も相当量の魔力を消耗していたが、ここが正念場であるとばかりに、残る力を振り絞り、近接武器を構えて走る。法撃により負つた傷へと何度も剣がつきたれ、構えられた槍が突き刺さつてゆく。

地中へと逃れよつともがくヌシが見る間にぼろぼろになつていつた。

テレスターが、その両手に持つ斧槍を振るう。ハルバード

その身体に張り巡らされた網型結晶筋肉ストランド・クリスタルティッシュが、弦楽器の如き調べを奏でながら、強力無比の力を發揮する。

激しい勢いと遠心力を与えられたハルバードの先端が、唸りを上げて魔獣の身体へと叩き込まれる。

それはついに、限界近くに達していたヌシの身体を裂き、致命傷となつて刻まれた。

活力を失つた巨躯が大地に倒れ、魔獣から流れ出した体液が雨土と

混じつて撒き散らされる。

強大な魔獣を退けた騎操士達が機体の腕を振り上げて雄叫びを上げた。

彼らが勝利の喜びに浸るのも束の間、すぐさま騎士や学生の援護に戻るべく、最初の襲撃地点へと向かう。

森から出る頃には、すでに大半のシェイカーワームは騎士と学生の怒涛の反撃の前に駆逐されており、ほどなくして街道は元の静寂を取り戻すのだった。

「やれやれ、クソミミズめ、厄介なことしてくれやがって」

大小ミミズの襲撃を退け、一息ついたところで親方はしかめつ面でぼやいていた。

彼の目の前には残骸と化した馬車があり、じつそりと身体の一部を食われた馬の死骸がある。

「全員が移動するだけの馬車は確保できそうか？」

「無理だな、とても応急修理で直る状態じゃねえ。頑張つても半分が動けば恩の字よ。」

そもそも俺達は鍛冶師で、木工は専門外だしな」

質問した騎士にも、ある程度予想が出来ていた答えに恼ましげに腕を組んだ。

魔獣との戦いで移動手段である馬車をいくらか潰されたのは、彼らにとって一番の痛手といつてもよい。

「負傷者の搬送を優先するぞ。動ける馬車は怪我人を乗せて先に力

ザザドシュ砦へ向かってくれ。

車体は無事だが馬がない？ 幻晶騎士で牽け。

ここから少し街道を進んでそれたところに村がある。我々は一旦そこへ向かうぞ。

代わりの脚が調達できればいいんだがな……」

その騎士の指示に従つて、全員が行動を開始した。

親方が忌々しげにシェイカーワームの死骸を蹴り飛ばすが、それで何かが好転するわけでもなく。

唯一、雨が随分と小降りになってきたことだけが、これから徒步で移動する彼らにとつての救いだった。

結局、近隣の村では移動手段を確保できず、カザザドシュ砦から迎えの馬車を出すことで事態を解決した。

あの後も何度も魔獣との遭遇があつたが、さすがに又シほどの大物が早々現れるはずもなく、問題なく幻晶騎士の戦闘力の前に蹴散らされてゆく。

予定から遅れること数日、ようやく学生とテレスタークがカザザドシュ砦に集結していた。

「おうし、テレスタークの点検をはじめんぞ！ 特に背面武装周りは念入りに見とけ！－！」

砦内に設置された工房へとテレスタークを運び込んだ親方達は、早速機体の点検を始めている。

予定外の大物との戦闘を行つたテレスタークは、それだけ十分な整備が必要だった。何しろ、この場所を訪れた本来の目的はテレスタークのお披露目である。

学生たちは、あくまでも整備班である自らの作業に手を抜くことはしない。念入りに機体の整備を行っていた。

その様子を、皆付きの鍛冶師や騎士達が興味深げに見ている。

彼らも簡単な事情は把握している。テレスター・レを実際に見るまでは、学生が開発した新型機体ということで期待半分、疑念半分といったところだったが、ここに来てその評価は大きく変化を見せていた。

特に実際にその戦いを目にして護衛の騎士の間では、テレスター・レが制式量産機として普及することを望む者が、少なからず現れ始めていた。

少なくとも同様の機能を組み込まれた機体が普及することになるだろ、彼らはいずれ来るその時へ期待し、今は目の前の作業を見守る。

さすがに皆と称されるだけあり、工房の広さは学園のそれよりもはるかに広い。

朱兎騎士団所属のカルダトアが並ぶ中、さらにその横にテレスター・レがあり、壯観な眺めを作っていた。

林立する機体の間を、銀色の残像を残して何かが駆け抜け抜けてゆく。今にも踊りだしそうな様子で、エルネスティは小粋なステップを刻んでいる。

エルネスティは鍛冶師ではないため、整備中はやることがなく、周辺を探索して無聊を慰めていた。

学園よりもはるかに規模の大きな工房、そしてずらりと並ぶ幻晶騎士の姿に、彼の顔にはいつもより十割り増しの笑顔が浮かぶ。

「(やっぱり格納庫つてなあええなあ。出撃シーンからみてなんぼ

やねー（ ）

妙な方向でこの世の春を謳歌するエルの元へ、騎士がやつてくる。傍目からは幻晶騎士をみて喜ぶ子供そのままの姿に、彼は微笑まいものを見たといつ笑顔を浮かべながら告げた。

「公爵閣下が君のこと呼んでいるよ。一緒に来てもいいのかな」振り向いたエルは、例えるならば部長に行く開発主任のよう、自信と不安と熱意と面倒さを混ぜ合わせた表情をしていたという。

時は学生がライヒアラ学園街を出発したしばし後こскаのぼる。ライヒアラ学園街は、ライヒアラ騎操士学園を中心として街を形成している。

そこには住宅があり、商店がある。

そんな比較的整然と立ち並ぶ町並みの中を、足早に進む一人の男性がいた。

天候はやや落ち着き始めているものの、未だその雨脚は強く、男は難儀しながらとある建物へとたどり着く。

街の一角にある、いくつ普通の建物。商店とこうわけではなさそうなので、住宅なのだろう。

男は手馴れた様子で鍵を開けると、家の中へと駆け込み、そこでようやくと言った雰囲気で一息ついた。

彼は雨具を脇に置くと、雨に濡れた服もそのままに家の奥へと進む。奥の部屋では、数名の男女が何事かを話し合っていた。

彼らは突如として入ってきた男に対し、特別驚いた様子は見せなかつたが、それでもその常にはない慌てた様子に訝しげな視線を返す。

「どうしたんだい、こんな雨の中急いでわ」

部屋の一番奥にいた女性が、不審げな様子で男へと問いかけた。男はそれに対する返答として、前置きもなく本題を切り出す。

「伏せ鼠から緊急の報告が上がっています」

女性の、元からきつめだった切れ長の目つきがむしろ引き絞られ、その雰囲気はまるで鋭利な刃物を連想させるものとなる。思わず相対する男も、周囲にいる彼女の部下たちも急に息苦しくなつたような錯覚を受けていた。

「どうした？ 学生が革命でも起こしたかい？」

「ティクスゴード公爵が、例のものに手をつけたようです。

学園から大急ぎで引き上げ、手元に呼び寄せたとの報告が入つています」

一瞬、その表情に苦々しいものがよぎる。

彼女はそれ以上感情をあらわにすることはなかつたが、椅子に深く腰掛けると腕を組み、考え込むじぐさを見せた。

「……先手を打たれたようだねえ。

未完成の部分があるって話だから悠長に静観してたツケが回つてきたつてことかい

「アレはすでに一部の学生と共に公爵領へ出発したとのこと。やられましたね」

幾分、皺の目立ち始めた彼女の表情に、さらに深い皺が追加される。彼女は些か忌々しげな様子で机の上の書類の束を手に取ると、横にいた部下へと乱暴にそれを投げつけた。

「フン、そんなことをぼやいても始まらないさ。

この報告は急いで本部の連中に回しな。あと連絡だ、最優先で陛下に報告を上げるよつこ、とね」

いつものことなのだが、部下は手馴れた様子で飛んできた書類の束を掴むと、了解を返してすぐさま部屋から飛び出していった。

「……さて、あんまり悠長には構えてられないね。

陛下の「」判断次第では、私たちが動かないといけないかも知れないよ

「我々が、直接、ですか……陛下も、そこまで……」「覚悟はしておきな。あと、準備が必要だ、全員呼び戻しといって」

強い視線と共に返された言葉に、男は無言で頷くと、踵を返して部屋から出てゆく。

ほどなく部屋に残っているのは彼女一人になった。

腕を組み思考に沈む彼女はいかなる予定を見ているのか。目を閉じ、厳しい表情を浮かべたその様子からは、恐らくは愉快な想像ではないのだろうと予想がつく。

「ひあて、忙しくなりそつだねえ」

言葉の内容とは裏腹に、意外なことにその響きは多分に愉快そうなものを帶びていた。

#36 彼らはその頃

雨の舞い散るライヒアラ学園街にある大通りを、雨具に身を包んだ少年少女が歩いてゆく。

時刻は朝、授業の開始までにはやや早い、街に住む学生達がそろそろと登校してくる時間帯だ。

そんな登校途中の学生の中に、アーキッズとアーティルートの双子の姿があった。

互いに挨拶を交わしたり、雑談しながら和やかに歩く学生達の間にあって、不機嫌な空気を撒き散らしている双子は周囲からやや浮いている。

「しつかしエルも薄情だよなあ。まーた置いていきやがった」

「先に説明くらいしてくれてもいいじゃない。ねー?」

彼らはつい先ほど、いつものようにエチエバルリア家へと向かい、エルネスティに登校の誘いをかけようとしたところで、セレスティナからエルが騎操士学科の生徒達と共に「ディクスゴード公爵領へ向けて出発したことを知らされたのだ。

昨日エルは教室へと戻つてこなかつたが、さすがにそのままどこかへ行くとは思つていなかつた双子は突然の旅立ちに驚き、さりとてティナに当るわけにもいかず、なんともいえない氣分で歩いていた。

陸皇亀事件に続き、彼らがエルに置いてきぼりを食らつたのはこれで二度目になる。

今は彼らも、以前のように戦う力がないわけではない。

幻晶甲冑の動作にも十分に慣れ、最近はエルと共に幻晶騎士の作業

シリエットギア

シリエットナイト

にまで参加しており、共に過ごしていた。

それがまさか再び置いていかれるとは思つていなかつたため、彼らは憤懣やるかたないと言つた様子だつた。

今回は突然の話であり、HULを責めても仕方のないといひはあるのだが、彼らもそこまでは知らない。

「ハツリでも昨日の内に出たんじや、今更ビリヂムもねえなー」

憤然とした様子でキッドが腕を組む。

キッドの横で膨れに膨れていたアーディが、不意に握りこぶしを固めて振り返つた。

「諦めるなんて駄目よー。私たちもこれまでとは違つ、幻晶甲冑があるんだから！」

「探し出して、追うのよー！」

「……で、行き先は、どこだよ？」

「え？ エーと、ティクスゴード公爵領だつて、ティナおばさんが

……」

「公爵領の、どこだよ？ しかも行き方わからんねえんだよなあ

ぐう、とよくわからない唸り声だけを残し、勢い込んで拳を突き出したポーズのまま、アーディが言葉に詰まる。

幻晶甲冑を使えば、並の馬を凌ぐ速度で移動できるとはいえ、行き先がわからないのでは意味がない。

ティナもそこまで詳しく述べてくれなかつた。

「俺も納得いかねーけど、一週間もすれば戻つてくるつて話だし、

待つておこうぜ」

むすつとした響きを残したキッドの言葉に、膨れたままアーディが口

を閉じる。

「……エル君、戻ってきたらしばらくの間、抱き枕の刑ね」

ぼそりと呟かれたアディの言葉に、キッドは直前まで抱いていた怒りも忘れ、彼の妹を宥めるエルが払うであろう苦労を想い、天を仰いだ。

このとき馬車で移動中のエルが悪寒に襲われたかどうかは、脇に置く。

カザド・シュ塔に向かつた学生達は雨雲を連れて行つたのだろうか、彼らが出発した後、ライヒアラ学園街を覆つ雲は序々に穏やかさを取り戻していった。

空に流れる厚く黒い雲はその面積を減らし、所々から明るい部分が顔を覗かせている。

雨ももはや小雨と言つてよく、街のあちこちで住人達が嵐に荒らされた箇所を片付ける光景が見られた。

ライヒアラ騎操士学園でも、校舎のいたるところに嵐の爪あとが残つてゐる。

嵐の本番を抜けた現在、授業を進める前に、生徒と教師が総出で校舎の修理を行つていた。

と言つても、彼らに本格的な修理が出来るわけではない。

後々本職の人間を呼ぶことにはなるだろうが、その前に応急の処置を施しているのだ。

学園の敷地は規模相応に広いため、簡易な作業であつても大勢の人数が必要になり、数日の間はこれに忙殺されることになった。

大気を切り裂く鋭い飛翔音を残し、鎌型の物体が校舎の屋根の上へと飛びあがつた。

鎌は屋根の上へと落ちると、がしゃりと音を立てて錨型へとその形を変えた。そのまま先端部は屋根の上の突起に引っかかり、固定される。

間もなく、屋根の下から幾つもの歯車が噛み合ひ、騒々しい音が響いてくる。

巻き上げ機構により、鎌に結び付けられたワイヤーを収納しながら壁を蹴り走った幻晶甲冑が屋根へと上ってきた。

危なげなく屋根へと上った幻晶甲冑が背負っていた資材を降ろすと、屋根の上で待っていた学生達がわらわらと集まってきてそれを受ける。

彼らはそのまま屋根のあちこちで補修作業を開始した。

幻晶甲冑に乗ったキッドも、中でも大きな資材を手に取ると、一緒に作業に加わっている。

「しかしこれはすごいな。幻晶騎士とはまた別の、小回りの効く故の便利さと言つか……」

作業に勤しむ幻晶甲冑を見上げていた生徒が、腕を組みながら呟く。五指を備え人と同様の器用さを持ちながら、人を遥かに上回る力をも持つ幻晶甲冑は、こうした作業において極めて大きな戦力となっていた。

幻晶甲冑は小型の幻晶騎士と書いた趣の、鎧を模した外見から戦闘用途を想定しがちだが、小回りが効く分それ以外の用途にも高い適性を持つ。

「まあ数少ないんで、あちこちに呼ばれていつそがしいけどな」

力仕事は言つに及ばず、修理での工作作業、果てはワイヤーアンカーを用いて高所での作業すらこなすその万能性は、周囲の人間を驚愕せしめると共に、それを扱うことの余りの困難さに怨嗟の声をあげさせたと言つ。

それは、建設重機など概念すら存在しないこの世界において、初めて誕生した万能の建機といえた。

「是非使えるようにして、うちの建築学科において欲しいな」

「おーおい、それなら鍛冶師学科にもだらう、打つの樂になるぜ」

「いや、服飾学科にだね」

「何を織る気だよそれ……」

一度雑談に入ると止まらない学生達に、キッドは面倒くさいわうな様子を隠しもせずに言つ。

「あー、とりあえず目の前の分、片してしまおうぜ」

そういった光景は、キッドの行く先々で見られるのだった。

屋根の応急処置を終えたキッドは、断りを入れてから休憩を取つていた。

幻晶甲冑の前面装甲を開くと、内部に溜まつた蒸し暑い空気が一気に入れ替わる。

「あつちー。蒸すなんてもんじゃねえぜ、これは」

流れ込んだ外気が彼の身体を撫でてゆき、身をつつんでいた熱気が冷まされる感覚に、彼は大きく息をついた。

余裕のほとんどない、身体に密着するような状態で装着する幻晶甲冑を動かしていれば、どうしても内部には熱がこもってしまう。雨の続く日々は大気に飽和寸前の湿度を与えていたが、それでも彼には外の空氣に当つたほうが、幻晶甲冑を着込んだままいるより遙かにましに思えた。

流れ込む空氣で少しでも涼を得るべく、手を団扇代わりに扇いでいたキッドの下へと、もう一機の幻晶甲冑 アディ機がやってくる。

「キッキー、そっち終わったー？」

キッドは風を起こしていた手をひらひらと横に振った。

「おーう、とりあえず一日休憩だ。これ着て動ぐの、暑すぎだ」「確かにねー」

圧縮空氣が噴出する音と共に、横に並んで座るアディ機の装甲が開く。

アディは機体から降りると、タオルで汗を拭いながら機体の脚を椅子代わりに座り込んだ。

「うーん、役に立つのはいいけど、ちょっと私たち大変すぎない？」

「こいつを動かせるのが俺達しかいねーつづーのがまず間違ってるな

「なんだっけー？ どひとかしたら、皆でも使えるようになるんだよね？」

「そのへんはエルがいねーとどひともなりねえよ

その時、彼らを探していたのだろう、彼らの担任である教師がやつ

てきた。

「おーい、一人とも……」

「まーたお呼びかよ」

「いそがしー！ あとでなんか奢つてもらおうよ」

「本當だ、しばらくは奢つてくれてもいいくれーだな

二人は幻晶甲冑を起動させると、再び作業へと向かう。彼らの活躍もあり、作業 자체はほぼ終わりに近づいている。もうひと頑張り、と彼らは気合を入れなおすのだった。

「むー」

「よかつた、熱は下がったみたいね」

無事に補修作業を終わった後、数日間の頑張りが祟つてか、アディは風邪を引き寝込んでいた。

最初こそ熱が出ていたが、それはもう治まっている。すると、普段無駄なほどの元気さが目立つ彼女だけに、大人しく寝ていることが出来ずに落ち着かない様子だった。

「お母さん、もう大丈夫よ！ 熱も下がったし、だるさもなくなつ……もがつ」

「駄目よ、風邪は治りかけが肝心なのよ。もつとちゃんと寝ていなさい」

ベッドから抜け出そうとするアディを、彼女の母イルマタルが押し戻す。

無理矢理布団をかぶせられたアディは、そろっと頭だけを外に出すと、上目遣いに懇願するような目線を母親へ向けていた。

「明日にはもう大丈夫でしょうから、今日は大人しくしなさい」

苦笑を浮かべてアーティの髪を撫でながら、普段は子供達に甘いイルマもこのときばかりは鉄の意志を貫く。

「じゃあ、ひやんとじめておおむけ。寝る前に飲んでおくのよ」

そういつて、イルマはベッドの傍らに、水と薬の載った盆を置く。それを見たアーティの表情がしつかりと引き攣った。

イルマが持ってきた薬は、風邪に対するものとしては一般的な薬草を用いたものだが、その効き目と比例するかのように猛烈に苦い。一昨日あたりの、熱があつたときならば我慢してそれを服用していたアーティも、峠を過ぎ去った今、再びそれを用いる勇気はなかつた。むしろ彼女には、服用したほうが体調が悪くなるのではないかと思う。

「だ、だ、大丈夫よお母さん！ 寝る、ゆっくりと寝て治すから、お薬はいらないわ！……」

「ええ、お薬を飲んでからね。アーティ、このお薬は苦手？ ならお母さんが飲ませてあげるわ」

薬を用意する、イルマの様子はどことなく嬉しそうだ。

彼女の子供達は普段は驚くほど手がかかるない。年頃の子供が持つはずの無尽蔵のやんちゃ心とスタミナは、大事件を連続させるエルネスティとの行動に費やされ、かつ周囲へのフォローも彼が勝手に終わらせている。問題の大半が親の元まで届くことがない。

それだけに、こうして子供の世話を焼くことが、彼女は楽しかった。それが病氣の看病であることに、彼女はほんの少しの申し訳なさを

感じじるが、この機会に彼女はアディを十分に甘やかすつもりでいる。

しかしそれと薬の件は全く別の話であり、つまりイルマは容赦なくアディに薬を飲ませ。

アディの悲痛な叫び声が、家から通りに響き渡つた。

あけて翌日には、学園初等部の教室では久しぶりに双子の姿が揃つていた。

苦味に満ちた薬から開放されたアディが、奇妙なハイテンションを示していたが、そこには概ねいつもどおりの日常が戻つていた。授業を受け、休み時間にクラスメイトと他愛のない談笑に興じ、放課後には通りをひやかしながら菓子を買つ。

いつもどおりのはずの、日常。

しかしそこには大きな欠落が存在した。

「まだ、帰つてこないのかな……」

思わず、と言つた風に漏れ出了た言葉を聞きとがめ、横に座るアディの顔を見やつたキッドは、そのまま視線を通りへと移した。様々な人が行き交う大通りでは、露店の店主が客を呼び込み、道行く人がそれをひやかしている。

手に持つ菓子の甘さを味わいながら、キッドも首をかしげた。

「うーん、確かに遅いな。聞いた話だと、もうとっくに帰つてきてもいい頃なんだが」

エルネスティと騎操士学科の生徒がカザドシュ皆へと出発してから、はや一週間以上が経過している。

最初に聞いた話では、往復に一週間程度と言つ事だったのだが、彼らの姿は影も見えない。

それは、エル達が道中に地碎蚯蚓ショイカーワームと遭遇したことにより、予定が大幅に狂つたことが主な原因なのだが、そこまでは彼らのあざかり知らぬことである。

連絡手段も持たない彼らは、ただ待つことしか出来なかつた。

彼らはいま一つ晴れない氣持ちを抱え、しかしどきる事もなく時間は過ぎる。

更に数日が過ぎた後、ようやく学生達がライヒアラへと戻ってきた。

馬車の群れが、ライヒアラ学園街の門をくぐる。

その護衛についていたのであるが、幻晶騎士・カルダトアが馬車と別れ、城門付近の工房へ入つていつた。

馬車はそのまま大通りを進み、ライヒアラ騎操士学園へと入つてゆく。

「おひ、懐かしき我らが古巣よ」

「一週間ちょっとしか経つてねーつすよ、親方」

「気分だ、馬鹿野郎」

長距離の移動で凝り固まつた手足をほぐしながら、親方を始めとした騎操士学科の面々がばらばらと馬車より降りてくる。
人がおらず、静かだつた工房が俄かにいつもの活気を取り戻していつた。

だが、そこには出発時に存在したものが、ない。

彼らと共に力ザドシュ音へ向かつたはずのテレスターの姿が、

機も見当たらなかつた。

護衛として付いていたのは全て朱兎騎士団所属のカルダトアのみ。それも全て待ちの入り口で分かれている。

現在、彼らは全くの“手ぶら”で戻ってきたのである。
それだけではない。

ここに居るのは騎操士学科の学生ばかり。

出発時には彼らと共にいた、一際小柄な少年の姿を見つけることは、できなかつた。

学園の授業が終わり、放課後を過ぎ、傾いた日がオービーハの山に沈んでゆく頃。

中等部の生徒達が暮らす学生寮にある自室で、ステファニア・セラーティ（ティファ）はその日の課題をこなしていた。

彼女は時折顔にかかる見事な金髪を邪魔そうに後ろに戻しながら、黙々とペンを進める。

しばらくして課題の大半が終了し、彼女が一息ついたところで来客が現れた。

ルームメイトが戻ってきたのかと思ったが、慌しく扉がノックされるのを聞きつけ、その可能性を否定する。

扉へ向かいながら、彼女は少しの戸惑いを見せる。

今日は生徒会に関係する作業はなかつたはず、何かしら緊急の案件ができたのか そう首を傾げながら、彼女は来客を迎えるべく扉を開いた。

「姉さん……！」

そこに居た、必死の形相を見せる自分の弟妹の姿を見て、彼女は珍しく、目を丸くして固まつた。

ティファは突然自分の下を訪れてきた腹違いの弟妹を、邪険にすることもなく部屋へと招き入れていた。

珍しい事もあるものだ、と彼女は笑顔の裏で思う。

最近は以前のようなわだかまりがなくなり、ずいぶんと仲がよくなってきたとは言え、双子が彼女の自室までやつてきたのはこれが初めてである。

とは言え、遊びに来たように見えない。

常と変わらぬ、どこか面倒くさそうな態度を見せる弟と違い、考えていることが表に出やすい妹をみれば、何かしらの、それも火急の頼みをもつてここを訪れたことは明白だ。

彼らが話しやすいように、ティファは飲み物を用意しようとしたが、それよりも先にアディが勢い込んで身を乗り出した。

「姉さん、力を貸して欲しいの……！」

「ええ、話はちゃんと聞くから、まずは少し落ち着きなさい。

飲み物を用意するわ、少し待つてね」

どうぞ、とキッドがアディを宥めている間にティファは紅茶を淹れて戻つてくる。

二人はそれを飲み、少し落ち着いてから、それでも早口に用件を切り出す。

「……それで、親方達は皆から戻つてきたのに、そこにエル君が……エル君だけが居ないの」

途中まではにこやかな表情で話を聞いていたティファも、話が進む

と共にじんじんと真剣な表情へと変わつていった。

テレスターの完成から、父親であるヨアキム・セラー＝ティ侯爵への連絡、そしてディクスゴード公爵からの召喚、学生達の帰還という説明が終わる頃には、ティファは目を伏せて考えこんでいた。

「そりなの……。お父様から少しば話を聞いていたけど、そんなことに……」「…………」

彼らの父親が何を考えているのかはわからないが、エルが何らかのトラブルに巻き込まれてしているのは間違いなく思える。以前、彼女達中等部の生徒は、エルの活躍により窮地を救われたことがある。

次はこちらが彼のために動く番だ、ティファは強い決意を胸に抱き、決然とした表情で顔を上げる。

「行きましょう」

「姉さん？」

「父様の元に、行きましょう。今ならカンカネンの別邸にいらっしゃるはずよ。

……せめて理由だけでも聞かないといけないわ

キッドとアティも、力強い領きを返していた。

結論を下した後のティファの行動は実に迅速だった。

翌日、即座に行動を開始した彼女は、生徒会長という権限を最大限悪……駆使し、かつ実家の都合があると押し通して、教師や生徒会役員の嘆息と涙を踏み越えて、そのままキッドとアティを連れて力ンカネンへと急行したのだ。

「…………あの時はちょっと、姉さんは敵に回さないほうが良いと、思

つたわ「

とは彼女の妹の談である。

その日、カンカネンにあるセラーティ侯爵家の別邸は、過ぎ去ったはずの嵐の再来に混乱に陥つていた。

まさに威風堂々の文字を体現しながら突き進む公爵令嬢を止めることが叶わず、慌てた使用人が右往左往しつつも、どうにか館の主へと取り次ぎを行う。

幸か不幸か、ヨアキムは別邸内におり、間もなく彼の書斎にて会うことが叶つた。

「突然何事だ？　ティファ。今日は授業のある日だろう、何故ここに居る？」

凡そ記憶にある中でも最大風速をたたき出す娘の暴走に、ヨアキム・セラー＝ティ侯爵は顔を合わせるなり不機嫌な様子で言葉を投げつける。

そしてティファの後ろから更にキッドとアディが現れるのを見、思わず眉間に深い皺を刻んだ。

「お前たち……」

「お父様、この二人を見れば私たちがいかなる用事でここに来たか、お分かりでしょう」

父親の不機嫌にも全く怯まず、優雅なしぐさで挨拶を述べ、そして微笑むティファは静かな、しかし厳しい迫力を満たした態度で挑む。彼女は伊達や酔狂でライヒアラ騎操士学園の生徒会長などやってい

るわけではない。

その上かの師団級魔獣との邂逅を体験している彼女は、歴代の生徒会長の中でも出色の精神力の持ち主と言えよう。

だからと黙つてヨアキムもそれで萎縮するような事はないが、一方的な命令で引き返させることはその時点で諦めざるを得なかつた。彼は喉まで出かけた嘆息をギリギリで飲み込むと、手に持つ書類を片付けて椅子に深く腰掛け、子供たちに向かい合つ。

「……新型機についての件か？」

「それだけではありません。新型機開発の中心人物であり、この子達の友人でもあるエルネスティ・エチエバルリアについて」

何かを言おうとしたヨアキムの機先を制し、ティファアは更に言い募る。

「過日のベヘモス事件において、私たち学生の大半は彼の活躍により窮地を救わされています。

……その彼が、ただ一人公爵領より帰つてきています。
お父様達が何をお考えなのか、私にはその全ては量りかねますが、恩義ある彼を害するような真似は、私は許すことができません」

キッドとアディを左右に従え、彼女らは父親に向かい合つ。

「お父様、納得の行く説明を聞かせていただきますわ

嘘偽りも、逃げることも許さない。

まるで決闘に挑むかのような意氣を以つて、彼女達は進軍を開始した。

#37 話し合いの結果

「…………以上が、部下より聞き取った内容の全てになります」

カザドシュ砦を拠点とする、朱鬼騎士団の団長、モルテン・フレドホルムが直立不動の姿勢で報告を読み上げた。

彼がいる場所は、カザドシュ砦内にある上級作戦会議室 普段は使用されないが、貴族などが訪れた場合等に使用される、応接室兼用の会議室 である。

部屋の中央には机があり、それを囲むように椅子が並べられている。今その椅子のひとつにはカザドシュ砦、及びティクスゴード公爵領の主であるクヌート・ティクスゴード公爵が座っていた。

モルテンの報告を聞いたクヌートは、少しの間瞑目していたが、やあつて肺腑へ溜め込んだ重い空気を吐き出す。

「なるほど、新型機の性能のほどはわかつた。それで、騎士たちから評判はどうだ」

モルテンが報告した内容は、地碎虹蜺シェイカーフームに襲われた際の、新型機・テレスターの戦闘能力について聞き取り調査を行った結果だ。

「正直なところ、極めて高いものであると言わざるを得ませんな。同数のカルダトアを使用しても、あれだけの戦果を上げるのは容易なことではありません。

共に戦つた騎士は、ほぼ全員が新型の導入を希望しています」

「ふうむ」

眉間に微かなしわを寄せ、クヌートは背もたれへと身を沈める。

丁寧に撫でつけた髪型の下にとがった鷲鼻が特徴的な、鋭い印象を受ける彼の顔つきは思索に研がれ、更に鋭利な雰囲気へと向かっていた。

「……新型機は、我が国にとつて益あるもの。これを捨て置くことは、できぬ、な」

クヌートの小さな咳きこみ、モルテンが領さきを返す。

「モルテン、新型機を作った学生達は、國機研への技術開発の手続きをとらうとしている。

その際予想される諸々の困難の仲裁を、我々に頼み込んでおつた」

クヌートの手元には先ほどの報告とは別の資料があった。

ライヒアラよりセラーティ侯爵を経由して彼に届けられた、報告書ラボと要望書だ。

「それと、だ。彼らは自らを國機研へと売り込むつもりのようだ

「ほう？ 技術だけ、ではなくですかな」

「新型機を形作る技を一番良く理解しているのは我々であり、今後これを開発する際にそれに加わることが出来れば、より深い貢献をお約束します……と」

要望書の一文を読み上げるクヌートに、モルテンは顎を覆う見事に切りそろえられ、整った髪を一撫でし、豪快な笑いを返した。

「はつはつは、最近の学生は貪欲ですなあ。

彼らなりに、新型機を開発した自負があるということですかな。なにより、よろしいではありませんか。ライヒアラ卒の者であれば、

その能力に不足はないでしょ。」

さらにはこれは新型の開発者達。有能な若者は大歓迎ですな」

モルテンも勿論適当に返しているわけではない。

新型機の開発、導入が始まれば当然多くの人員をそこに裂く必要が出てくる。彼はそれを見越していた。

来るべき大きな流れに対し、やる気と熱意、そして十分な能力を持つて挑む人材は、いくら居ても困ることは無い。

求められるものと本人の意思が一致しているのならば、それは幸せなことだらう。

「さて、どにまでが彼らの力かな」

しかしクヌートの考えは少し違っていた。

彼の視線の先には、報告書のとある一文がある　発案者、エルネスティ・エチエバルリア、と。

彼の脳裏を、銀の輝きを持つ少年の姿がよぎった。

「モルテンは引き続き学生達の相手をしてくれ。余裕があれば、新型機についての更なる調査を行え」

「はつ！　して、閣下はいかがされますか？」

「私は……直接会わねばならぬ者が居る」

その言葉は、國家の重鎮たる彼には珍しいことに、苦々しげな空気を孕んでいた。

そうして、エルヘと呼び出しの伝令が向かうことになる。

モルテンが出て行つた後、クヌートはゆっくりと息を吐き出す。

事前にセラーティ侯爵から受け取った報告書を見ている彼は、今回の新型機開発が学生のみの力によるものでは無いことを知っている。

「（……悔るべきではなかつた？　しかし……）」

クヌートはやもすると首をもたげる後悔を脳裏から追い出す。

その後悔は、偏にかつての彼自身の油断に起因していた。

国王とエルが魔力転換炉の製法を知る条件として“幻晶騎士を作^{シルエットナイツ}”事を約束した、あの時。

その時点では、クヌートにとっての問題の中心は、国王の道楽ぶりにあつた。

約束を交わした相手であるエルは、注意こそ必要だつたが、さほど重要ではなかつたのだ。

それほどまでに、国王とエルが交わした幻晶騎士を設計するという条件は達成困難なものだつた。

エルはその年齢をすれば才氣煥発な子供だったが、いかに才能があるとも個人でできることには限度がある。

国王も条件は提示すれども直接的な支援は約束しておらず、そもそも幻晶騎士の設計というものは個人で行うものではない。

現在のフレメヴィーラ王国の制式幻晶騎士であるカルダトアが設計されたのがおよそ100年前。長年に渡る技術の蓄積の上に、当時最高の鍛治師たちが総力を挙げてようやく成しえたことなのだ。

それでさえカルダトアの前身であるサロドレアの開発から200年近く経つてからのことと言えば、いかに困難なことが想像がつくだろう。

クヌート“自身の経験”を鑑みても、交わされた約束が実現される可能性は、およそ考慮に値するものではなかつた。

……はず、だつたのだ。

そこから1年すら経たずして、彼の元に耳を疑う報告が舞い込む。

“学生達によつて新型の幻晶騎士が作り上げられた”

それ自体がただ一言、前代未聞である。

さらにはその報告書に書かれた新型機の発案者の名前を見て、クヌートは危つく卒倒するところだつた。

“エルネスティ・エチエバルリア” 記憶にある、国王との約束が俄かに現実味を帯びるにあたつて、クヌートは己の常識が首を立てて崩れてゆくを感じていた。

かつてクヌートは若かりし頃に“カルダトアの改良”に着手した経験がある。

幻晶騎士の戦闘能力は、そのまま国内の安定に、国の力へと直結する。

王家の傍流であり、国内最高位の貴族であるティスクゴード公爵家の頭首として、彼がさらなる国発展を願い、そのための力を幻晶騎士に求めるのは当然の流れでもあつた。

国王の許しを得、ラボ 国立機操研究所と連携して行われた一大計画は、しかし十分な結果を残せぬままに終わる。

100の年月を越える間に蓄積された技術的改良は小幅なものに留まり、中心となる大きな改良点がなかつたためだ。

ある程度の改良は施せたものの、それはクヌートが求めるほどものではなかつた。

クヌートにとっては、苦々しい記憶だ。

彼は自身の経験として幻晶騎士の新型を作ると誓つことが、どれほど困難か十分に知つてゐる。

長きに渡る技術の蓄積もなく、潤沢な人材も、ましてや資金すらな

く、ただ学生を集めて新型の幻晶騎士を作り上げるなど、本来は夢物語でしかない。

ならば、とクヌートは思考を切り替える。

エルネスティといつ少年は、“何か”を持つてはいるはずなのだ。これまでとはまったく別の条理から、新型機の開発といつ夢物語を現実に為しうる“何か”を。

それはクヌートに、そしてフレメヴィーラ王国に多大な恩恵をもたらすものとなるだろう。

クヌートは、己の判断がいかに危ういものだったかを思い、背筋の寒くなる感覚を覚える。

より以前からエルについて多くの情報を持ち、実際に行動を起こしたセラーティ侯爵がいなければ、クヌートはただ後になつて結末を伝え聞くだけの位置に居たかもしない。

彼は情報を伝えてくれたセラーティ候に感謝しつつ、それを知り得た好機を生かすべく行動を起こした。

それはいくらか予想外の事件を挟んだものの、果たして新型機は高い戦闘能力を示して見せ、騎士からも良い評価を受けている。

いずれこれを導入し、国内に普及させることは必要なことだと、クヌートは考えている。

しかしそれには唯一つ大きな不安要素がある。それが発案者であるエルネスティの存在だ。

クヌートにとってエルは、いまだに正体のわからない黒く蠢く影のようなものだ。

その全貌は杳として知れず、彼が何を考えているのか、何を求めているのかも確かにつかむことは出来なかつた。是非でも、彼が求めるところを知り、考えるところを知り、そしてそれを生かす必要がある。

いつの間にか目を閉じていたクヌートの耳に、控えめなノックの音が聞こえてくる。

彼は一瞬だけ深く息をついて自身を落ち着かせると、許可を告げ、客人を部屋へと招き入れた。

石造りのカザドシュ皆の長大な廊下を、数名の人影が歩いてゆく。先を案内するのは鎧を着た騎士、それに続くのは小柄な、まだ幼子といつても良い子供だった。

先導する騎士のもつ揺らめく灯りが、静まり返った廊下に僅かな動きをもたらし、擦れあう鎧の音と足音が微かな旋律を刻む。

やがて廊下は終わりを告げ、小さな灯りの中に重厚な造りの扉が浮かび上がってきた。

細かな装飾が施されたその扉は、いかにも周囲とは違った雰囲気を放つており、“上級作戦会議室”と書かれたその部屋が特別なものであることを示している。

案内の兵士が扉をノックする。彼は軋む音ひとつ立てずに扉を開いて少年 エルネスティを中へと導いた。

エルが扉をぐぐると、そこには皆の無骨な雰囲気とは一線を画する、立派な部屋が広がっていた。

兵士が歩くには全く適さない、柔らかな絨毯の感触を確かめるように、彼はゆっくりと部屋の中央へと進む。

部屋の中央にはテーブルが用意され、その向こう側には壮年の男性が待ち構えていた。

その人物は他でもない、この皆の主であるクヌート・ディクスゴード公爵である。

クヌートは鷹揚な態度でエルに席を勧め、簡単な挨拶とともに一礼したエルが椅子にちょこんと腰掛けた。

同時にやつてきた給仕が、飲み物を注いでから下がつてゆく。
オービニエ山地の西側諸国から輸入されてきた、高級茶の馨しい香りが一人の鼻腔をくすぐる。

そうして紅茶を片手に、和やかな雰囲気の中で彼らの会話の幕が切って落とされた。

クヌートにとつては、そこで行われる会話はいわば真剣勝負。
エルの人となりを、欲するところを暴き出し、そして如何にして相手に対し主導権を取るか。

まるで剣術の試合で間合いを計るかのように、静かに熱を帯びたものとなるはずだった。

だが彼は今、困惑でいっぱいだった。

「……このように、新型機の全身には騎操士学科の鍛冶師達により新開発いたしました^{ストランド・クリスタルディショウ}綱型結晶筋肉を用い、従来に比べ1・5倍近くの出力を得……」

テーブルを挟んだ彼の向かい側にはエルが座り、立て板に水を流すようにな新型機の説明を行っている。

それはクヌートがまず様子見とばかりに新型機についての質問を行つたときから絶え間なく続いており、もはや会話の場はエルの独壇場となつていた。

「お手元の資料をござらんください。前述の通り、新型機は従来型に比べ高い筋力、豊富な装備運用能力を誇りますが、反面持久力にや

や問題が残つておつ……」

なまじ内容がクヌートが聞きたい事でもあるから始末に悪い。

会話の主導権を握るうにも、彼の耳はエルの言葉を拾い、且は資料を読み、そして思考は新型機の情報を整理することに費やされてしまっている。

頭の片隅で警鐘が鳴らされるが、しかし彼は求める情報を貪欲に摂取することを、止める事ができなかつた。

「費用に関しては今のところ、明確に申し上げることが出来ません。今後最適化を進め、生産性を上げることにより変動するでしょう。ただし、現状でも高額な部品である幻晶騎士の心臓部は既存のままであり、比較的安価な部分を中心に変更していくことから、極端な高額化はしないと想定され……」

淀みなく、エルのプレゼンテーションは続く。

カザドシュ皆へと呼び出されたときから内容を練りこんでいたこのプレゼンテーションは、こと説明といつ点では完璧な内容であったといつてよい。

結局、エルの話が終わつたのは話し始めてから2時間後のことだった。

いかにエルに前世の経験があるとは言え、それだけの時間を走りきらせたのは偏にロボットへの愛と言ひ他ない。

実際に満足げに冷めてしまつた紅茶を啜るエルに対し、クヌートは頭の中で内容を整理し、その量産のための計画を検討し、質問をしようと唐突に口の当初の目的を思い出した。

これまでの公爵としての仕事上、鍛え上げられた交渉における能力を全く発揮できていないことに、クヌートは愕然とした気分を味わ

う。

新型機への強い興味を持っているという点を、鮮やかに突かれてしまった。

これが計画的なものであれば、彼は完敗したと言つてもいい。しかしその強力な手札も、説明が終わつたことで一時的にその効果を失つている。

反撃に移るならば今しかない クヌートは、自身にも不可解な焦りを感じて、己の切り札を場へと送り出した。

「なるほど、新型機については、いくらか質問があるが……その前にエルネステイよ、その扱いについてだがな」

さすがに彼も伊達にその任を勤め上げて来たわけではない。
彼の雰囲気が、急速に切り替わる。鉄面皮の鞘から、まるで刀剣を擬人化したかのような鋭利な印象が抜き放たれようとしていた。

“陛下より許しを得”、此度の新型機の評定、そして今後の運用について、その全権を私が任される事となつた

爵位としては最上位にあたる公爵位の人間が、国王より全権を任せられると言う事は、事実上、国王と限りなく近い力を持つことになる。少なくともこの案件に関する限り、彼の言葉は国王のそれと解釈して相違ない。

「新型機に関するその全てを一時的に私が管理する。それは情報についても然りだ。

これらは、私から陛下へとお伝えすることとなる

クヌートにとって、それは正に切り札であり、最終手段だった。

相手に対する全権の掌握。

完全に上を抑えるそれは、効果は絶大な反面、相手の反感を買いや
すいと言つ避け得ない欠点を持つ。

エルを敵に回すわけには行かないクヌートにとつては、あまり良い
選択肢とはいえないが、このままエルのペースで話が進むことに、
彼は危機感を感じていた。

そもそも彼はまだ新型機の説明しか聞いていないのだ。

これだけの札を出せば、エルも大きな反応を返さざるを得なくなる。
それはクヌートにとって大きな手がかりとなる。

反動も大きなものとなるだろうが、その後の話の流れをまとめる所
こそ、彼の腕の見せどころだ。

渇巣く思いを押し殺し、微かに目を細めたクヌートへと返された言
葉は、たやすく彼の想像の遙かに斜め上を行った。

「よかつた、では今後陛下に同じ説明をする必要はないのですね。
後はよろしく願いいたしますね」

エルは頷くと、ぴょこりと小さく一礼した。

クヌートが喉の奥底から湧き上がる唸り声を抑えることが出来たの
は、何かの奇跡だろう。

誰を相手にしても、最大の威力を發揮するであろう切り札は何の効
果ももたらさず、華麗に空を切つた。
さしもの彼も、ただ手間が省けたとばかりに扱われるなどと予想で
きようはずもない。

言葉に詰まつたクヌートが固まつている間に、当然の結果として話
の主導権は再びエルへと戻つていた。

「閣下が全権をお持ちと言つのならば、一つ確認したいことが二つあります」

「…………う、うむ、なんだ」

「新型機の『』報告を入れた際に、騎操士学科の生徒について、一緒に申し入れたと思うのですが……」

それを受けて、軽い咳払いを残してクヌートが再起動を果たした。

「聞いている。彼らを、新型機開発の人員として雇用できないかと。それについては断言は出来ぬが、開発が本格化すれば恐らくは人はいくら居ても足りぬ事となる。むしろ、断つても彼らにはその位置についても立つこととなるだろうな」

エルが、笑みと共に小さく安堵の吐息を漏らす。
大半の要望を達成したのだから、それは当然のことと思える。
しかしクヌートは、ある疑問を強く感じていた。それは、

「お前の話が意図するものは、一体なんだ？」

と詰つものだ。

「新型機の説明と、要望として出していました、先輩達の採用についての確認にきました」

エルの答えも極めてシンプルなものだったが、それはクヌートの中の違和感を決定的なものとする。
彼はしばしの間悩み、その違和感の原因に辿り着いた。

「…………お前は、どうするのだ？」

「僕ですか？」

「そうだ。新型機を売り込み、学生達を売り込み、それはいい。しかし肝心のお前がどうするかを聞いていない。にも拘らず、お前は満足しているように見える。

お前が新型機の発案者なのだろう？　その功績をもつて、何か言うべき事があるはずだ」

結局のところ、クヌートはエルについて何も知らないままだ。その上、エルからは彼自身に関する要望の一通りすら聞こえてこない。疲れたのであろうか、もはやクヌートの言葉は駆け引きを全く考慮しない、酷くストレートなものになっていた。

「どうするも何も僕は初等部の生徒ですから。卒業までそのまま通いますけれど」

ああそうか、そういうえば10歳の子供だったな、とクヌートは素直に納得しそうになり、危ういところで問題はそこではないことに気が付いた。

「な、これだけのことをしてかしておいて、今更それか！？」

クヌートがエルの年齢を完全に失念していたのを、責めるわけにもゆくまい。

それを別にしても、ここで奇妙に常識的な答えが返ってくるとはどうということか、彼は混乱のただ中に叩き込まれていた。

「今更とおっしゃいますが……仮に僕まで国機研までこくことになりますと、僕は初等部中退という経歴になってしまいます。

それでは、両親を悲しませてしまいそうですし」

妙なところで、前世の考え方の抜けないエルだった。

むしろここに来て緩い雰囲気を放つその物言いに、ついにクヌートが“切れた”。

「……お前は自分が何を為したか、わかつているのか？」

「新型の幻晶騎士を、提案しただけですよ？」

「簡単に言つてくれる。余りにも当たり前で、説明するのも空しいが敢えて言つてやろう。

「よいか？　この国が出来て以来、いや人の歴史を歩み始めて以来、
“新しい幻晶騎士を提案した個人”などと言つ者は一人として存在
しないのだ！！」

何故こんな常識をわざわざ説明しているのだろう、とクヌートは彼の人生でも間違いなく最上位に位置する空しさを噛み締めていた。
貴族としての長きに渡る実務経験がなければ、泣きが入っていたかもしれない。

「言つまでもないが、幻晶騎士の開発は数多の人間が関わる、一大
事業だ！」

新たな機体を提案する集団はいても個人で成し遂げられることでは、決してない！！

徐々に熱に入るクヌートの言葉に、さすがのエルも引き気味である。

「陛下が魔力転換炉と引き換えに出した条件……あれは、不可能と言ひ換えても間違いではない。

それをしつと持ち込んで来るような非常識の極みをやつてのけながら、この期に及んで何を普通の子供みたいなことを言つておるか！！」

エルは外面的には実際に子供なのだから、クヌートの怒りは見当違
いではあるのだが、この場にそれを突つ込む者は存在しなかつた。
逆に、齡10歳をして国家を揺るがすほどのことを“しでかす”よ
うな相手だと考へては、クヌートはもたなかつたのかも知れない。
敢えてそのことを考へないようにする、それは一種の自己防衛処置
とも言えた。

しかしエルは容赦なく、クヌートの炎に正面から油を注ぐ。

「いえ、テレスター＝レを持ち込む気はなくて、陛下へお見せするも
のは、別にあります」

「……まだか、まだ何かやる気か、貴様」

すでに鉄面皮は跡形もなく、クヌートのこめかみには青筋が浮き上
がつてゐる有様である。

「はい、もちろん。幻晶騎士を作ることが、僕の趣味ですか？」

それまでの燃え盛りようが嘘のように、クヌートが不気味に沈黙す
る。

彼の脳裏ではかつて見覚えのある場面が再生されていた。

『趣味に御座います』

そう、エルが国王に語つた言葉は掛け値なしの本音であつたのだと、
クヌートはその時、心底から理解した。

そして彼は悟つた。

今相対しているのは間違いなく歴史に残る才を持つ者だ。それは特

定分野に関しては他の追随を決して許さない。

同時に、周囲の迷惑を微塵も考慮せず、己の道をどこまでも突き進む災害か何かの親戚のよつた存在だ。

これは陛下と意気投合するわけだ クヌートの思考のひが、冷 静な部分が恐るべき予感を確信する。

クヌートは若かりし頃、天才的な手腕で馬鹿を為す、アンブロシウスの様々な計略じみた道楽につき合わされて散々な目に遭っていた。アンブロシウスは今でこそ“名君”といつても良い国王だが、いや、今ですら道楽の氣を抑えられない御仁なのだが 当時は正に天災とも言つべき存在だった。

そんなクヌートは、王宮ではこつそりと“猛獸使い”と呼ばれていることを知らない。

田の前にいる少年はそんな国王と同種の人間だ、と。
図らずも、クヌートの“Hルの考え方を知る”という目的はここに達成されていた。

すとん、と重力にしたがつてクヌートが席に戻る。

「……そつか」

実際に重々しい言葉を最後に、彼らの会話はその幕を閉じた。長い話し合いだつたが、クヌートの疲労は明らかにそれ以上のものに見受けられたと、後にモルテンは語る。

エルとクヌートが会話の空中戦をやつてのけでからおよそ一週間の

後。

場所は王都カンカネンにあるセラーティ侯爵家の別邸へと移る。

ヨアキム・セラーティ侯爵は、すでに何度も読み直した手元の資料を今一度読み上げる。

エルとクヌートの話の内容を要約したそれは、直後にヨアキムの元へと届けられていた。

「……という話が、なされたと聞いていい

「……

表情を変えることもなく説明を終えたヨアキムに対し、彼の子供たちは一様に返す言葉を思いつけないでいた。

勢い込んで振り上げた拳は落としどころを失い、代わりにやつてきた非情な気まずさが彼らの口を縫う。

彼らの心情を表現するなら、このような感じになるのだろう。“ああしました、エルってそんなやつだった”、と。

それでも鍛えられた精神力を振り絞り、なんとかティファアが立ち直る。

「……そう、なのね。ひとまず彼が……楽しそうで何よりね

彼女の言葉が少し恨みがましい口調になってしまっていたのも、むべなるかな。

ふと、グロッキー状態だったキッドが顔を上げる。

ヨアキムの説明で、エルが何をしてかしたのかは概ねわかつたが、一つ謎が残っている。

「だったら、エルが帰ってきてないのは、何故なんだ?」

「そこまでは私も知らん。カザドシュより戻ってきた者が居るのだ

るつ。彼らに聞かなかつたのか？」「

「……あつ」

余りに勢い込んでいたために、重要な情報源であるはずの親方達への聞き込みを失念していた3人は、酷く落ち込んだ。

「……聞く前に、ここへ……」

「やれやれ。それほど焦るとは、エルネスティという少年は、お前達にとつて相当に重要なものらしいな」

部屋に入ってきたときの勢いを完全に失つた3人は小さくしぶんでもいた。

ヨアキムは彼らを責めるでもなく、ふと真剣な表情で双子へと声をかけた。

「アーキッド、アデルトルート

「はつ、はい！」

「ならば、これからもエルネスティと共に居よ

「え？」

自分達の無茶を怒られるどばかり思つていた二人は、その言葉に驚いた様子を見せる。

「ディクスゴード公は、彼をひとまず野望なしと踏んだ。私も同意見だ。

彼は今後、この国に……いや、もしかしたらそれ以外にも大きな影響を与えるだろう。

それは多くの味方を作り、同様に多くの敵を作る。

どれほど有能であるうとも、一人で乗り切ることは難しかう。

お前達は彼と近く、そしてその教えを受けたのだろう？ なら

ば彼の力となれ

キッドとアティはぐつと拳を握りなおし、力強く彼らの父親へとい放つ。

「言われるまでもねえよ」

「もうよー、言わねなくても、私はエル君と一緒に居るんだからー。」

決意も新たに双子が頷き、ティファアが彼らを後ろから抱きしめた。その様子を見ながら、ヨアキムは資料のうす、子供達へ告げていな部分へと目を走らせる。

「（公は、あれは子供の氣質と年長者の思考を併せ持つとおっしゃった。

ならば、昔馴染みをそばに置いておく」とは、無駄ではあるまい。願わくば、彼にはその力に溺れることがなく、この国の力となつて欲しいものだ）

子供達を見つめるヨアキムの視線は、意外なほど柔らかなものだったが、抱きしめあつ彼の子供達はそれに気付いては居ないようだつた。

「……それはそれとしてだ」

堅い調子を取り戻したヨアキムの言葉に、3人の動きがぴたりと止まる。

「学園を無理やり抜け出してきたようなだな？ 今少し、話し合いが必要なようだな」

3人の表情が笑顔から泣き笑いのそれへと、徐々に変わつてゆく。嵐の最後に落ちた雷は、特大のものであつただけ、ここに記しておぐ。

クヌート・ディクスゴード公爵は、頭を抱えていた。

その原因は彼の目の前で、数多の資料と共に笑みを浮かべている。

「貴様、本当に、これを……作るつもりなのか」

「はい、これでこそ魔力転換炉の製法を教えていただくに値すると、自負しております」

搾り出すようなクヌートの声に、エルの弾けるような答えがかぶさる。

クヌートは、やはり国王に伝える前に自分が挟まつたことは正解であつたと、心底己を讃めたい気分だった。

エルの提示した資料には、国王へと見せる予定の幻晶騎士、その基礎設計が書かれている。

常識を世界の果てまで吹つ飛ばした“それ”を、とてもではないが国王へとそのまま伝えるわけには行かない。

クヌートは深い溜め息と共に悟る。

どうやら彼は、エルネスティと言つて常識外の存在の手綱を、上手く取つて行かねばならないようだ。

「お話中、失礼いたします！――！」

彼の悩みは、突如として飛び込んできた第三者の声にさえぎられた。返答も待たずに、朱兎騎士団長であるモルテンが扉を殴りつけるような勢いで部屋へと入って来る。

いかな騎士団長とは言え、公爵位の人物が客と話している場所にいきなり入るのは非礼の誇りを免れない。しかしクヌートは、無礼をとがめる前にモルテンの様子から、相当の緊急事態が起こったことを読み取っていた。

「どうした、何があった？」

「ダリエ村の方角より、魔獣襲来の狼煙が確認されました。……上がった狼煙は、赤。決闘級以上の群れと推測されます」

決闘級以上の魔獣、それも群れとの遭遇。それは高い防衛力を持たない村落にとつては、滅亡を意味する。クヌートの判断は迅速だった。

「モルテン、即応可能な騎操士ナイトランナーはすでに召集してあるな？」

「編成は最低でも一個中隊、全速を以つてダリエ村付近まで進出し、これを守護せよ！」

「はっ、すでに準備は進めてあります。編成が終了次第、我が朱兎騎士団は直ちに出撃いたします」

モルテンは敬礼を返すと、来たときと同じ勢いで部屋を飛び出してゆく。

「話をしている場合ではなさそうだな。私は皆の指揮につけ。
貴様は……捨て置くのもなんだな。共に来い」

エルは頷くと、部屋を出るクヌートの後に従つた。

穏やかに澄み渡る晴天の下、ここライヒアラ騎操士学園の一角を、ふらふらとした足取りで進む人影があった。

キッドとアディの双子である。

カンカネンで父親であるヨアキム・セラー・ティ侯爵に姉と共にたつぶりと絞られた二人は、学園に戻つてからは教師に注意を受け、いまや満身創痍と化していた。

やたらと広大な面積を誇る学園の廊下を、げつそりとした様子で歩む。

気晴らしにでかけるなり、いつそ不貞寝でもしたい気分だったが、確かめねばならぬ事柄の存在が彼らの歩みを何とか前に進めていた。

氣力を振り絞つて騎操士学科の工房へと辿り着いた双子は、勢い込んで中に居た顔馴染みのドワーフ族の青年へと突撃する。

「おう、銀色坊主か？ あいつに向こうで公爵様へ教育……うおつほん、解説をしてるはずだぜ」

「…………えええええるううううううううう…………」

精根尽き果てがっくりと膝をつく双子へと、親方が哀れみとも同情ともつかない、微妙な視線を送っていた。

最初から親方に確認に来れば、騒ぐ必要などなかつたのだと思うと、二人は口から乾いた笑いが漏れでるのを止めることが出来なかつた。

「と言つわけでな、坊主はしばらく戻つてこねえ。

いやしかし見ものだつたなアレは。公爵様、最後は軽く泣きが入つてよつ……」

髭を撫でつつ語る親方の口調に、双子が座り込みながら投げやりな返事を返す。

親方は特に気にした様子もなく、ふむ、と頷くとそのままカザドシユで決まったことを説明しだした。

親方は、彼らも新型機開発に関わる一員だと考えており、それを伝える必要があると思つたのだ。

「おう、そのままで良いから聞け。それで、テレスターは当面の間は公爵様が管理することになつてよ。

新型機開発計画は、公爵様の主導で進むつてことになつたわけだ。そこで俺達、鍛冶師は向こうの準備によつちや途中卒業して、そのまま国機研か、^{ラボ}どこか新型開発のところへ配属される、つてえ方向で話が進んでる」

その言葉に、へたり込んでいたキッドが顔を上げる。

「んじゃ、親方達つて、もうすぐいなくなつちまつのか？」

彼の声に少しの寂しさが滲んでしまうのは、避けられなかつた。キッドとアティにとつては、クラスメイトや昔馴染みとは別に、騎操士学科の先輩達も共に過ぐした仲間であり、良い兄貴分だつた。彼らが居なくなることは、一人にとつて少なからずショックな出来事だ。

「元々俺も、来年にやあ卒業だ。そんな顔すんじゃねえよ」

思わずしんみりとした周りの空気を払おうと、親方がキッドの頭を小突く。

しかしジワーフ族の拳は予想以上の威力を持ち、キッドはそのままもんどりうつはめになつていた。

アディがじりじりと親方から間合いを取る中、咳払いを一つ残して彼は話を戻す。

「あー、それで、言つておかねえとなねえんだけどよ。
恐らく今、向こうでは坊主の扱いに揉めてんだろ?」

「エルの?」

「おう、あいつ、卒業までは学園に通つとか言つたらしげじよ、
正直それが許される状況じゃねえ。」

俺らも作るんならいくらでも来いってもんだけどよ、正直、坊主
は“モノ”が違う。

「このままつてこたあまず無い」

親方の言葉の意味が、二人の頭に染み込むまでに多少の時間を要した。

つい先ほどの、親方達がいなくなるといつ言葉以上に、今告げられた言葉の重さは双子の顔色を真つ青に変じさせていた。

「えつ……な、なあ、親方、それって、エルも国機研に行つちまつ
つてことなか!」^{ラボ}

「エル君が……居なくなつちやつのー?」

それは、彼らにとつて考えた事も無い未来だった。

新型機の存在により騎士になるかどうかは搖らいでいるが、それで
も学園を卒業するまでエルと共に居るのは当然だと、彼らは考えて
いた。

本来ならばそれは根拠の無い思い込みではない。何しろ同じ道を志
す同級生なのだから。

しかし激変する状況が、当たり前の未来へ進むことすら困難にして
いた。

余りにも衝撃的な内容に、言葉をなくし俯く双子に親方が声をかけようとした、その時。

決然とした雰囲気を纏い、猛然とキッドが顔を上げる。

「いますぐに、俺達はエルのところへ行く」

静かに呴かれた言葉に、親方も、そしてアティも驚愕を顔に乗せたままキッドへと振り向いた。

「馬鹿野郎。どれだけ手間だと思つてやがる、簡単に行けるわけねえだろ。

それに、そのうち坊主は戻つてくる、何も今……」

「そんなのは関係ない！ いますぐに、アイツのところへ行く！！ 行つて話しこそする！！ このままなんて許せねえ……」

普段はだるそうな空氣を放ち、やる氣のない態度を隠さないキッドの突然の剣幕に、周囲は彼の決意の固さを知る。

「落ち着け、あんな遠いところへどうやって行こうってんだ」

「幻晶甲冑（シルエットギア）があるわ！ あれなら馬よりも早く走れるんだから……」

同様に拳を振り上げたアティに、親方は額を抑えて天を仰いだ。エルの直弟子である彼らなら、本当にやつてのけかねないと思ったからだ。

とは言え、カザドシュアルへの道のりは、口で言つほど簡単なものではない。

そもそもフレメヴィーラにおける都市間の移動といつもの、魔獣の存在によりそう気楽なものではいるのだ。

経験に長け、入念に準備を整えたものだけがそれを可能とする。

いかに双子であれ無謀としか言いようのない行為に、親方は何とか彼らの説得を試みた。

そうして興奮する双子を押しとどめたのは、後ろから聞こえてきた落ち着いた声だった。

「駄目だ、決まっているだろう」

エドガーはそのまま一人の腕をガシッと掴み、無理矢理動きを止める。

「エドガーさん！？ 放してくれ！」

「駄目だ、よく聞け一人とも。カザドシユまでの道のりは険しい！ いくら幻晶甲冑があり、お前達が尋常ならざる使い手だからとて、許せるわけ無いだろう。

「気持ちは……わかるが、今は待て」

流石に二人とも、杖を抜かずに置くだけの冷静さは残っていた。エドガーは一人の腕を掴んで放さず、強化魔法も使わない子供の力では、それを振りほどくことは出来ない。

彼らの後ろからやつてきたヘルヴィとディートリヒの二人が、困った表情を隠せないままにその様子を見ていた。

「……そいやあ、ディー。アイツの修理が、途中だつたな」

声を荒げて押し問答を繰り返す彼らにより、気まずい空気が漂いだした工房に、いきなり場違いに気楽な様子の親方の台詞が響いた。全員の視線を集めながら、彼はどこか悪戯を思いついた子供のよう

な笑みを浮かべながら、自分の後ろを顎で指している。

急な話の転換にいぶかしげな顔を見せながらも、その場にいる人間は親方が指示するほうへと顔を向けた。

示された場所、工房の最も奥に据えられた幻晶騎士の整備台には、

組み上げ途中の機体が座っている。

綱型結晶筋肉ストランド・クリスタルティッシュを使用した構造、一次装甲だけを配した機体の周囲には、取り付け途中の外装アウタースキンが置かれている。

“真紅”に塗り上げられたその装甲に、彼らのうち一人が強い反応を示した。

「グウエールか！ 確か組み上げ途中でカザド・シユシルエットナイトへ向かつたんだったね。

いやあ、完成も目前……って親方、新型の製造は公爵閣下の管理に入るから、当面は中止なんじやなかつたのかい？ どうするつもりだい？」

その騎操士ナイトランナーであるデイートリビが、喜色から困惑まで百面相を見せている。

「おう、まあ新しくは作らねえって事なんだが。

ここまで直して、途中で放つておくのも気持ちわりいしよ、こいつは完成させるしかねえだらう」

何度も頷きながら話す親方に、デイートリビが機嫌よく同調した。和やかな空気を漂わせる一人を尻目に、残る者たちの困惑が深くなつてゆく。

「するつてえとまあ、新型は公爵様管理だからよ、ライヒアラに置いてくわけにもいかねえ。

まさかその程度のことでの公爵様のお手を煩わせるわけにもいかねえしな、そうすつと俺達が向こうへ持つてかねえといけねえなあ？」

ディートリヒの表情が笑顔のまま凍りついた。
徐々に親方が言いたいことを理解し始めたエドガーとヘルヴィイが、
非常に曰く言いがたい表情になつてゆく。

「まさかグウェール一機で歩いてくるのも無用心だしよ、エドガーも
アールカンバーで付き合え。

ついでに俺らも馬車だすか。途中で修理が必要かもしけねえしな。
それにひょっとしたら、余計な客も乗り込んでくるかもしけねえ
がな」

その言わんとするところを理解したキッドとアーティが、目を見開いて親方を見る。

髭に埋もれた彼の顔は、器用に笑みの形を取つていた。

「おいおい親方、いくらこの一人のためでも、こんなわがままに付き合つことはないぞ？」

「おーう？ 別にこいつらのためつてんじゃあねえよ。

“丁度向こうに行く用事”があるからよ、ひょっとしたら何か手違いがあるかもしけねえって話をしてるだけだな

それを聞いたエドガーは、呆れたとばかりに肩をすくめた。

親方の言葉は完全に屁理屈だ。

それでは双子のわがままを聞いただけと何が違うのかと思ったが、
彼は苦笑の下でなんとかそれを飲み込む。

「ふーん、意外と子供には親切なのね、親方？」

「ふん、共に槌を振つたヤツあ俺の同胞よ。ドワーフの眾は同胞の苦境を見過ごしあしはしねえ。

……坊主は、ここつらの友達なんだろ。今話をしねえで、じづくるんだよ」「

悪びれることもなく胸を張る親方に、彼らは苦笑じみた返事を返していた。

エドガーも強く双子を制止していたものの、いきなり友人との別れを聞かされた彼らの気持ちは理解しているし、どうにかしたいと言ふ気持ちもある。

非常に“わざとらしい”行動だが、時に建前は重要なのだと自分に言い聞かせ、双子の手を離した。

親方の、ついに拳に小さな拳を打ち当てて喜ぶ一人の子供の姿に、騒ぎを聞いていた整備班の者たちは少し心和み、そして袖をまぐると猛然と動き出した。

「外装はどれくらい仕上がつてる！？」

「8割、細かいところは予備から流用できそうだ

「クレーン二つちに回せ、取り付け急ぐぞ！」

直前のゆるやかな空気などどこへやら、俄かに鉄と炎の活気に溢れた工房が、常以上の勢いで稼働を始める。

滑車が立てる騒音を背景に、槌が金属を叩く澄んだ音が重なる。

ここしばらくの様々な活動により鍛え上げられた整備班の手によつて、紅い幻晶騎士は見る間に完全な姿へと近づいていった。

「…………う、グウエールは本当に持つていつてしまつのかい？ 折角直るところだ……。

私もそのままカザドシユで雇つてもうべきだらうか
「ディー、その、あれよ。……元気だしなつて」

熱氣に包まれる工房の中、ただ一人ディートリヒだけが複雑な心境を持つて、紅い機体が着々と組みあがる様を見守るのだった。

魔獸襲来の狼煙(のねじ)を受けた朱鬼騎士団は、その狼煙が上がった方角にあるダリエ村へと急行していた。

構成はカルダトア一個中隊（9機）に指揮官であるカルディアリア1機の10機編成だ。

比較的近い場所というのもあり、彼らは幻晶騎士を通常以上の速度で走らせていた。

フレメヴィーラ王国の大抵の村では、魔獸に対する備えとして、頑強な防壁を構築している。

しかし一般的な農村に、村の周囲全てを囲むだけの防壁を作ることは、様々な理由から不可能だ。

そのため大抵の村では、村の中心となる部分のみを囲う特に強固な防壁と、そこに食糧などを備蓄したごく小規模な砦を作っている。人間には倒せない、強大な魔獸に襲われた場合は、そこに避難すると共に狼煙を上げ、近隣に駐在する騎士団の助けが来るのを待つのである。

小規模ながら、村人が生きるために最終防衛線とも言つべきその砦は、かなり堅牢に作られている。

ただし今回上がった狼煙は赤 決闘級魔獸（最低でも幻晶騎士が必要な魔獸）の襲来を告げるものだ。

人が持つ最強の兵器である幻晶騎士と拮抗しうるその力の前では、

いかな堅固な砦とて長期間耐えるものではない。

騎士団は焦る気持ちを抑え、ダリエ村への道のりを急いだ。

決闘級魔獸といつものは、それなりに国内に存在し、被害も絶えることがない。

だからそれに襲われたこと自体は、不思議なことではない。

しかし朱鬼騎士団の騎士がダリエ村に到着したとき、そこにいた魔獸は1匹や2匹などという数ではなかつた。

村の周辺には少なくとも十匹を越す決闘級魔獸が存在している。更には中型以下の魔獸も相当数集まつており、いきなり魔獸の樂園が出現したかのような光景が広がつていた。

偵察のために先行した騎馬隊は、その光景に戦慄を覚えると共に首を捻る。

彼らが見たのは鎧熊、鈍竜、炎舞虎……様々な種類の魔獸だった。どれも近辺に生息しているものの、それぞれ個別の縄張りを持ち、共に行動する魔獸ではないはずだ。

それがこうして集まつているなど、不可解な状況である。

しかもどの魔獸も興奮した様子を見せ、中には互いに争つて個体すら見られた。

注意深く進出していた偵察部隊は、その中にあつてはならないものを発見する。

彼らの視界に飛びこんで来たもの。

それは住人を守るべき強固な防壁が無残にも破壊され、1匹の鎧熊が、砦の内部へと頭を突つ込み“何か”を貪つてゐる光景だった。

そう、偵察兵から報告を受けた瞬間、カルディアリアに乗る中隊長は躊躇いなく指示を下した。

「全速で村の中央部まで進出する。楔形陣形を取れ、邪魔な魔獸は全て撃ち倒し前進しろ。

到着後、我々は全力で砦を防護する！！」

魔獸に囲まれた只中へと突撃するなど、もはや自殺行為とも言えるものだつたが、騎操士の間からは異論は聞こえず、むしろ力強い承諾の声が返る。

彼らは恐るべき素早さで陣形を組むと、盾を仕舞い、魔導兵装シルエットアーマーズと剣を構える。

それは防御よりも最大の攻撃力をもつて突破力を頼みとする構えだ。中隊長の号令一下、中隊が突撃を開始した。

巨人が走る、雷鳴のような音が周囲へ轟く。

それに気づいた魔獸が駆け寄つてくるが、カルダトアの持つ魔導兵装・カルバリンから戦術級魔法オバードスペルの光が煌き、仮借ない法撃により出会つ端から吹き飛ばされてゆく。

彼らは自ら放つた法弾を追いかけるようにして突撃し、中央への最短距離を強引にこじ開けた。

その場にいる数だけならば魔獸のほうが多いが、それらは一箇所に集まっているわけではない。

密集した一個中隊の幻晶騎士は、その密度で魔獸を圧倒し、一気に砦まで駆け抜けた。

周囲で轟く爆発音に、砦に頭を突っ込んでいた鎧熊は警戒心を覚え、のつそりとした動作で首を上げた。

“食事中”に邪魔が入った彼は、不機嫌な唸りを上げながら振り返る。

食事に気をとられ、注意が疎かになっていたその行動は、完全に過ぎに失したものだった。

振り向いた彼のもとへと、雷鳴の如き轟音を打ち鳴らし、炎の槍を撃ち放ち、疾風の速度で突撃する巨人の一団が殺到する。

「失せろ！ 畜生めが！！」

楔形陣形の先陣を切るカルディアリアが、ここまで走ってきた勢いを殺さず槍を構える。

カルダトアより高い筋力を持つカルディアリアから、突撃の勢いに裂帛の気合を乗せて、槍の一突きが繰り出される。

鎧熊は甲殻じみた硬化した皮膚を持っているが、圧倒的な勢いを持つカルディアリアの攻撃は、それを物ともしなかった。

槍の穂先が綺麗に鎧熊の頭部を捉える。

皮膚を突き抜け肉を割り、勢いのまま骨を碎いて突き刺された槍が、一撃で鎧熊の命を絶つ。

突撃の勢いを全く殺さなかつたカルディアリアは、そのままもつれ合つように鎧熊の死骸に衝突した。

憎き魔獣を見事に屠つた中隊長を守るように、残るカルダトアは素早く陣形を変更した。

彼らは防壁にあいた穴を守る半円陣形を取る。背後には何人たりとも通さないとする意志に満ちた、鉄壁の守護の構え。

吹き飛んだ魔獣の血の臭いに酔い、さらに凶暴性を増した残りの魔獣が押し寄せてくる。

カルダトア部隊が、迫り来る暴虐の津波を正面から迎え撃つた。

突撃によりうまく魔獣を減らすことができ、中隊は数の上では魔獣とほぼ同数となっていた。

しかし無理矢理に、しかも最も危険な魔獣達のただなかに踊りこんだ彼らは、実際には極めて危うい状況にいた。

先刻の無理な突撃により魔力貯蓄量^{マナ・プール}は激しく消費されており、彼らから積極的な攻撃という選択肢を奪っている。

機体の魔力^{マジック}転換炉^{マジック・トランスフォーマー}は悲鳴のような吸気音を撒き散らしながら魔力を生成しているが、魔獣からの熾烈な攻撃にさらされる、機体の動作に供給が追いついていない。

炎舞虎の吐く炎を盾で遮り、鋭利な棘に身を包まれた鈍竜の痛烈な尻尾の一撃を凌ぎ、鎧熊の体当りを受け止める。

彼らは魔獣ではない、連携という人の知恵と技を駆使してそれらを凌いでいるが、綱渡りのような危うい状況が続いていた。

「これで止めだ！」

状況を打ち破つたのは、中隊長が操るカルディアリアだつた。

指揮官用の高性能機であるそれは、鎧熊との衝突により多少ガタが来ていたものの、相対した魔獣を打ち倒すことに成功する。

中隊長はそのまま、機体の魔力貯蓄量が限界を迎える前に反撃に打つて出た。

一度状況が動き出すと、決着までの時間は短かつた。

数で有利になつた騎士団が、そのまま一気に魔獣を押し込み、辛くも勝利をもぎとる。

最後の鈍竜を倒したとき、中隊に無事な機体はなく最低でも小破、うち3機が中破で2機が大破し戦闘不能という有様だつた。

決闘級を倒した後は、残る中型の魔獣が速やかに駆逐されてゆく。長い戦いが終わり、彼らが周辺の十分な安全を確保した頃には、す

でにとつぱりと日が暮れていた。

戦闘が終わると共に、交戦区域の外に待機していた随伴部隊が村へと進出する。

彼らによって、生き残った村人の救助が始まった。

砦の周囲には幾多の篝火かがりびが焚かれ、簡易の天幕を張り、傷を負つたものが収容されていく。

砦の中は、凄惨な有様だった。

壁を破り侵入した鎧熊により、ダリエ村に暮らす人の約半数が死傷している。

生き残った村人達は、あわや全滅を目前としたところで騎士団が間に合つたことに、多大な感謝を送つていた。

その裏には、失った同胞を悼む気持ちも、騎士団がもう少し早く到着すれば、という気持ちもあるだろう。

しかし彼らは何よりも、今生き残れたことを喜び合つ。

それは“魔獸”という強大な脅威と隣り合わせのまま暮らさざるを得ない、この国の人々に独特の考え方だ。

ある種ドライとも取れる極端な前向きさが、過酷な状況における彼らの生活を支える原動力の一つとなっていた。

人的被害もさることながら、建物や田畠の被害も相当なものに上る。騎士団の任務は、多くは魔獸を駆逐するだけでは終わらない。

中でも今回のように極めて被害の大きな魔獸災害が発生した場合は、しばらくの間そのまま駐留し、安全を確保すると共に復興に協力することになる。

普通は採算が合わないので行われないが、幻晶騎士は極めて巨大なパワーを持つ工作機械としても使用可能だ。

こういった緊急時に限り、その用途へと転用される。

当分の間この村では、全高10mに達する巨人が建物を直す光景が見られることだろう。

本格的な村の復興に取り掛かる前に、中隊のうち自力歩行の可能な2機のカルダトアが、カザドシュ皆へと伝令に向かつた。主に当面の安全確保と、復興活動の開始を報告するためだ。また、大破した機体を回収するための部隊を寄越してもらう必要があり、その要請も兼ねていた。

応急処置を受けただけの機体を操る騎操士は、時折怪しげな動きを見せる相棒をなだめすかしながら、カザドシュ皆への道のりを急ぐ。道中は順調で、程なく彼らはカザドシュ皆の周囲の深い森へと差し掛かつた。ここを抜ければ皆へ到着する。

勝利の報告を手にした彼らは、浮かれた雑談をかわしつつ森へと続く街道を進んだ。

朱兎騎士団の中隊がダリエ村を襲つた魔獣を駆逐している間、随伴部隊とは別に、森の中よりその様子をうかがう影があった。森に溶け込むような色合いをした布に全身を包んだその姿は、極めて視認が難しく正に影と化している。

影は、決闘級魔獣の大半が倒れたあたりでその場を離れ、近くにつないでいた馬に飛び乗つた。

そのまま抑え目の速度で静かに森を進む。しばらくして森の中に小屋が見えてきた。

その小屋は元々は森で狩をする猟師が非常時に使用する建物だ。やはり魔獣に追われた時のことを考えてか、丸太を強固に組み合わ

せ、小さいながらも耐久性を持たせた造りになつていて。

馬から下りた影が一定のリズムをつけて扉をノックすると、少しして鍵を開ける音がして扉が開かれた。

内部には、小屋の大きさからは意外なほどの人数がいる。それぞれに暗い色の皮の鎧を着た彼らは、中央に机を囲み、何かを話し合っていた。

机の上には、周辺の地形を書き出した地図が置かれ、あちこちに矢印と注釈が書き込まれている。

それはまるで“作戦行動前の部隊”のような雰囲気を漂わせていた。

小屋へ入ってきた影はおもむろに全身を包む布を脱ぐ。その下にあつたのは、かつてライヒアラ学園街で学生から新型機の資料を受け取った、あの男だった。

「隊長、朱兎騎士団は予想通り魔獣を倒したようですね？」

「そうだろうね、あいつらはそのために居るんだからさ。で、出てきた規模は？」

「一個中隊つてとこですね」

男に隊長と呼ばれた女性は、彼の報告を聞いて腕を組む。

彼女が入手した情報では、皆に配備されている戦力は三個中隊規模。ならばそこには、残り二個中隊と新型機があるはずだ。

「偵察に出でているやつも呼び戻しな、手はずどおりに進めるよ。

これが最初で最後の、あたしらだけの戦だ。上手くやればじゅないか」

そりつて女性が窓から外を見る。

小屋の外には、布に蔓と木々を組み合わせた、森と同化する色合いの覆いをかぶせられた巨大な人型があつた。

それが3つ。小屋の周囲のやや開けた空間を占拠している。覆いの下で沈黙するそれは、目前に迫った始動の時を、今や遅しと待ち構えているのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3556o/>

Knight's & Magic

2011年10月6日16時37分発行